一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 12

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）

２０１７．３

一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 12

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）

２０１７．３
一般財団法人　米子市文化財団

例　　言

1．本報告書は、鳥取県が計画する一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴い、平成24・25年度に西伯郡伯耆町坂長地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、一般財団法人米子市文化財団が実施した。
3．本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系の座標値である。またレベルは海抜標高を示す。
4．本報告書第３図の地図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「米子」（平成17年１月１日発行）を加筆・修正して使用した。
5．調査の実施に当たって、基準点測量をエースプランに、調査前地形測量、人骨出土状況図、石棺実測図と空中写真撮影をフジテクノに、出土鉄製品の保存処理を葵文化と元興寺文化財研究所に、人骨に付着した顔料の分析を古環境研究所にそれぞれ委託した。
6．出土石材の同定は、高橋章司氏の肉眼観察による。
7．本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
8．発掘調査によって作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに、出土遺物は伯耆町教育委員会によって保管されている。
9．現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）

李　素妍、井上貴央、植野浩三、栗田結衣、高田健一、高橋章司、中原　計、中山寧人、山内紀嗣、鳥取県西部土地改良区

凡　　例

1．発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
2．遺跡の略称は「T-コシキ」と記載した。
3．本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。

Po：土器・土製品・陶器　　S：石器　　F：鉄製品　　G：ガラス製品

4．本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
5．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6．遺物実測図の縮尺は、土器・陶器が２分の１、４分の１。石器が１分の１、４分の１である。

坂長越城ノ原遺跡１～３区・越敷山古群　新旧遺構名対照表

坂長越城ノ原遺跡１区

新遺構名	旧遺構名
越敷山107号墳	107号墳
１主体部	107号墳石棺
越敷山108号墳	108号墳
越敷山126号墳	SD-39
１主体部	SX-38
越敷山109号墳	109号墳
１主体部	SX-45
２主体部	SX-46
越敷山127号墳	109号北墳
１主体部	１主体部
２主体部	２主体部
越敷山128号墳	SD-30
１主体部	SX-25
越敷山110号墳	110号墳
１主体部	110号墳１主体部
２主体部	110号墳石棺
３主体部	SX-52
石棺墓１	SX-44
石棺墓２	SX-18
陥 穴 １	SK-48
陥 穴 ２	SK-36
陥 穴 ３	SK-35
陥 穴 ４	SK-51

新遺構名	旧遺構名
陥 穴 ５	SK-31
陥 穴 ６	SK-19
陥 穴 ７	P-6
竪穴建物１	SI-40
竪穴建物２	SI-20
竪穴建物３	SI-22
竪穴建物４	SI-50
竪穴建物５	SI-21A
竪穴建物６	SI-21B
掘立柱建物１	SB-34
掘立柱建物２	SB-47
掘立柱建物３	SB-27
掘立柱建物４	SB-24
掘立柱建物５	SB-23
掘立柱建物６	SB-26
段状遺構１	SS-12
竪穴遺構１	SI-11
貯蔵穴１	SK-33
道 路 １	SD-1、14、15、16
道 路 ２	SD-42、43
道 路 ３	SD-20
道 路 ４	SD-2
道 路 ５	SD-4、5

坂長越城ノ原遺跡２区

新遺構名	旧遺構名
土 坑 １	SK-3
土 坑 ２	SK-2
土 坑 ３	SK-1

坂長越城ノ原遺跡３区

新遺構名	旧遺構名
越敷山70号墳	70号墳
１主体部	70号墳石棺
石蓋土壙墓１	SX-7
段状遺構１	SX-3
段状遺構２	SI-2
掘立柱建物１	SI-2-SB
竪穴建物１	SI-6
竪穴建物２	SI-8
陥 穴 １	SK-4
陥 穴 ２	SK-1
陥 穴 ３	SK-11
陥 穴 ４	SI-6-P3
土 坑 １	SK-9

目　　次

例言、凡例、新旧遺構名対照表
目次
図版目次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 ……1
　第２節　発掘調査の経過 ……2
　第３節　整理作業の経過 ……3
　第４節　坂長越城ノ原遺跡の調査区割 ……3
　第５節　調査体制 ……4

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ……5
　第２節　歴史的環境 ……5

第３章　坂長越城ノ原遺跡１区・越敷山古墳群（坂長地区）の調査
　第１節　調査区の概要と層位 ……9
　第２節　古墳の調査……17
　第３節　古墳以外の調査……50
　第４節　遺構に伴わない遺物……80

第４章　坂長越城ノ原遺跡２区の調査
　第１節　調査区の概要と層位……83
　第２節　検出遺構……85
　第３節　出土遺物……90

第５章　坂長越城ノ原遺跡３区・越敷山70号墳の調査
　第１節　調査区の概要と層位……95
　第２節　試掘トレンチの調査……98
　第３節　古墳の調査 ……104
　第４節　古墳以外の調査 ……109
　第５節　遺構に伴わない遺物 ……117

第６章　総括
　第１節　越敷山古墳群（坂長地区）の調査成果 ……119
　第２節　坂長越城ノ原遺跡の調査成果 ……121

観察表
写真図版
報告書抄録・要約・奥付

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 ……1
第２図　調査地位置図 ……2
第３図　坂長越城ノ原遺跡区割図 ……3
第４図　周辺遺跡分布図 ……7
第５図　越城ノ原遺跡１区　調査前地形図…10
第６図　越城ノ原遺跡１区
　遺構配置図（全体）……11
第７図　越城ノ原遺跡１区
　遺構配置図（古墳）……12
第８図　越城ノ原遺跡１区
　遺構配置図（集落）……13
第９図　越城ノ原遺跡１区
　遺構配置図（陥穴・道路）……14
第10図　越城ノ原遺跡１区　地区割・
　断面位置・断面図……15
第11図　越城ノ原遺跡１区
　調査前地形図（古墳のみ）……16
第12図　越敷山107号墳　遺構・遺物図 ……18
第13図　越敷山107号墳　１主体部　遺構図①
　……19
第14図　越敷山107号墳　１主体部　遺構図②
　……20
第15図　越敷山107号墳　１主体部
　玉類出土状況図・遺物図①……21
第16図　越敷山107号墳　１主体部　遺物図②
　……22
第17図　越敷山108号墳　遺構・遺物図 ……23
第18図　越敷山108号墳　土器集中１、２
　遺構・遺物図……24
第19図　越敷山108号墳　土器集中３
　遺構・遺物図……25
第20図　越敷山126号墳　遺構図 ……27
第21図　越敷山126号墳　遺物図 ……28
第22図　越敷山109号墳　遺構図 ……29
第23図　越敷山109号墳　１主体部
　遺構・遺物図……30
第24図　越敷山109号墳　２主体部
　遺構図……31
第25図　越敷山109号墳　土器集中４～６
　遺構・遺物図……32
第26図　越敷山109号墳　土器集中７
　遺構・遺物図……33
第27図　越敷山109号墳　遺物図 ……34
第28図　越敷山127号墳　遺構・遺物図 ……36
第29図　越敷山127号墳　１主体部
　遺構図……37
第30図　越敷山127号墳　２主体部
　遺構・遺物図……38
第31図　越敷山127号墳　土器集中８・９
　遺構・遺物図……39
第32図　越敷山127号墳　土器集中10・11
　遺構・遺物図……40
第33図　越敷山128号墳　遺構図 ……42
第34図　越敷山110号墳　遺構図 ……43
第35図　越敷山110号墳　１主体部遺構図 …44
第36図　越敷山110号墳　２主体部遺構図 …45
第37図　越敷山110号墳　２・３主体部
　遺構・遺物図……46
第38図　越敷山110号墳　土器集中12
　遺構・遺物図……47
第39図　石棺墓１　遺構図……48
第40図　石棺墓２　遺構図……49
第41図　陥穴１～４　遺構図……51
第42図　陥穴５～７　遺構図……52
第43図　竪穴建物１　遺構・遺物図……53
第44図　竪穴建物２　遺構・遺物図……55
第45図　竪穴建物３　遺構図……56
第46図　竪穴建物３　古段階……57
第47図　竪穴建物３　中段階……58
第48図　竪穴建物３　新段階……59

第49図　竪穴建物３　遺物図……60
第50図　竪穴建物４　遺構・遺物図①……62
第51図　竪穴建物４　遺物図②……63
第52図　竪穴建物５・６　遺構・遺物図……64
第53図　掘立柱建物１・２　遺構図……66
第54図　掘立柱建物３・４　遺構図……67
第55図　掘立柱建物５・６　遺構図……68
第56図　段状遺構１・竪穴遺構１・貯蔵穴１
遺構・遺物図……70
第57図　道路１（北側）　遺構・遺物図 ……72
第58図　道路１（南側）　遺構図 ……73
第59図　道路２　遺構図……74
第60図　道路３（北側）　遺構・遺物図 ……75
第61図　道路３（南側）　遺構図 ……76
第62図　道路４（北側）　遺構図 ……77
第63図　道路４（南側）　遺構図 ……78
第64図　道路５（北側）　遺構図 ……79
第65図　道路５（南側）　遺構図 ……80
第66図　遺構外出土遺物図①……81
第67図　遺構外出土遺物図②……82
第68図　越城ノ原遺跡２区　調査前地形図…84
第69図　越城ノ原遺跡２区　調査区断面図…85
第70図　越城ノ原遺跡２区
第１遺構面全体図……86
第71図　越城ノ原遺跡２区
第１遺構面（北区）……87
第72図　越城ノ原遺跡２区
第１遺構面（南区）……88
第73図　越城ノ原遺跡２区
土坑１～３遺構図……89
第74図　越城ノ原遺跡２区　第２遺構面……90
第75図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図①…91
第76図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図②…92
第77図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図③…93
第78図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図④…94
第79図　越城ノ原遺跡３区　全体図……96
第80図　越城ノ原遺跡３区　断面図……97
第81図　越城ノ原遺跡３区　調査前地形図…99
第82図　越城ノ原遺跡３区
トレンチ断面図① ……100
第83図　越城ノ原遺跡３区
トレンチ断面図② ……101
第84図　越城ノ原遺跡３区　トレンチ12
遺構図 ……102
第85図　越城ノ原遺跡３区　遺構平面図 …103
第86図　越敷山70号墳１主体部　遺構図 …105
第87図　越敷山70号墳１主体部　人骨図 …106
第88図　越敷山70号墳１主体部　石棺図 …107
第89図　石蓋土壙墓１　遺構図 ……108
第90図　越敷山70号墳　墳丘除去後平面図
……108
第91図　段状遺構１　遺構図 ……109
第92図　段状遺構２・掘立柱建物１
遺構図 ……110
第93図　掘立柱建物１　遺構図 ……111
第94図　竪穴建物１　焼土分布図 ……112
第95図　竪穴建物１　炭化材分布図 ……113
第96図　竪穴建物１・陥穴４
遺構・遺物図 ……114
第97図　竪穴建物２　遺構・遺物図 ……115
第98図　陥穴１～３・土坑１　遺構図 ……116
第99図　越城ノ原遺跡３区　出土遺物図 …118

第１章　調査の経緯と経過

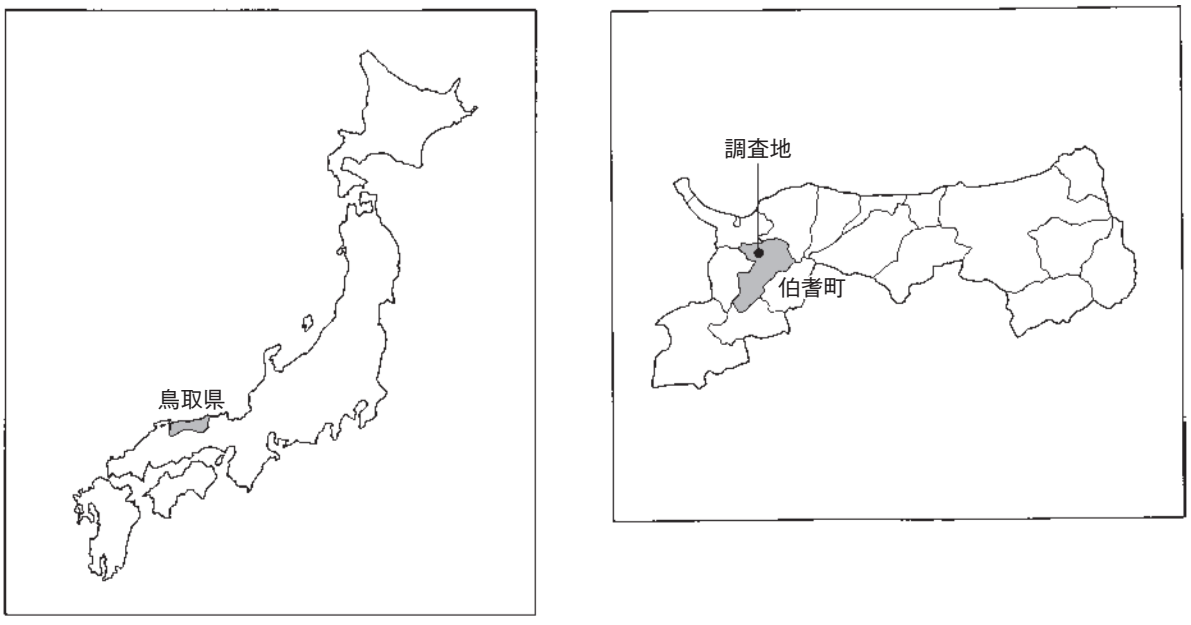
第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、西伯郡伯耆町坂長地内において計画された一般国道181号（岸本バイパス）の道路改良工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。

一般国道181号（岸本バイパス）は、米子市五千石から伯耆町吉定を結ぶ全長６㎞の高規格道路であり、道路区間内では、米子市・西山ノ後遺跡や伯耆町・長者屋敷遺跡の調査などが実施され、既に米子市五千石～伯耆町坂長区間の一部は供用されている。

今回調査を行った坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）については、工事予定地内において、周知の遺跡である越敷山古墳群の107～110号墳が所在していることから、事業主体者である鳥取県と鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会の三者による事前協議が行われ、平成24年６月には伯耆町教育委員会が工事予定地内の試掘調査を実施し、弥生時代の住居跡や古墳の周溝などの遺構、縄紋時代から近世にかけての遺物が多数検出された。

この結果を受けて、この工事予定区間における発掘調査主体と発掘調査日程の調整を行ったが、平成24年度以降は、鳥取県教育文化財団の調査が県東部の鳥取西道路に傾注したことと、平成24・25年度内の伯耆町教育委員会の事業量が多く、年度内の調査実施が困難な状況であったことから、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室（当時）が本調査を実施することとなり、平成24年度に越敷山107～110号墳の所在する坂長越城ノ原遺跡１区の南側1,500㎡の調査を、平成25年度には坂長越城ノ原遺跡１区の残地部分1,170㎡と、坂長越城ノ原遺跡２区830㎡、坂長越城ノ原遺跡３区940㎡の発掘調査を行った。これらの調査に関わる発掘調査届については、坂長越城ノ原遺跡１区を平成24年11月２日付で、坂長越城ノ原遺跡２区・３区を平成25年６月３日付で、文化財保護法第92条の第１項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出している。



第１図　遺跡位置図

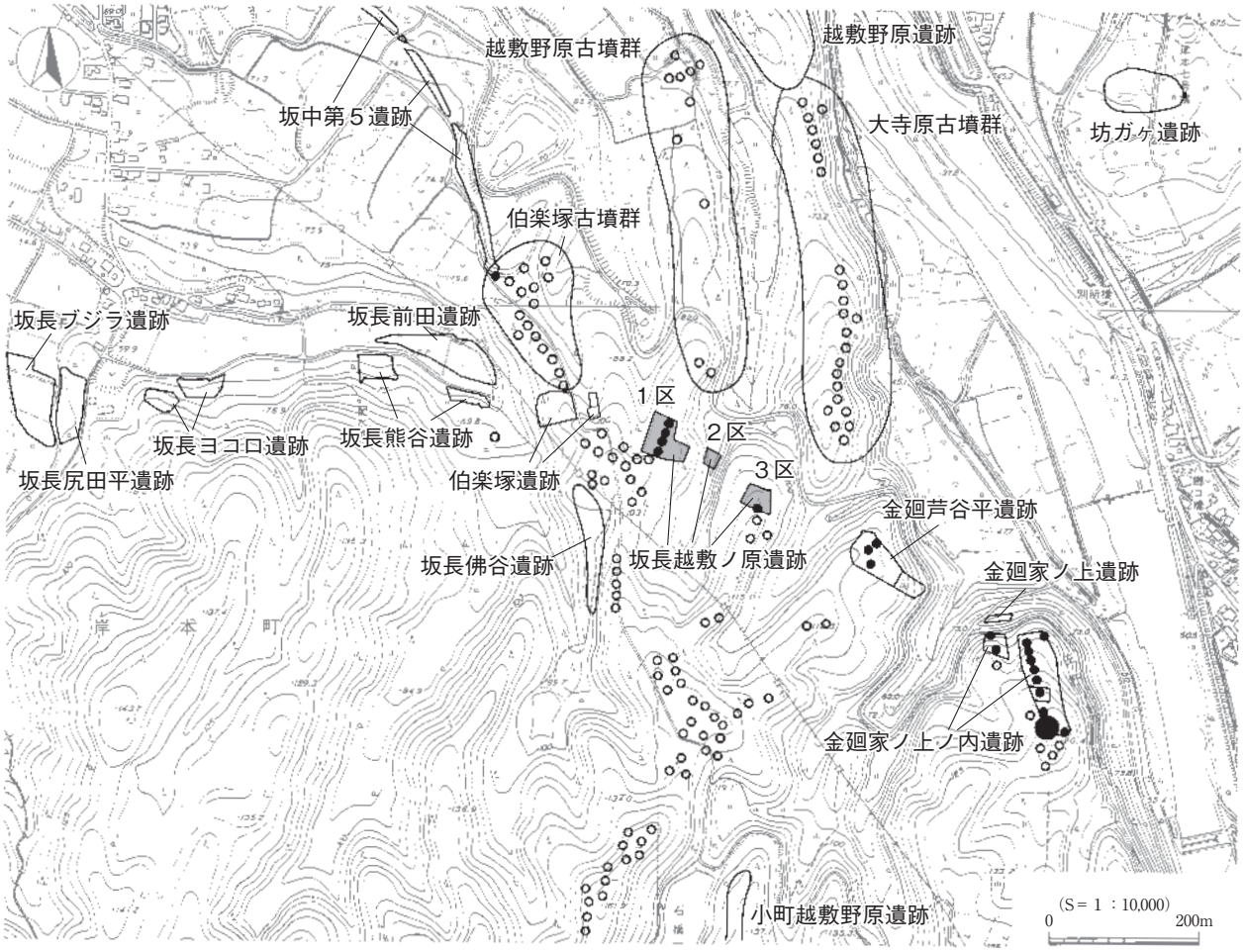
発掘調査に関わる契約と現地調査日程については、平成24年11月22日に鳥取県西部総合事務所と契約を締結し、平成24年12月７日から現地調査に着手、平成25年３月27日まで実施した。平成25年度実施分については、坂長越城ノ原遺跡１区の残地部分の調査を平成25年４月１日に鳥取県西部総合事務所と契約を締結し、４月４日から現地調査に着手、７月25日まで実施した。坂長越城ノ原遺跡２区と３区については、平成25年７月１日に鳥取県西部総合事務所と契約を締結し、７月16日から現地調査に着手し、３月28日までに全ての調査を完了した。

第２節　発掘調査の経過

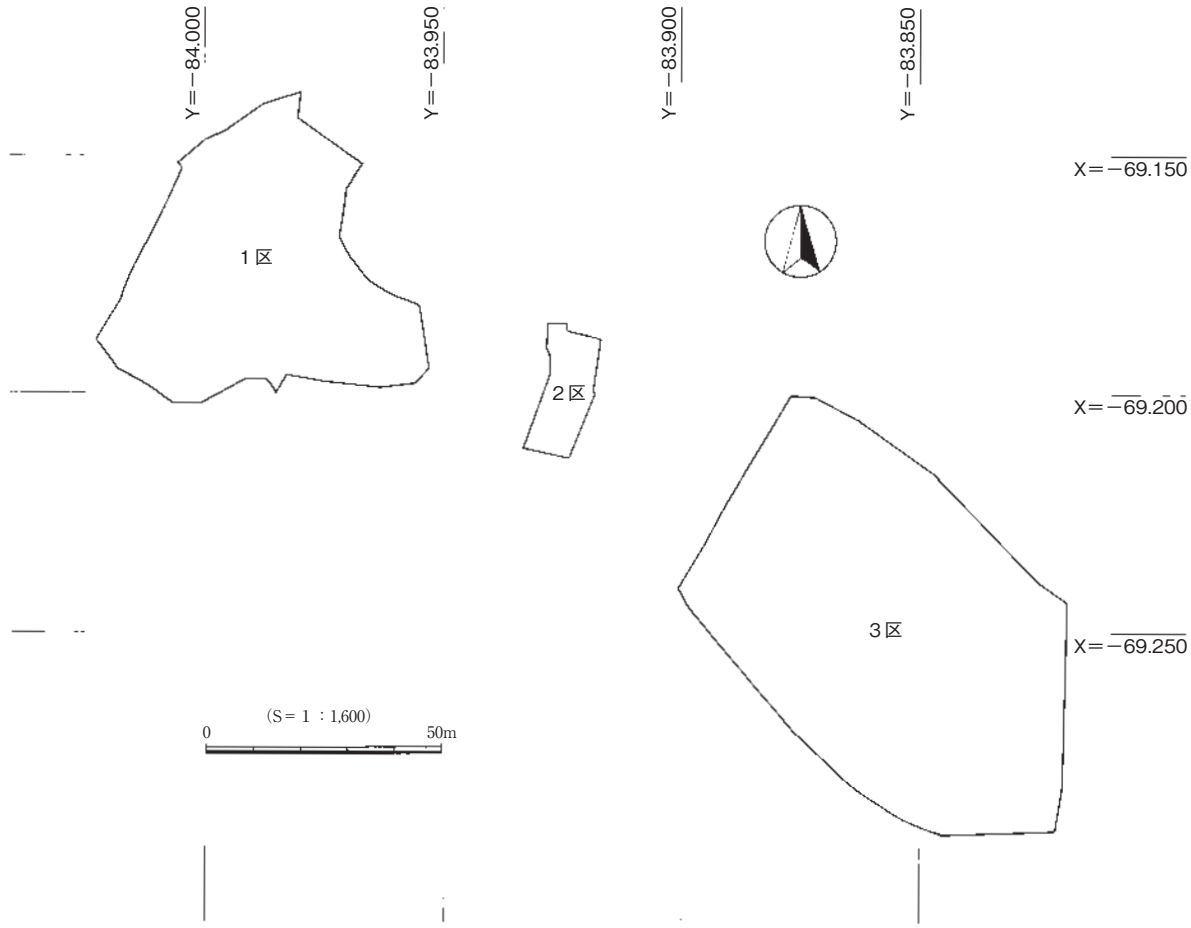
発掘調査は、平成24年度には坂長越城ノ原遺跡１区の南側1,500㎡を調査した。平成25年度は、坂長越城ノ原遺跡１区の北側の残り1,170㎡と、坂長越城ノ原遺跡２区の830㎡と３区の940㎡を調査した。

現地調査では、急傾斜地が多く重機の使用が困難であったため、安全性の確保出来る平坦地部分のみ重機を使用し、排土の搬出作業を行った。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出を行った。

写真撮影については、35㎜の一眼レフカメラを２台使用し、フイルムはモノクロとリバーサルフィルムを使用した。また、人骨の出土状況など一部の写真は４×５インチカメラによる撮影を行った。



第２図　調査地位置図



第３図　坂長越城ノ原遺跡区割図

サブカメラには、長年35㎜のカラーフィルムとコンパクトデジタルカメラを併用していたが、平成25年度からはカラーフィルムの使用を停止し、コンパクトデジタルカメラに一本化した。

業務委託に関しては、測量基準点の設置、調査前の地形測量、出土鉄製品の保存処理業務等を専門業者に委託して実施している。

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成25・26年度には、一部の出土遺物の洗浄と注記作業を行った。平成28年度には、出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第４節　坂長越城ノ原遺跡の調査区割

坂長越城ノ原遺跡は、越敷山の山頂から北へ長く伸びる丘陵地一帯に位置しており、平成24年度に調査を行った坂長伯楽塚遺跡と、平成26年度に調査を実施した金廻芦谷平遺跡の中間にある。

坂長越城ノ原遺跡の地区割りについては、調査範囲が二つの丘陵尾根と、それに挟まれた谷部（標高76m）に分かれていることと、斜面部は大半が調査範囲から除外されていることから、先行して調査に着手した西側の丘陵部を１区とし、東へ向かって谷部を２区、東側の丘陵部を３区とした。

第５節　調査体制

平成24年度（2012年度）

事業主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（財団法人米子市教育文化事業団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

平成25年度（2013年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　中村智至（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室　　長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）

事務長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　主任調査員　佐伯純也

平成28年度（2016年度）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　杉原弘一郎

常 務 理 事　先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員　小原貴樹

次長兼統括調査員　平木裕子

非常勤職員　田中昌子

事業担当　　統括調査員　佐伯純也

調査協力・管理・指導・助言　米子市教育委員会・伯耆町教育委員会・鳥取県教育委員会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）は、鳥取県西伯郡伯耆町坂長に所在する集落遺跡・古墳群である。遺跡の立地は、越敷山から北へ長く派生する丘陵上から谷部に位置しており、現況は森林となっている。

遺跡周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸地域は、主に第四紀更新世に形成された大山の火山噴出物からなる緩やかな台地で構成されているが、坂長越城ノ原遺跡の位置する日野川左岸の地域は、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北８㎞、東西３㎞にわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な沖積台地によって構成されている。

前記の丘陵地帯は、第三紀鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。一方、洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤としており、上部はやはり大山上中部火山灰に覆われている。また、この他に日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19（1550）年と元禄15（1702）年の洪水により、現在のような西寄りの流路に変化している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

鳥取県の西部に位置する大山の西麓地方では、旧石器時代の遺跡は検出例が少ない。今回調査した坂長越城ノ原遺跡の周辺では、長者原台地の東端に位置している諏訪西山ノ後遺跡（24）から、硅岩製のナイフ形石器がローム層中から出土した事例がある。また、坂長村上遺跡でも黒曜石製のナイフ形石器が１点出土しているが、ブロックを伴うようなまとまった遺跡の検出例が無く、旧石器時代の様相は不明な点が多い。

縄紋時代

縄紋時代には、草創期のものと見られる尖頭器が坂長村上遺跡からまとまって見つかっているほか、貝田原遺跡（61）や奈喜良遺跡（20）などでも単独で出土しており、この頃から広範囲に遺跡が広がっているが、土器を伴う集落遺跡の事例はいまだ確認されていない。

続く縄紋時代の早期から、押型紋土器の出土が鳥取県西部の各所で見られ、集落遺跡としてまとまりのある上福万遺跡（73）をはじめとして、林ヶ原遺跡（69）、長山馬籠遺跡などで土器が出土している。ここで出土している押型紋土器は、黄島式、高山寺式まであり、上福万遺跡ではこれに後続すると見られる沈線紋土器も出土している。早期の終末には、表裏縄紋で繊維を混入した菱根式土器があり、突帯を持つ福呂式土器へと続くが、坂長越城ノ原遺跡の周辺ではこの段階の様相は明確ではない。

縄紋時代前期には、西川津式土器、北白川下層式土器が広範囲に認められ、目久美遺跡（８）などの遺跡が集中する中海沿岸の地域で集落が活発化し、周辺にも影響を及ぼしていたようである。

伯耆町内では、長山馬籠遺跡（71）から西川津式土器が出土しており、縄紋時代前期の様相が窺える。中期には、鳥取県西部地方全体で集落活動が低下したものと考えられ、特に中期中頃から後半期の遺跡の検出数が激減するが、この原因はよくわかっていない。

縄紋時代の後期後半以降には、目久美遺跡などの中海周辺の遺跡で土器の出土が見られるようになり、再び集落活動が活況を呈するようになる。

縄紋時代晩期には、米子市古市の河原田遺跡（12）や井出胯遺跡（81）などでまとまった資料が得られているが、特に内陸部の河川周辺域での活動が活発になっている。

弥生時代

弥生時代前期には、目久美遺跡をはじめ、米子市近郊の低湿地とそれに面する微高地上に集落が形成されているものと見られ、縄紋時代晩期から継続する遺跡も多い。これらの遺跡は初期の農耕集落と推測されるが、明確な建物跡などが見つかる事例は少なく、弥生時代前期の集落像を描くことは難しい。南部町の清水谷遺跡（17）や諸木遺跡（29）では前期の環濠が見つかっているが、これらの環濠でも建物などは見つかっていない。

伯耆町内における弥生時代の集落遺跡は、久古第３遺跡において前期の土器の出土が知られているが、この段階の遺構は確認されていない。中期には、下山南通遺跡（70）において中期中葉から後葉の竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴が見つかっている。また、長山馬籠遺跡でも大型の掘立柱建物のほか、中期後葉段階の良好な土器資料が得られている。後期には、代遺跡において竪穴建物が見つかっているほか､父原地区では四隅突出型墳丘墓が確認されており､伯耆町内の各所に遺跡が分布している。

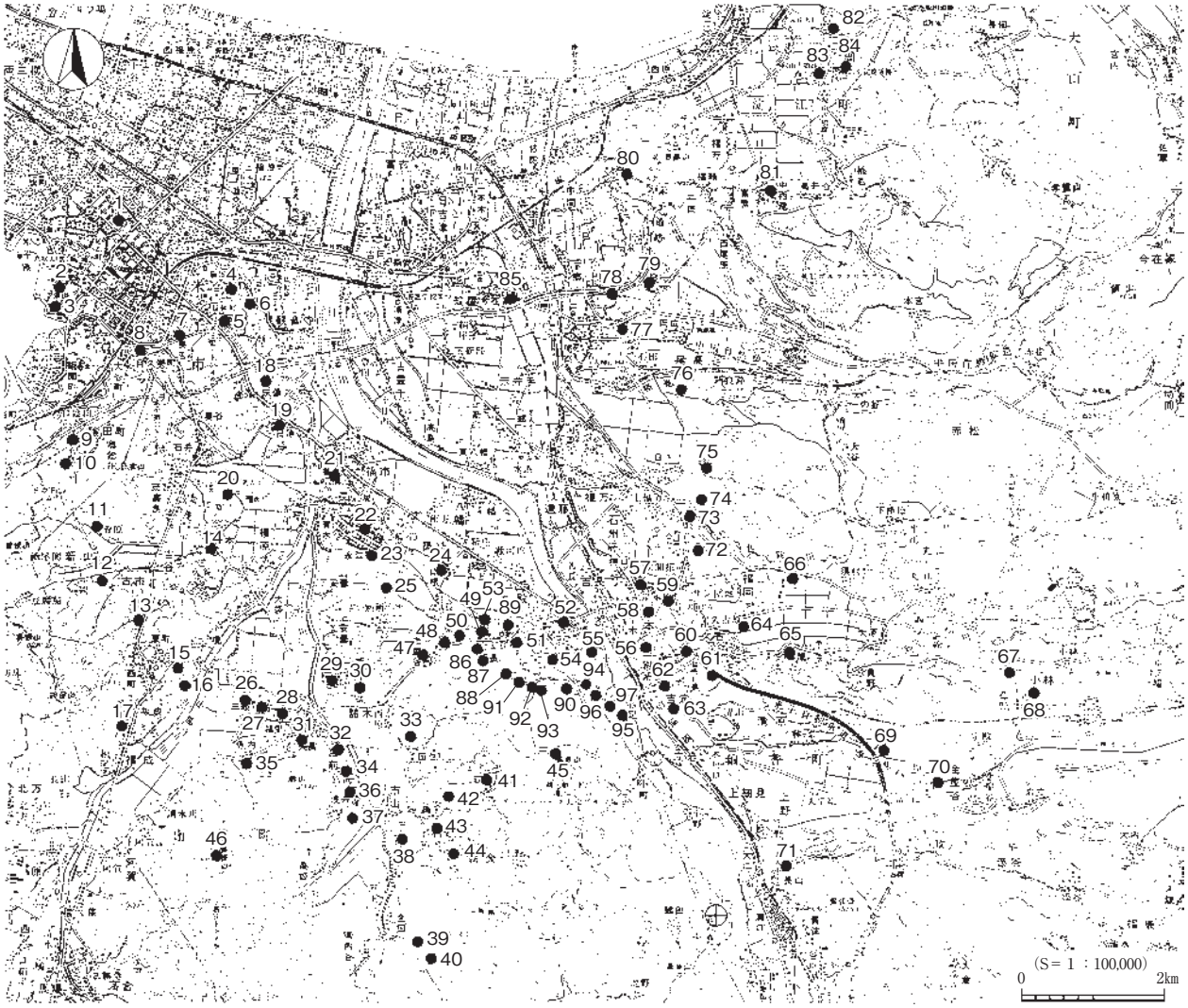
古墳時代

伯耆町周辺における古墳時代の様相は、付近に古墳時代前期の首長墓として三角縁神獣鏡が出土した南部町の普段寺古墳群（35）があり、画紋帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）など、鏡を副葬する首長墓の系譜が辿れる。特に、中期には全長108mの前方後円墳である三崎殿山古墳（26）が造られており、鳥取県西部地方における最大首長の墓と目されている。

越敷山周辺では、明確な前期古墳は見られないが、中期に至ってようやく越敷山古墳群が群集墳を形成し始める。これらの群集墳を造った人々の集落は確認されていないが、越敷山から見える範囲に点在しているものと考えられる。越敷山古墳群は、調査された事例が少ないため、不明な部分が多いが、直径10～20mクラスの円墳が主体的であり、規模や副葬品の上で突出した古墳は少ない。これまでに調査された中で最大規模の越敷山51号墳でも、直径25mの円墳であり、中心部の埋葬主体は箱式石棺を用いており、副葬品も鉄器と玉類・竪櫛が出土したのみで、鏡を持たないなどの特徴がある。

後期には、初期の横穴式石室が細見神社で見られるが、数は少なく、石州府古墳群（72）のような横穴式石室を主体とする大規模な群集墳を形成する動きは見られない。越敷山古墳群でも80号墳で横穴式石室が確認されているが、石室の規模が小さく終末期に近い段階のものと考えられている。

終末期には、鳥取県西部地方では横穴墓が一般化し、各地で盛んに造られているが、伯耆町内では検出例が少ないことから、横穴墓があまり積極的に導入されていなかった地域と見られる。



第４図　周辺遺跡分布図

1　錦町第１遺跡
2　久米第１遺跡
3　米子城跡
4　長砂第１・２遺跡
5　長砂第３遺跡
6　水道山古墳
7　池ノ内遺跡
8　目久美遺跡
9　陰田遺跡群
10　奥陰田遺跡群
11　新山遺跡群
12　古市遺跡群
13　吉谷遺跡群
14　橋本遺跡群
15　福成石佛前遺跡
16　福成早里遺跡
17　清水谷遺跡
18　東宗像古墳群
19　日原古墳群
20　奈喜良遺跡
21　福市遺跡
22　青木遺跡
23　樋ノ口第４遺跡
24　諏訪西山ノ後遺跡
25　別所新田遺跡
26　三崎殿山古墳
27　天萬土居前遺跡
28　宮尾遺跡
29　諸木遺跡
30　後塚山古墳
31　天万遺跡
32　宮前３号墳
33　田住古墳群
34　宮前遺跡
35　普段寺１号墳
36　浅井11号墳
37　浅井土井敷遺跡
38　天王原遺跡
39　金田瓦窯
40　両部太郎窯
41　荻名遺跡群
42　田住松尾平遺跡
43　朝金古墳群
44　朝金小チャ遺跡
45　越敷山遺跡群
46　手間要害跡
47　荒神上遺跡
48　長者屋敷遺跡
49　坂長下屋敷遺跡
50　坂長村上遺跡
51　坂中廃寺跡
52　大寺廃寺跡
53　長者原古墳群
54　坂中第５遺跡
55　岸本大成遺跡
56　岸本古墳群
57　岸本遺跡
58　岸本要害跡
59　岸本下の原遺跡
60　久古第３遺跡
61　貝田原遺跡
62　口別所古墳群
63　吉定１号墳
64　久古北田山遺跡
65　番原遺跡群
66　須村遺跡
67　真野ブヤ遺跡
68　藍野遺跡
69　林ヶ原遺跡
70　下山南通遺跡
71　長山馬籠遺跡
72　石州府古墳群
73　上福万遺跡
74　日下寺山遺跡
75　日下古墳群
76　尾高浅山遺跡
77　尾高城跡
78　尾高御建山遺跡
79　泉中峰・前田遺跡
80　小波原畑遺跡
81　井出挟遺跡
82　晩田遺跡
83　向山古墳群
84　上淀廃寺跡
85　今在家下井上遺跡
86　坂長第７遺跡
87　坂長第８遺跡
88　坂長下門前遺跡
89　大殿狐谷遺跡
90　坂長前田遺跡
91　坂長武寿羅遺跡
92　坂長ブジラ遺跡
93　坂長尻田平遺跡
94　坂長伯楽塚遺跡
95　金廻家ノ上ノ内遺跡
　　金廻家ノ上遺跡
96　坂長越城ノ原遺跡
97　金廻芦谷平遺跡

古　代

古代の坂長地区には会見郡の郡衙が置かれていたと推測されており、近くには駅家も設置されていた。これまでの調査で、会見郡衙跡とみられる大型の掘立柱建物が長者屋敷遺跡（48）において確認されており、周辺の遺跡からも会見郡衙関連の建物と見られる遺構がたくさん見つかっている。こうしたことから､長者原台地とその周辺に会見郡の郡衙が位置していたことは間違いないと考えられる。

白鳳期には、大殿地区に大寺廃寺（52）が建立される。この寺は、東向きの法起寺式伽藍配置で、瓦積基壇の金堂と舎利孔を持つ塔心礎が確認されている。また、大寺廃寺の瓦は４タイプの八葉複弁蓮華紋軒丸瓦と２タイプの均整唐草紋軒平瓦、重弧紋軒平瓦で構成されている。また、福寿寺の境内に保管されている石製の鴟尾は、大山山麓に産出する安山岩を加工したもので、大寺廃寺の金堂の屋根に置かれていたとされる。平安期には長者原台地上に坂中廃寺（51）が建立されるが、正確な位置など詳細はよくわかっていない。

中　世

平安時代の終わりから鎌倉時代の初めには、長者原台地一帯において紀成盛が活躍していた。紀成盛は、承安元（1171）年に焼失した大山寺の本堂を再建し、本尊の仏像とそれを納める鉄製の厨子を奉納した人物であり、これについては、鉄製厨子の由来を記した鍛造の鉄板３枚が現存しており、当時の様子が分かる。

南北朝時代には、大寺地区に安国寺という六十もの僧坊を持つ三千石を領する大寺院が所在したと伝わるが、永禄８（1565）年に杉原盛重により焼き討ちにされたという。また、伯耆町内では三部地区で野上城跡の調査が行われているほか、代遺跡において中世の城郭遺構が調査されている。

近　世

中世末期の西伯耆地方は、尼子氏と毛利氏の覇権争いの場となり、しばしば合戦が行われていたが、永禄９（1566）年には月山富田城が開城し、山陰地方の多くが毛利氏の支配下となった。天正19（1591）年からは吉川広家が隠岐国と出雲・伯耆三郡の領主となり、この地を統治していた。関ヶ原戦後の慶長５（1600）年には、中村一忠が伯耆国の領主となり、米子に城を構えたが、慶長15（1610）年に断絶となり、続く加藤貞泰、池田光政（1617～）の統治を経て、寛永９（1632）年に池田光仲の治世となると、池田家家老の荒尾氏による自分手政治が行われ、明治２（1878）年まで存続した。

坂長地区では、佐野川用水の開削事業が開始された。この工事は元和元（1615）年から中断を経ながら約250年間継続し、文久元（1861）年にようやく開通した。この佐野川用水の完成により、長者原台地上において水田耕作が可能となり、現在の田園風景が広がる景観の礎となった。

近現代

アジア・太平洋戦争の敗色が濃くなった昭和20年５月から、鳥取県内の各所において市民を動員した「チ号演習」が始まった。この「チ号演習」とは、連合軍の上陸を想定して行われた陣地構築作戦の名称であり、いわゆる「本土決戦」に備えたものであった。この越敷山一帯でも塹壕の掘削が各所で行われており、主に日野郡の義勇隊が動員されて作業が進められたという。

第３章　坂長越城ノ原遺跡１区･越敷山古墳群(坂長地区)の調査

第１節　調査区の概要と層位

坂長越城ノ原遺跡１区は、越敷山の山頂から北東へ細長く伸びる丘陵の尾根上、標高92～100m付近に位置している。調査地の現況は山林であり、周辺には広葉樹が鬱蒼と生い茂っているが、松喰虫が拡大する以前は、この越敷山一帯には松林が広がっていた。しかしながら、近年の松枯れの進行によって、調査区の周辺では、松の木はほとんど見ることが出来なくなっているほか、枯れた松の大木が処分されずに立ち枯れたままの状態になっているものも散見されることから、現在では、山を歩くには危険な状況となっている。

現地の地形は、丘陵の尾根が南北方向に細長く伸びており、遺跡地図には南から北へ向かって、越敷山107号墳から110号墳まで４基の古墳が登録されている。また、事前の測量調査では、越敷山109号墳の北、標高96m付近に一辺６m程の平坦地形が広がっていることから、小型の方墳が存在するものと考えられた。

現地には、路面は舗装されていないが、軽トラックでも通行可能な道が古墳群のすぐ東側をかすめるように通っており、最も北側に位置する越敷山110号墳では、この道路が墳丘の一部を削平しているものと推測された。また、古墳群の西側には「V」字形に丘陵をカットした溝状の地形が南北方向に伸びていることから、さらに古い時代の道路があったものと考えられ、平成24年度に伯耆町教育委員会によって実施された試掘調査では、弥生時代の竪穴住居や古墳の周溝が確認されていることから、丘陵の全域に遺構が存在することが推測されている。

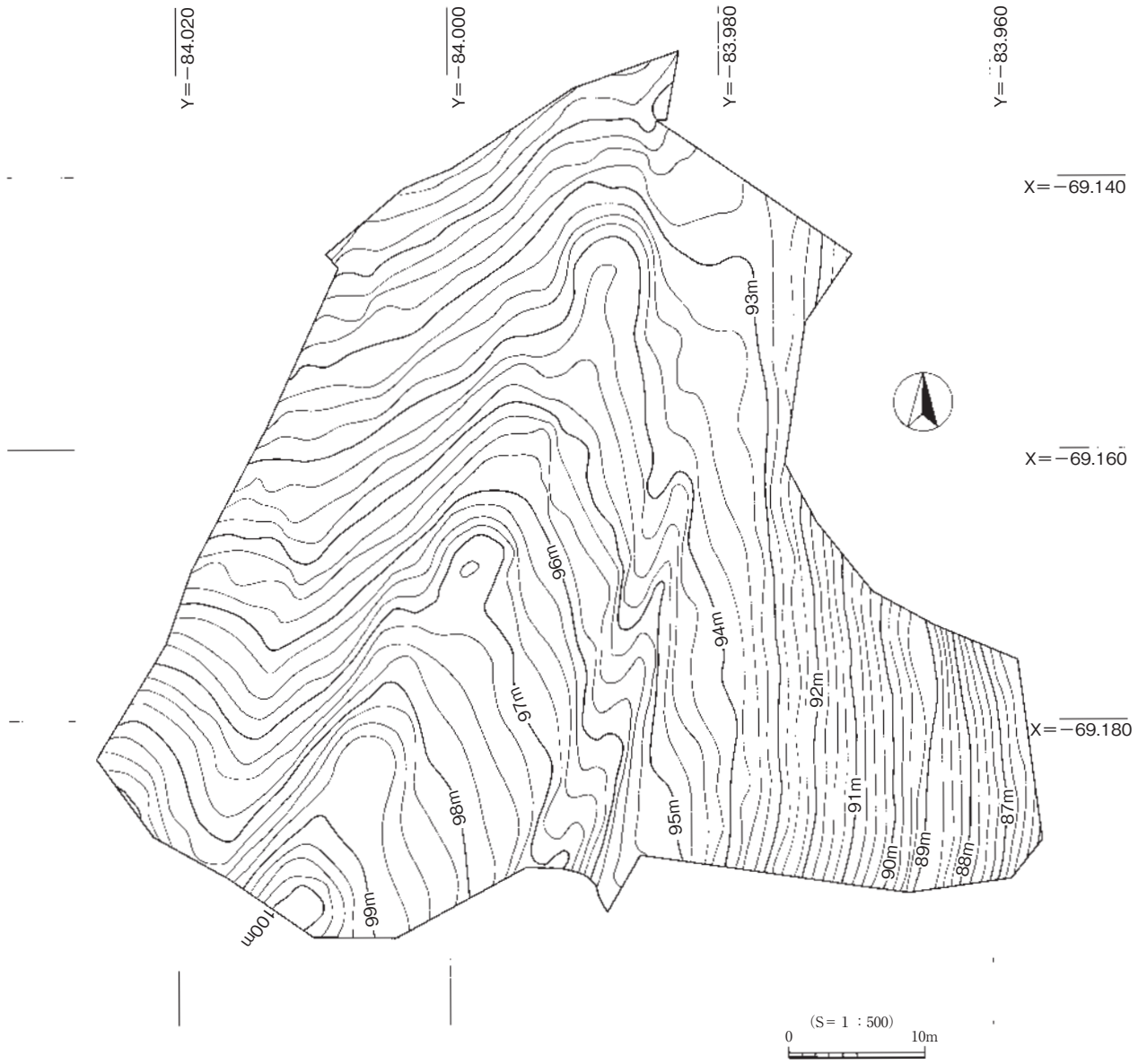
調査区の地区割については、世界測地系公共座標（第Ⅴ系）に基づいて10m単位の方眼の交点に杭を設置した。各グリッドの名称は、平成23年度に鳥取県教育文化財団が実施した「金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群（金廻地区)」の設置方法を参考に、グリッド名を割り当てている。

発掘調査は、重機を用いて表土層を除去した後、人力にて包含層を掘削して遺構を検出した。また、排土の処理は、一輪車と人力により運搬し、重機により調査区内の排土置場へと移動させた。排土置場については、調査区の東西に広がる斜面部に設定し、斜面の下には木製の柵を設けて土砂が崩落しないよう対策を行った。

人力による掘削作業については、鍬とジョレンを用い、遺構の検出作業についてはガリと移植鏝を使用した。遺構の検出面については、古墳の主体部以外は、地山のローム層の上面で検出した事例が多い。

現場での遺物の取り上げは、遺物取り上げ台帳を作成して出土地点と層位を記録して管理した。検出した遺構名については、調査段階では仮の略号を用いているが、本報告書作成段階で変更している。遺構番号については、同じ番号が重複しないよう、全て続き番号で登録した。

検出した遺構の記録には、平板とオートレベル、トータルステーションを用い、座標値を記録した。また、写真撮影は、現地では35㎜の一眼レフカメラと４×５インチカメラを使用し、白黒、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとして、コンパクトデジタルカメラも使用している。遺物の撮影には、一眼レフのデジタルカメラを使用した。

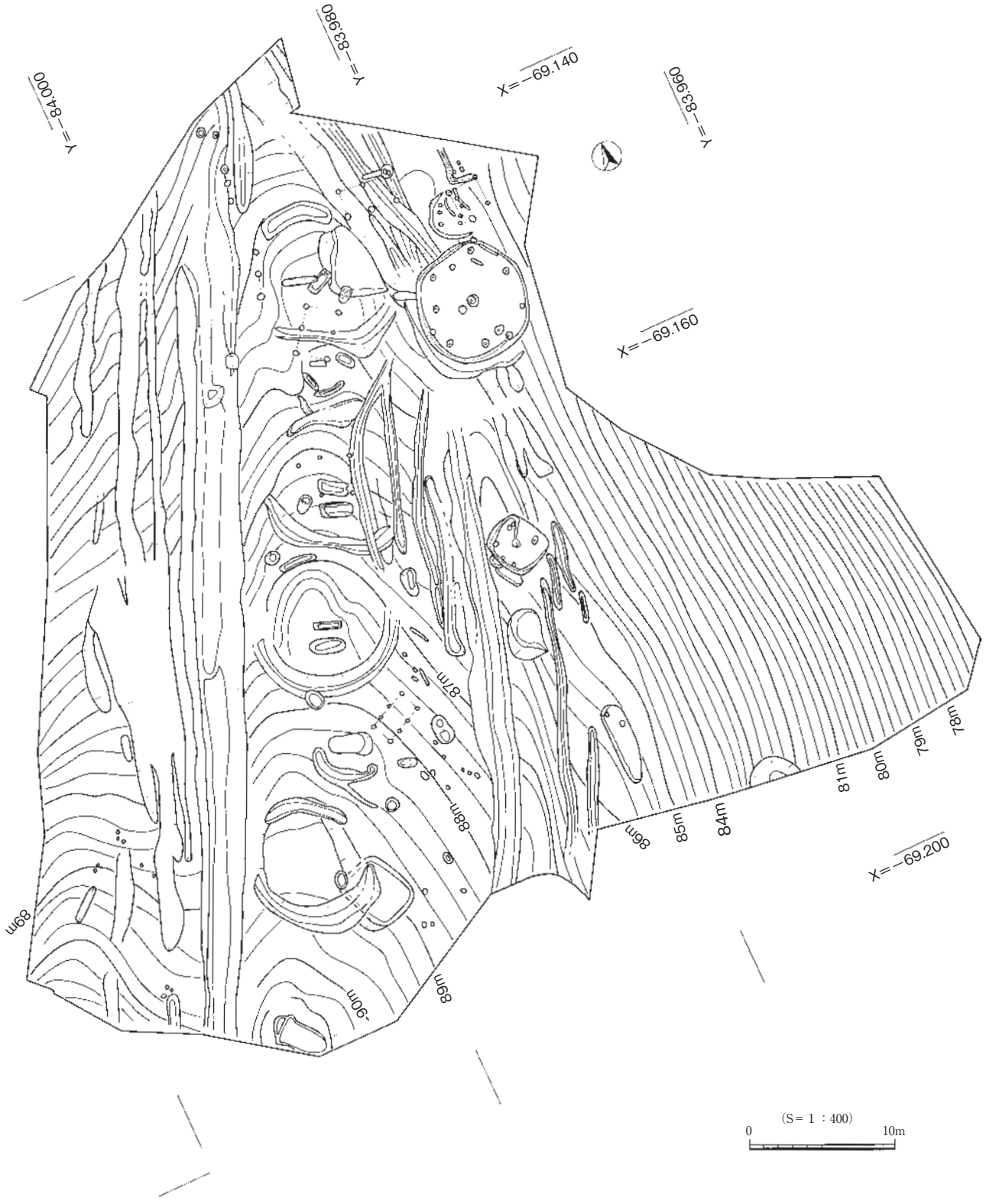


第５図　越城ノ原遺跡１区　調査前地形図

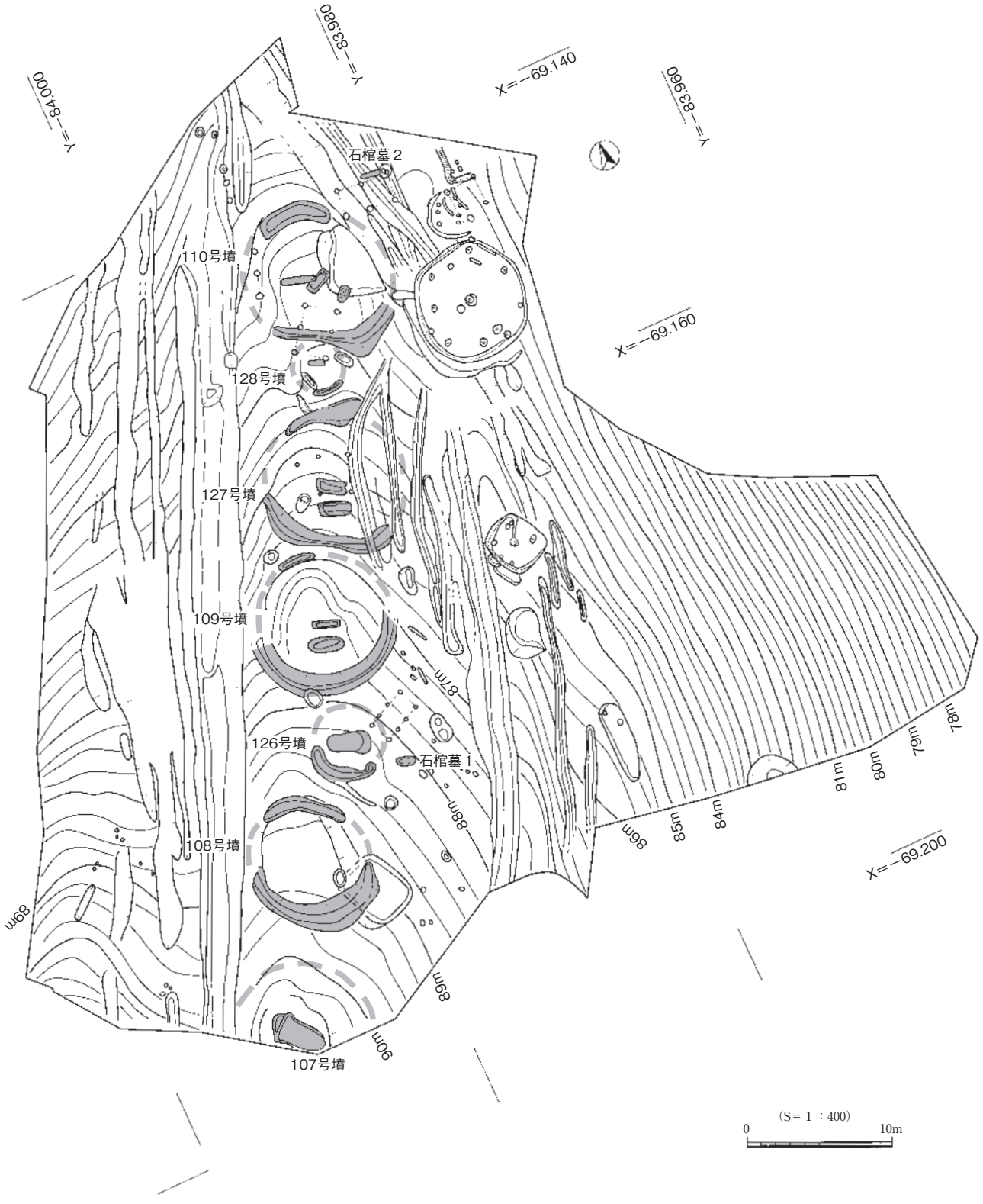
調査区の堆積は、丘陵の上部では表土である褐色系の砂質土が全面に広がっており、すぐ下に黒色の遺物包含層が堆積している。古墳群よりも西側では、このままローム層となり、このロームの面を掘り込んで３条の道路が掘削されている。古墳の東側は、D-6区周辺で平坦地形が広がっており、竪穴建物が建てられた後に古墳が構築され、更に道路が掘削されるなど、複雑な堆積状況を示している。古墳群については、表土に10～20㎝程度堆積している腐植土層を除去すると、すぐに墳丘の盛土層が現れるため、この面から遺構検出作業を行った。

丘陵斜面部では、表土の直下に黒色系の砂質土が堆積しており、この層を除去すると、すぐに地山のローム層となる。丘陵の斜面部ではほとんど遺構を検出することが出来なかったが、H-6区の南側、標高92m付近で風倒木の痕跡と見られる大型の土坑を確認したことから、かつては大木が生い茂るような原生林が広がっていたと考えられる。

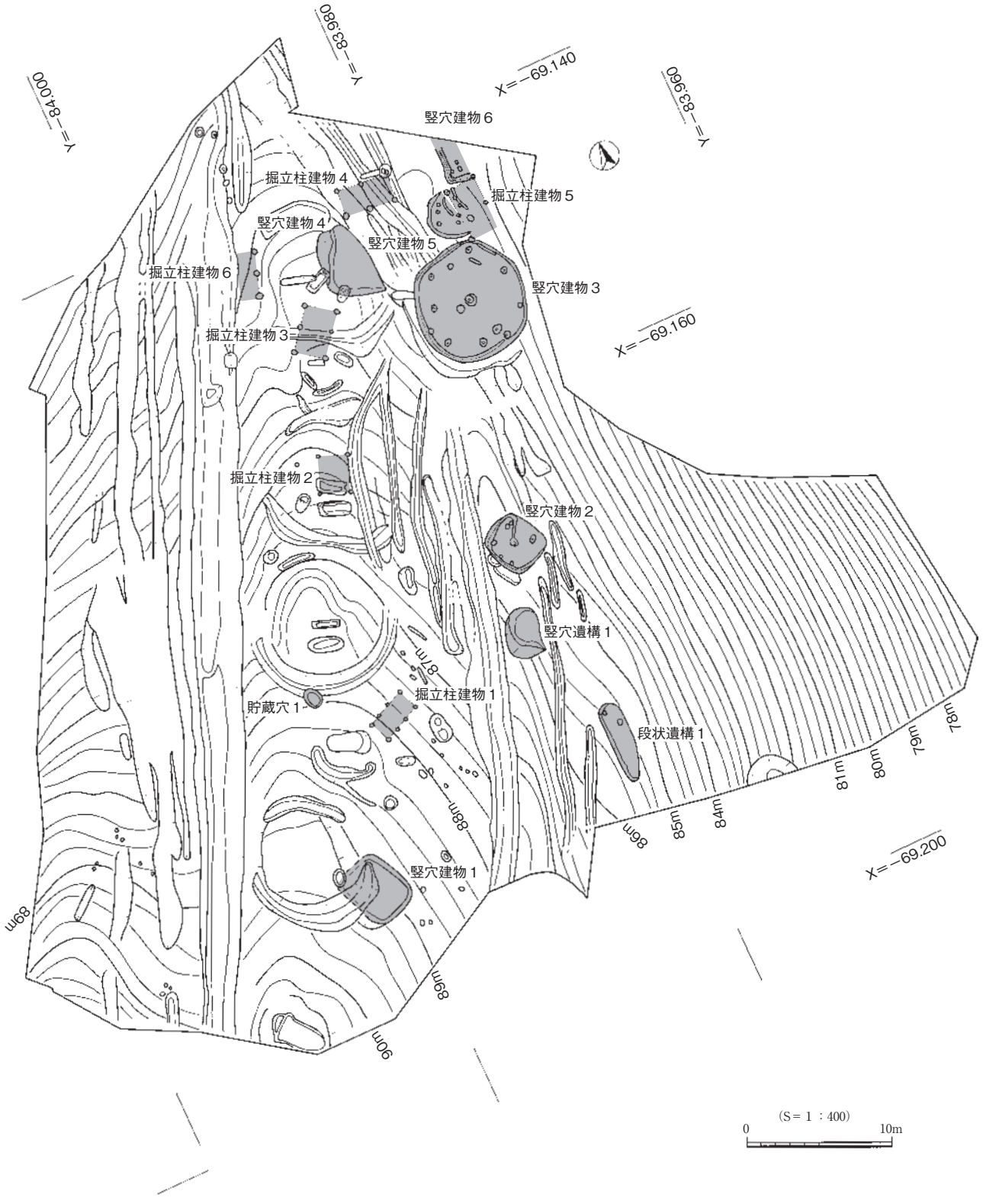
坂長越城ノ原遺跡１区で検出した遺構は、縄紋時代のものと見られる陥穴７基と、弥生時代から古墳時代の竪穴建物６棟、掘立柱建物６棟、貯蔵穴１基、段状遺構１基、竪穴遺構１基、古墳７基、石棺墓２基、道路５条である。出土した遺物は、縄紋時代早期から平安時代までの土器や石器類のほか、竪穴建物の床面やピット内、古墳の埋葬施設から出土した鉄製品、メノウ製の勾玉､ガラス製の小玉類がある。



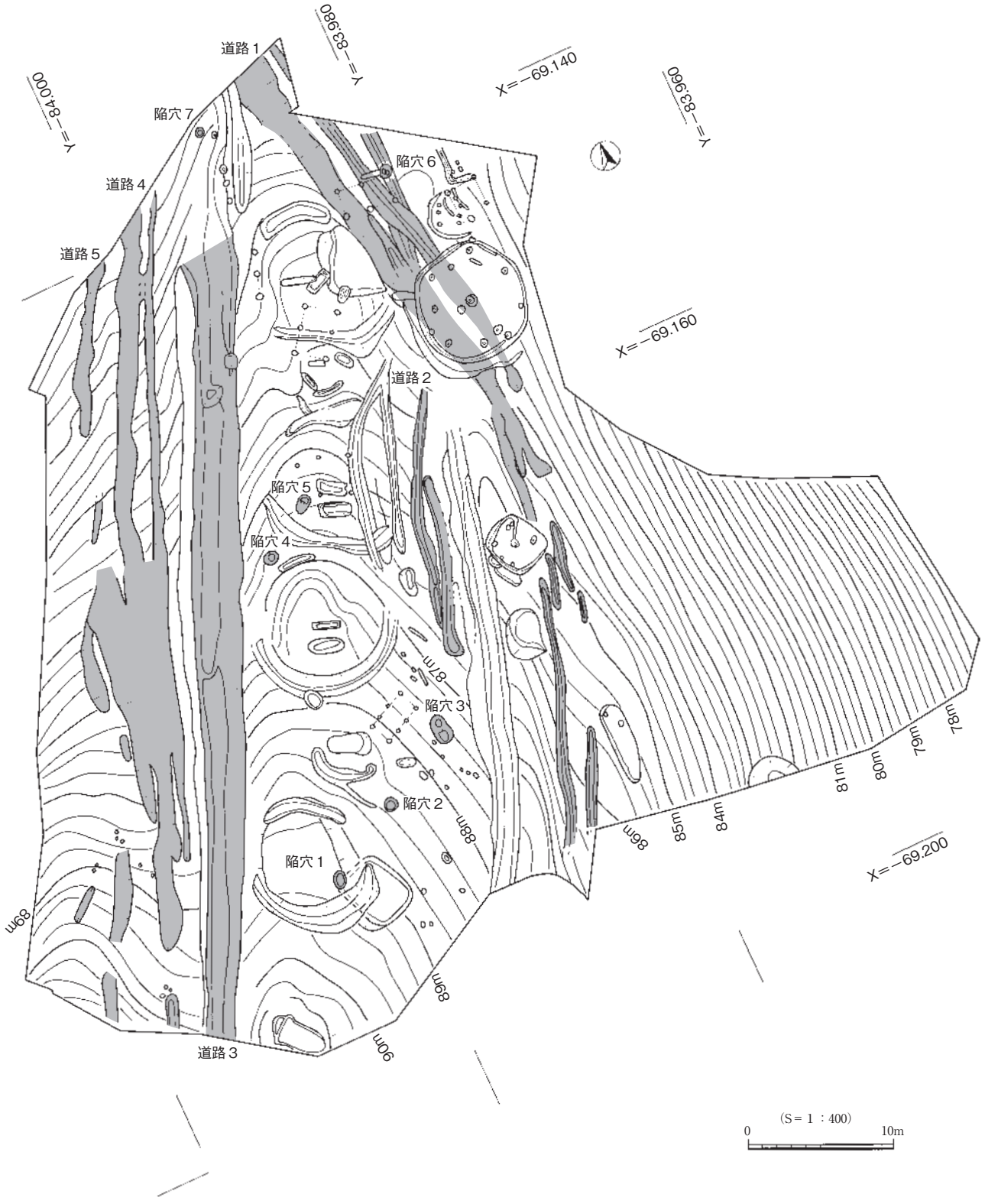
第６図　越城ノ原遺跡１区　遺構配置図（全体）



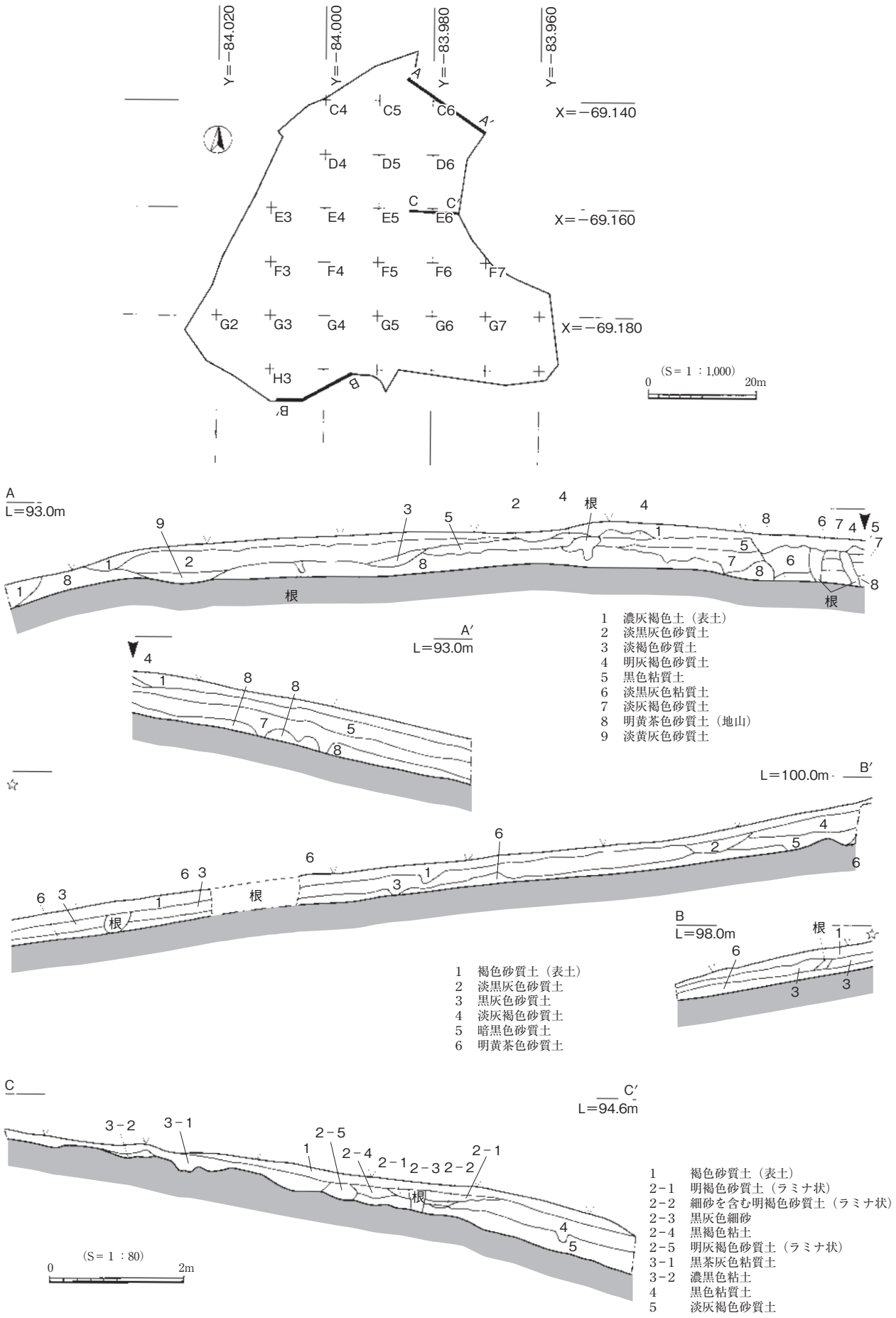
第７図　越城ノ原遺跡１区　遺構配置図（古墳）



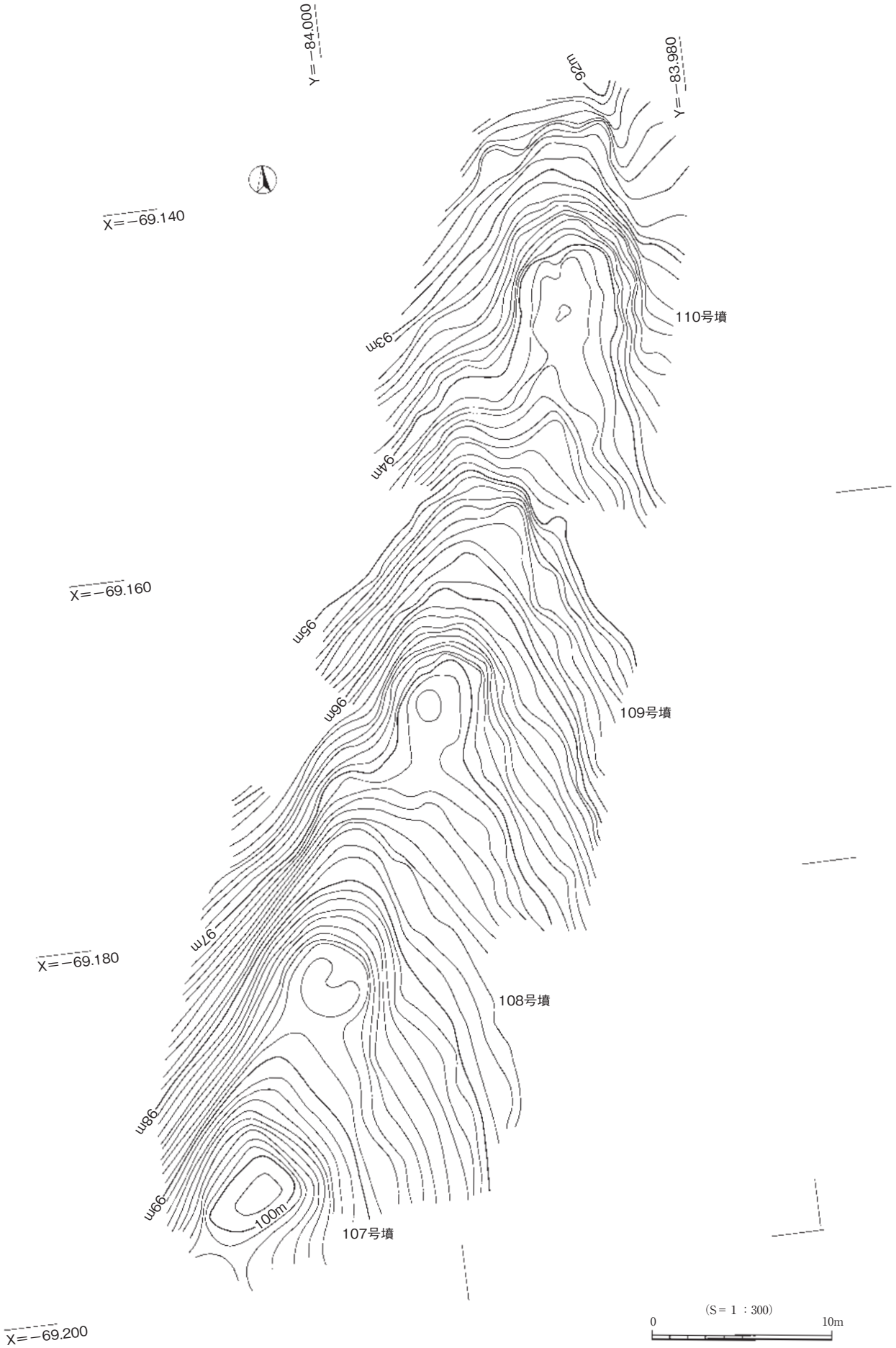
第８図　越城ノ原遺跡１区　遺構配置図（集落）



第９図　越城ノ原遺跡１区　遺構配置図（陥穴・道路）



第10図　越城ノ原遺跡１区　地区割・断面位置・断面図



第11図　越城ノ原遺跡１区　調査前地形図（古墳のみ）

第２節　古墳の調査

古墳の調査は、越敷山107～110号墳、126～128号墳の７基の古墳とこれに伴う埋葬施設を調査したほか、周辺に単独で作られた石棺墓２基を検出している。

越敷山107号墳（第12～16図）

越敷山107号墳は、調査区の南端中央付近に位置しており、墳丘の半分近くは調査区外に伸びるものと考えられた。

調査前の現地表面の観察では、墳丘の西側部分が大きく削平されていたため、ややいびつな長方形を呈していたが、事前に行った測量調査の結果、直径８m、高さ1.2mほどの円墳であると推測された。

墳丘・周溝　越敷山107号墳は、直径８m、高さ1.2mの円墳である。墳丘は、地山の上に黒色土を盛り上げて形成されており、墓壙はこの盛土を切って構築されている。周溝は明瞭な形では検出できなかったが、周辺の盛土の残存状況から周溝を持たない円墳であると推測した。

埋葬施設　越敷山107号墳で確認した埋葬施設は、墳丘上で検出された石棺墓１基のみである。墓壙の掘形は楕円形を呈しており、長さ3.4m、検出した幅は1.5mである。前述したように、墓壙は墳丘の盛土を切って構築されており、石棺の裏込め部分の埋土は固くしまった土が水平堆積しているのに比べて、石棺の蓋は締まりのない明褐色の砂質土で埋め戻されている。

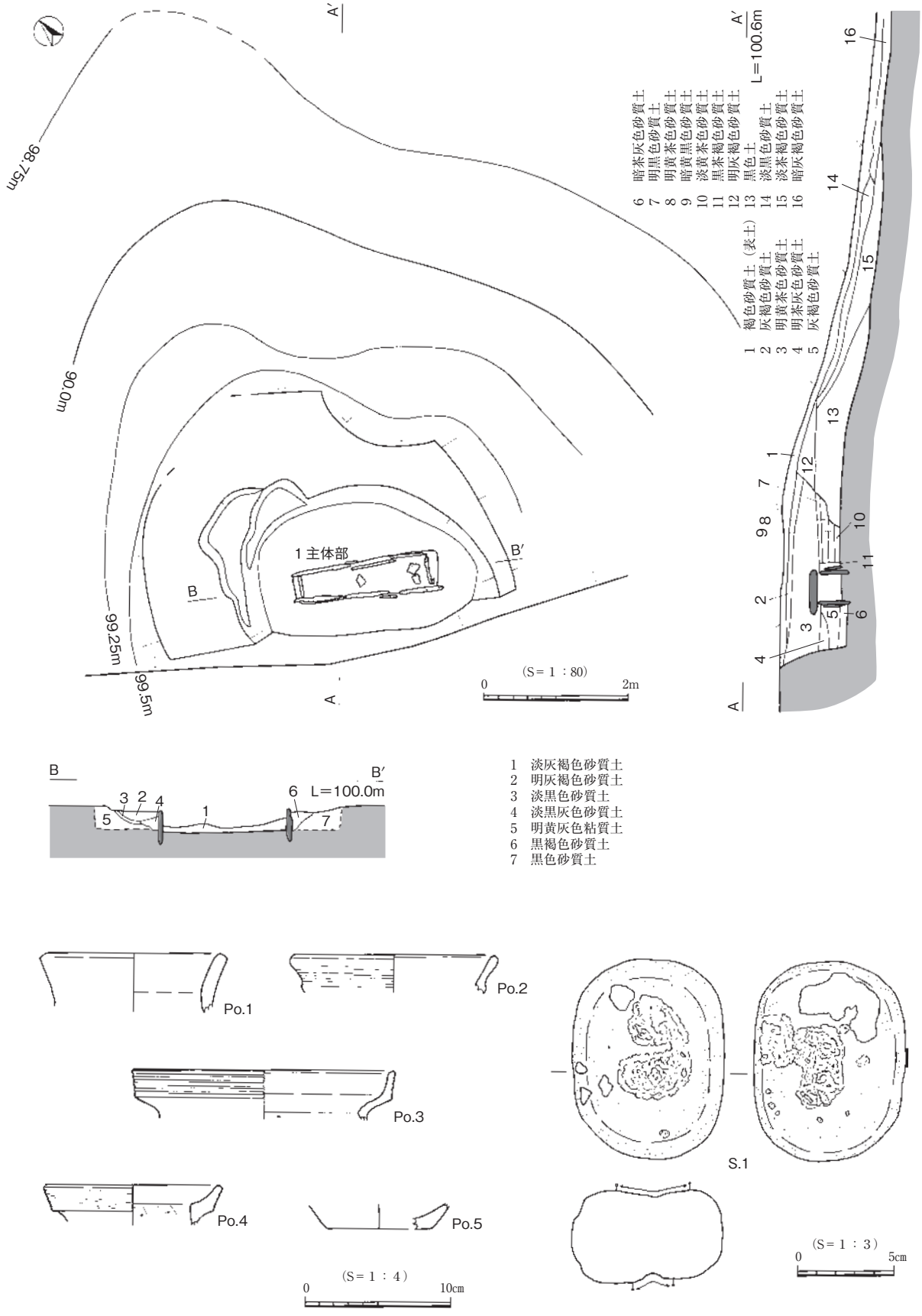
石棺の蓋石は、最大長85cm、厚さ10cmのものを三枚置き、更に合わせ目の上にも平石を置いて閉塞している。石棺の本体は、小口に１枚、長側板に三枚の板石を用いて作られており、長側板の合わせ目には、裏側にもう一枚の板石を置いて土砂の進入を防いでいる。

石棺の規模は、内法で長さ175cm、幅30～45cm、高さ35cmを測る。石棺の組み合わせ方は「H」字形になっている。石棺の蓋を開けると、木の根や雨水の影響で侵入したと見られる締まりのない灰褐色の砂質土が、石棺の中ほどの高さにまで堆積していた。

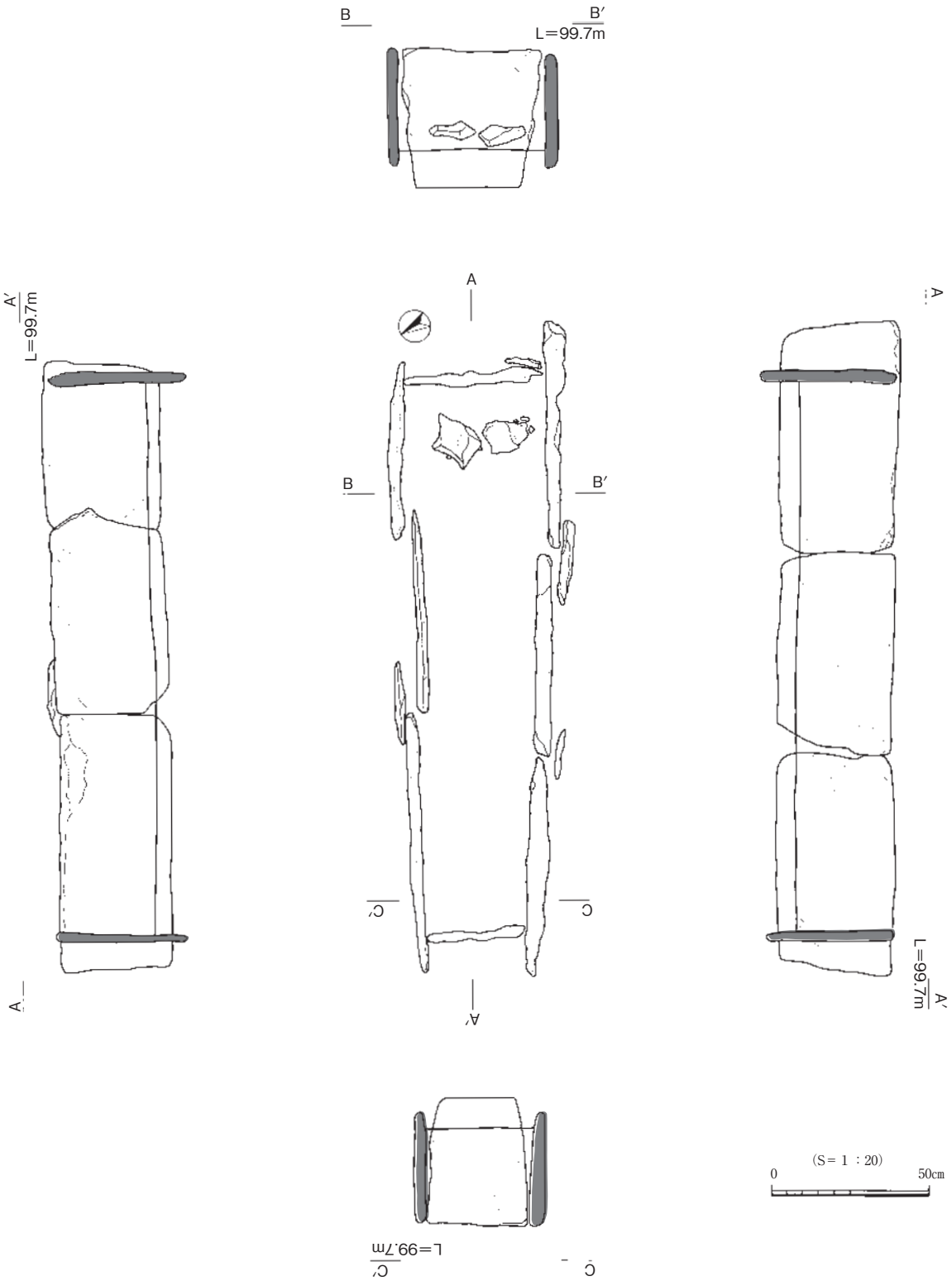
棺内には、東側に枕石と見られる長さ12cm程の平石が二個置かれており、その周辺から、メノウ製の勾玉３点とガラス製の小玉21点が原位置を留めた状態で出土した。これらの出土状況は、枕石を中心に疎らに分布しているが、一連の首飾りのような状況で副葬されたものではなかったと考えられる。このほかには、埋土を全量持ち帰り水洗選別した結果、ガラス製の小玉を75個確認したが、その他の副葬品などは見られなかった。

墓壙の底面で検出した石棺材を固定する掘形は、きれいな「ロ」字形に掘られており、掘形の深さは石棺の床面から10cm程度であった。

出土遺物　古墳の埋葬施設に伴う出土遺物は、石棺内からメノウ製の勾玉３点とガラス製の小玉96点が出土した。S.2は、色調がやや透明感のある乳白色を呈するメノウ製の勾玉で、長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ３gを測る。穿孔は、片面穿孔である。S.3は、色調が透明感のある灰褐色を呈するメノウ製の勾玉で、長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重さ５gを測る。穿孔は、片面穿孔であ

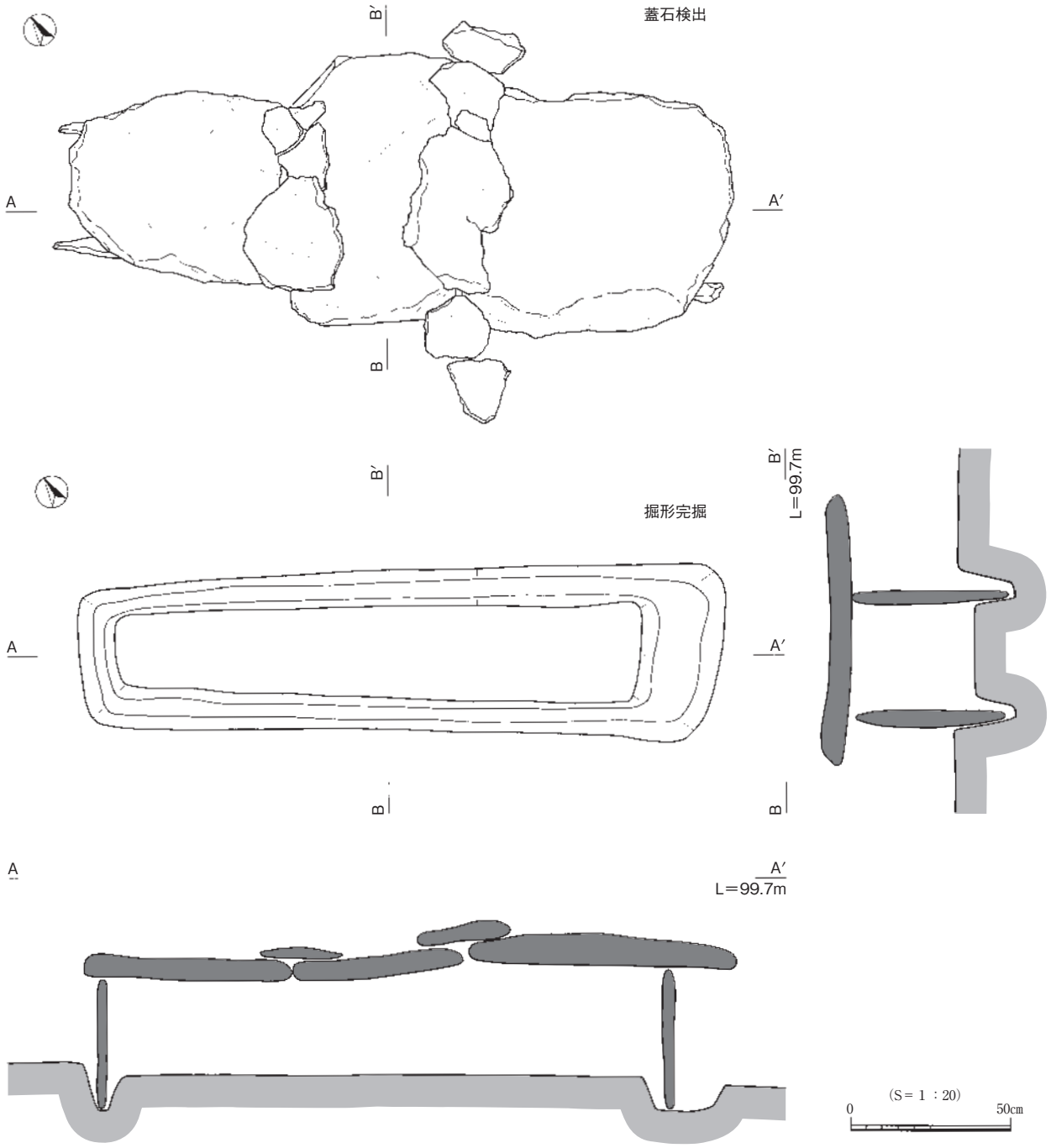


第12図　越敷山107号墳　遺構・遺物図



第13図　越敷山107号墳　1主体部　遺構図①

る。S.4は、色調が透明感のある白色を呈するメノウ製の勾玉で、長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.8cm、重さ3.9gを測る。穿孔は、片面穿孔である。G.1～96は、石棺の棺内から出土したガラス玉で、G.1～21は、原位置を留めていたもの。G.22～96は、石棺内の埋土の水洗選別によって出土したものである。ガラス玉のサイズは、直径2.5～６㎜までのものがあるが、大半は直径３㎜前後、重量が0.1g以下の小型品である。色調は、殆どが淡いブルーを呈するが、G.24は表面がかなり風化しており、淡い緑灰色を呈している。

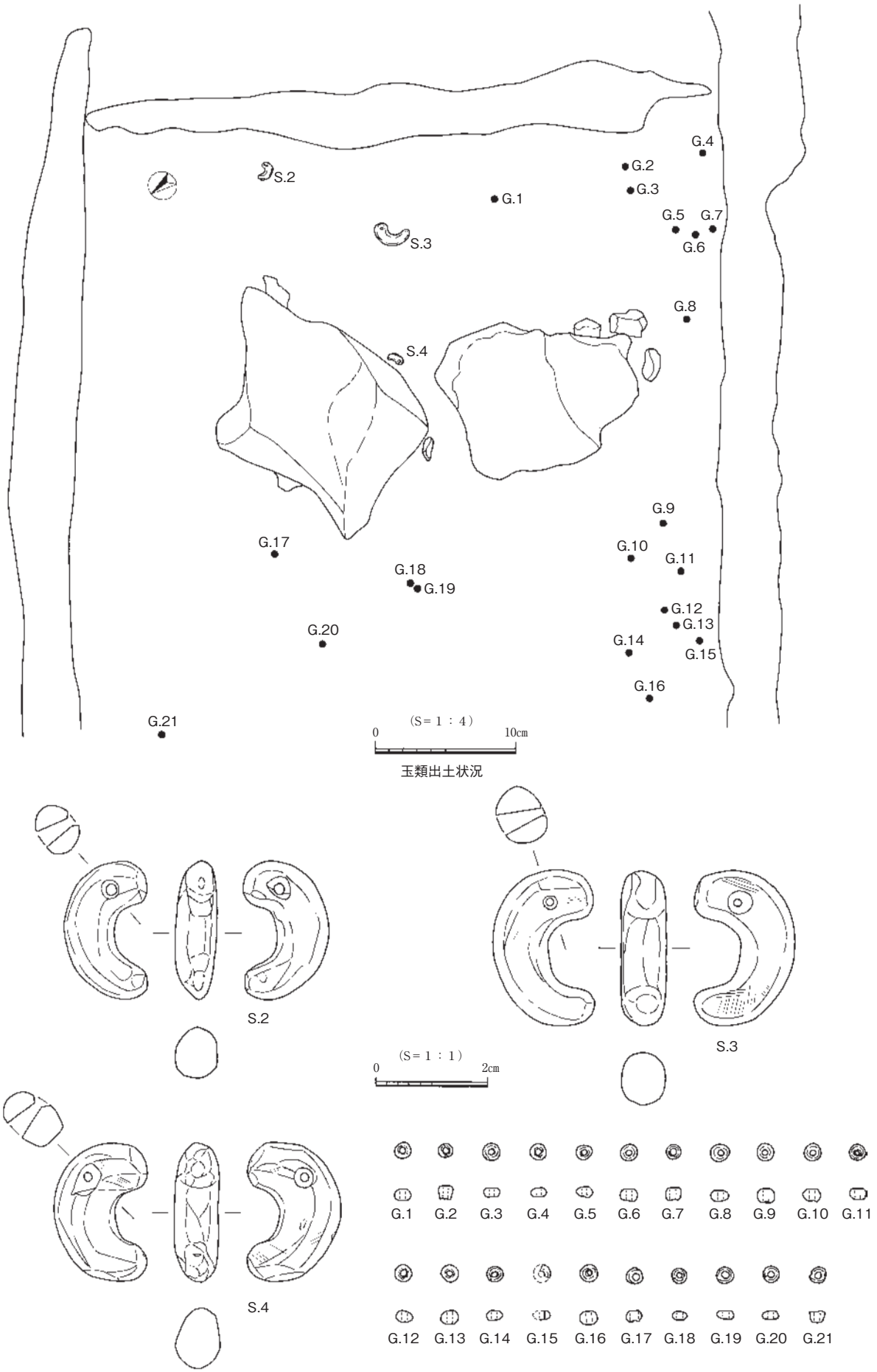


第14図　越敷山107号墳　1 主体部　遺構図②

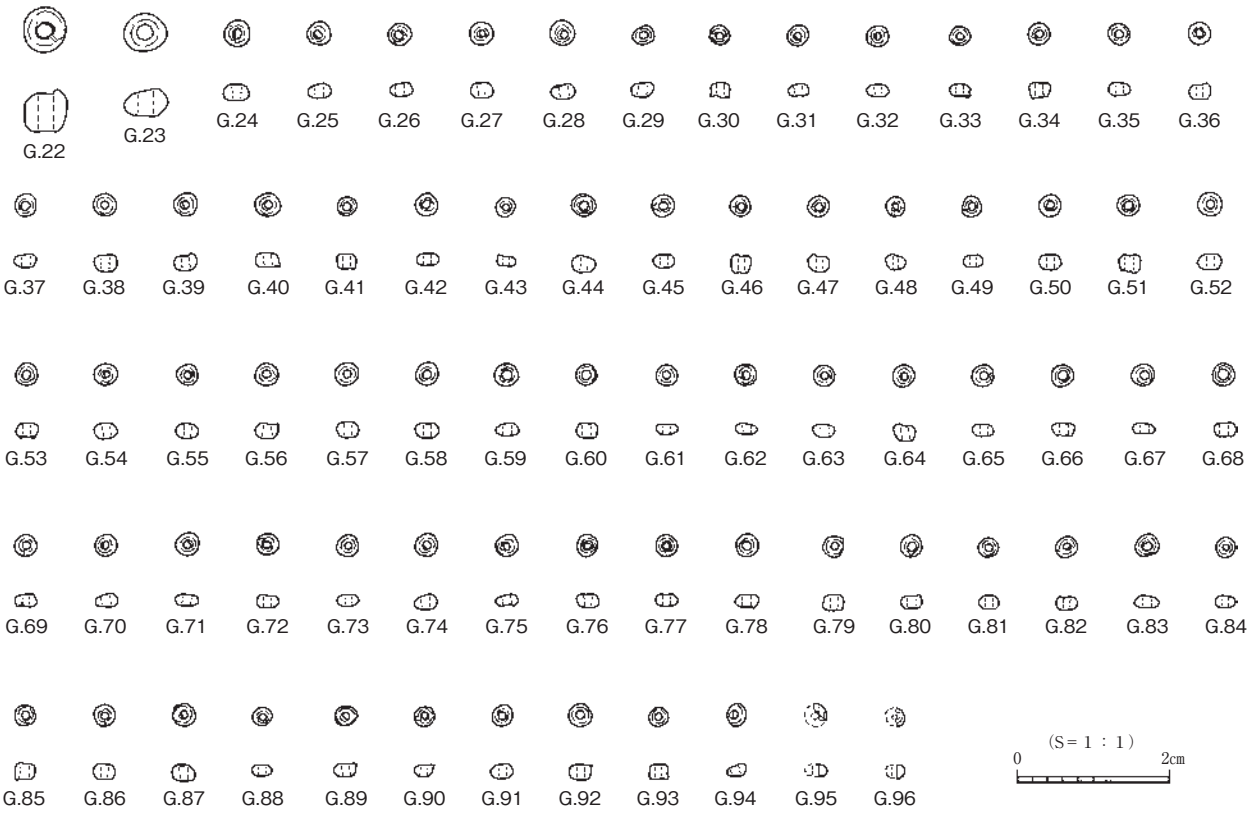
このほかに出土した遺物は、墳丘の表土掘削中に出土したものや、墳丘の盛土中から出土した弥生土器がほとんどである。

Po. 1は、表土から出土した、口縁端部が面を持つ土師器の甕である。Po. 2は、口縁端部が外方に広がる弥生土器の甕。Po. 3は、まっすぐ立ち上がる弥生土器の甕口縁部。Po. 4は、口縁部がやや厚みを持つ弥生土器の甕である。Po. 5は、平底状となる弥生土器の底部片。S. 1は、長さ10. 4cm、幅7. 9cm、厚さ4. 9cm、重さ507. 5gのデイサイト製の凹石である。

この古墳の時期については、土器が出土しなかったためはっきりしないが、隣接する越敷山108号墳と同時期に属するものと考えられる。



第15図　越敷山107号墳　1主体部　玉類出土状況図・遺物図①



第16図　越敷山107号墳　1 主体部　遺物図②

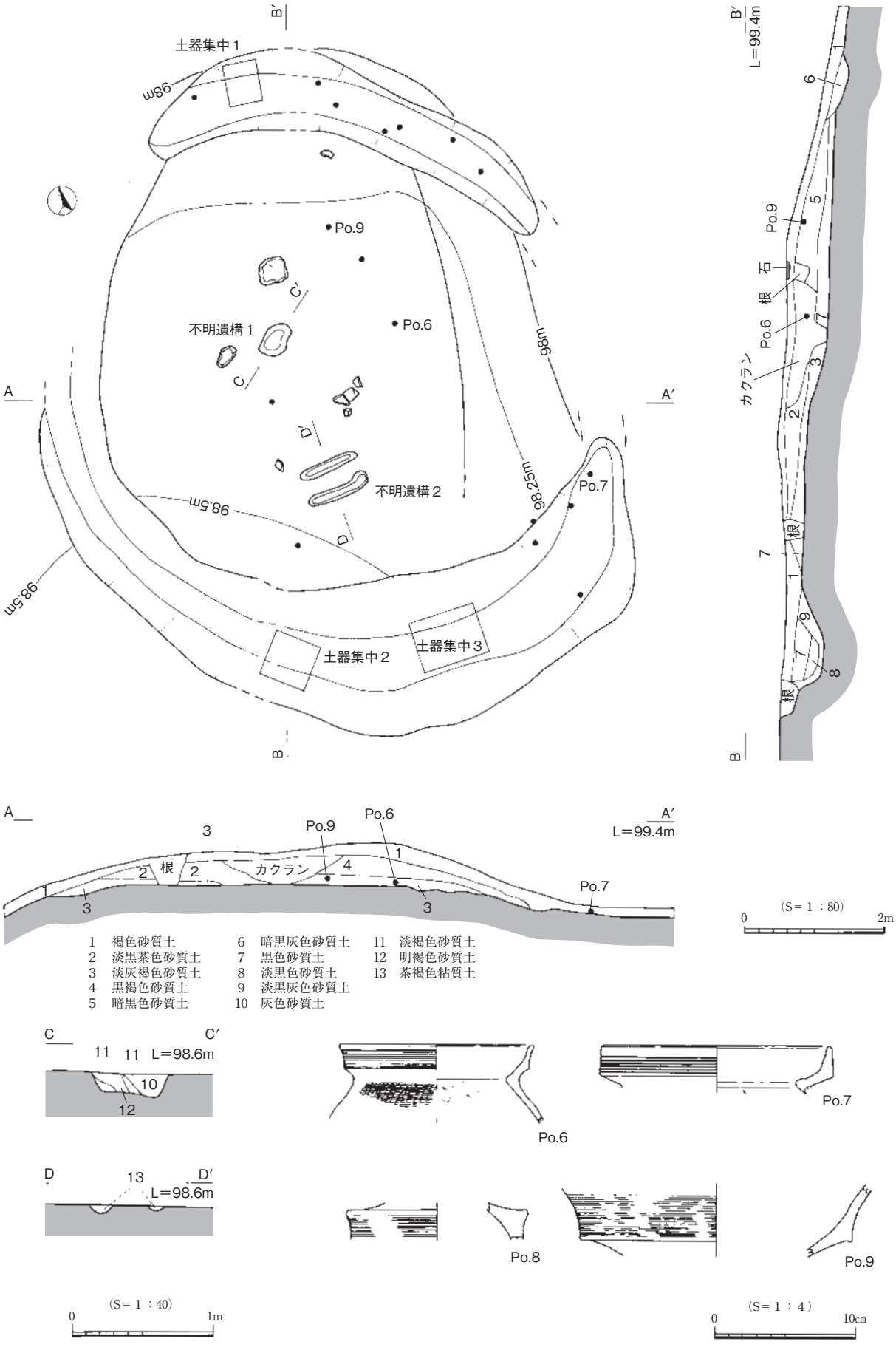
越敷山108号墳（第17～19図）

越敷山108号墳は、越敷山107号墳の北東、約10mの地点に位置する円墳である。この古墳は、陥穴１と竪穴建物１を切って造られている。

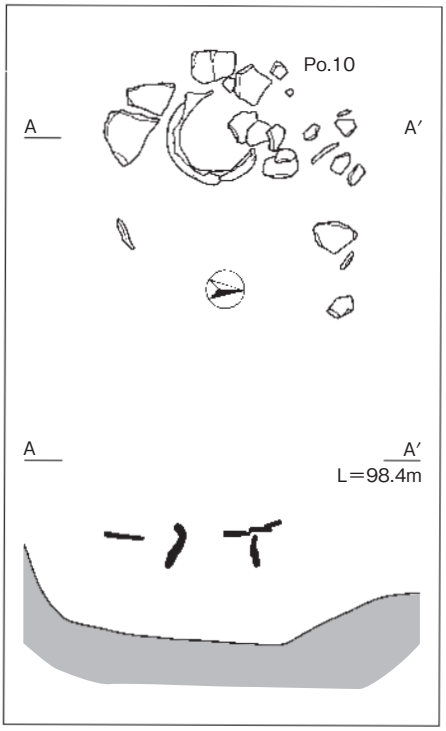
墳丘・周溝　越敷山108号墳は、調査前には盛土が60cm程度残存していたが、墳丘の中央部に大きな攪乱穴があるため、盗掘を受けているものと考えられた。調査では、この攪乱穴の検出面を中心に主体部の痕跡を探したが、結局地山面まで露出させた段階で石棺材の残欠と思われる板石の分布と、２基の不明遺構を検出したに留まった。墳丘の規模については、墳丘の東西両面が削平されているため直径が分からないが、南北方向では7.8mを測る。周溝の幅は、残存している範囲で１～２m程度、底面では40～80cm程度と推測される。周溝内では、北側に１ヶ所、南側に２ヶ所の土器集中を確認した。

埋葬施設　この古墳の埋葬施設は、盗掘による破壊で検出できなかったが、性格不明の掘り込みと石材の散布を確認した。不明遺構１は、墳丘の中央で検出した、長径60cm、短径40cm、深さ18cmの盗掘坑である。不明遺構２は、長さ90cm前後、深さ５～10cm程の２条の溝が平行する遺構で、石棺の石材を据え付けた掘形の可能性がある。

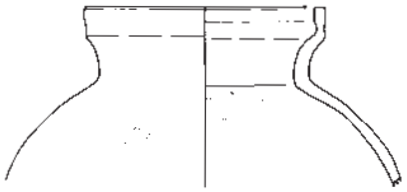
出土遺物　越敷山108号墳から出土した遺物は、墳丘の盛土中から弥生土器の破片のほか、古墳の周溝内から土器の集中区画を３ヶ所確認した。Po.6は、肩部に貝殻腹縁による連続刺突紋を施す弥生土器の甕である。Po.7は、口縁部に多条化した凹線紋を施す甕。Po.8は、表面を赤色塗彩する器台

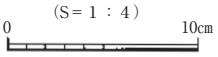


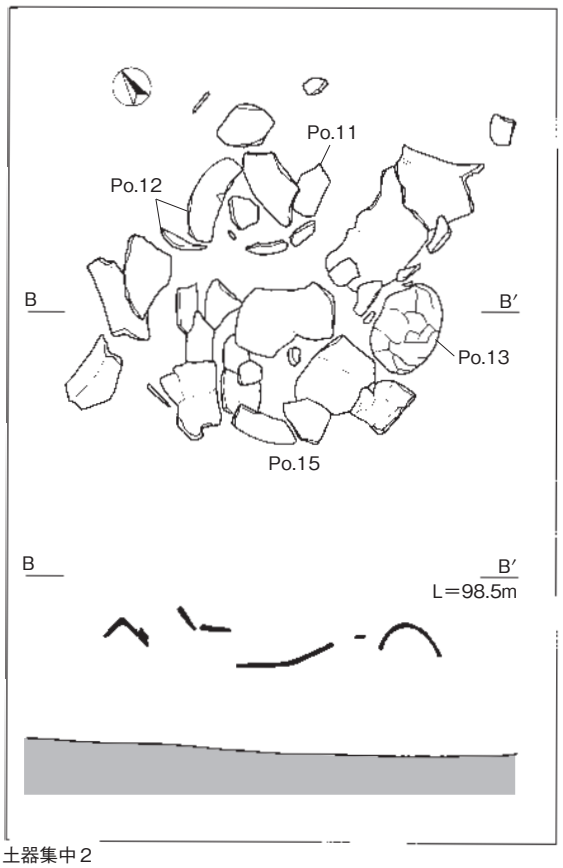
第17図　越敷山108号墳　遺構・遺物図



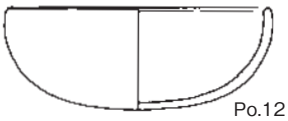
土器集中１

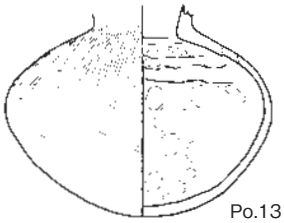


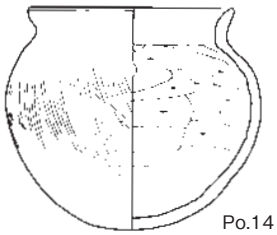


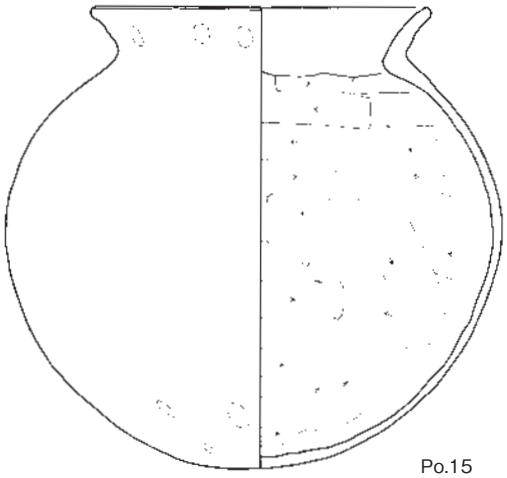


土器集中２

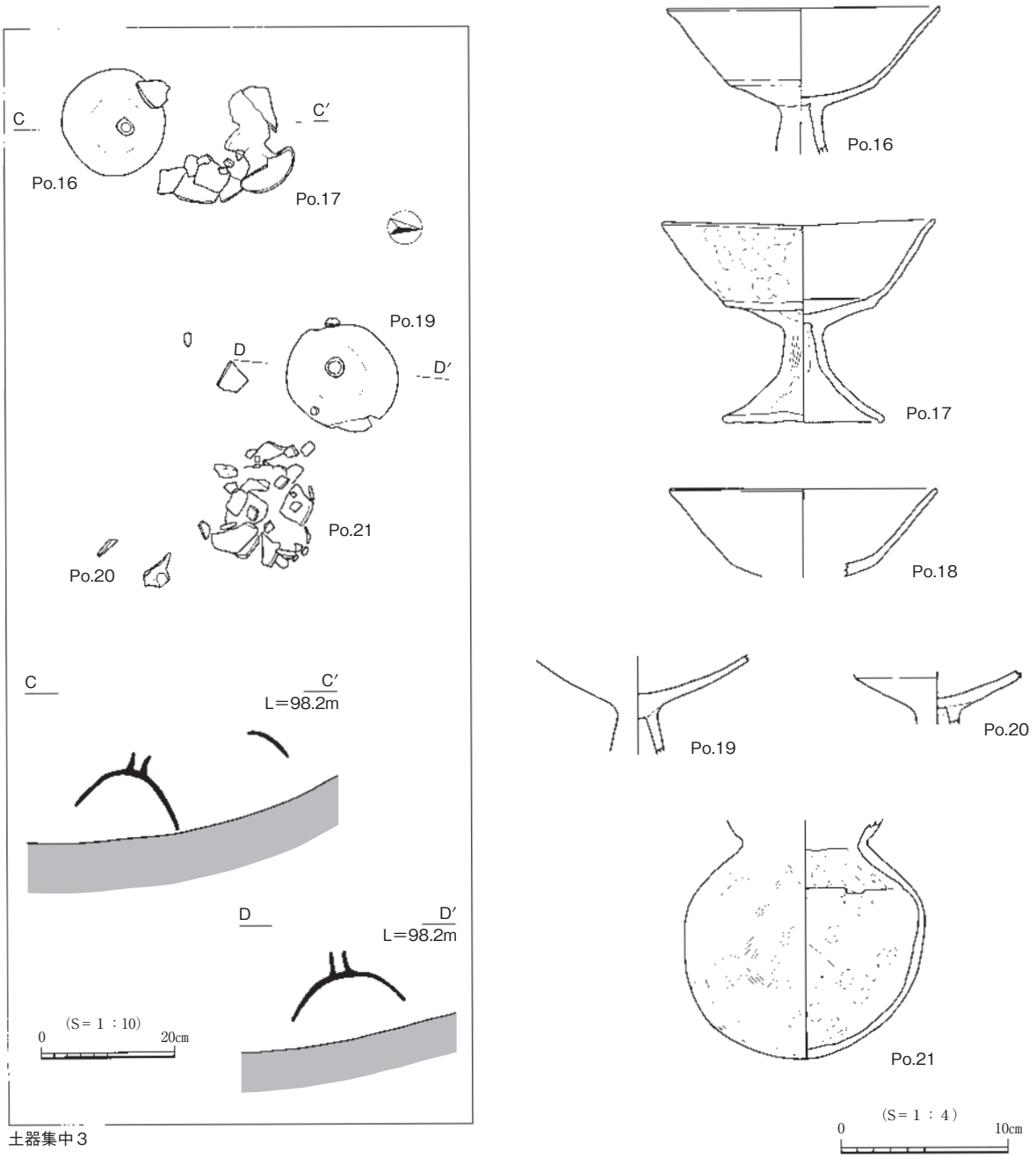








第18図　越敷山108号墳　土器集中１、２　遺構・遺物図



第19図　越敷山108号墳　土器集中３　遺構・遺物図

か高坏の脚部片。Po. 9は、多条化した凹線紋を施す器台である。土器集中１から出土したPo. 10は、口縁端部を複合口縁状にまっすぐ上方に立ち上げる土師器の壺である。土器集中２から出土した遺物は、須恵器の坏蓋、土師器の坏身、長頸壺、短頸壺、甕である。Po. 11は、口径11. 6cm、高さ4. 1cmの須恵器の坏蓋である。天井部の全体をヘラケズリし、口縁端部と天井部の下にある稜は鋭く突出する。口径がやや小さいが、陶邑のTK208と同時期のものか。Po. 12は、土師器の坏身である。口径は13. 9cm、高さ5. 4cmで、器壁の風化が著しいが、底部は丸底に仕上げられている。Po. 13は、頸部より上を欠くが、土師器の長頸壺と見られる。内面の上部には粘土の積み上げ痕が明瞭に残るが、底部はナデ調整されている。頸部の直径が小さく、人間の手が入る大きさではないので、底部を先に作ったあと、肩部以上を積み上げて整形したものと考えられる。Po. 14は、口径10. 5cm、高さ11. 8cmの小型の甕である。外面は縦方向にハケ調整され、内面はケズリ調整され、器壁にはススが付着してい

る。Po. 15は、土師器の甕である。口縁は「く」字形に鋭く外反し、外面にはナデ調整、内面にはヘラケズリの痕が明瞭に残る。また、底部下半の外面にはススが付着している。土器集中３では、土師器の高坏５点と土師器の壺１点が出土した。Po. 16は高坏で、坏部には段を持つ。Po. 17は、脚部がラッパ状に広がり、坏部に段を持つ高坏である。Po. 18～20も高坏だが、坏部の段は緩やかになっている。Po. 21は、土師器の直口壺である。土器集中３から出土した遺物は、淡橙褐色を呈するものが多い。

これらの出土した遺物から、この古墳の時期は古墳時代中期のものと考えられる。

越敷山126号墳（第20・21図）

越敷山126号墳は、108号墳と109号墳の東寄りの中間点、標高97m付近で確認した、小型の円墳である。

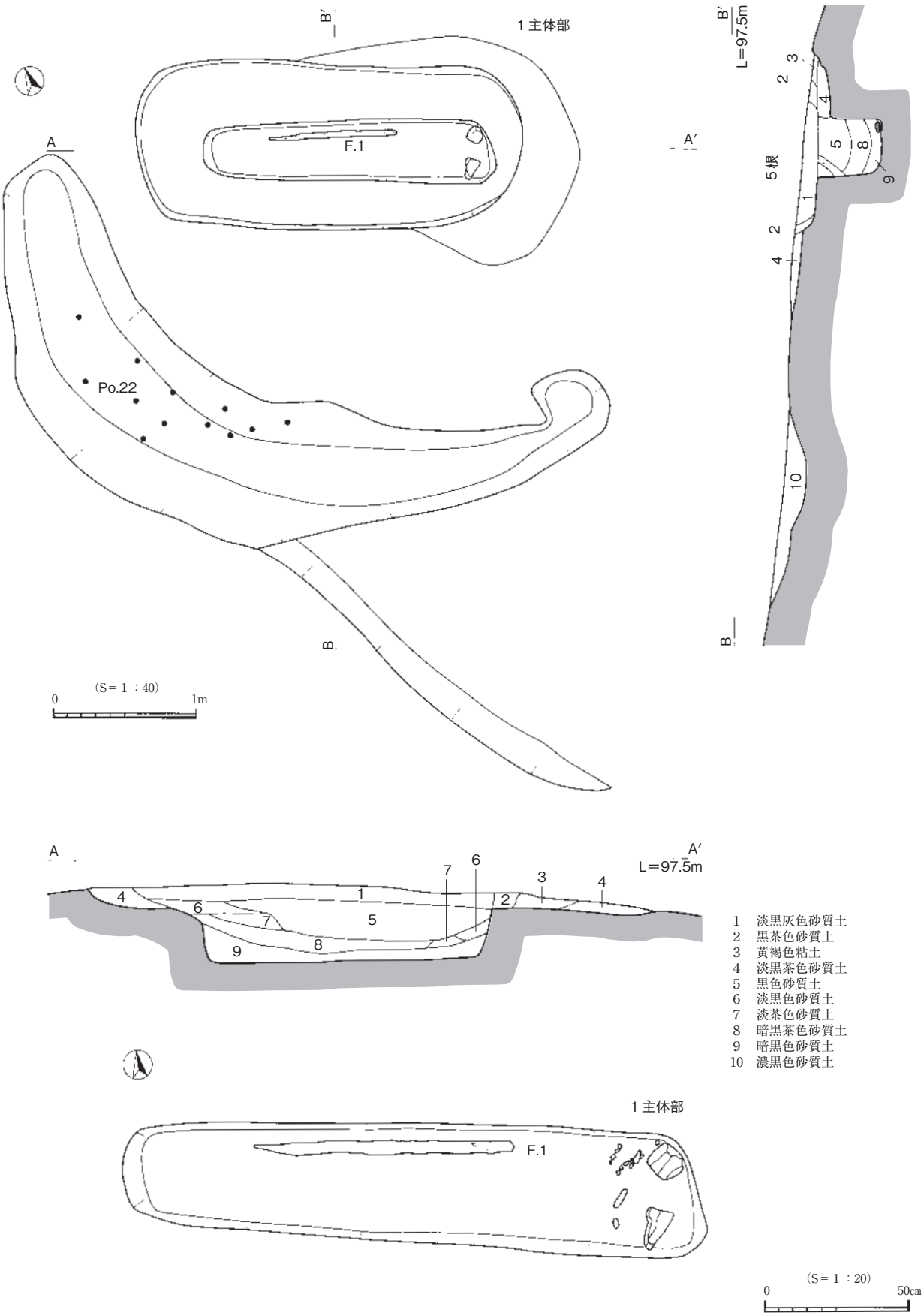
墳丘・周溝　この古墳は、調査前から墳丘が流出しており、事前の測量でも存在を確認できなかった。調査では、表土剥ぎの段階からこの周溝上に大木の根株があり、その根の中に須恵器片が大量に噛みこまれている状況であった。周溝は半分以上が流失しているが、主体部の南側に長さ4. 5m程度が残存している。この周溝は、主体部を中心に丸く廻るように配置されている。周溝の幅は1. 1m、深さ20㎝程度あり、周溝内からは須恵器の破片が出土している。南側で検出した周溝が北側にも全周していたと仮定すると、直径４m程の円墳であったと考えられるが、築造された当初から高く盛られた墳丘があったのかは判然としない状況であった。

埋葬施設　埋葬施設は、二段墓壙状の形態となっている。一段目の墓壙は、長さ2. 7m、幅1. 1m、深さ15㎝あり、二段目の墓壙は、長さ2. 1mで、東側が幅45㎝、西側が幅35㎝である。棺内の東側には枕石が置かれていることから、この主体部は東頭位で埋葬されていると考えられる。

副葬品については、墓壙北側の壁面に接して鉄刀が置かれており、刃先を西に向けている。鉄刀が墓壙の壁面に接して置かれていることから、木棺墓ではなく土壙墓であったと推測される。また、墓壙内の堆積状況は、上層から土砂が一気に落ち込んだように見えることから、木製の蓋が被せられていた可能性もある。

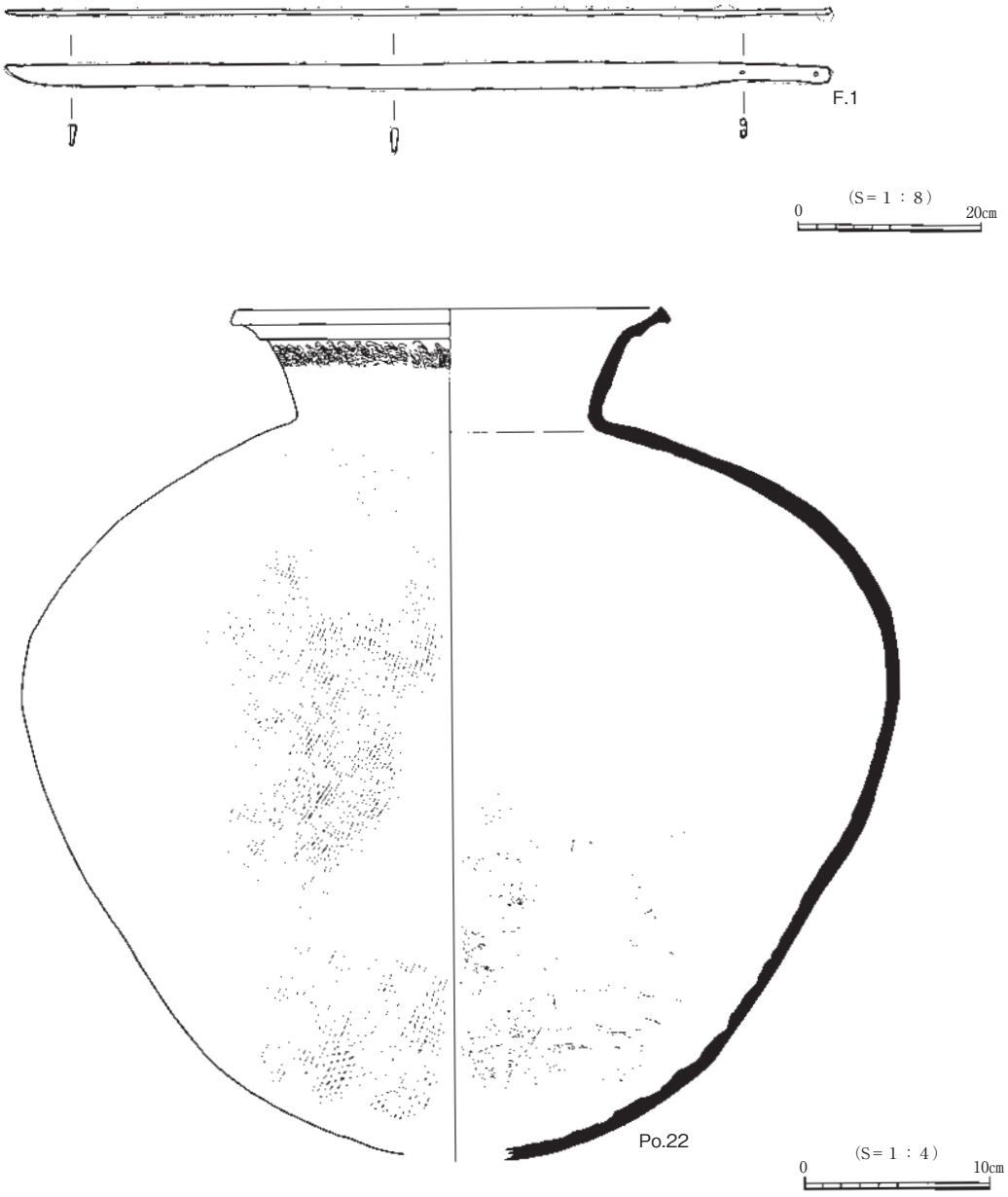
出土遺物　この古墳に伴う遺物は、主体部内から出土した鉄刀と、周溝内から出土した須恵器の壺がある。

F. 1は、長さ89. 5㎝、幅2. 8㎝、厚さ７㎜の刀で、反りが殆ど無い直刀である。柄は関が不明瞭だが、長さ13. 5㎝程と推測され、目釘穴は２ヶ所ある。出土時には、鉄刀の表面には鉄錆が厚く付着していたが、表面には木質の痕跡が見られなかったことから、鞘や柄の無い、抜き身の状態で副葬されたものと考えられる。Po. 22は、周溝内から出土した、口径23㎝、高さ46. 2㎝の須恵器の大甕である。プロポーションは、肩部が大きく広がり底部に向かって急激に細くなる。外面にはタテ方向のタタキが見られるが、底部付近では密にタタキの痕跡が残る。内面の調整は、底部には当て具の痕跡が明瞭に残るが、胴部より上は当て具の痕跡がナデ消されている。口縁端部はやや肥厚し、下段に一条の突帯が貼り付けられ、更にその下に波状紋が施されている。これらの装飾は、古墳時代後期の須恵



1　淡黒灰色砂質土
2　黒茶色砂質土
3　黄褐色粘土
4　淡黒茶色砂質土
5　黒色砂質土
6　淡黒色砂質土
7　淡茶色砂質土
8　暗黒茶色砂質土
9　暗黒色砂質土
10　濃黒色砂質土

第20図　越敷山126号墳　遺構図



第21図　越敷山126号墳　遺物図

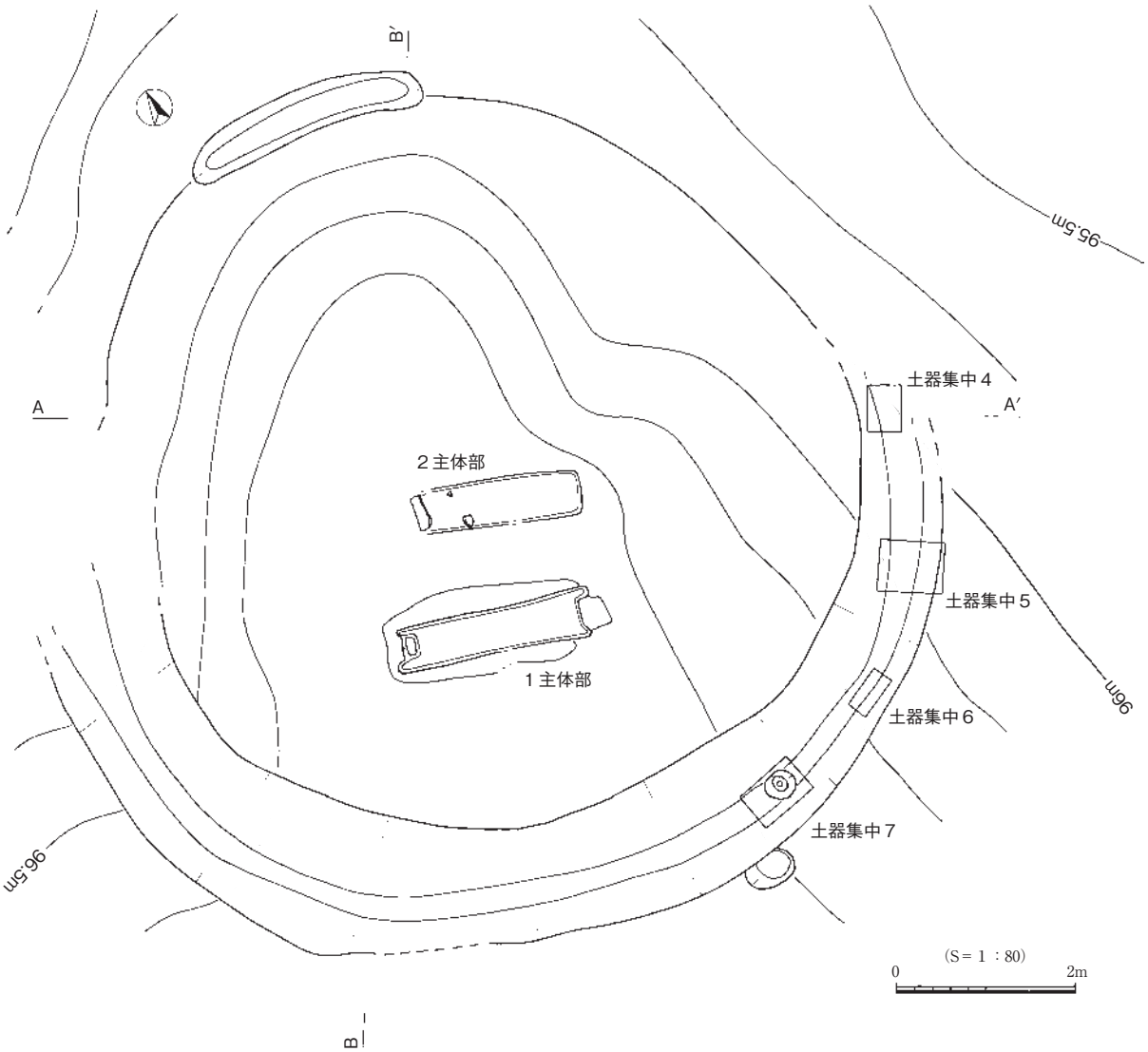
器の大甕と比べると簡素な印象を受ける。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。

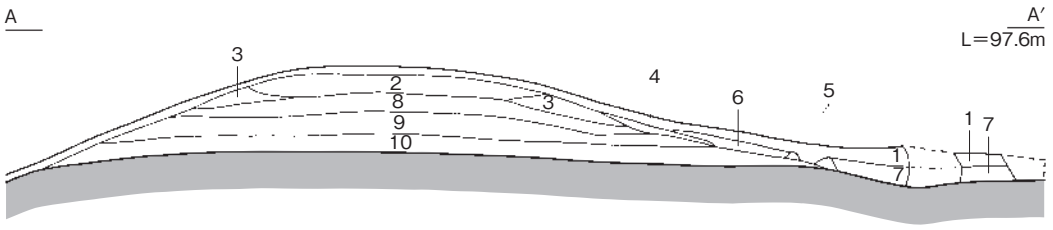
この古墳の時期は、出土した須恵器から古墳時代中期のものと考えられる。

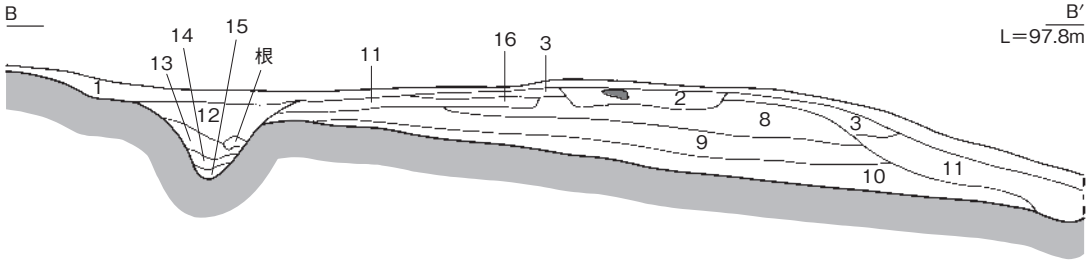
越敷山109号墳（第22～27図）

越敷山109号墳は、越敷山108号墳と127号墳の中間、標高96m付近に位置している。

墳丘・周溝　越敷山109号墳は、直径９m、高さ1.2mの円墳である。墳丘は、地山の上に層状に盛土を重ねて構築されている。周溝は、北側では大半が消滅しているが、南側では良好に残っており、上面の幅1.7m、底面の幅30㎝、深さは80㎝以上あったと考えられる。また、周溝の南側では貯蔵穴１を切っていた。周溝内からの遺物の出土状況は、南東部の周溝内に４ヶ所のまとまりとなって出土し

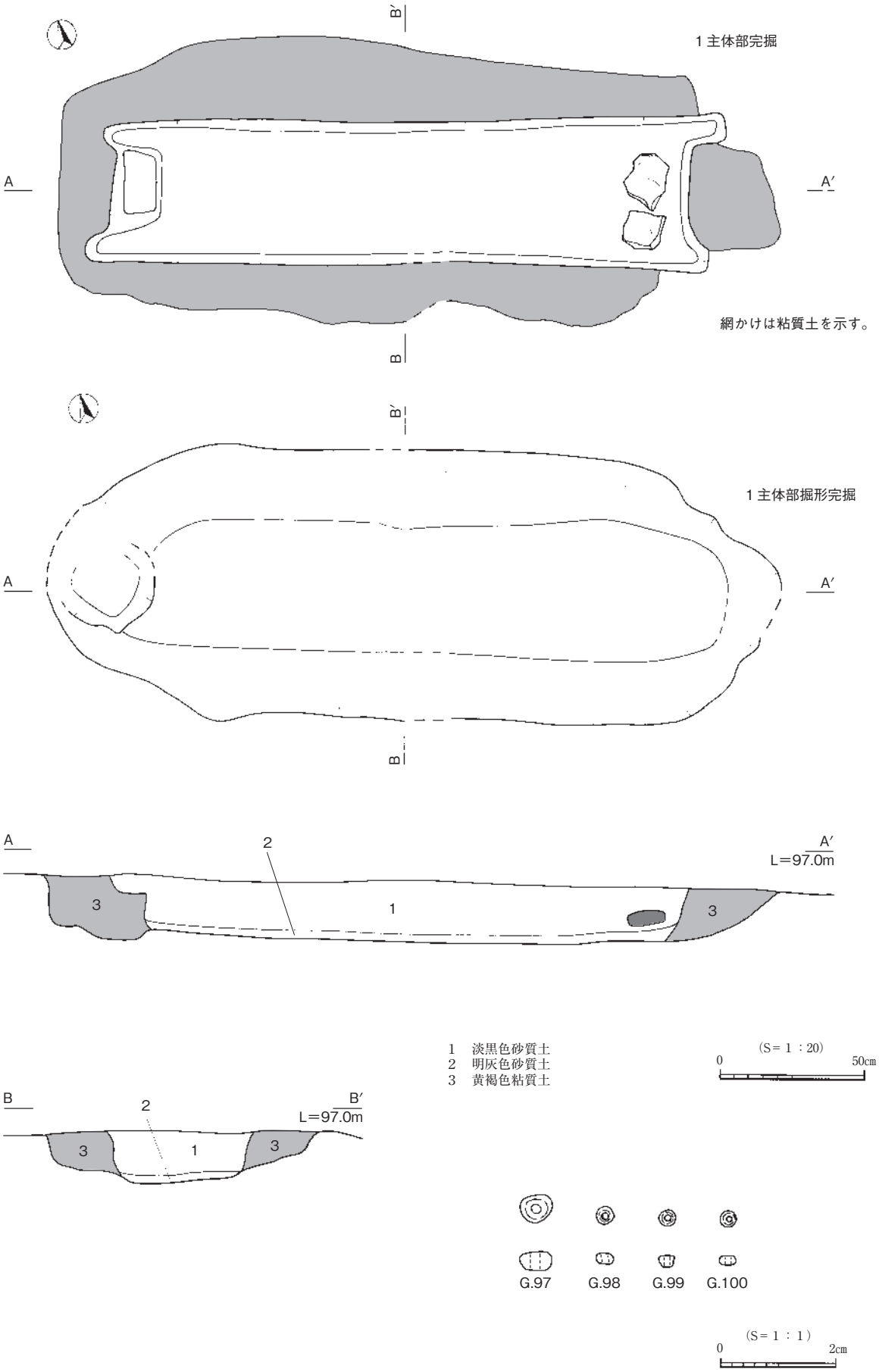




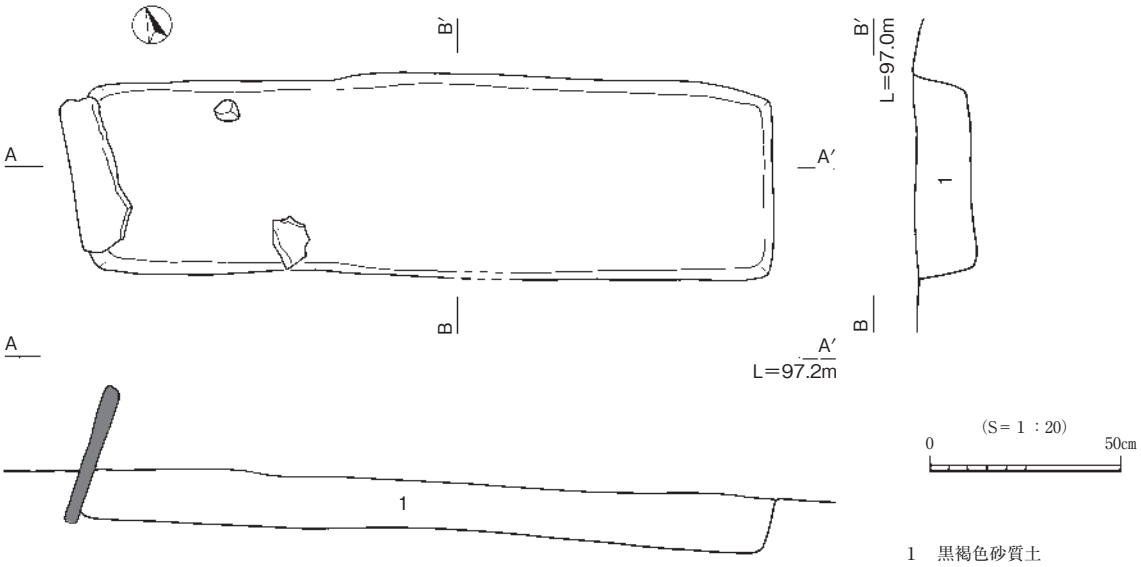


1　暗褐色砂質土（表土）
2　灰褐色砂質土
3　淡灰茶色砂質土
4　暗茶灰色砂質土
5　淡黄茶色砂質土
6　濃灰色砂質土
7　暗黒茶色砂質土
8　淡黒褐色砂質土
9　黒色砂質土
10　明灰褐色粘質土
11　明黒色砂質土
12　暗黒色砂質土
13　黒褐色砂質土
14　茶褐色砂質土
15　明茶褐色砂質土
16　淡黒色砂質土

第22図　越敷山109号墳　遺構図



第23図　越敷山109号墳　1主体部　遺構・遺物図



第24図　越敷山109号墳　２主体部　遺構図

ており、そのうちの土器集中７では、小穴の中に須恵器の壺を埋め、更に石で蓋をした状態で検出している。

埋葬施設　この古墳の埋葬施設は、表土直下の盛土層上面で、墳丘の中心からやや南寄りの地点に２基の主体部が並列している状況を確認した。

南側に位置する１主体部は、明瞭な掘形を持つ木棺墓で、墓壙の長さ2.5m、幅0.9m、深さ20cmあり、木棺の裏込めには黄褐色の粘質土が充填されていた。木棺の規模は、長側板が長さ2.3mあり、幅が50cmである。木棺は「H」字形に組み合わされており、木棺材の幅は、長側板で10cm程度あったものと考えられる。木棺の痕跡は確認することは出来なかったが、棺床は明灰色の砂質土が堆積しており、東側の棺床には平石が２個置かれていたことから、枕石であったと考えられる。副葬品については、主体部内の土砂を水洗して結果、ガラス製の小玉４点が出土したが、それ以外のものは見られなかった。

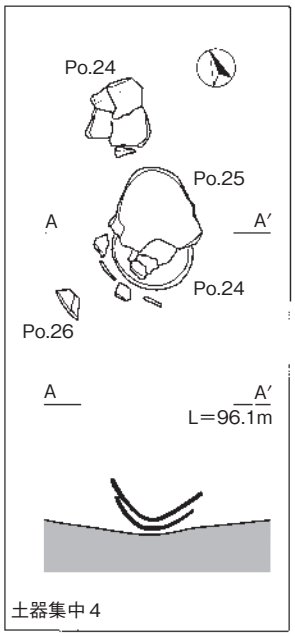
２主体部は、西側の小口部にのみ板石を残す石棺墓である。１主体部のような掘形を検出することは出来ず、棺床にも枕石は置かれていなかったが、周辺の状況から盗掘に遭っているもの考えられる。

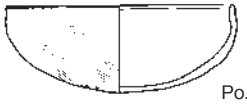
石棺の規模は、長さ1.8m、幅50cm、深さ15cmである。この主体部内から、遺物は出土しなかった。

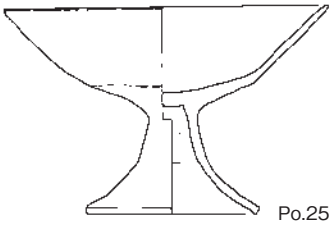
出土遺物　この古墳に伴う遺物は、１主体部から出土したガラス玉４点と、周溝内から出土した土器や、周溝内、墳丘の盛土内から出土した弥生土器や石器類がある。

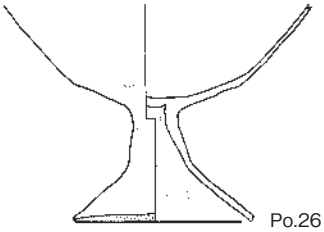
G.97～100は、１主体部から出土したガラス製の小玉である。G.97は、直径５㎜、厚さ３㎜を測り、色調は濃いブルーを呈している。それ以外の３点は、直径３㎜程度で色調も淡いブルーである。

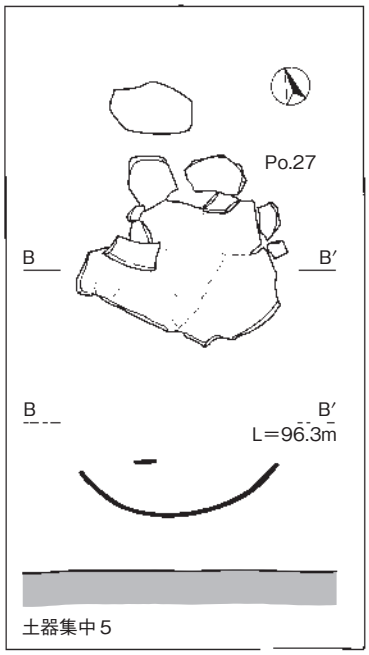
土器集中４では、土師器の坏身２点と高坏２点が出土した。Po.23は、口径12cm、高さ4.8cmの土師器坏である。口縁部と内面はナデ調整され、口縁端部は突出する。底部は丸底で外面にはハケ調整の痕が残る。色調は橙褐色を呈するが、内面は一部が色抜けしている。Po.24は、口径12cm、高さ4.7cmの土師器坏で、Po.23と比べると口縁部がやや内彎気味に立ち上がり、端部の突出も弱い。Po.

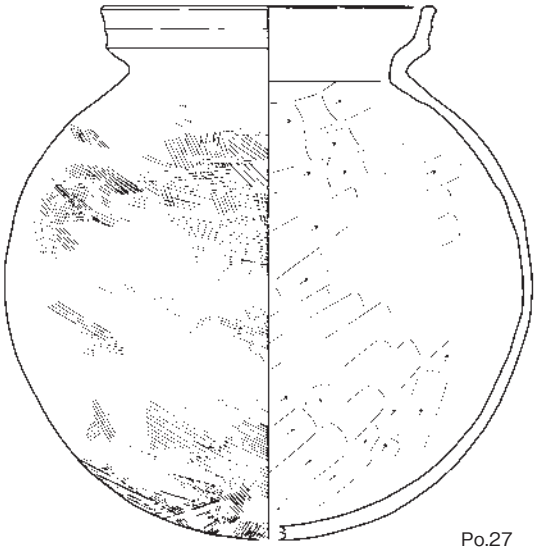


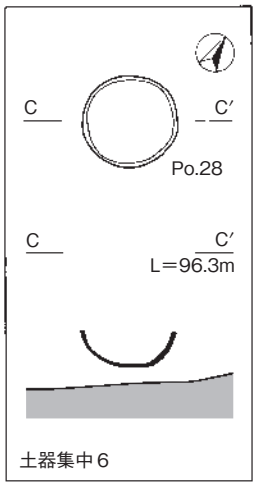


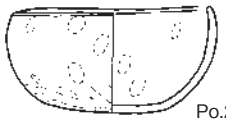








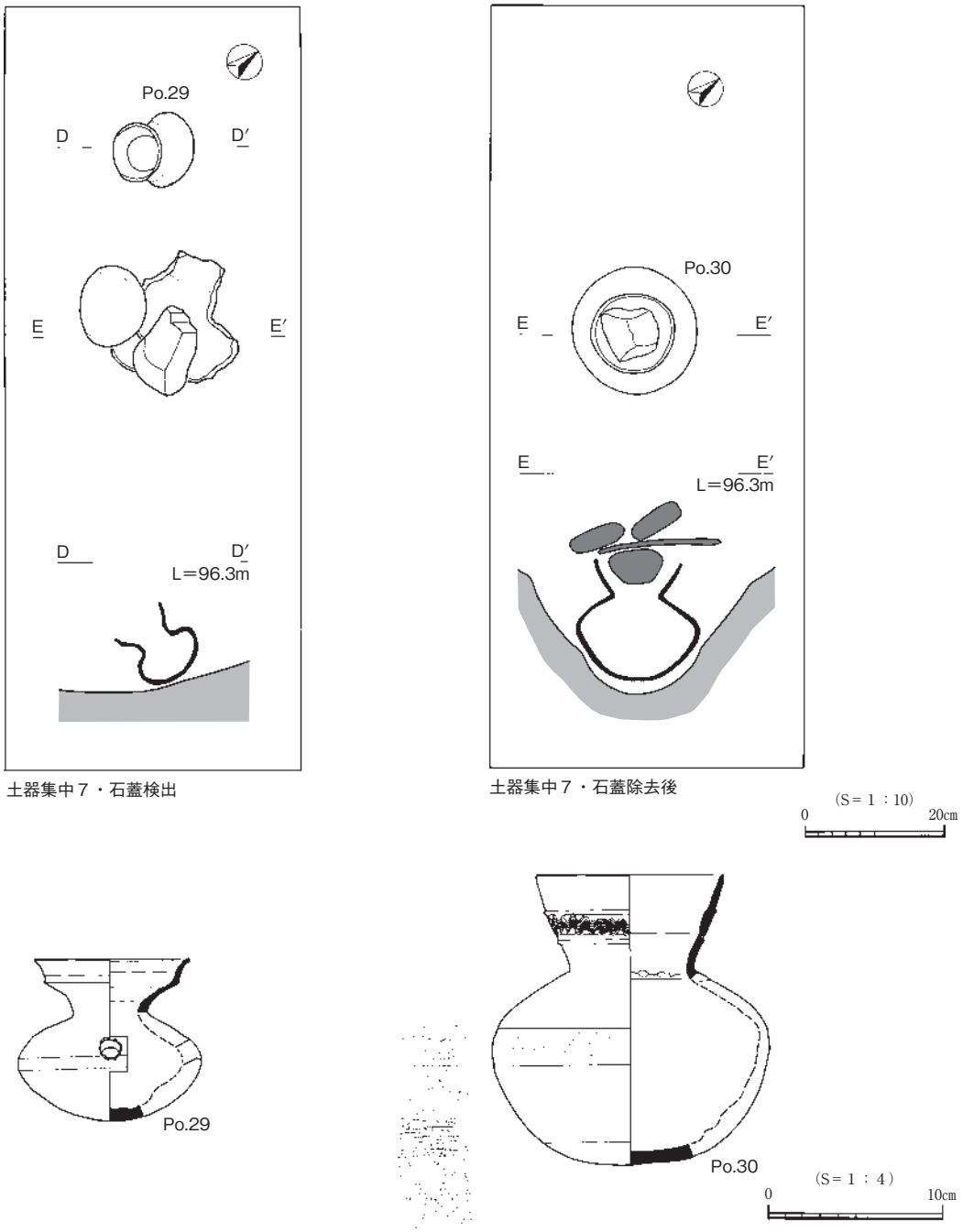




(S=1:4)
0 10cm

(S=1:10)
0 20cm

第25図　越敷山109号墳　土器集中４～６　遺構・遺物図

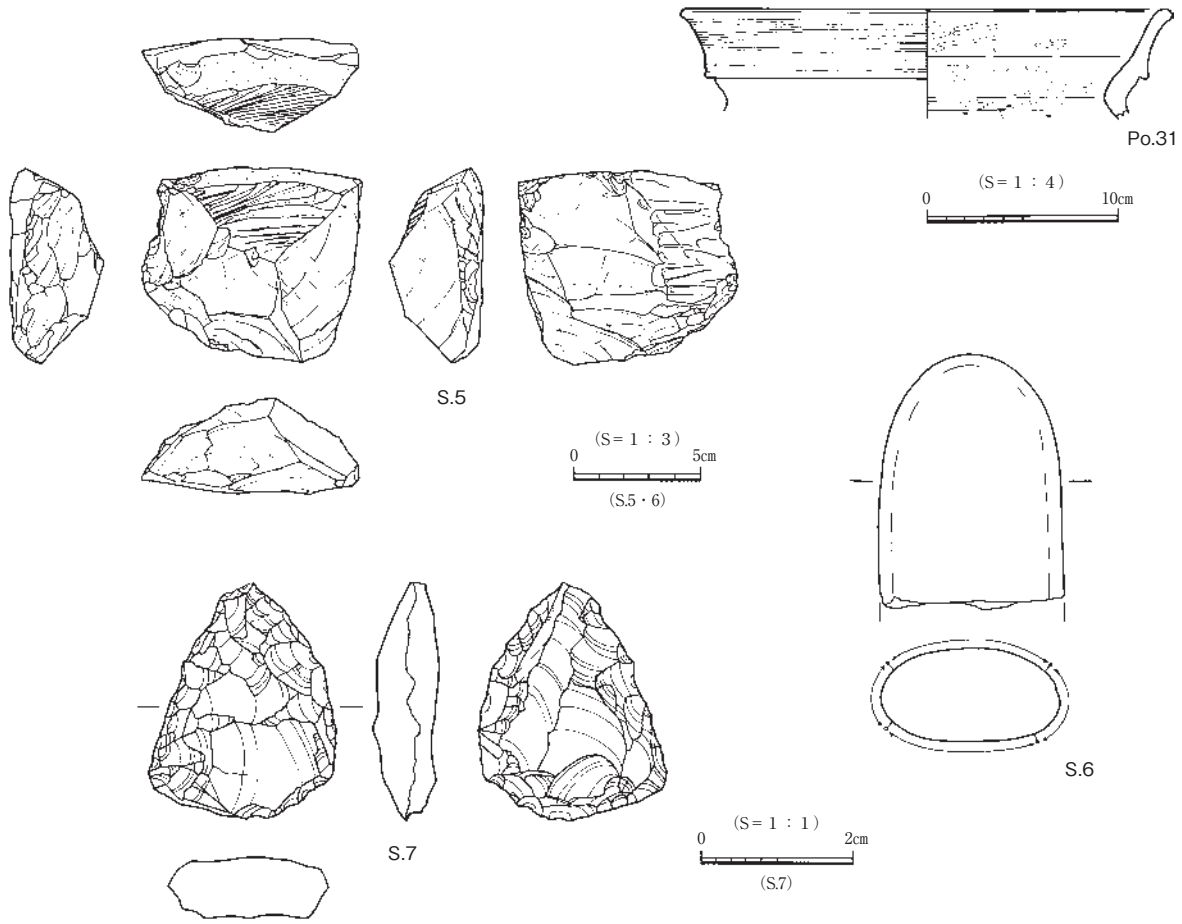


第26図　越敷山109号墳　土器集中７　遺構・遺物図

25は、土師器の口径17cm、高さ11cmの高坏で、坏部には緩い段を持ち、脚部の調整はやや粗い。胎土は水樋されたような土で、色調は明るい橙褐色を呈するが、所々で色抜けしており、口縁部外面には黒斑がある。Po. 26は、口縁部を欠くがPo. 25と同様の資料である。胎土には白い砂粒を含み、口縁部と脚部の外面には黒斑が付く。

土器集中５では、土師器の甕が口縁部を横に向けた状態で出土した。Po. 27は、複合口縁の土師器甕である。体部は球形で、外面はハケ調整、内面は全面をケズリ調整される。胴部外面の下半には、帯状にススが付着しているが、内面には炭化物は見られない。

土器集中６では、土師器の坏身が１点だけ単独で出土している。Po. 28は、口径10. 3cm、高さ5. 8cmの土師器坏である。丸底の器形で、全体にナデ調整されているが、底部外面にはケズリ調整の痕跡



第27図　越敷山109号墳　遺物図

が残る。胎土や色調、焼成などの特徴は、越敷山127号墳の土器集中10から出土した高坏に類似しており、底部には黒斑が付く。

土器集中７では、須恵器の小型瓶が１点と、小穴の中に須恵器の壺を置き、壺の口縁部に石を詰め、更に板石で蓋をした状態のものが出土した。Po. 29は、口径8. 9cm、高さ9. 4cmの須恵器の小型瓶で、口縁は段を持ち外方に広がる。紋様は施されず、外面はナデ調整される。Po. 30は、口径10. 7cm、高さ17cmの須恵器長頸壺で、口縁部と胴部に波状紋が施され、底部にはタタキの痕跡が残る。口縁部から肩部外面と底部内面に緑灰色の自然釉が付着していることから、口縁部を真上に向けた状態で焼成されたものと考えられる。

Po. 31は、周溝内から出土した口径25. 3cmの弥生土器の甕。S. 5は、玄武岩製の石核。S. 6は、デイサイト製の砥石。S. 7は、墳丘の盛土から出土した黒曜石製の石鏃である。

この古墳の時期は、周溝内から出土した遺物から、古墳時代中期のものと考えられる。

越敷山127号墳（第28～32図）

越敷山127号墳は、標高95m付近に所在する円墳である。

墳丘・周溝　この古墳の墳丘は、東側を道路２によって大きく削平されており、主体部も道路の断面に見えている状況であった。墳丘の形は、一見すると隅丸方形を呈しているように見えるが、墳丘のコーナー部は大きく墳丘側に向かって削り込まれていることから、円墳であったと推測される。規模は、直径９m、現存する高さは60cm程度と考えられる。南側の周溝は保存状態が良好であるが、北側

は段状に残っているのみである。墳丘の盛土は、大半が流出しているが、20cm程度残っており、盛土を除去した地山面からは掘立柱建物２が検出された。

埋葬施設　埋葬施設は、墳丘の中心からやや南寄りに２基の石棺墓が並列して配置されているが、２基の古墳とも盗掘に遭っており、大半の石棺材が抜き取られてしまっている。

１主体部は、墓壙の掘形が2.1m以上、幅90cmあり、墓壙の検出面では破壊された石棺材が散乱している状況であった。掘形の底面は、「ロ」字形に溝が掘られており、石棺材を固定する掘形と考えられる。この主体部内から、遺物の出土は見られなかった。

２主体部は、墓壙の規模が2.4m以上、幅90cmあり、墓壙内には取り残した石棺材の長側板２枚が内側に倒れ込んだ状態で放置されていた。盗掘は墓壙の底面にまで及んでおり、東側の部分は小口板の掘形も失われていたが、西側には「H」字形の掘形が残っていた。この主体部に伴う遺物は、盗掘坑の埋土から土師器の坏が１点出土している。

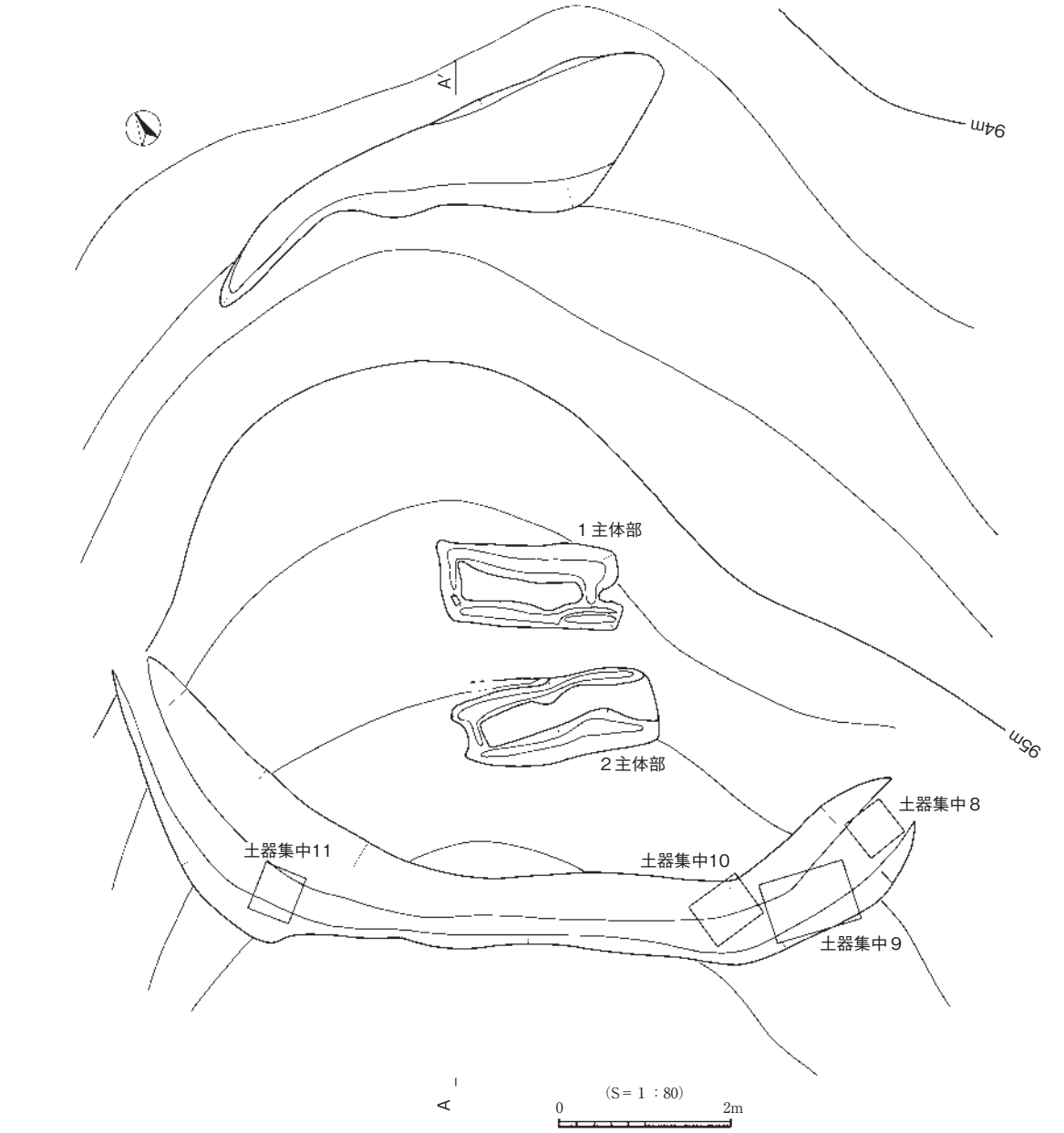
出土遺物　この古墳から出土した遺物は、２主体部の掘形や、墳丘上の各所に破片となって散らばっていた須恵器の直口壺、周溝内の土器集中から出土した土器である。

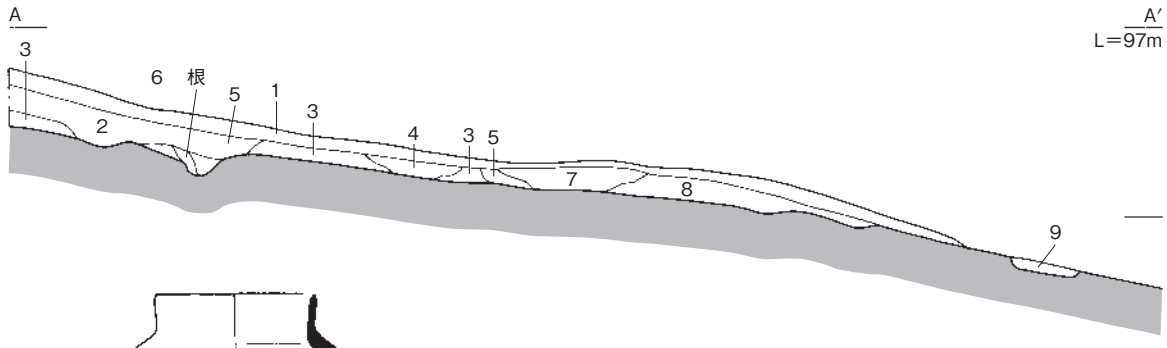
Po. 32は、口径8.2cm、高さ4.5cmの須恵器直口壺である。墳丘の表土や周溝内からバラバラの状態で見つかっていることから、周溝が埋没する前に墳丘上で破砕されたものと考えられる。全体的にナデ調整されているが、底部外面には粗いヘラケズリの痕が残る。外面には緑色の自然釉が掛かっており、釉の垂れ具合から、底部を斜め下に置いた状態で焼成されたものと考えられる。Po. 33は、２主体部の埋土中から出土した土師器の坏である。復元口径は12.9cmあり、底部を欠くが高さ４cm程度と推測される。全体にナデ調整されており、口縁部は内彎する。色調は、器壁、胎土とも橙褐色を呈し、白い砂粒を含む。

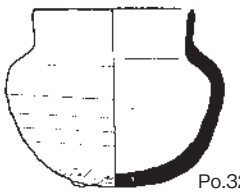
Po. 34は、土器集中８から出土した土師器の甕である。口縁部は退化した複合口縁形を呈し、外面は斜め方向のハケ、内面はヘラケズリ調整される。胴部外面にはススが付着し、底部内面に炭化物が付着していることから、煮炊きに使用されたものと考えられる。

土器集中９からは、土師器の坏３点と小型の甕１点、須恵器の甕、鉄製品が出土した。Po. 35は、口径12cm、高さ4.5cmの土師器の坏。口縁部と内面はナデ調整されるが、底部にはケズリの痕が残る。また、外面の器壁には細かいヒビが入っている。色調は赤褐色を呈するが、内面には一部色抜けした部分が残り、胎土も黒化している。Po. 36は、口径11.5cm、高さ4.6cmの土師器坏で、胎土や調整はPo. 35とよく似ている。Po. 37も、復元口径12cm、高さ4.4cmの土師器坏で、Po. 35とよく似ている。Po. 38は、口縁部が退化した複合口縁形を呈する小型の土師器甕である。底部は丸底で、口縁部と胴部の径が近いため、なで肩風に見える。内外面とも、炭化物の付着は見られない。Po. 39は、胴径17cmの球形を呈する須恵器の甕である。口縁部を欠くが、段状に大きく広がるものと推測される。穿孔のある胴部中央には、板状工具による右上がりの刺突紋が廻る。全体的にナデ調整されているが、胴部の下半にはタテ方向のタタキの痕跡がうっすらと残る。陶邑のTK208に相当する資料と考えられる。F. 2は、残存する長さ4.8cmの刀子の破片と見られる。

土器集中10は、土師器杯２点と高坏が出土した。Po. 40は、口径11.4cm、高さ4.7cmの土師器の坏である。Po. 41は、口径12.2cm、高さ4.6cmの土師器坏で、底部のケズリ調整は、手持ちの状態で行



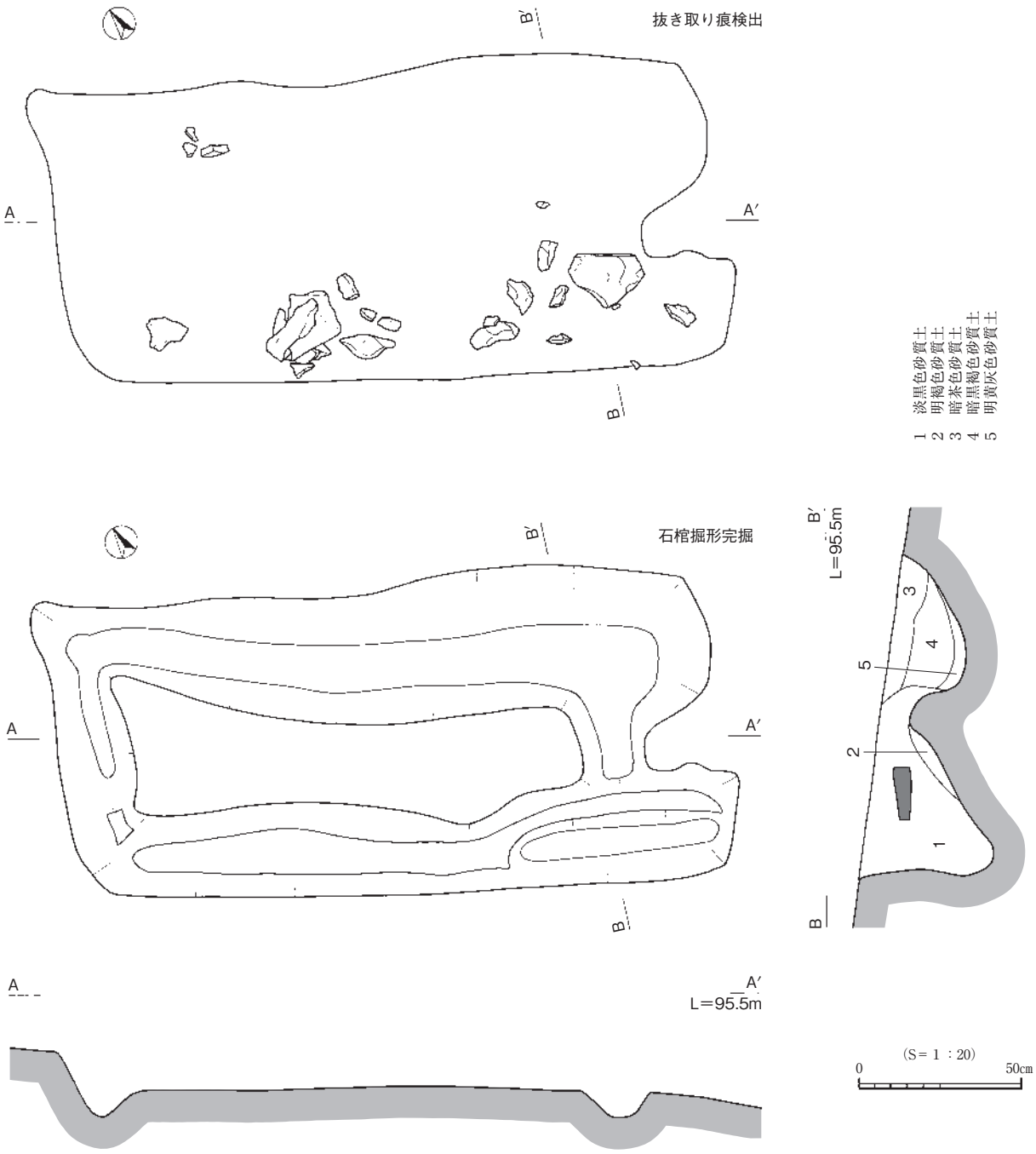




(S＝1：4)
0
10cm

1　暗褐色砂質土（表土）
2　明黒色砂質土
3　暗黄茶色砂質土
4　淡黒色砂質土
5　暗黒灰色砂質土
6　明黄茶色砂質土
7　淡橙灰色砂質土
8　淡茶灰色砂質土
9　淡灰色砂質土

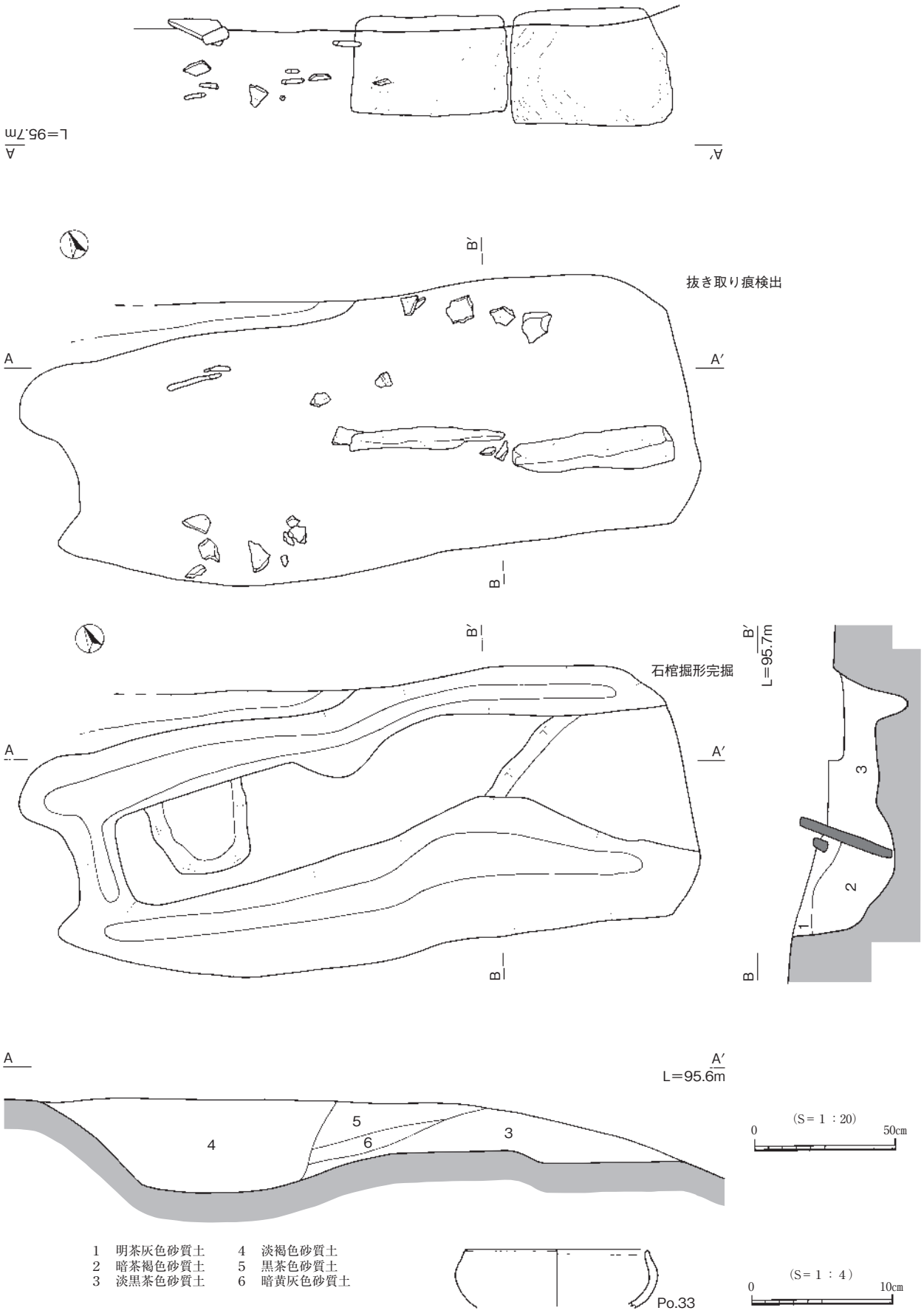
第28図　越敷山127号墳　遺構・遺物図



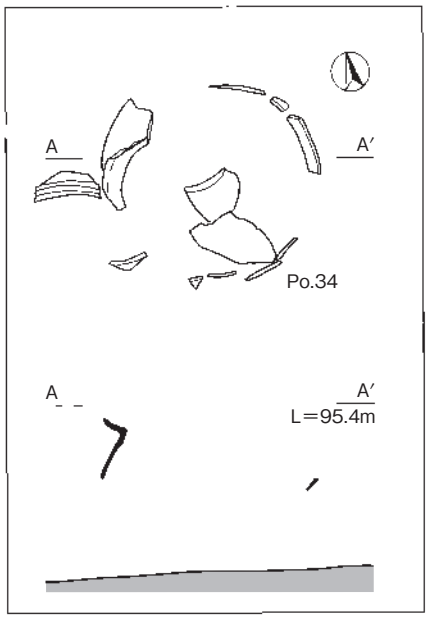
第29図　越敷山127号墳　1主体部　遺構図

われたことが分かる。また、内面には大きな黒斑がある。Po. 40・41とも土器集中９から出土した土師器杯とよく似ている。Po. 42は、口径が23. 3cm、器高が15. 9cmのやや大型の高坏である。坏部は段を持って大きく立ち上がり、脚部の内面には板状工具による調整痕が明瞭に残る。色調が赤褐色を呈することや、胎土、器壁に入ったヒビの特徴などから、土器集中９・10の土器は、同一の工人によって製作されたものと考えられる。

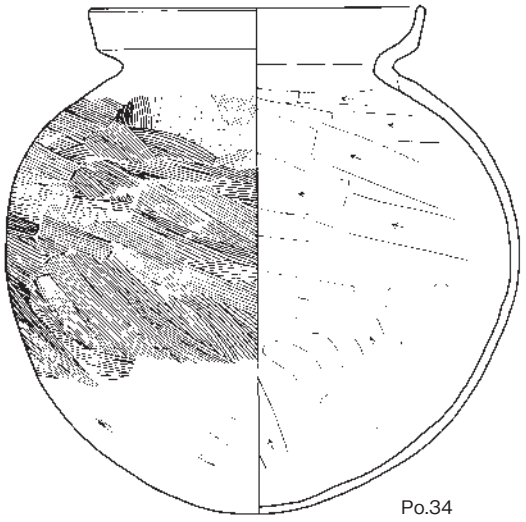
Po. 43は、南西部周溝内の土器集中11から出土した、口径9. 8cm、高さ18cm以上の、大型の土師器長頸壺である。色調は橙褐色を呈しているが、風化によるものか所々で色落ちしている。器壁は、全

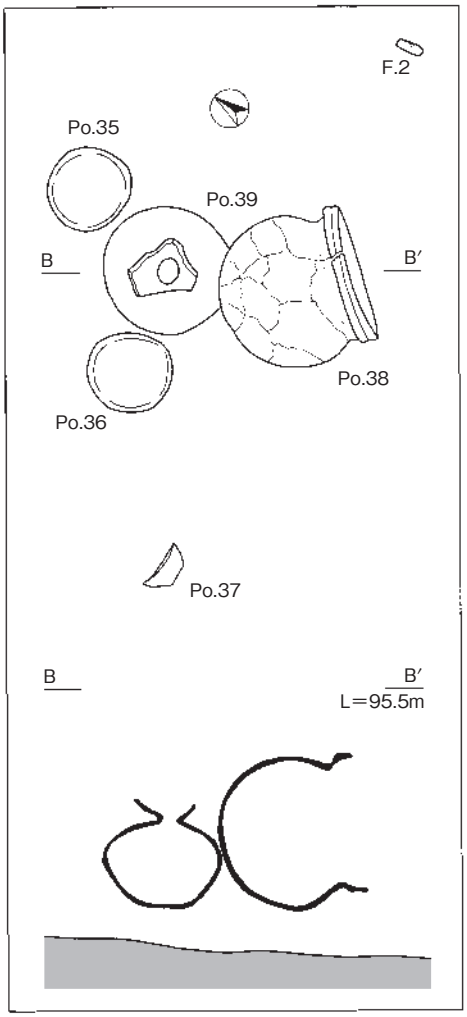


第30図　越敷山127号墳　２主体部　遺構・遺物図

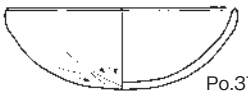


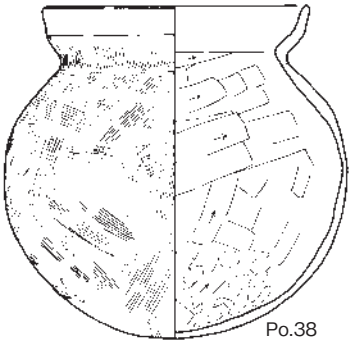
土器集中８

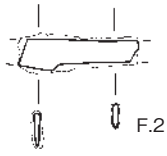


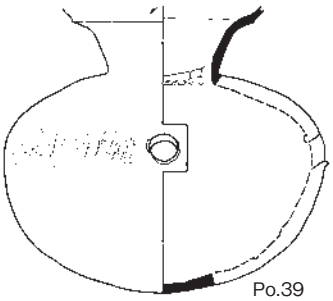


土器集中９





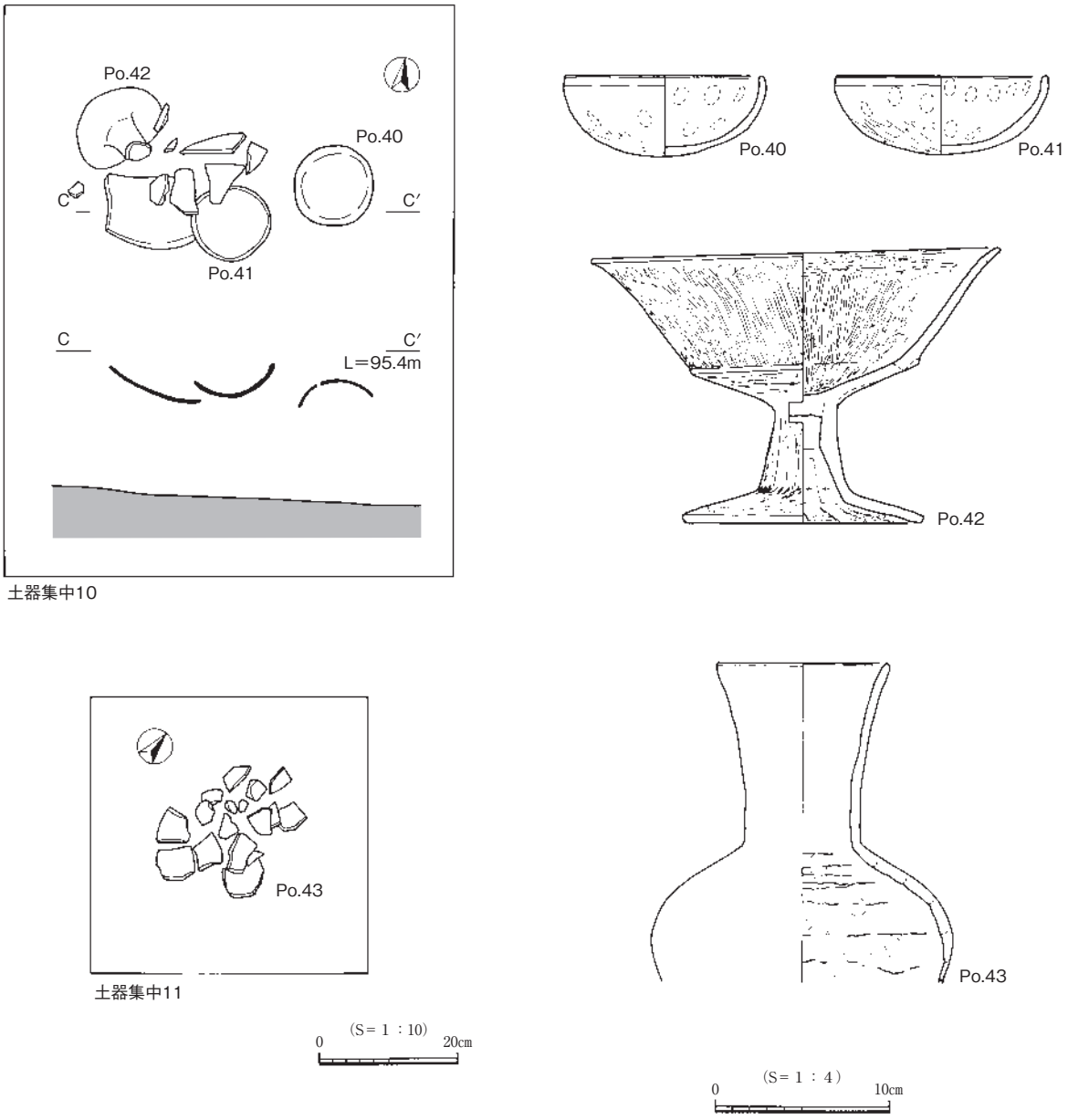




(S＝１：４)
0
10cm

(S＝１：10)
0
20cm

第31図　越敷山127号墳　土器集中８・９　遺構・遺物図



第32図　越敷山127号墳　土器集中10・11　遺構・遺物図

体にナデ調整されているが、肩部の内面には粘土の輪積み痕が明瞭に残る。

この古墳の時期は、周溝内から出土した遺物から、古墳時代中期のものと考えられる。

越敷山128号墳（第33図）

越敷山128号墳は、127号墳と110号墳の中間に位置する古墳である。事前の測量調査では、墳丘の存在は認められなかったが、石棺と周溝を検出したことから、周溝を持つ小型墳と考えられる。

墳丘・周溝　前述したように墳丘の盛土は存在せず、周溝が南側を廻っているのみである。北側は、110号墳の周溝と共有している。墳丘の規模や形態は、墳丘の東西が大きく削平されているため不明だが、南側の周溝から北の越敷山110号墳の周溝まで3.4mほどあることから、直径3.4mほどの円墳の可能性がある。南側の周溝の規模は、残存する長さ2.2m、幅30cm、深さ15cm程度である。

埋葬施設　埋葬施設は、石棺墓を検出した。石棺は、西側の掘形が削平されており、この部分にあった小口板や長側板は抜き取られている。また、石棺の掘形は掘立柱建物３のピットを切っている。石棺の規模は、内法で長さ1.2m以上、幅30㎝と推測される。石棺内には、副葬品や枕石などは置かれていなかった。

出土遺物　この古墳に伴う遺物は、出土しなかった。

越敷山110号墳（第34～38図）

越敷山110号墳は、調査区の北、標高93m付近に位置している。

墳丘・周溝　この古墳の規模や形態は、墳丘の東西が大きく削られているため不明だが、直径8.5～９m、高さ50㎝程のやや歪んだ円墳と推測される。周溝は、南東側で一部が突出しており、この地点には土師器の甕が置かれていた。祭祀的な目的があって突出しているのか、南西部に隣接する128号墳との関係でこのような形になったのかは分からなかった。また、墳丘の東側下層には竪穴建物４があり、墳丘の南西部には掘立柱建物３が建てられていた。墳丘は地山を丸く整形し、更に盛土を行っているが、大半は流出しており、１主体部の石棺材は一部が露出した状態であった。

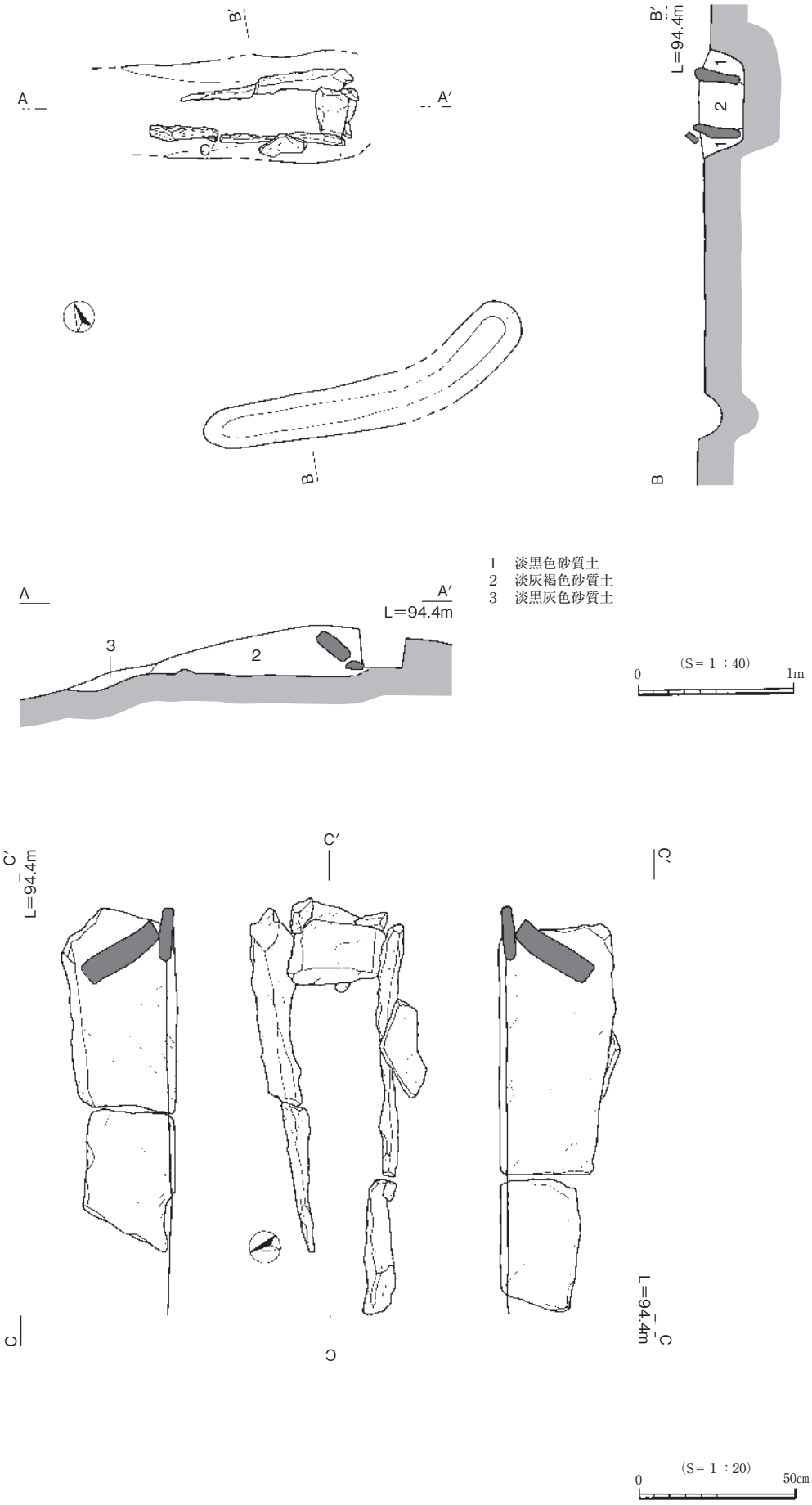
埋葬施設　埋葬施設は、墳丘上に３基あり、このうちの３主体部は１主体部によって切られている。

１主体部は、越敷山110号墳のほぼ中心で検出したもので、表土を除去した段階で石棺材が露出している状況であった。このため、検出面を精査したところ、墓壙の掘形に沿って、南側に褐色のラインが見えたことから、石棺材の抜き取り痕であると考えた。墓壙の掘形は、長さ2.5m、幅85㎝、深さ30㎝あり、掘形の底面には南側に石棺材を固定した溝が見えるが、北側では鮮明には残っていなかった。副葬品は見られず、棺内には石枕は置かれていなかった。

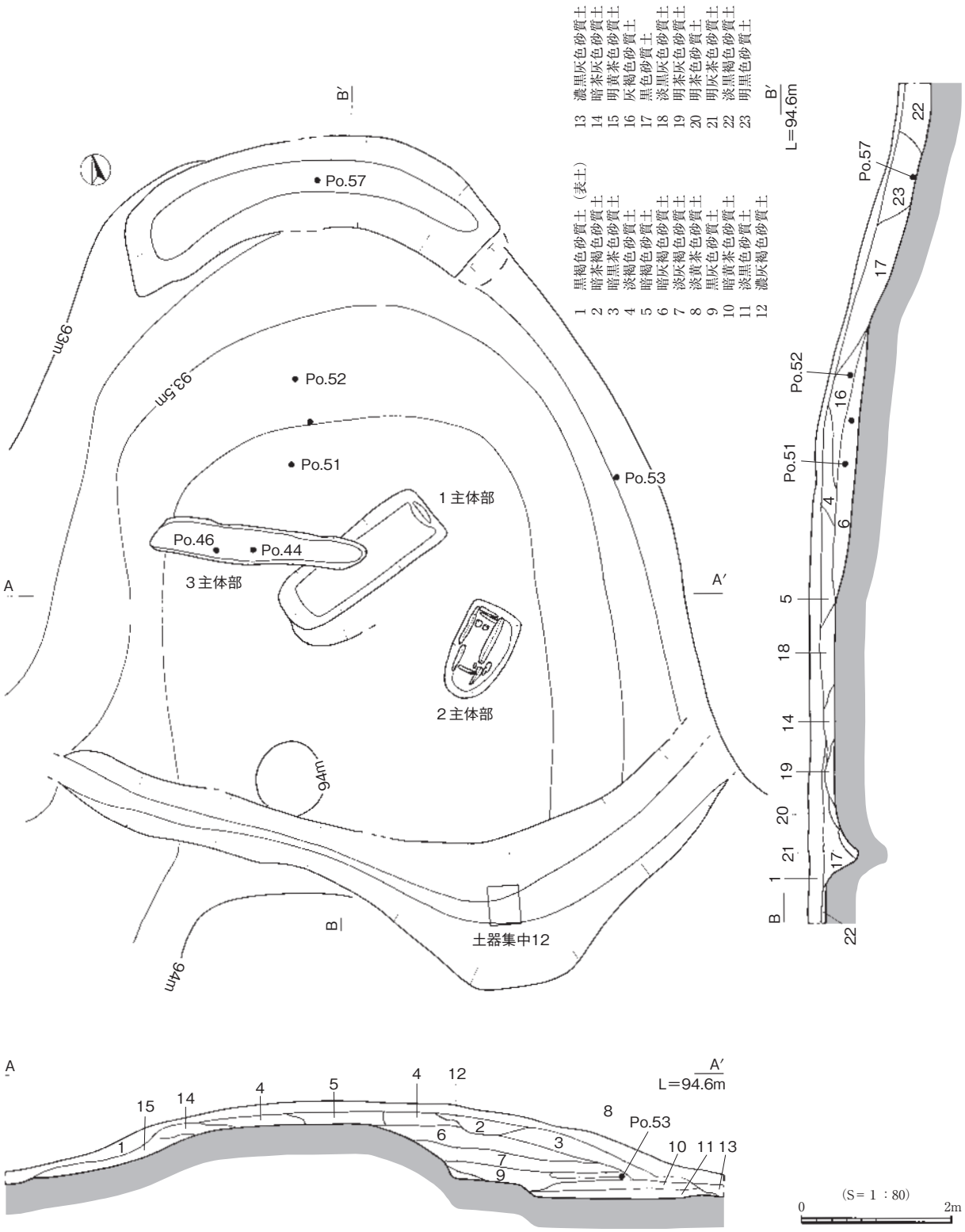
２主体部は、１主体部の南東へ１mほど離れた所で検出した、小型の石棺墓である。墓壙の掘形は「U」字形を呈し、長さ130㎝、幅80㎝を測る。石棺の蓋は、長さ85㎝、幅４㎝、厚さ10㎝の板石と、長さ25㎝程の二枚の板石によって閉塞されており、蓋石の合わせ目の上には、更に板石を被せて蓋がなされていた。また、石棺の蓋石の内面には朱が塗布されていた。石棺の本体は六枚の板石によって組み上げられており、石棺の内法は、長さ75㎝、幅20㎝、深さ25㎝である。石棺床の東北側には二つの石が置かれており、枕石と考えられる。副葬品については、石棺の南東部に刀子が１点置かれているほかには出土しなかった。石棺の掘形は、「ロ」字形に溝が掘られているが、南西部では小口板を「H」字形に押えるために左右の長側板が突出している。

３主体部は、１主体部の下層に位置しており、東側の一部が切られている。西側は、道路３の構築によって削り取られている。検出した長さ2.7m、幅40～50㎝、深さ12㎝を測り、墓壙の掘形は箱掘り状となる。木棺の痕跡は認められなかったが、床面は水平であり、枕石などは置かれていないが、状況から見て１主体部に先行する埋葬施設であったと考えられる。墓壙の埋土からは、弥生土器の破片が出土したが、それ以外の遺物は見られなかった。

出土遺物　この古墳から出土した遺物は、石棺内から出土した刀子や、３主体部から出土した弥生土



第33図　越敷山128号墳　遺構図

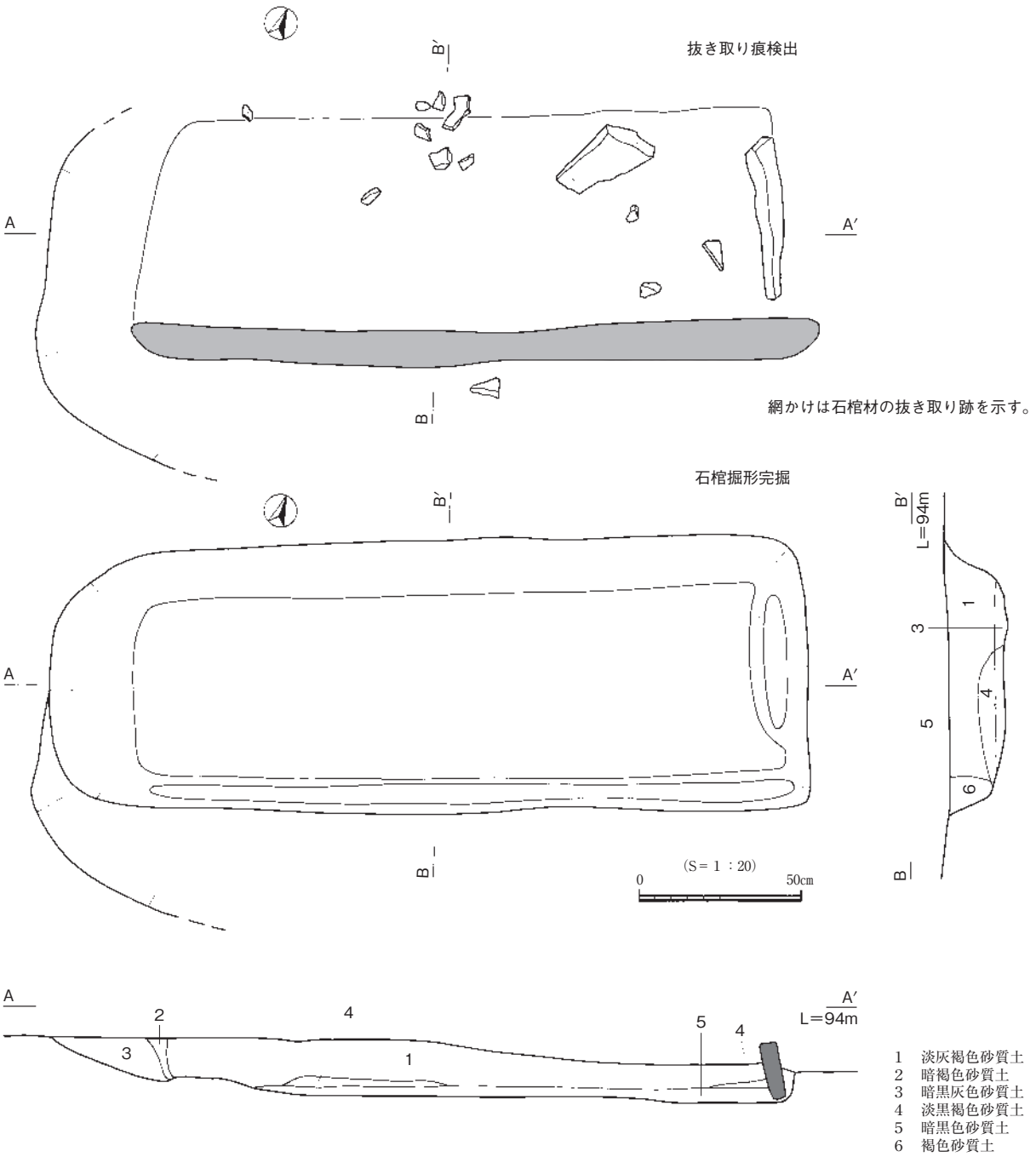


第34図　越敷山110号墳　遺構図

器片。周溝内から出土した土師器甕、墳丘の盛土から出土した土器片などがある。

F. 3は、２主体部の石棺内から出土した長さ11. 3㎝の鉄製の刀子である。表面に木質が残っていなかったため、鞘や柄があったかどうかはわからない。Po. 44～47は、３主体部の埋土中から出土した土器片である。Po. 44・Po. 45は、弥生土器の甕。Po. 46は、平底状となる弥生土器の底部である。Po. 47は、口縁端部が短く屈曲する甕である。

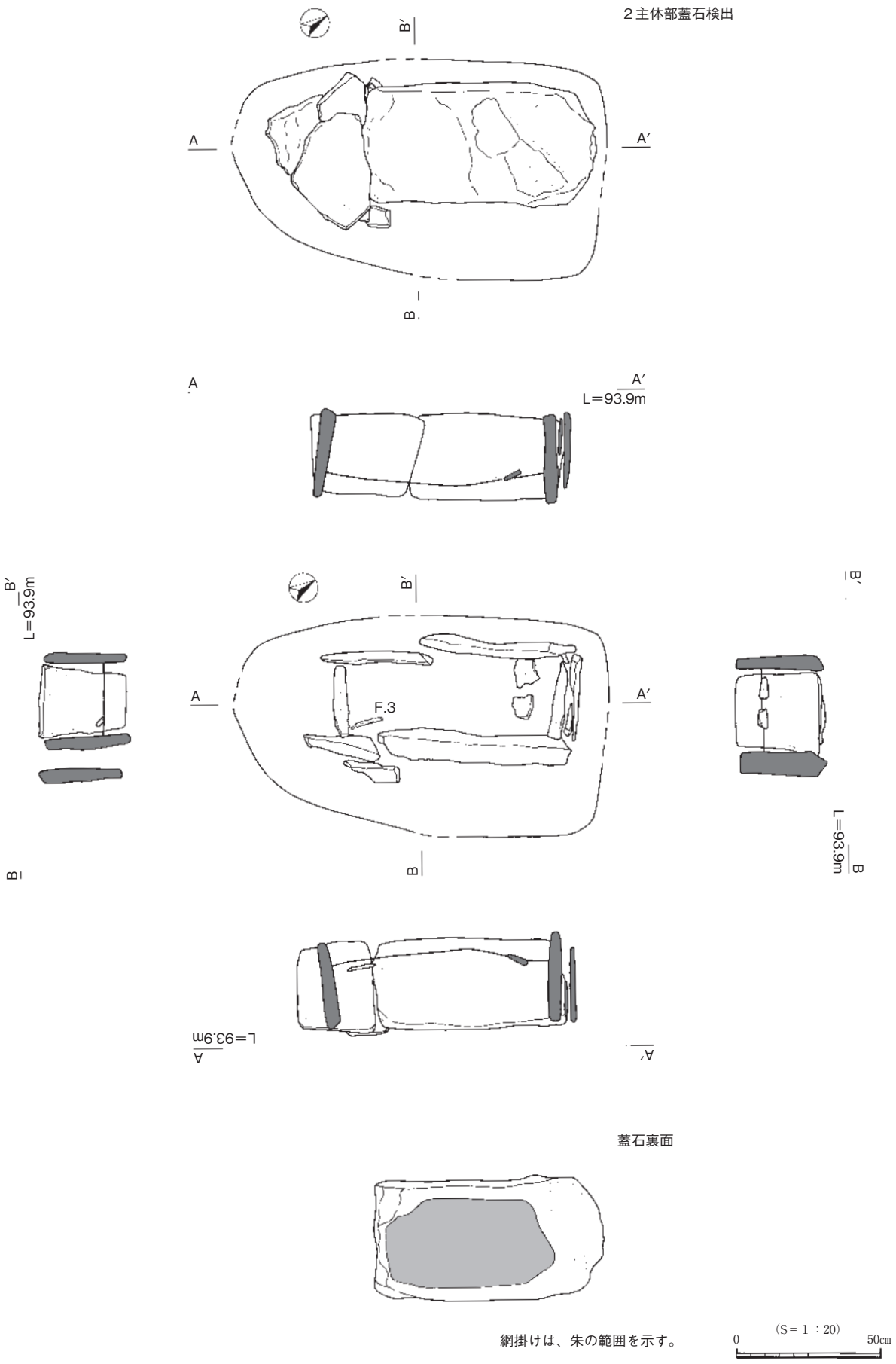
Po. 48は、周溝内から出土した土師器の甕である。出土時には、口縁部を西に向けた状態であっ



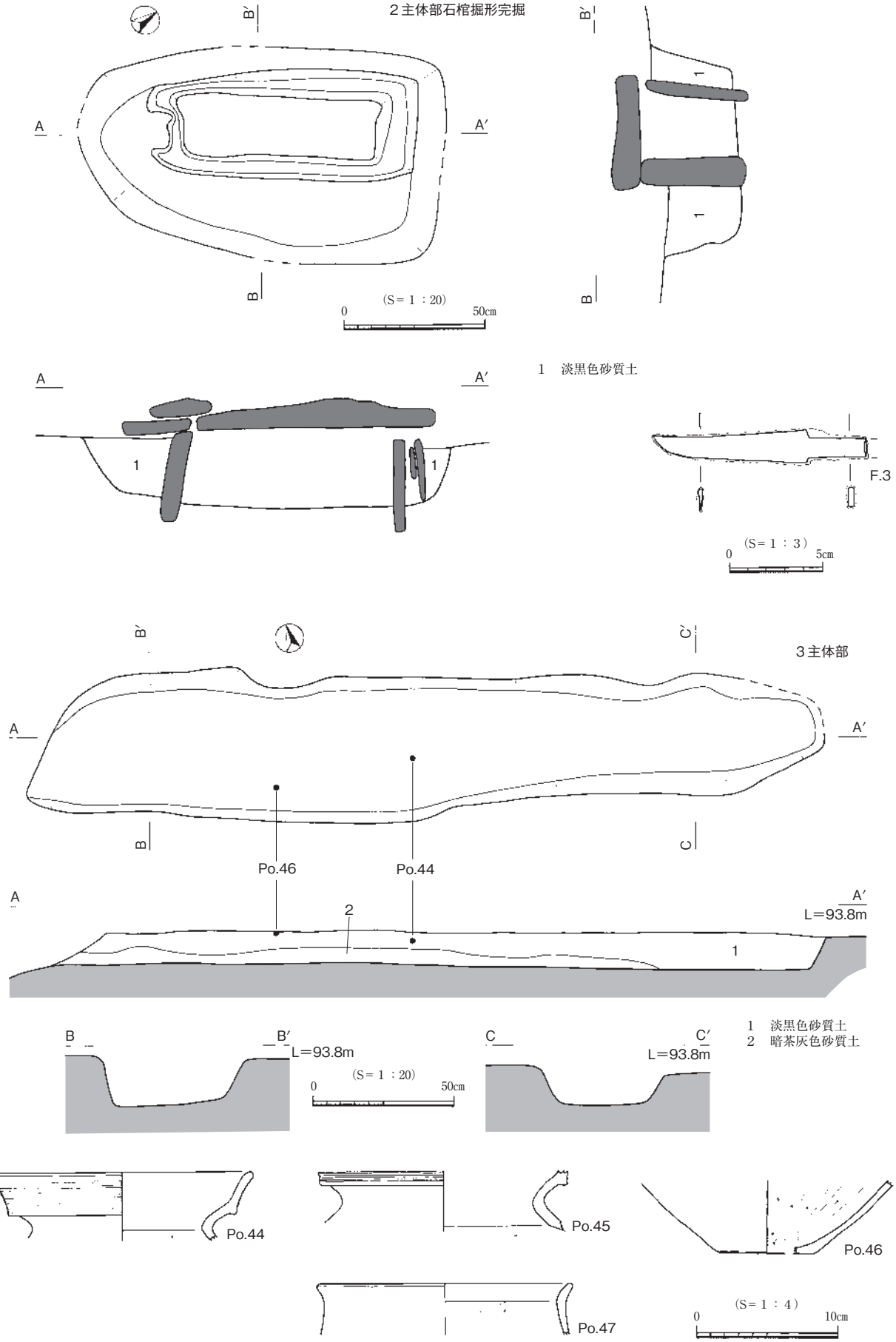
第35図　越敷山110号墳　1主体部遺構図

た。口径は14.9cm、器高は23.7cmで、体部外面はハケ調整され、内面の上半はヘラケズリ調整されるが、底部内面には指押さえの痕が明瞭に残っている。口縁端部は内画に向かって少し肥厚している。体部の側面には、焼成後に穿孔された穴が開けられている。胴部下半には帯状にススが付着しているが、内面には炭化物は付着していない。このことから、煮炊きに使用された土器であると考えられる。Po.49は、口縁部が少し肥厚する土師器の甕。Po.50は、暗橙褐色を呈する高坏の脚部で、胎土には白い粘土がマーブル状に練り込まれている。Po.51～54は、弥生土器の甕。Po.55～57は、土師器の甕である。S.8は、墳丘から出土した黒曜石製の石鏃である。長さは、1.6cm、幅1.6cm、厚さ4㎜、重さは0.8gである。

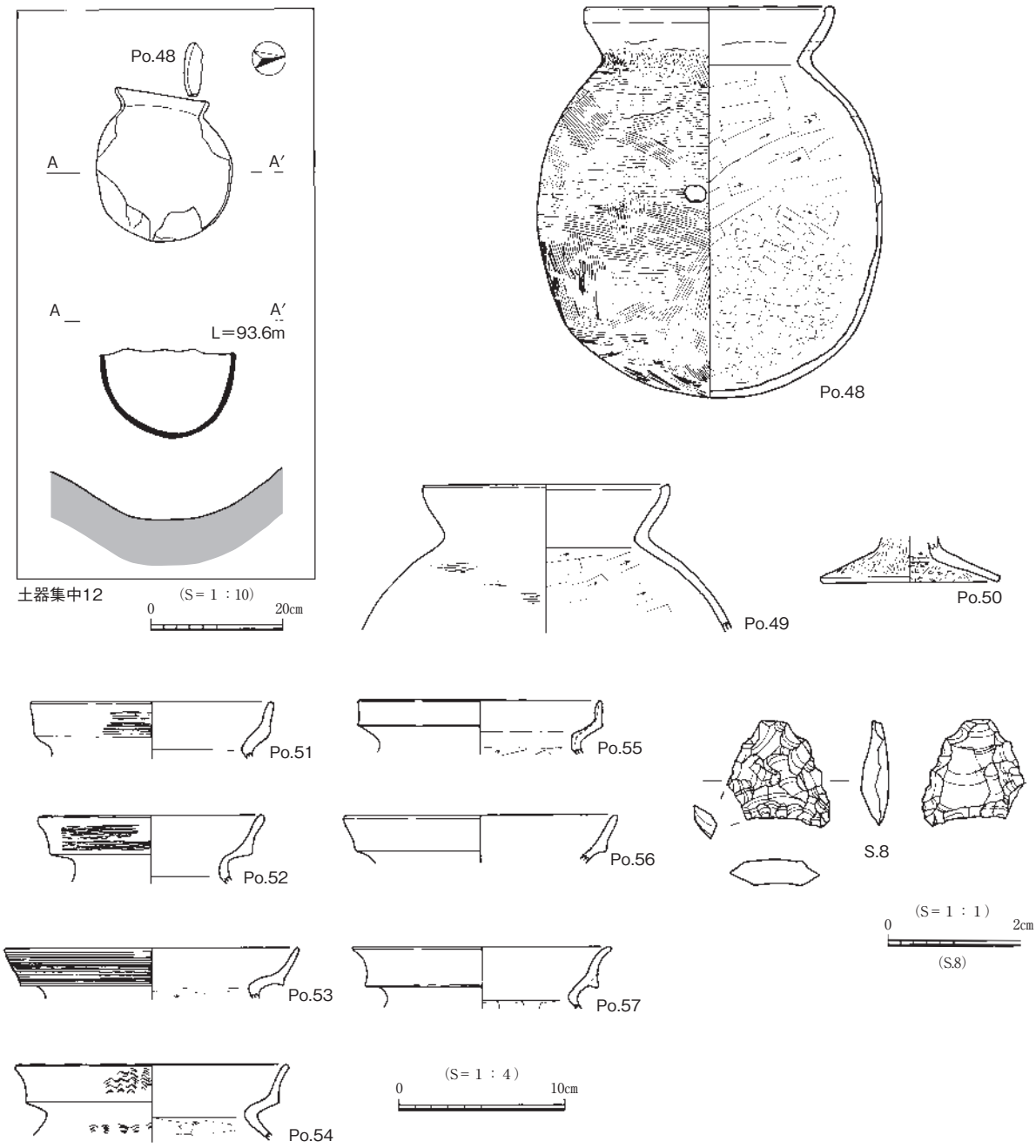
この古墳の時期は、周溝内から出土した遺物から、古墳時代中期のものと考えられる。



第36図　越敷山110号墳　２主体部遺構図



第37図　越敷山110号墳　２・３主体部　遺構・遺物図



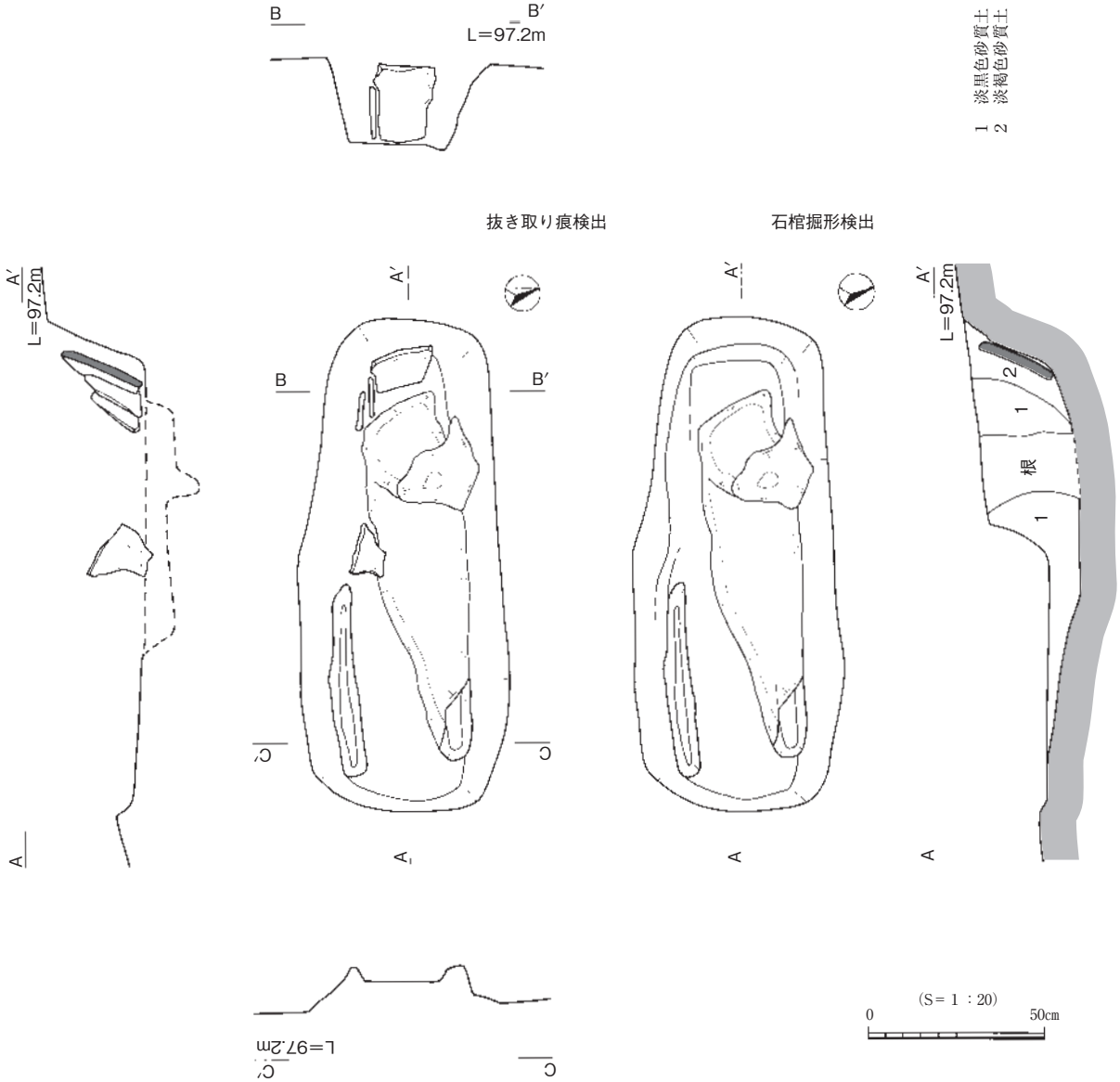
第38図　越敷山110号墳　土器集中12　遺構・遺物図

石棺墓１（第39図）

石棺墓１は、越敷山126号墳の東へ約５mの地点で検出した石棺墓の残欠である。この石棺墓の周辺には周溝などの痕跡が見られないことから、単独で作られた埋葬施設と考えられる。

墓壙の掘形は、長さ1.4m、幅は東側で幅60cm、西側で45cmあり、残存する深さは30cm程度と推測される。墓壙内は、調査前から盗掘による攪乱を受けており、棺内には西側の小口板と見られる板材が残されているのみで、蓋石や長側板、東側の小口板はすでに抜き取られた状態であった。このため、枕石も確認できず、埋土中からの遺物の出土も見られなかった。

残存している小口板は、幅18cm、厚さ４cm、高さ22cmであり、やや小型の部類に属すると考えられる。頭位方向については、枕石が残存していないため断定できないが、墓壙の掘形が東側の方がやや広くなっていることから、東頭位であった可能性が高い。



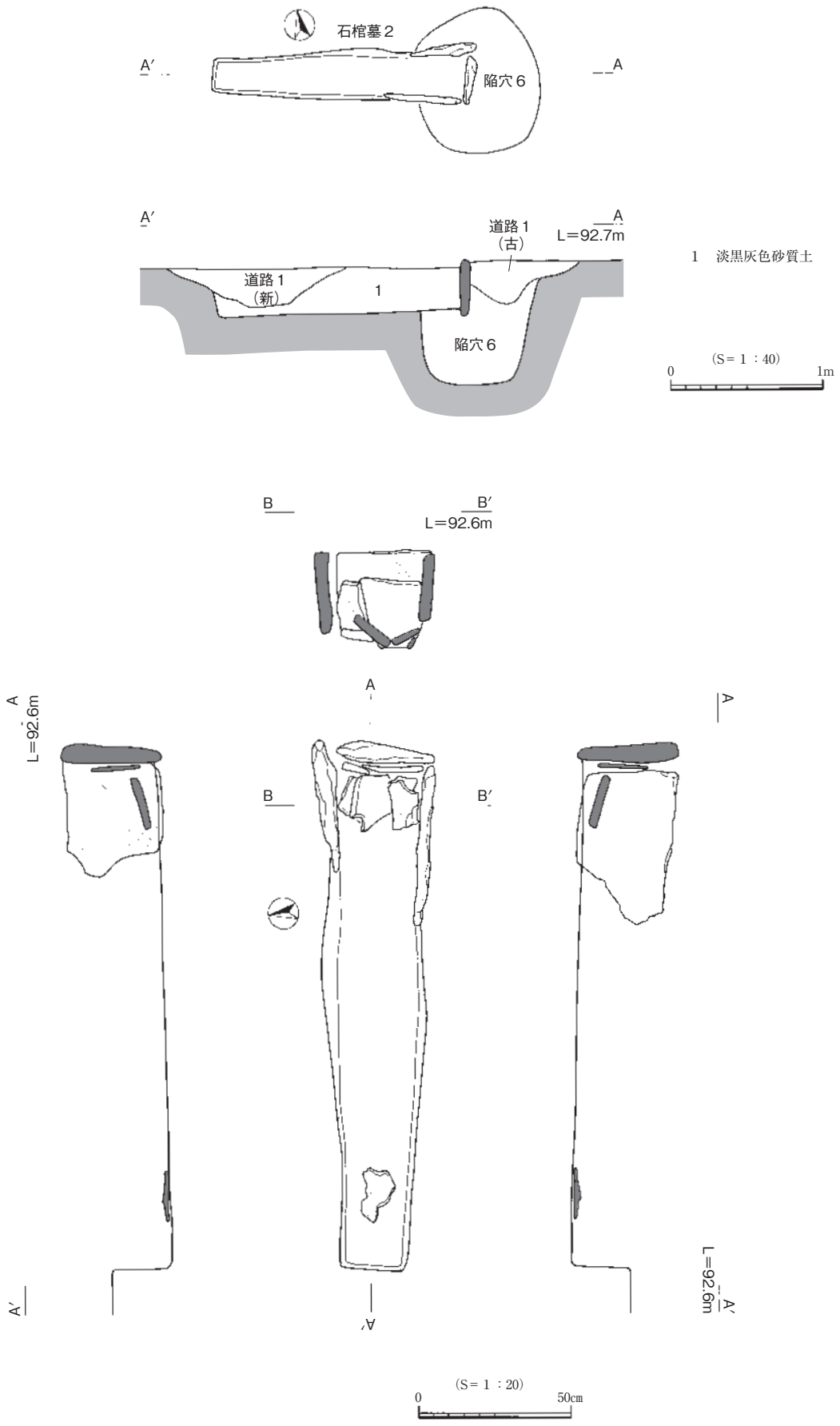
第39図　石棺墓１　遺構図

石棺２（第40図）

石棺墓２は、越敷山110号墳の北東部で検出した、単独で所在する埋葬施設である。この遺構は、陥穴６の掘形と掘立柱建物４の柱穴を切っているが、遺構の西側上面は道路１によって切られており、長側板の一部や西側の小口板が抜き取られている。

墓壙の規模は、長さ1.7mあり、幅は東側で40㎝、西側で20㎝となっている。深さは35㎝程が残っており、本来はこの上に蓋石があったものと考えられる。棺内はほぼフラットで、東側に二つの板石を「V」字形に組み合わせて枕としている。このため、この石棺墓は東頭位で埋葬されたものと考えられる。また、西側の棺床にも不整形な板石が一枚置かれているが、これが枕石なのか、石棺の抜き取りの際にここに落ちたものかは判別がつかなかった。

この遺構内からは、遺物は出土しなかったが、周辺の古墳の分布状況から見て、古墳時代中期でも新しい段階に属するものと考えられる。



第40図　石棺墓２　遺構図

第３節　古墳以外の調査

古墳以外の遺構は、縄紋時代のものと見られる陥穴や弥生時代の竪穴建物、掘立柱建物、時期不明の道路などを検出している。

陥穴１（第41図）

陥穴１は、越敷山108号墳の南側墳丘上、標高98.2mの地山面で検出した、楕円形の陥穴と推測される。

遺構の南東部は竪穴建物１によって切られているが、現存している土坑の規模は、長径1.3m、短径90cm、深さ1.2cmを測る。土坑の底面は楕円形を呈するが、底面には小穴は見られなかった。土坑内は、黒褐色系の粘質土が堆積している。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴２（第41図）

越敷山126号墳の南東、標高97.5mに位置する、円形の土坑である。

土坑の規模は、直径90cm、深さ１mを測る。この土坑の底面は直径70cmあるが、底面には小穴は見られなかった。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陥穴３（第41図）

越敷山126号墳の南、標高96.6m付近に位置する、長方形の土坑である。この陥穴は、南側にあった掘り込みを切って掘られている。

検出面の規模は、長辺1.5m程度、短辺１m、深さ1.2mで、底面は長辺60cm、短辺38cmの長方形を呈するが、底面には小穴は見られない。

この遺構の埋土中からは、石鏃が１点出土した。S.9は黒曜石製の石鏃で、先端部を欠くが、長さ1.5cm、幅1.9cm、厚さ４mm、重さ0.8gを測る。

陥穴４（第41図）

陥穴４は、109号墳の北側、標高96m付近で検出した不整円形を呈する土坑である。

土坑の規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ1.2mを測る。底面は隅丸方形で、中央には直径12cm、深さ15cmの小穴が掘られている。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

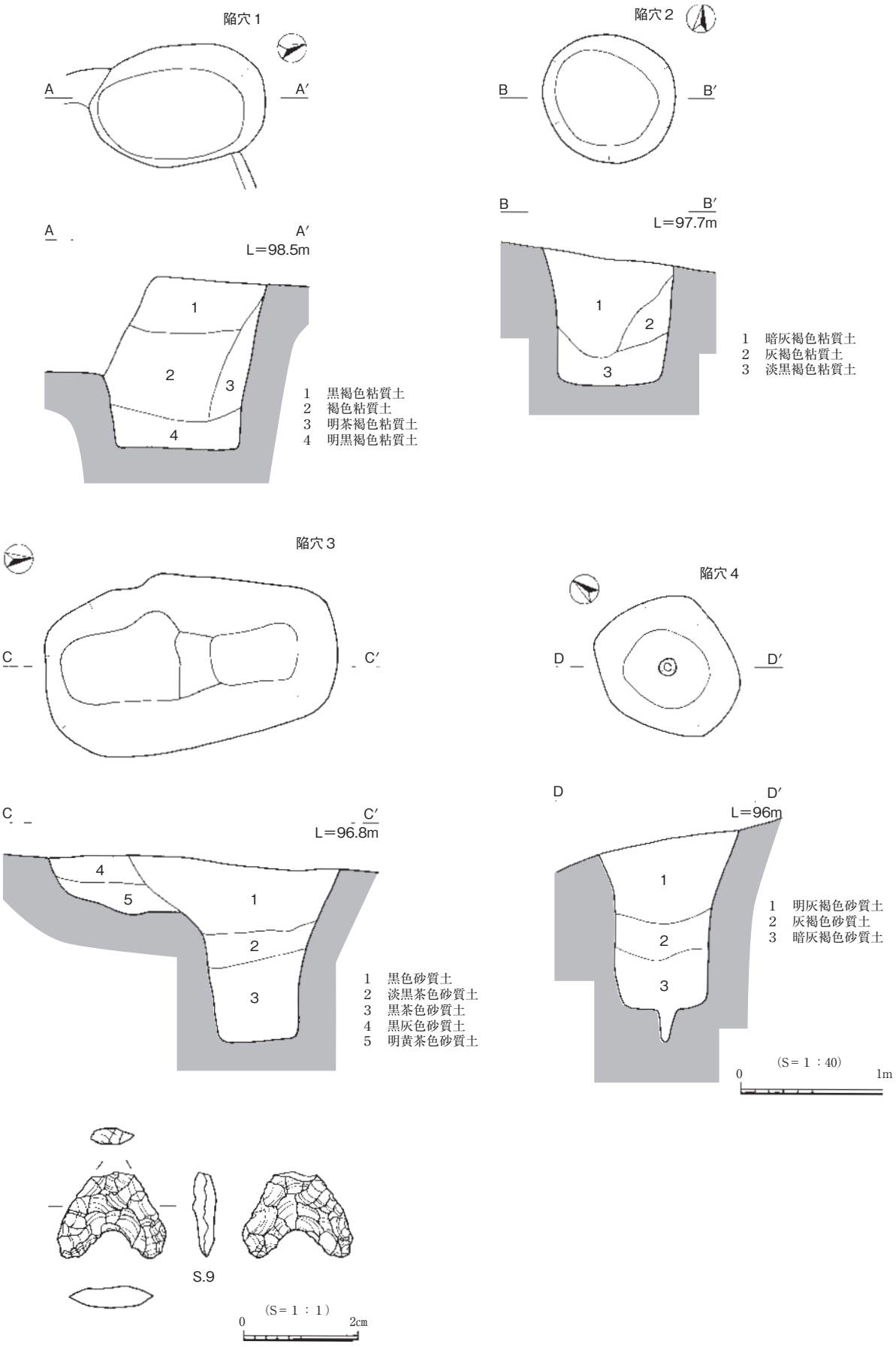
陥穴５（第42図）

越敷山127号墳の墳丘上で検出した、円形の土坑である。

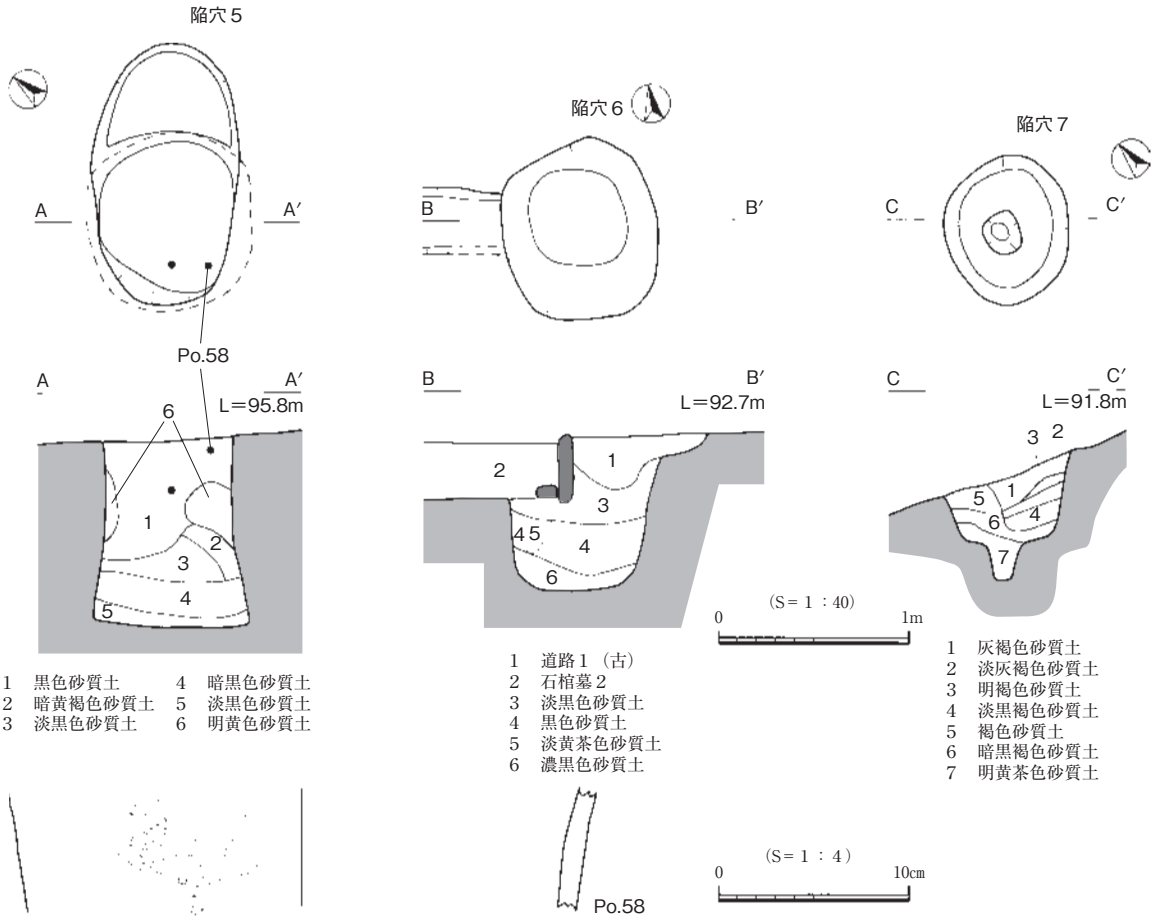
検出面の規模は、長径80cm、短径70cmであるが、底面は直径が90cmとなるため、底面の方がやや大きくなる。この土坑の底面には、小穴は見られなかった。

この土坑の上層埋土中からは、縄紋土器の破片が出土している。Po.58は、高山寺式土器の深鉢体部片である。外面には山形紋が横位施文され、内面はナデ調整されている。

この遺構が埋没した時期は、出土した遺物から縄紋時代早期中葉頃と考えられる。



第41図　陷穴１～４　遺構図



第42図　陷穴５～７　遺構図

陷穴６（第42図）

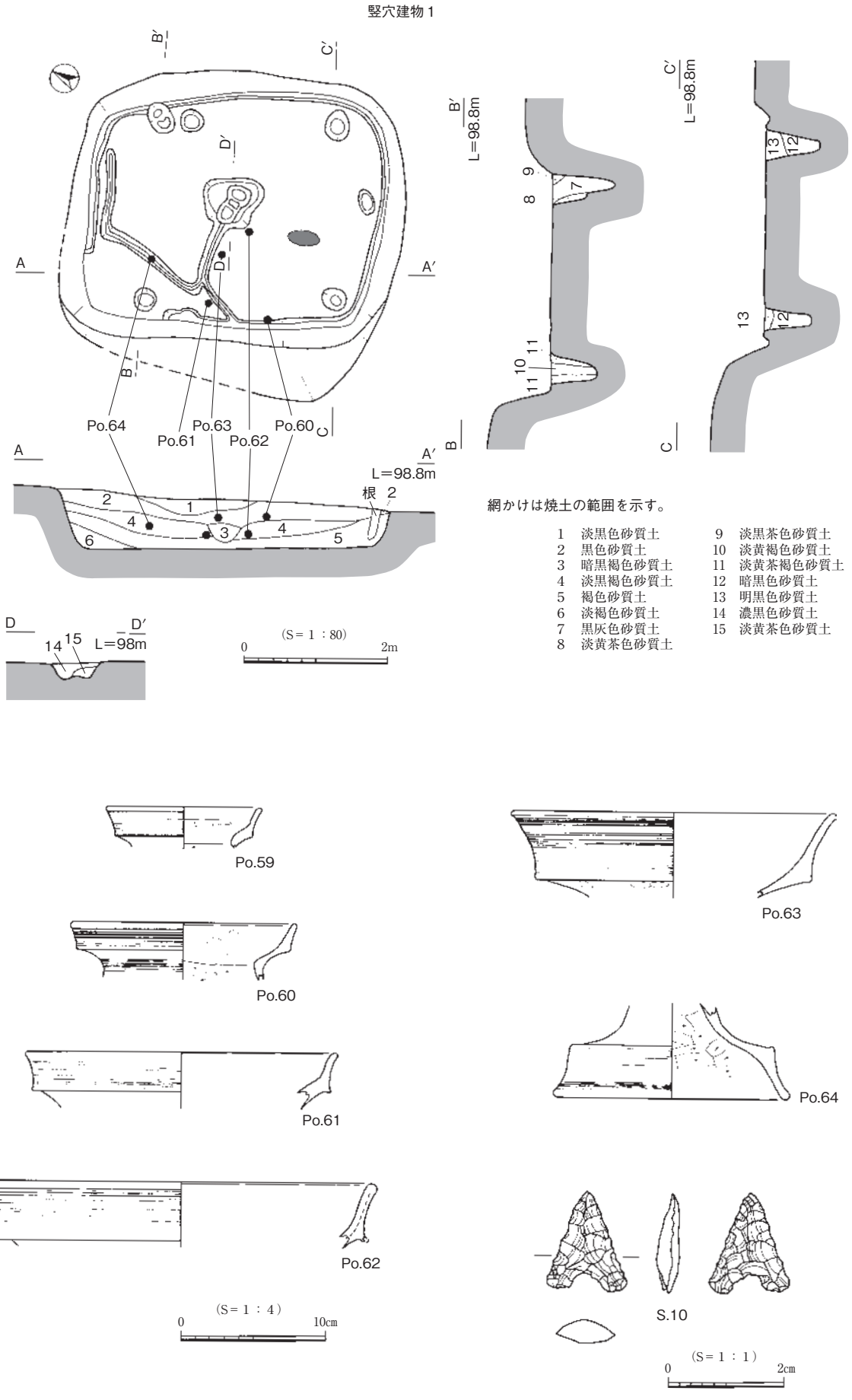
C-5区とC-6区の境界付近で検出した、平面多円形の土坑である。遺構の上面は、石棺墓２と掘立柱建物４の柱穴、道路１によって切られている。

検出面の規模は、長径95cm、短径80cmで、深さは80cmである。遺構の底面は一辺が50cmあり、平面は隅丸方形を呈するが、土坑の底面には小穴は見られなかった。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

陷穴７（第42図）

B-4区の調査区境、標高91.5m付近で検出した楕円形の土坑である。

この土坑は、長径80cm、短径65cm、深さは40cmあり、土坑の底面には直径20cm、深さ20cmの小穴がある。通常の陷穴と比べると、深さがかなり浅くなっていることから、道路３の掘削によって元の遺構面から１m以上遺構面が削平されていると考えられる。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第43図　竪穴建物１　遺構・遺物図

竪穴建物１（第43図）

この遺構は、越敷山108号墳の南側で検出した、隅丸方形の竪穴建物である。建物の上面は、一部が越敷山108号墳の周溝によって切られている。

遺構の規模は、検出面で南北4.6m、東西3.5～4.4mである。遺構の深さは、越敷山108号墳の墳丘上では80cm程度あり、浅い所では20cmとなっている。遺構内の埋土は、４層ほどに分かれているが、遺物の多くは中層から出土している。

遺構内の床面には、北西部のコーナー付近を除いて周壁溝が掘られており、一部は分岐して中央ピットへと繋がっている。このコーナー部分に周壁溝が掘られなかった理由は定かではないが、何か物を置くスペースだったのだろうか。

この建物の柱穴は４本あり、それぞれ直径30～40cm、深さ60～80cmの規模を持つ。中央ピットは、一辺80cm程度の方形の掘形で、中央に向かって20cmほど深くなっている。中央ピットの南側には、床面が赤く変色した範囲があることから、ここで火を焚いていたと考えられる。

この遺構から出土した遺物は、埋土の中層から弥生土器の甕や器台、石鏃が出土した。

Po.59・60は、口縁端部が外方に立ち上がり、多条化した凹線紋が施される小型の甕である。Po.61・62は、口径が20cmを超える大型の甕の口縁部である。Po.63・64は器台で、それぞれの端部には多条化した凹線紋を施し、底部内面はヘラケズリ調整されている。S.10は、長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ４㎜、重さ0.5gの黒曜石製の石鏃である。

この遺構は、出土した遺物から弥生時代後期末に埋没したものと考えられる。

竪穴建物２（第44図）

越敷山109号墳の東側に位置する、隅丸方形の竪穴建物である。建物の東側は、道路１の構築によって削平されている。

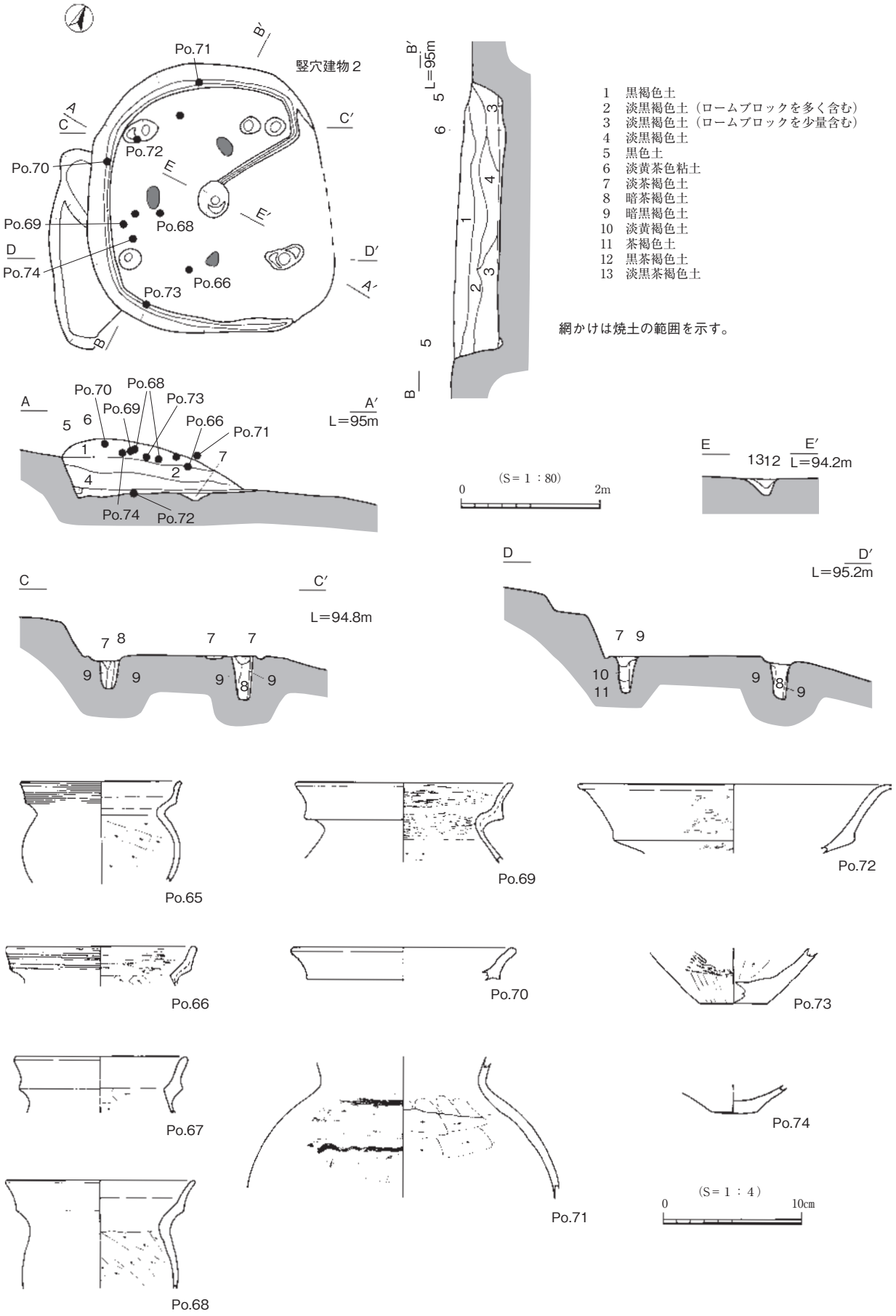
遺構の規模は、南北４m、東西3.8m以上、深さは80cmである。遺構内の埋土は、黒色系の砂質土が堆積しており、多くの遺物はこの上層から出土している。遺構の床面には周壁溝が廻るが、東側は削平されているため、周壁溝が全周していたかは分からない。また、北東コーナー部の周壁溝から、柱を避けるように屈曲しながら中央ピットに向かって溝が繋がっている。

この建物の柱穴は４本あり、直径は20～40cm、深さは40～60cmである。中央ピットは、直径40～50cm、深さ20cm程で、断面形は擂鉢状となる。また、床面に中央ビットの北、西、南の３ヶ所に赤く変色した部分があり、火を焚いた痕跡と考えられる。調査終了後に、念のために床面の断ち割りを行った所、貼床の痕跡が認められた。

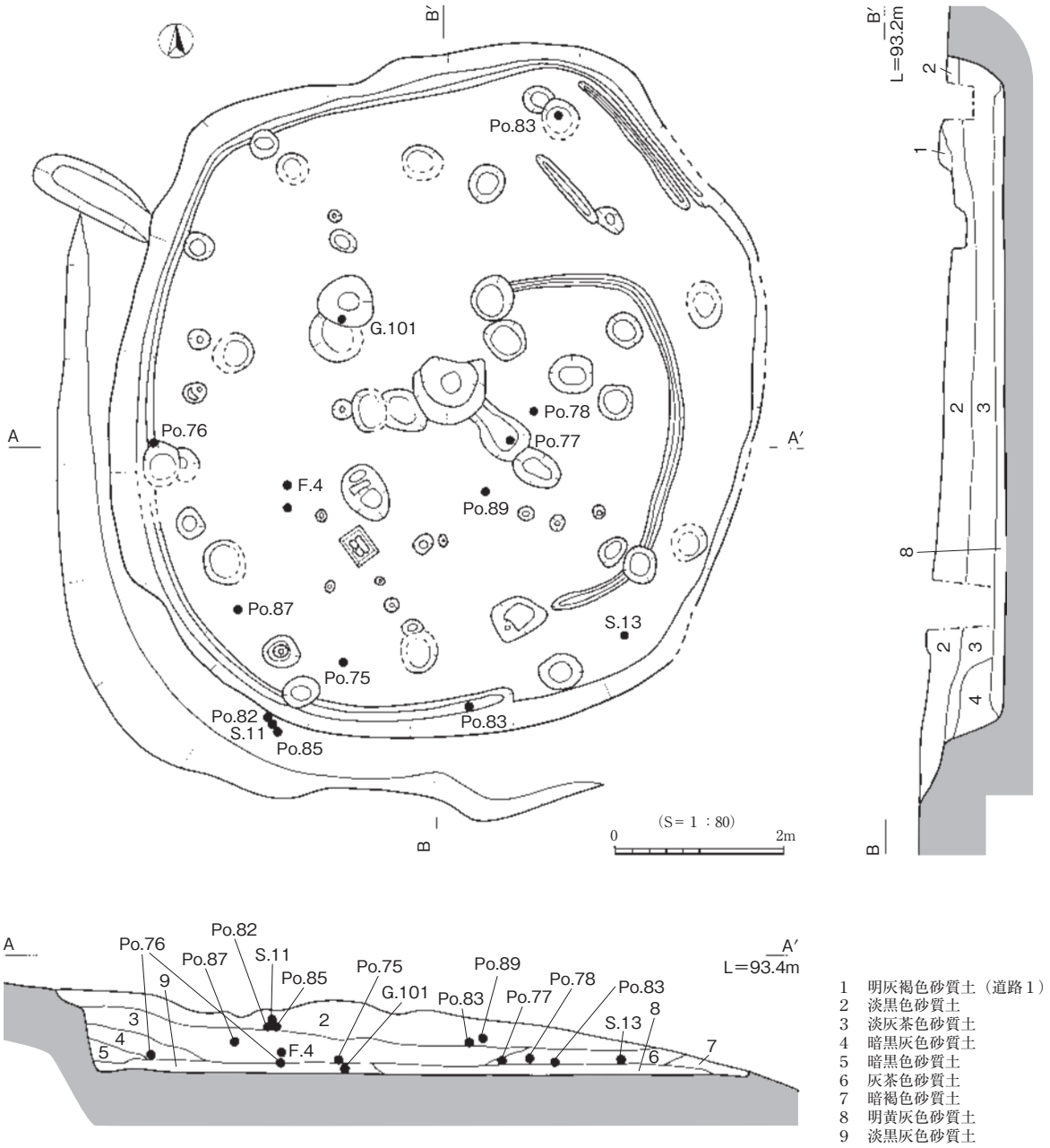
出土遺物は、弥生土器の甕や壺のほか、古墳時代前期にまで下る土器が出土している。

Po.65・66は、口縁部が外方に開き、多条化する凹線紋を施す弥生土器の甕である。Po.67～79は、口縁部が無紋化する甕で、Po.68は体部外面をナデ調整している。Po.71は、口縁部を欠くが、肩部に凹線紋と波状紋を施す壺と考えられる。Po.72は、器台か高坏の口縁部。Po.73・74は、底径が小さくなった甕の底部である。

これらの出土した遺物から、この遺構が埋没した時期は、古墳時代前期初頭と考えられる。



第44図　竪穴建物２　遺構・遺物図



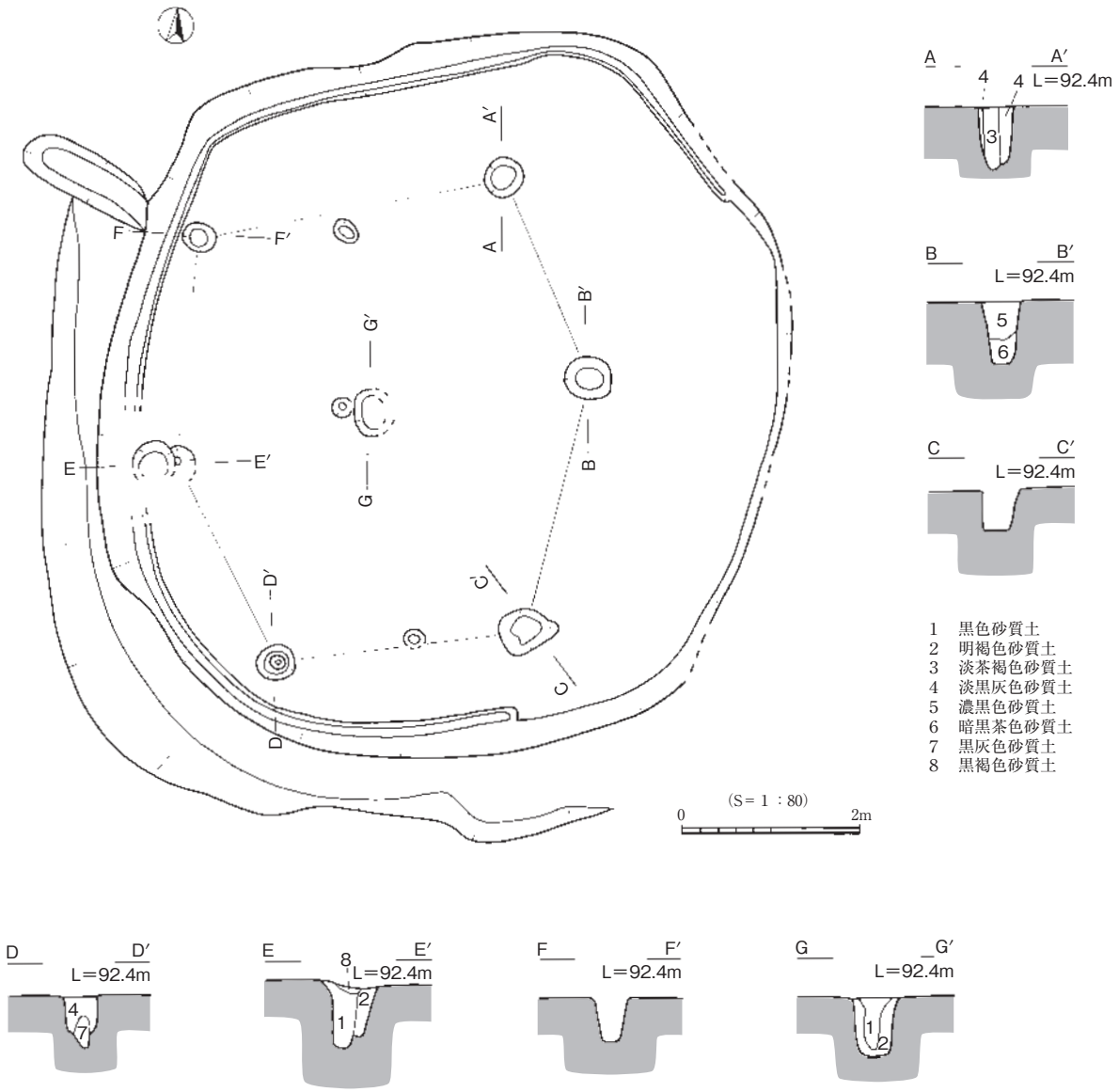
第45図　竪穴建物３　遺構図

竪穴建物３（第45～49図）

竪穴建物３は、越敷山110号墳の南東部に広がる平坦地で検出した、最終段階では平面多角形を呈していた大型の竪穴建物である。床面には複数の柱穴が重複しており、貼床による新旧関係も確認されたことから、長期間に亘って使用された建物と考えられた。

遺構の規模は、最終段階の竪穴で南北10m、東西10mで、深さは１mを測る。この種の竪穴建物としては、超大型の部類に属することから、集落の中心的な建物であったと考えられる。また、遺構の上面が道路１によって削平されているため正確な規模は分からないが、遺構の南西部上面が段状に掘り残されていることから、更に大型の建物であった可能性がある。

この建物は、上層の新段階の面では、床面の柱穴の掘形が判然とせず、柱の痕跡のみが黒く見える状態であった。このため、この柱痕を中心に断ち割りを行ったところ、柱を立てた後に貼床が行われ

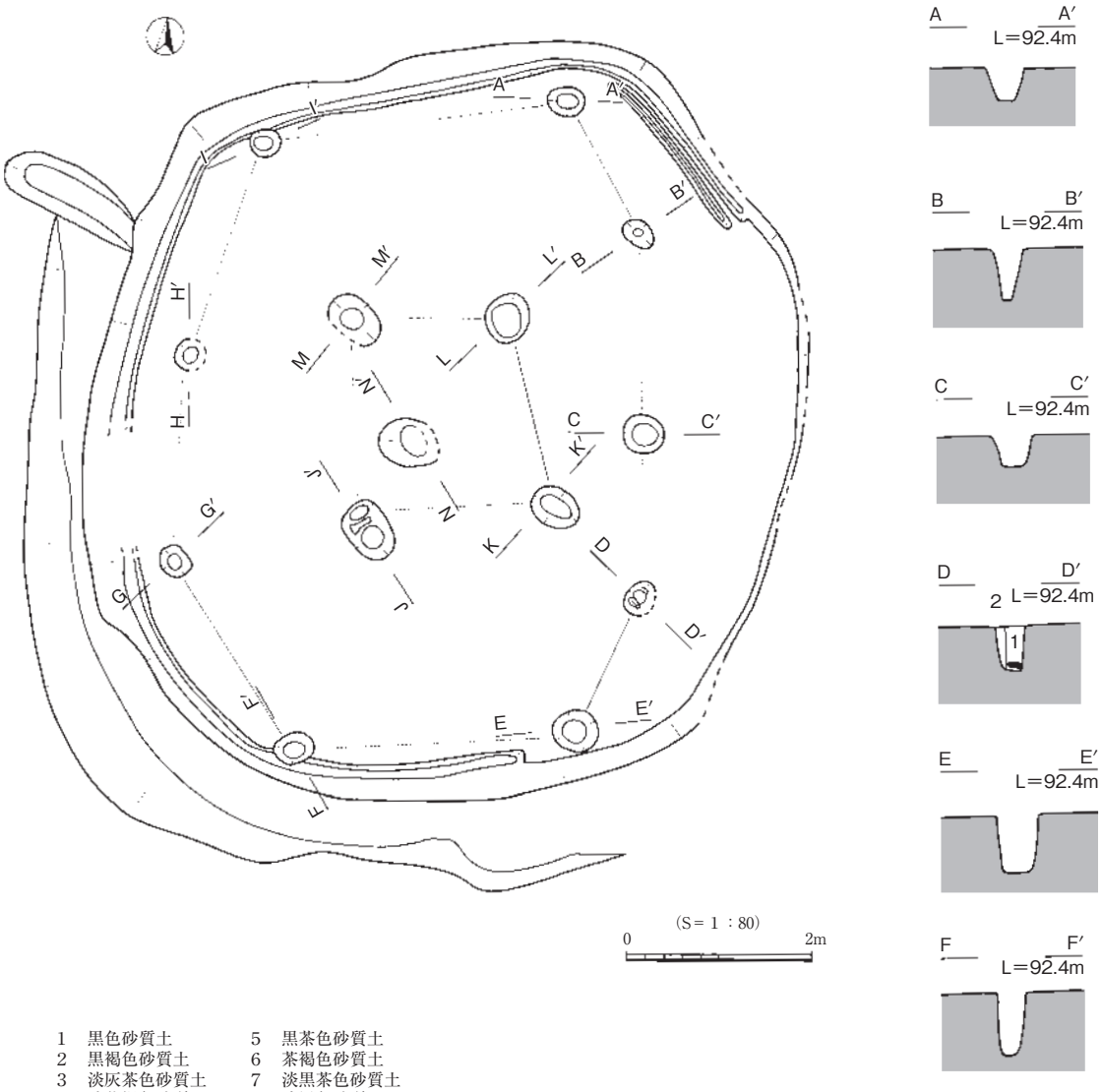


第46図　竪穴建物３　古段階

ていることが判明した。この貼床の面で検出した柱穴を繋ぐと、建物の最終段階の柱は第48図のとおり、建物の輪郭に沿って計７～12本の柱が建てられ、中央ピットとその東西に二つのピットが立っていたことになる。しかし、柱筋の通りが悪く、柱間の間隔が一定していないなど、上屋を支えるのに十分な強度が保てたのかどうか定かではないが、改築や増床を重ねた結果、このような柱配置になったと推測した。貼床については、建物の東側で一部に黒色土が使用されている部分もあったが、それ以外は全て地山のロームと同じような土が10cmほどの厚さで埋められていた。

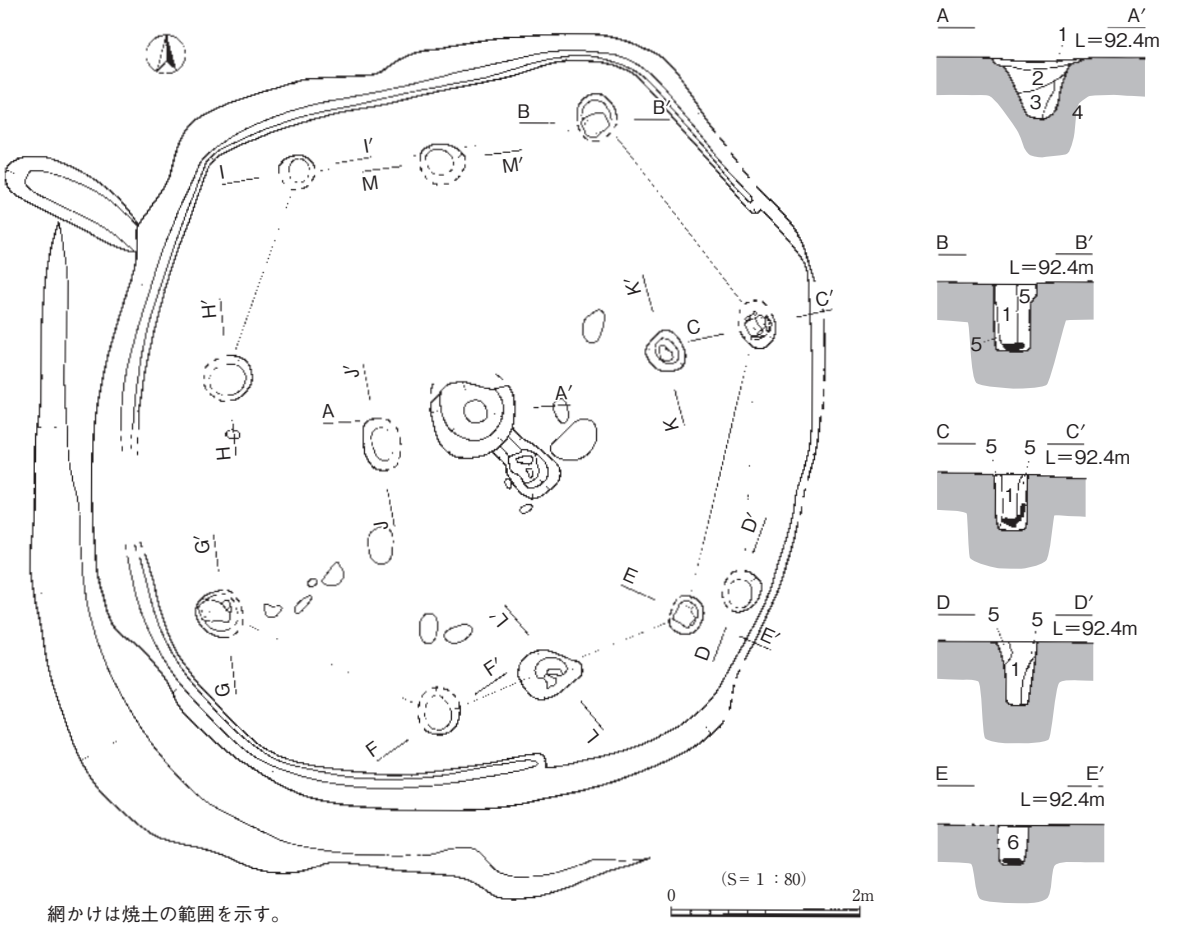
柱穴の規模は、30～60cm、深さは40～75cm程度である。この新段階の建物では、６本の柱穴で石を用いたものが見られた。見つかった石は、柱穴の底面に平石を置くものがほとんどだが、東部で検出した柱穴は、根巻き石風に柱穴の周囲に立てて置くものも見られた。これらの石がどのような目的で置かれたのかは分からなかったが、全ての柱穴に用いられていないことから、建物の沈下を防ぐためではなく、建て替えの際に柱の高さを合わせるために置いた可能性もある。

中段階の建物は、新段階の貼床を除去した面で柱穴を検出した。建物の構造は、中央ピットの周囲



第47図　竪穴建物３　中段階

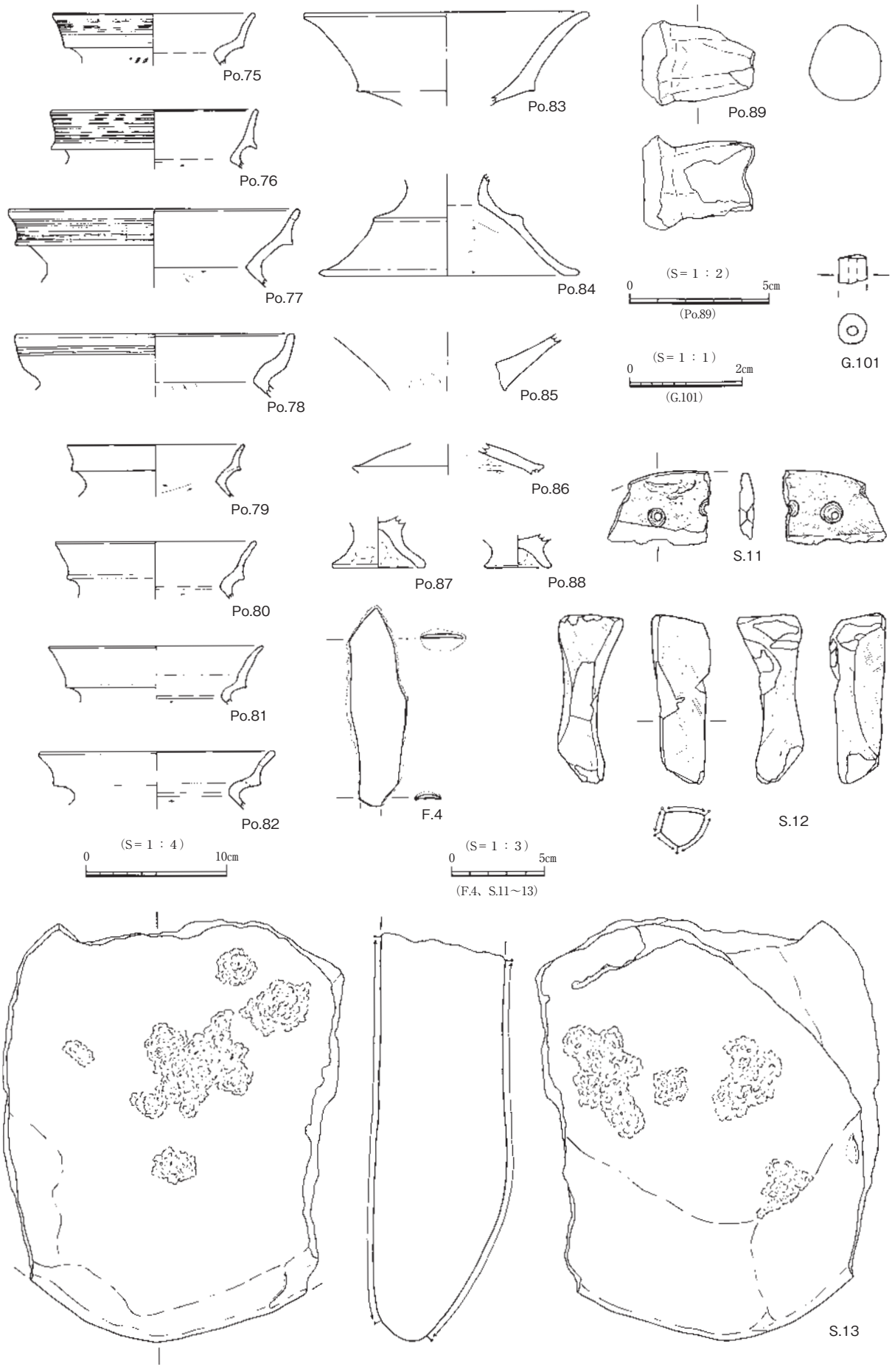
に四本の柱を立て、更に外周の竪穴の範囲いっぱいに９本の柱が建てられている。こちらも新段階の建物と同じで、柱間の間隔がそろっておらず、ややいびつな形となるが、東西方向の柱間は北側で3.3m程にもなる。柱穴の規模は、直径20～60cm程度で、深さは40～70cmのものがほとんどである。



第48図　竪穴建物３　新段階

また、南東部のピットでは、底面に石を置いたものも見られた。中央ピットの規模は、直径60cm、深さ35cmであった。

古段階の建物は、第46図に示すように６本の柱で支える構造であり、後の建て替えにより周壁溝が失われているため、元のプランは不明だが、一辺が６m近い楕円形か六角形の竪穴であった可能性がある。東西方向の柱間は、北側で3.8m近い距離となるが、中間に直径20cm程の小穴が掘られていることから、補助柱が付くと見られる。柱穴の規模は、直径が40～60cm近くあり、深さは60～80cmと大きい。中央ピットは、直径50cm程の楕円形であったと考えられる。



第49図　竪穴建物３　遺物図

この遺構内から出土した遺物は、弥生土器、土師器、ガラス玉、鉄製品、石庖丁、砥石、台石である。Po. 75～77は、外反する口縁の端部に凹線紋が施される弥生土器の甕である。Po. 78は、やや受け口状に立ち上がる口縁に２条の凹線が廻る弥生土器の甕である。Po. 79～82は、口縁部が無紋化する土師器の甕。Po. 83・84は、外面をナデ調整する器台である。Po. 85・86は、高坏の破片と考えられる。Po. 87・88は、小型の低脚坏か蓋の摘部である。Po. 89は、器種不明の把手部で、色調は茶褐色を呈する。G. 101は、ピット内から出土した、長さ５㎜程度、直径５㎜のガラス玉である。色調は、淡い緑灰色を呈しており、表面には気泡が見える。外形がややいびつな台形状をなしているため、破損した管玉にも見えるが、ルーペで観察すると破断面は平滑に見える。F. 4は、長さ10. 5cm、幅３cm、厚さ２㎜の鉄製品で、ヤリガンナか。S. 11は、長さ5. 3cm、幅3. 5cm、厚さ８㎜、重さ27. 4gの結晶片岩製の石庖丁の破片である。S. 12は、長さ９cm、幅３cm、厚さ1. 9cm、重さ86. 7gで四面を使用する凝灰岩製の砥石である。S. 13は台石と見られるデイサイト製の平石で、大きさは、長さ22. 6cm、幅18. 3cm、厚さ7. 2cmあり、重さは５kg近い。

これらの出土した遺物から、この遺構の時期は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭のものと考えられる。

竪穴建物４（第50・51図）

この遺構は、越敷山110号墳の墳丘下層から見つかった竪穴建物である。

遺構の形態は、越敷山110号墳と道路１によって大きく削平されているため不明であるが、方形か隅丸方形のプランを呈する竪穴建物と推測される。遺構の床面は南西部で二段に分かれているため、２時期の遺構が切り合っている可能性があるが、土層の堆積状況を見ると下段の床面が古く、上段の床面が新しい段階の遺構と考えられる。

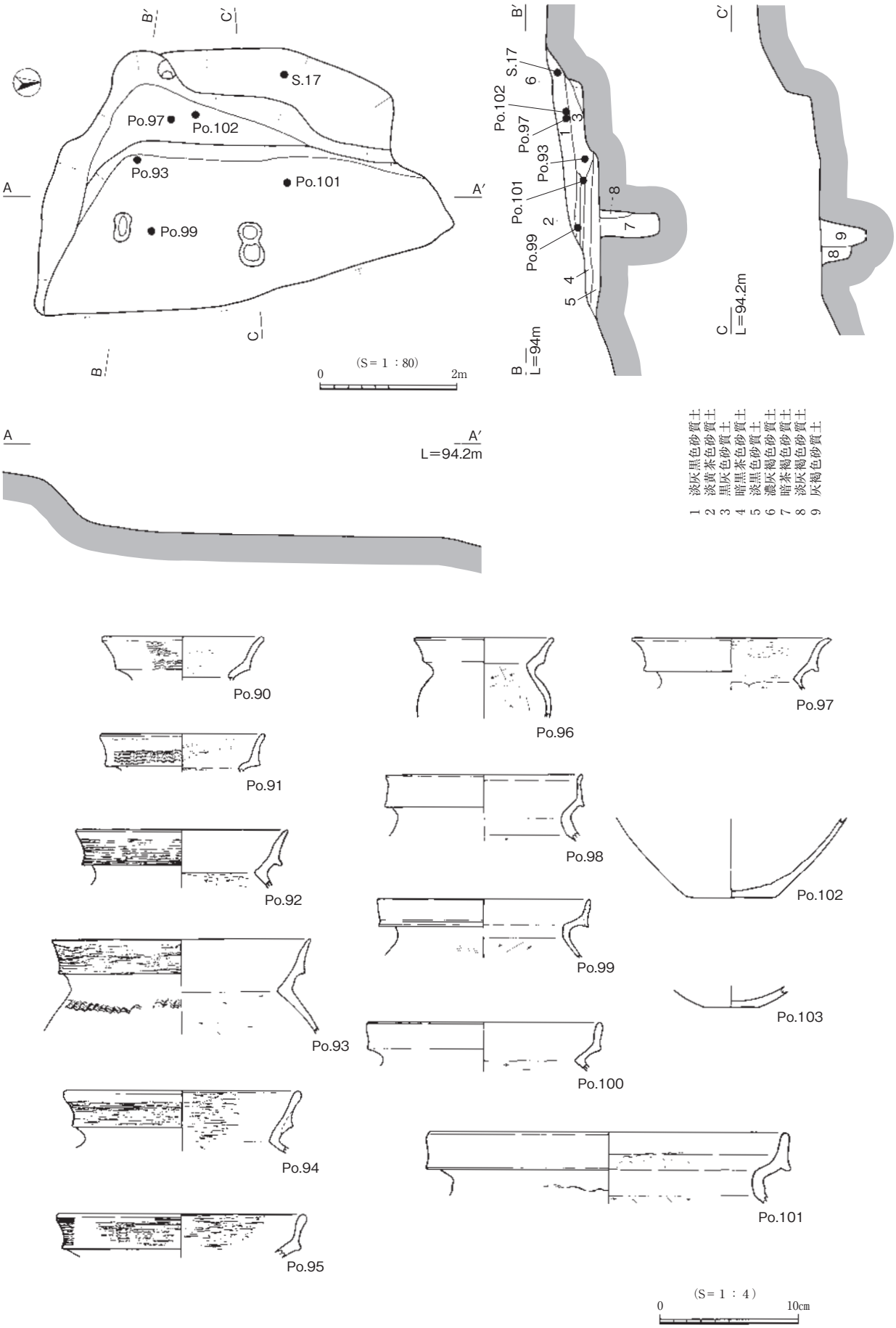
この遺構の床面では、２時期とも周壁溝は無く、ピットも２基検出したのみである。このうち、北側のピットは切り合いが認められる。遺物の出土状況は、中・上層の埋土から土器の破片が出土しているが、下段の床面直上からの遺物の出土は見られなかった。

床面で検出したピットは、北側は東西方向に２時期の切り合いが認められ、両ピットとも直径35～40cmの円形の掘形を持ち、深さは40～50cmである。切り合い関係は、深く掘られている西側のピットの方が新しい。南側のピットは、長径40cm、短径20cmほどの楕円形を呈しており、深さは床面から80cm程である。

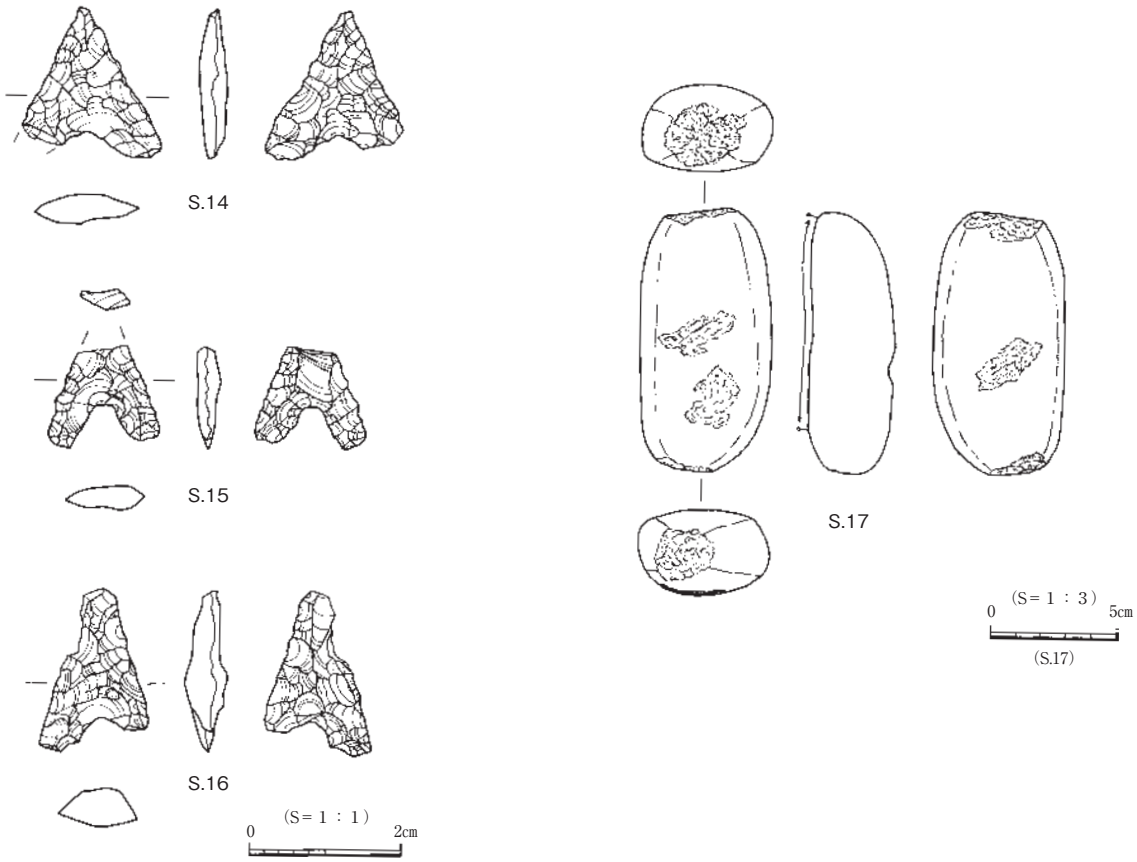
出土した遺物は、弥生土器と土師器、黒曜石製の石鏃３点と敲打痕の残る凹石である。

Po. 90・91は、口縁端部に波状紋を施す甕である。Po. 92～95は、口縁部に多条化した凹線紋が施される弥生土器の甕である。Po. 96～98は、口縁部が無紋化する土師器の甕である。Po. 99～101は、口縁が無紋化した甕の口縁部だが、弥生土器の甕と考えられる。Po. 102・103は土師器の壺か甕の底部と見られる。S. 14は、長さ２cm、幅1. 8cm、厚さ４㎜、重さ0. 8gの黒曜石製の石鏃である。S. 15は、長さ1. 4cm、幅1. 5cm、厚さ３㎜、重さ0. 4gの黒曜石製の石鏃である。S. 16は、長さ2. 2cm、幅1. 4cm、厚さ６㎜、重さ0. 8gの黒曜石製の石鏃である。S. 17は、長さ10. 4cm、幅5. 2cm、厚さ3. 4cm、重さ290. 5gのデイサイト製の凹石である。両端部には敲打痕が残る。

この遺構の年代は、出土した遺物から古墳時代前期初頭頃に埋没したものと考えられる。



第50図　竪穴建物４　遺構・遺物図①



第51図　竪穴建物４　遺物図②

竪穴建物５（第52図）

越敷山110号墳の東側、竪穴建物３の北で検出した竪穴建物である。遺構の上面は削平されているため、全体の規模は不明であるが、直径3.2m程の小型の竪穴建物と推測される。

この遺構は周壁溝を持たず、柱穴も20～30cm程度と浅いが、中央ピットに向かって溝が伸びている。遺構の埋土は、深さ20cm程度が残存しており、北側に位置している竪穴建物６の埋土を切っている。

この遺構に直接伴う遺物は確認できなかったが、竪穴建物５・６の検出作業中に、包含層から石器が出土している。S.18は、スクレイパーである。長さ6.6cm、幅3.5cm、厚さ0.9cm、重さ19.8gを測る。S.19は、長さ1.3cm、幅1.4cm、厚さ３mm、重さ0.3gサヌカイト製の石鏃である。

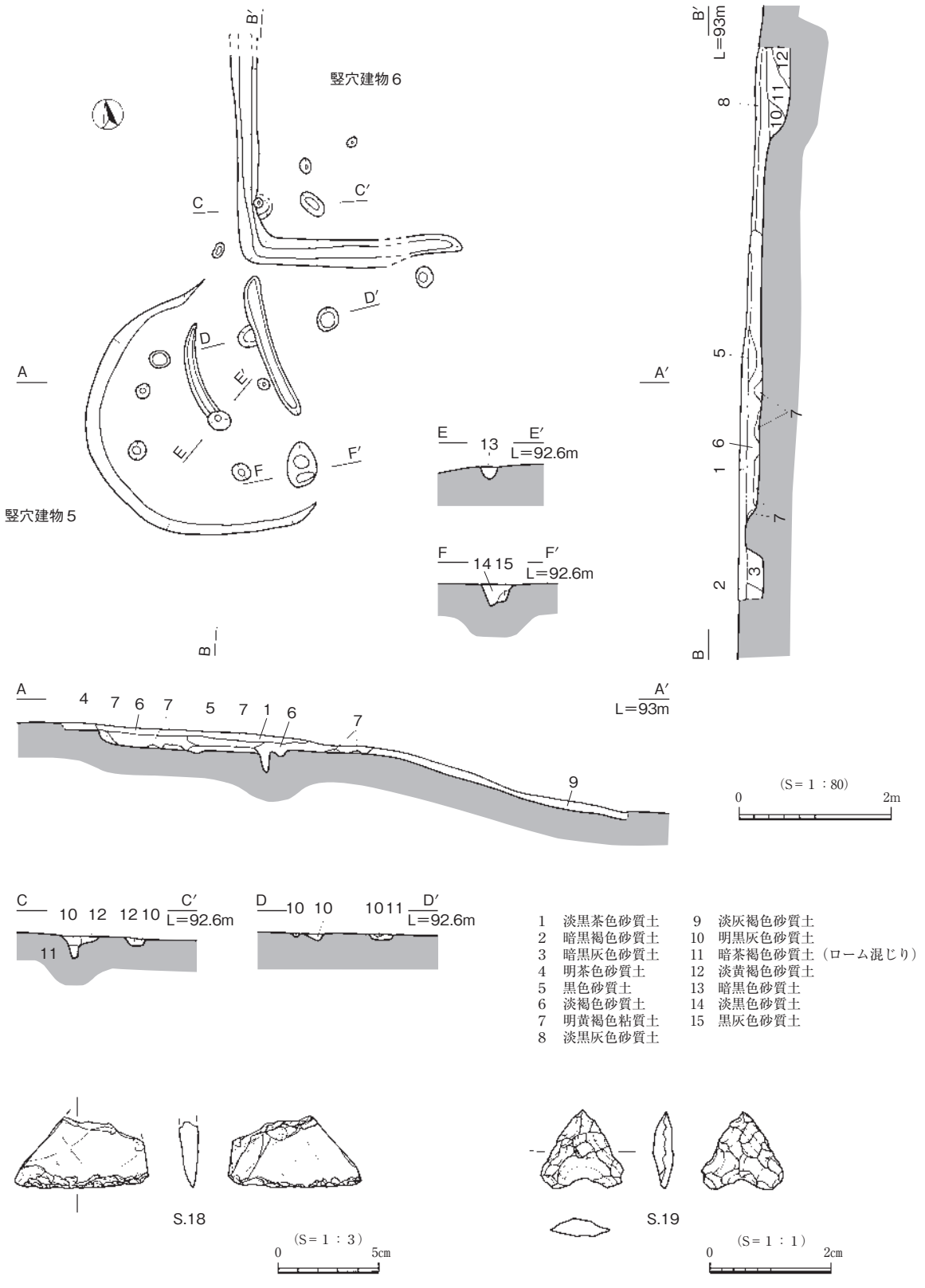
この遺構の年代については、出土遺物が無いため不明であるが、竪穴建物６よりも新しい遺構と考えられる。

竪穴建物６（第52図）

竪穴建物５の北東部で検出した、「L」字形の溝に区画された遺構である。

「L」字形の溝の規模は、南北方向に2.8m、東西方向に３mが残存しており、幅は25～40cm、深さは床面から20～30cm程である。この建物に伴う柱穴は不明であるが、溝が深く掘られていることから周壁溝ではなく、壁建ち建物である可能性も考えられる。

この遺構に直接伴う遺物は出土しなかった。



第52図　竪穴建物５・６　遺構・遺物図

掘立柱建物１（第53図）

越敷山126号墳の東側で検出した、梁行１間、桁行３間の掘立柱建物である。現在の遺構検出面は傾斜しているが、残存している柱穴の深さから推測して、建物が建てられた当初は水平な場所であったと考えられる。

柱間の寸法は、桁行が2.9m、梁行が1.6mあり、柱穴に囲まれる範囲は4.64㎡である。柱穴の掘形は円形か、または楕円形を呈しており、直径20～30㎝前後の大きさが多いが、南西コーナー部の柱穴のみ長径40㎝と大きい。柱穴の深さは、コーナー部分で標高97.2～96.4m程度である。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

掘立柱建物２（第53図）

越敷山127号墳の墳丘上の地山面で検出した、１間×１間の堀立柱建物である。この建物の南西部のピットは、越敷山127号墳の１主体部によって遺構の一部が切られているほか、北東部のピットも上面が大きく削平されている。

掘立柱建物の規模は、南北方向が2.6m、東西方向が2.1mあり、柱穴に囲まれる範囲は5.46㎡である。柱穴の掘形は全て円形で、直径は30～38㎝、深さは底面の標高が94.6～94.7mに揃えられている。

この遺構に伴う遺物は出土しなかったため、この建物が建てられた時期は不明であるが、南側の柱穴が越敷山127号墳の埋葬施設によって切られていることから、古墳時代中期以前のものと考えられる。

掘立柱建物３（第54図）

越敷山128号墳と110号墳の中間で検出した、梁行１間×桁行２間の掘立柱建物である。ピットの一部は、古墳の周溝によって削平されている。

柱間の寸法は、桁行が3.3m、梁行が2.2mあり、柱穴に囲まれる範囲は7.26㎡である。柱穴の掘形は円形で、直径30～40㎝程度あり、検出面からの深さは25～70㎝である。

この遺構に伴う遺物は出土しなかったため、この建物が建てられた時期は不明であるが、南側の柱穴が越敷山128号墳の埋葬施設によって切られていることから、古墳時代中期以前のものと考えられる。

掘立柱建物４（第54図）

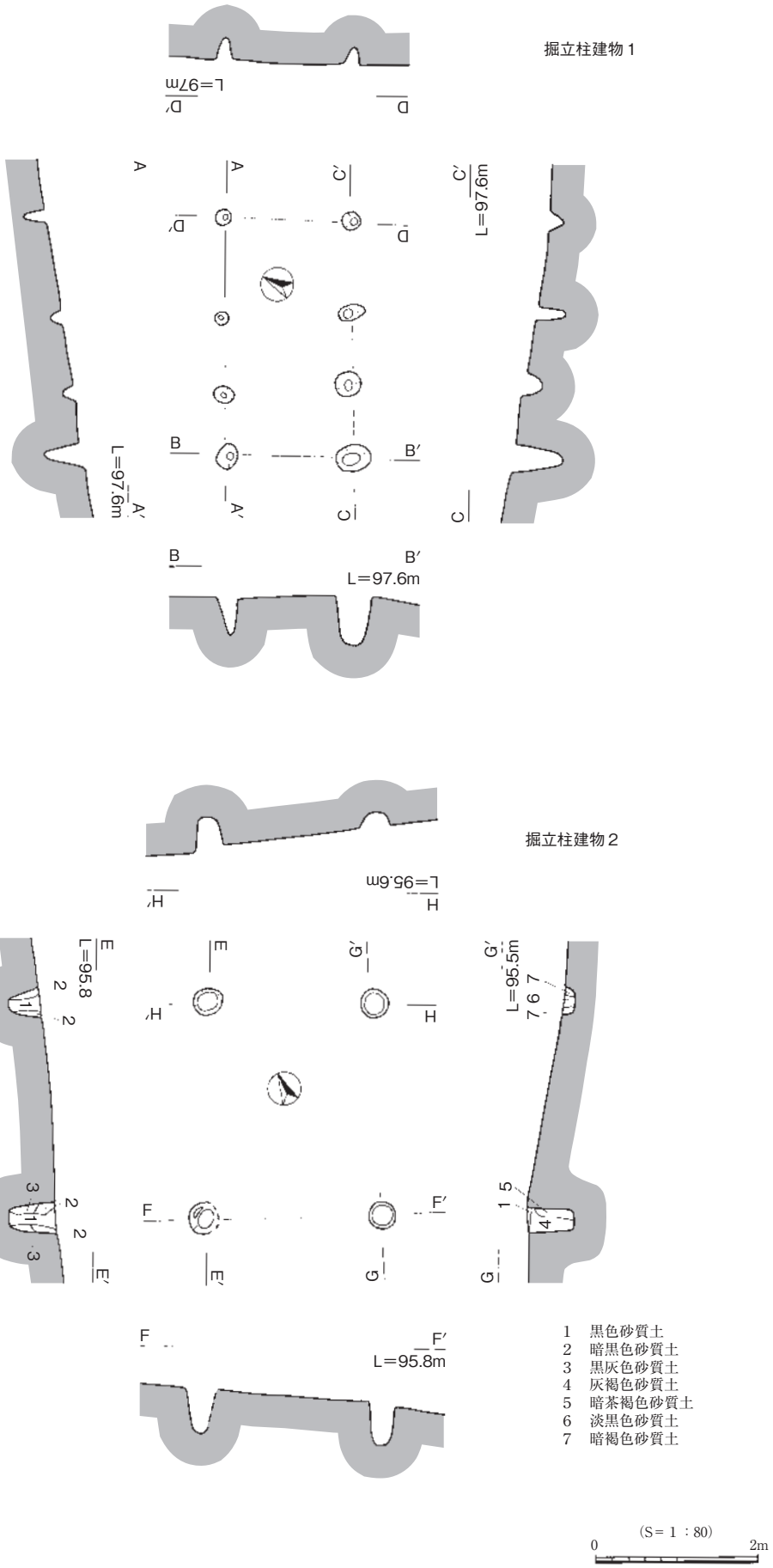
越敷山110号墳の北東部で検出した、梁行１間×桁行２間の掘立柱建物である。建物の検出面は、道路１によって大きく削平されている。また、建物の北東部コーナーの柱穴は、陥穴６の掘形を切っているが、その後に作られた石棺墓２によって切られている。

柱間の寸法は、桁行が3.7m、梁行が1.9m、柱穴に囲まれる範囲は7.03㎡である。柱穴の掘形は円形で、直径30～45㎝、柱穴の底面のレベルは標高92m付近に揃えられている。

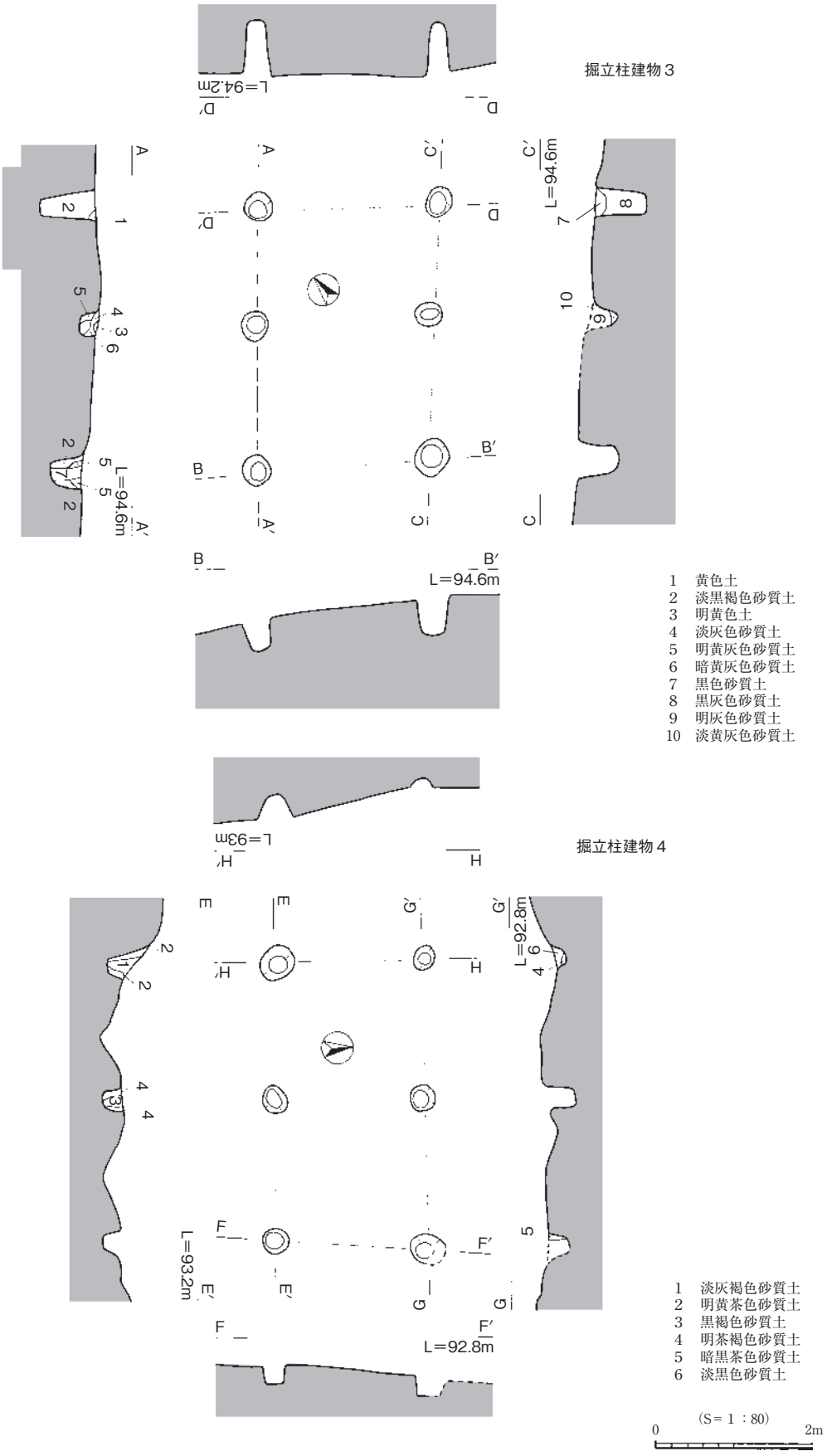
この遺構に伴う遺物は出土しなかったため、この建物が建てられた時期は不明であるが、北東側の柱穴が石棺墓２によって切られていることから、古墳時代中期以前のものと考えられる。

掘立柱建物５（第55図）

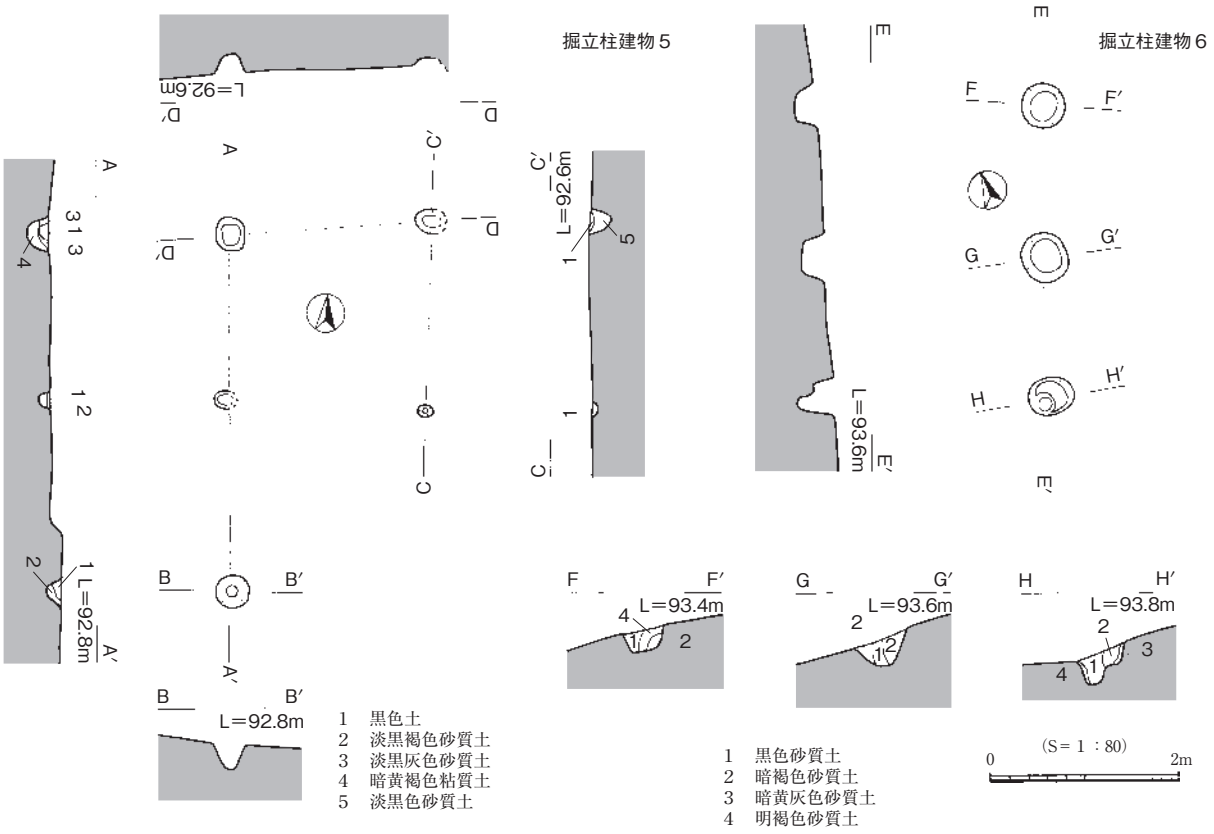
竪穴建物５の東側で検出した、梁行１間×桁行２間の掘立柱建物である。この建物の周辺には、竪穴建物３や竪穴建物６などが密集している。この建物は、東に向かって下る緩斜面上に建てられてお



第53図　掘立柱建物１・２　遺構図



第54図　掘立柱建物３・４　遺構図



第55図　掘立柱建物５・６　遺構図

り、南東部の柱穴は削平のため消滅している。

柱間の寸法は、桁行が3.8m、梁行が2.2m、柱穴に囲まれる範囲は8.36㎡と推測される。柱穴の掘形は、円ないし隅丸方形状を呈し、コーナー部分の柱穴は直径35㎝程度の大きさと見られる。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

掘立柱建物６（第55図）

越敷山110号墳の北側で検出した、掘立柱建物の柱列と考えられる３基のピット群である。

検出したのは建物の東側部分と推測され、西側の柱穴列は道路３によって完全に削平されているものと考えられる。

３基のピットの柱間は3.2mあり、柱穴は円形を呈し、直径は40～45㎝程度である。柱穴の底面は標高92.8m前後の高さに揃えられている。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかった。

段状遺構１（第56図）

G–5区で検出した、長さ5.6m、幅1.8mの平坦地形である。東向きに下る丘陵の斜面を「L」字形にカットして整形されており、遺構内には、黒褐色の砂質土が堆積していた。この段状遺構の北側には、直径40㎝、深さ20㎝のピットが１基存在するが、これに対応するピットが見つからないことから、この段状遺構には、当初から建物は建てられていなかったと考えられる。

この遺構に伴う遺物は、埋土中から弥生土器の口縁部片と砥石か出土した。Po.104は、口縁部に波状紋を施す弥生土器の甕である。S.20は、残存する長さ13.3㎝、幅5.3㎝、厚さ2.4㎝、重さ234gの花崗岩製の砥石である。

竪穴遺構１（第56図）

竪穴建物２の南側、道路１の西側斜面寄りで検出した、性格不明の遺構である。平面は、直径3.6m程度の円形土坑と推測され、内部にはレンズ状に堆積したロームが見られた。この遺構内からは、遺物は出土しなかった。

この遺構の性格については、埋土中に遺物を含まないことと、調査区内でも風倒木の痕跡が多数見られたことから、風倒木痕の可能性が高いと考えられる。

貯蔵穴１（第56図）

越敷山109号墳の南側周溝によって切られている、大型の円形土坑である。

この土坑は、底面から80㎝上の地点で内側に向かって大きく屈曲していることから、いわゆるフラスコ状の貯蔵穴と考えられる。遺構の半分が削平されているため遺構上面の規模は不明だが、残存する深さが１mあり、底面の直径は1.2mを測る。

この遺構からは遺物は出土しなかったが、集落の存続時期が弥生時代後期後半から古墳時代前期であることから、当該期に使用された可能性が高いと考えられる。

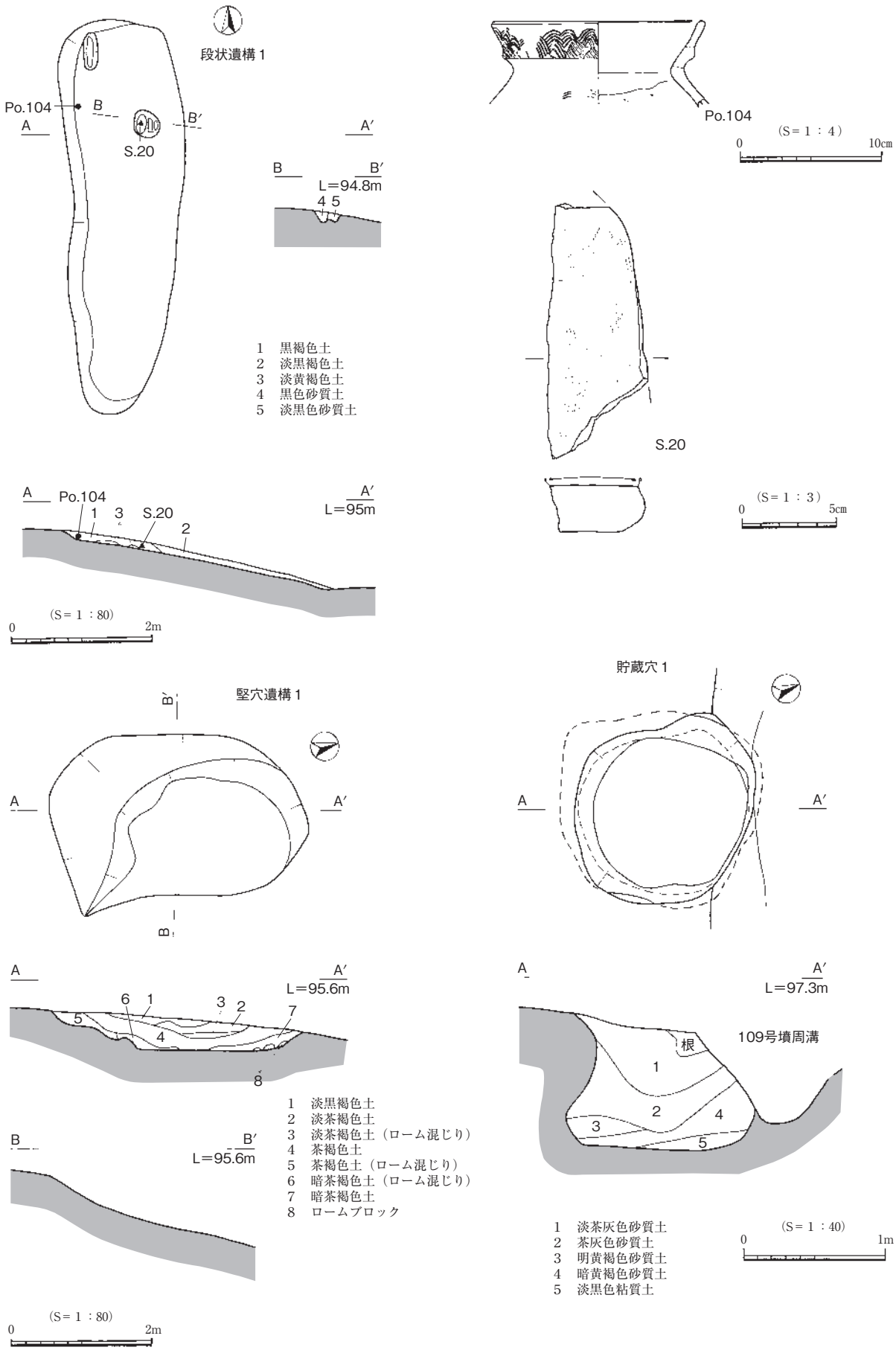
道路１（第57・58図）

調査区のB–5区からH–5区に向かって弧状に伸びる溝状の遺構で、複数回に亘って造りかえられた道路と考えられる。北側の調査区では４時期の溝の切り合いが認められるが、南側では３条ほどの浅い溝へと変化しており、この溝と並行して走る平坦地形と合わせて道路として使われたものと考えられる。また、溝の底面には波板状の凹凸が見られる部分もあった。

遺構の規模は、全体で長さ60m以上、幅は検出面で１～2.4mほどあり、底面では40㎝、深さは20～60㎝程度である。遺構の断面は、幅広の「U」字形を呈し、遺構の埋土は水平堆積した砂が縞状に堆積している。このため、水路の水成堆積のようにも見えるが、この遺構は丘陵上にあることから、この砂は道路の基礎地業として人為的に敷き詰められたものと考えられる。また、この堆積の中には、少量の砂鉄が含まれていた部分もあった。

この遺構からは、埋土中から黒曜石製の石鏃が２点出土している。S.21は、長さ2.1㎝、幅1.6㎝、厚さ４㎜、重さ0.8gである。S.22は、長さ1.9㎝、幅1.5㎝、厚さ４㎜、重さ0.6gである。

この遺構からは時期を決定できる遺物が出土しなかったため、埋没した時期は不明であるが、石棺墓２を切っていることから、古墳時代中期よりも新しい時期の道路と考えられる。



第56図　段状遺構１・竪穴遺構１・貯蔵穴１　遺構・遺物図

道路２（第59図）

道路２は、竪穴建物３のある地点から、南西の方向に向かって丘陵上を登る２条の溝状遺構である。この遺構の南端は標高96m付近の丘陵上で途切れているため、その続きを検出することは出来なかった。

遺構の規模は、長さ20m程が残存しており、幅は40～80㎝、深さは10～40㎝程度である。遺構の埋土は、黄灰色系の砂質土が堆積しているが、硬化しているわけではなく、また、道路１のような砂の堆積も見られなかった。

この遺構からは、遺物は出土しなかったため、埋没した時期などは不明である。

道路３（第60・61図）

道路３は、越敷山古墳群が列状に並ぶ丘陵の西側を幅広の「V」字形に掘りこんで造られた道路である。この遺構の範囲では、調査区の北側に所在する陥穴７のように、遺構の上面が大きく削平されたものがあることから、かなり大規模な土地造成を行って造られた道路と考えられる。

遺構の規模は、長さ66m、幅は２～3.5mあり、深さは西側の遺構の肩部から20～50㎝程度ある。遺構の底面には、波板状の凹凸が掘り込まれており、この部分の埋土は固くしまった土が充填されていた。

この遺構からは、埋土中から礫石器が１点出土している。S.23は、閃緑岩製の砥石である。長さ19.7㎝、幅6.7㎝、厚さ5.1㎝、重さ635.6gを測る。この遺構の年代は土器が出土しなかったために不明であるが、越敷山古墳群の西側を大きく削平して造られていることから、古墳時代中期よりも新しい時期のものと考えられる。

道路４（第62・63図）

道路４は、調査区の西側、道路３と道路５の間を南北方向に伸びる溝状の遺構である。南側では４条以上、北側でも２条の溝へと分岐して伸びており、複数時期に亘って使用された道路と考えられる。

遺構の規模は、長さ60mあり、幅は検出面で0.5～1.5m、深さは30～50㎝程度である。遺構内の埋土は、黒色系の砂質土が堆積しており、底面には波板状の凹凸が掘られている。

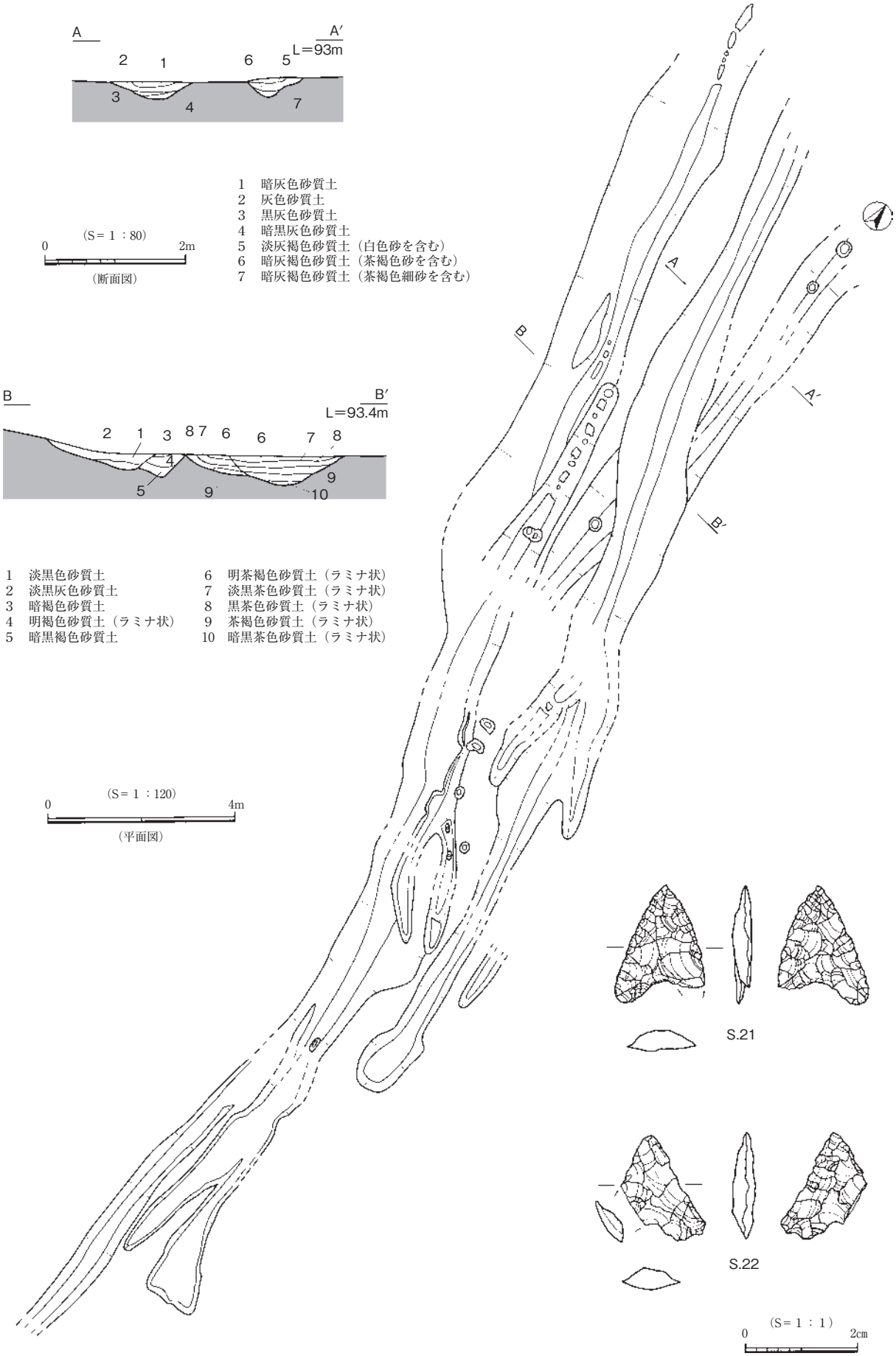
この遺構からは、遺物は出土しなかった。

道路５（第64・65図）

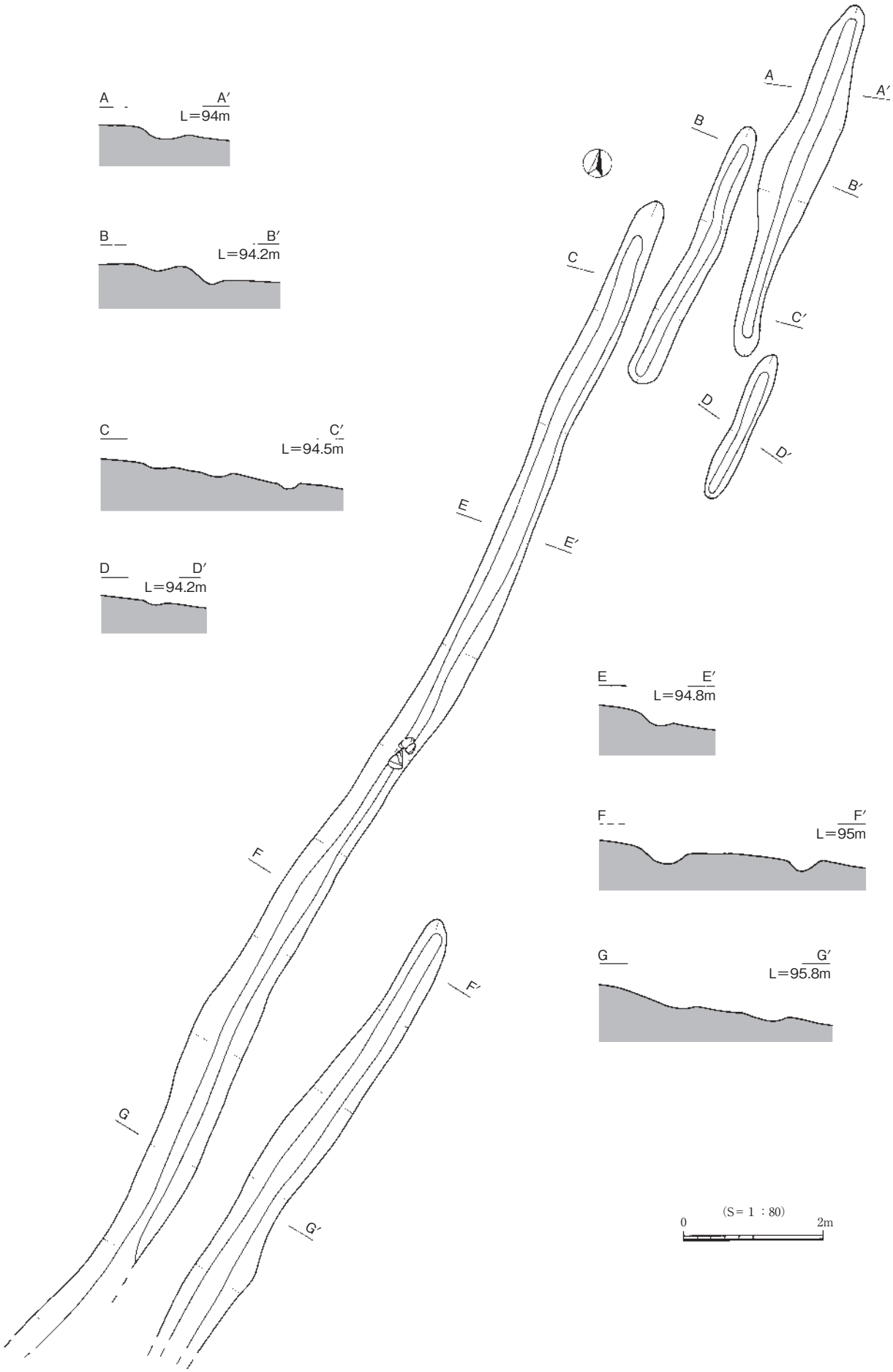
道路５は、調査区の西端に伸びる溝状の遺構で、所々で途絶えているが、複数時期に亘って使われた道路状の遺構と考えられる。

遺構の規模は、長さ52mほどで、幅は、0.4～1.2mあり、深さは10～20㎝程度である。遺構の埋土は、灰色か黄灰色系の砂質土がラミナ状に堆積している。

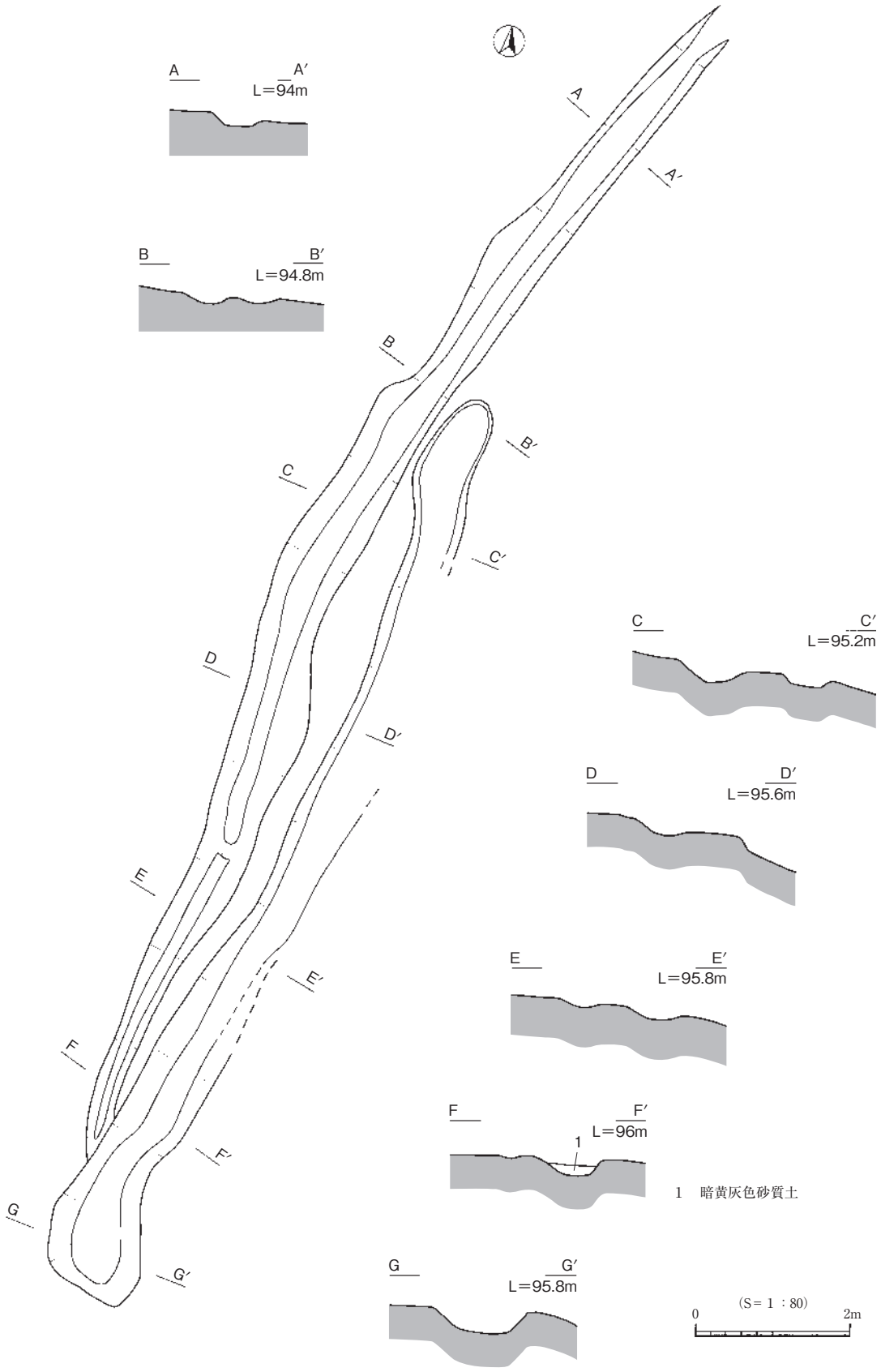
この遺構からは、遺物は出土しなかった。



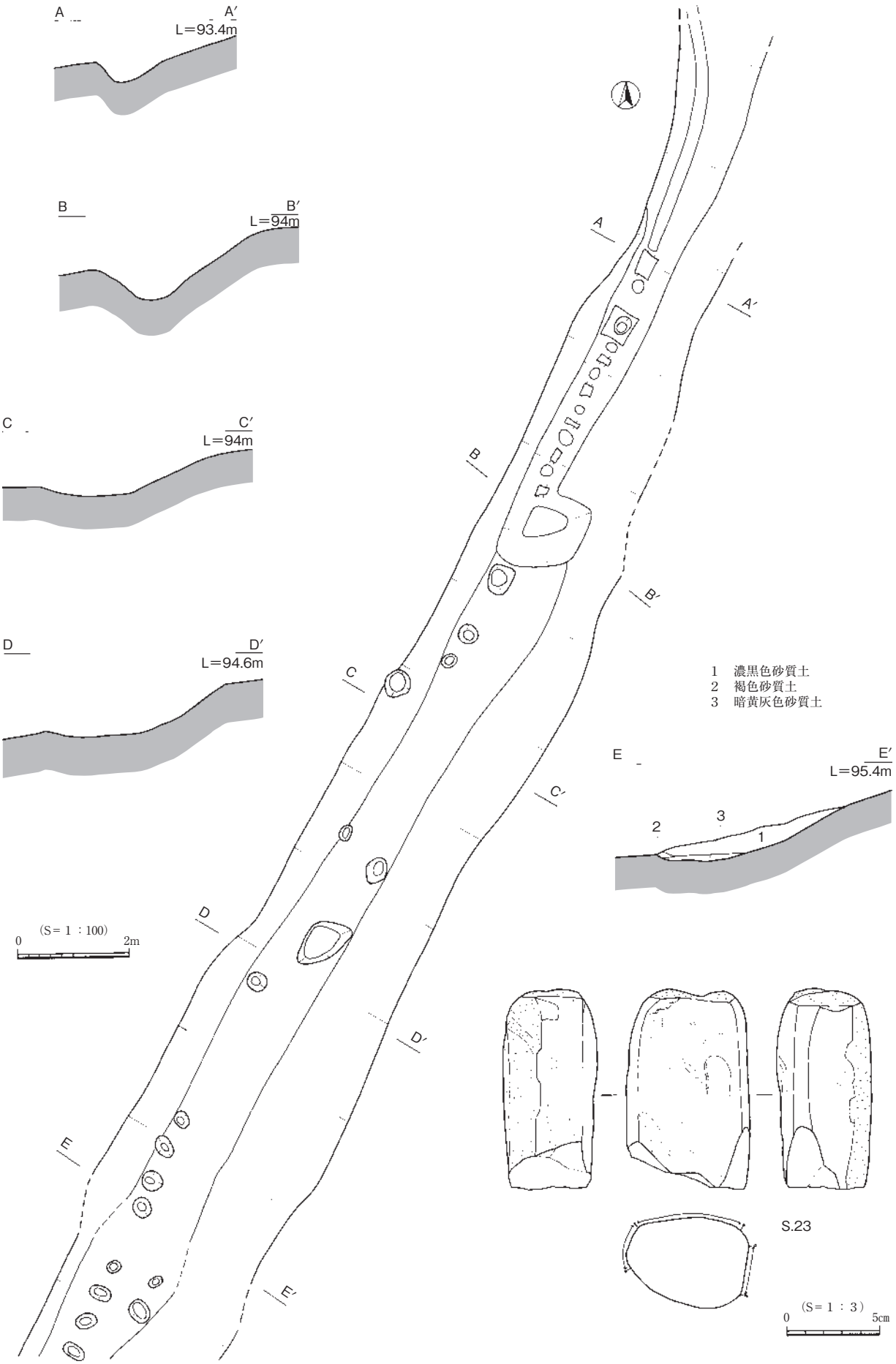
第57図　道路１（北側）　遺構・遺物図



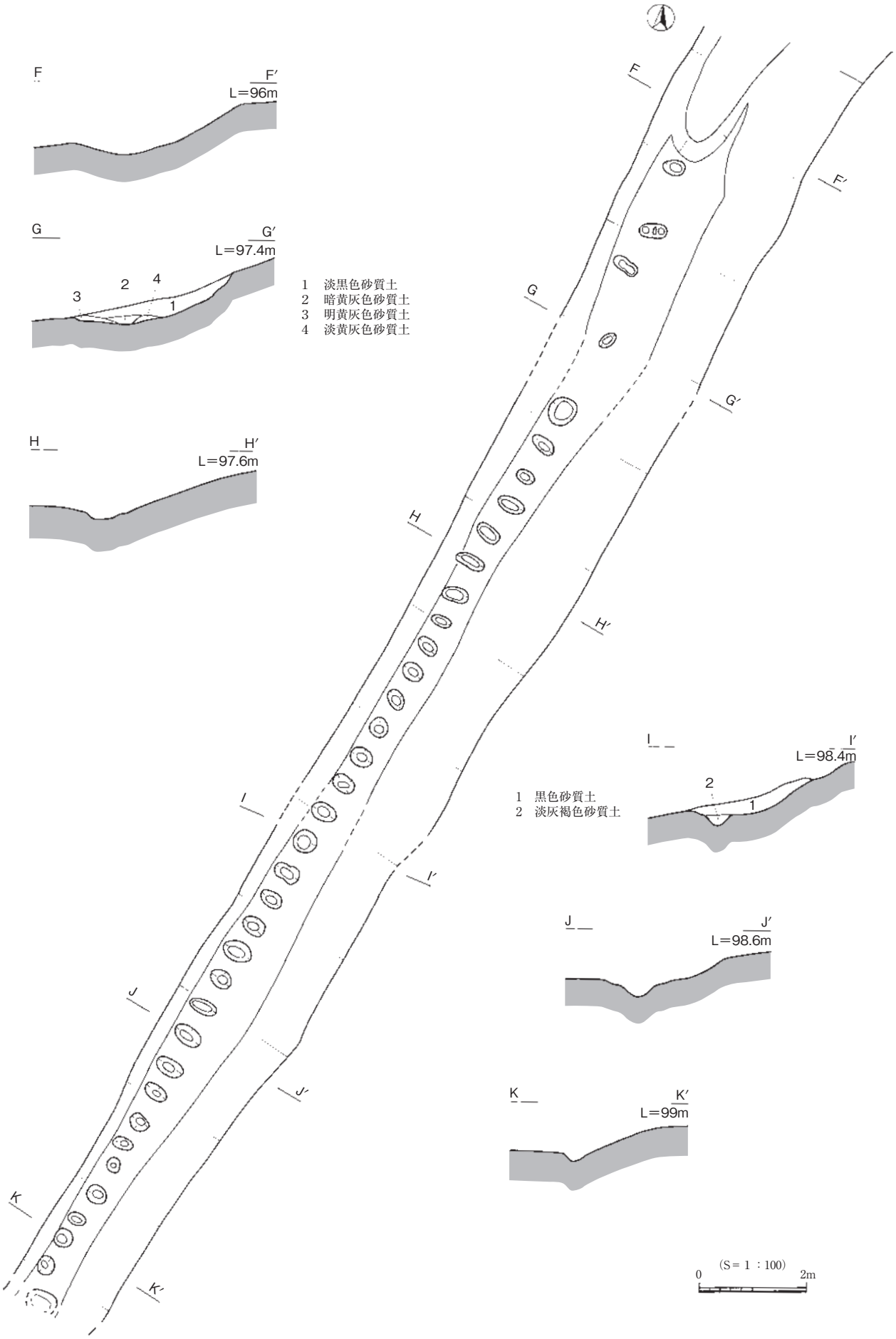
第58図　道路１（南側）　遺構図


A
A′
L=94m
B
B′
L=94.8m
C
C′
L=95.2m
D
D′
L=95.6m
E
E′
L=95.8m
F
F′
L=96m
1
1　暗黄灰色砂質土
G
G′
L=95.8m
(S=1：80)
0
2m

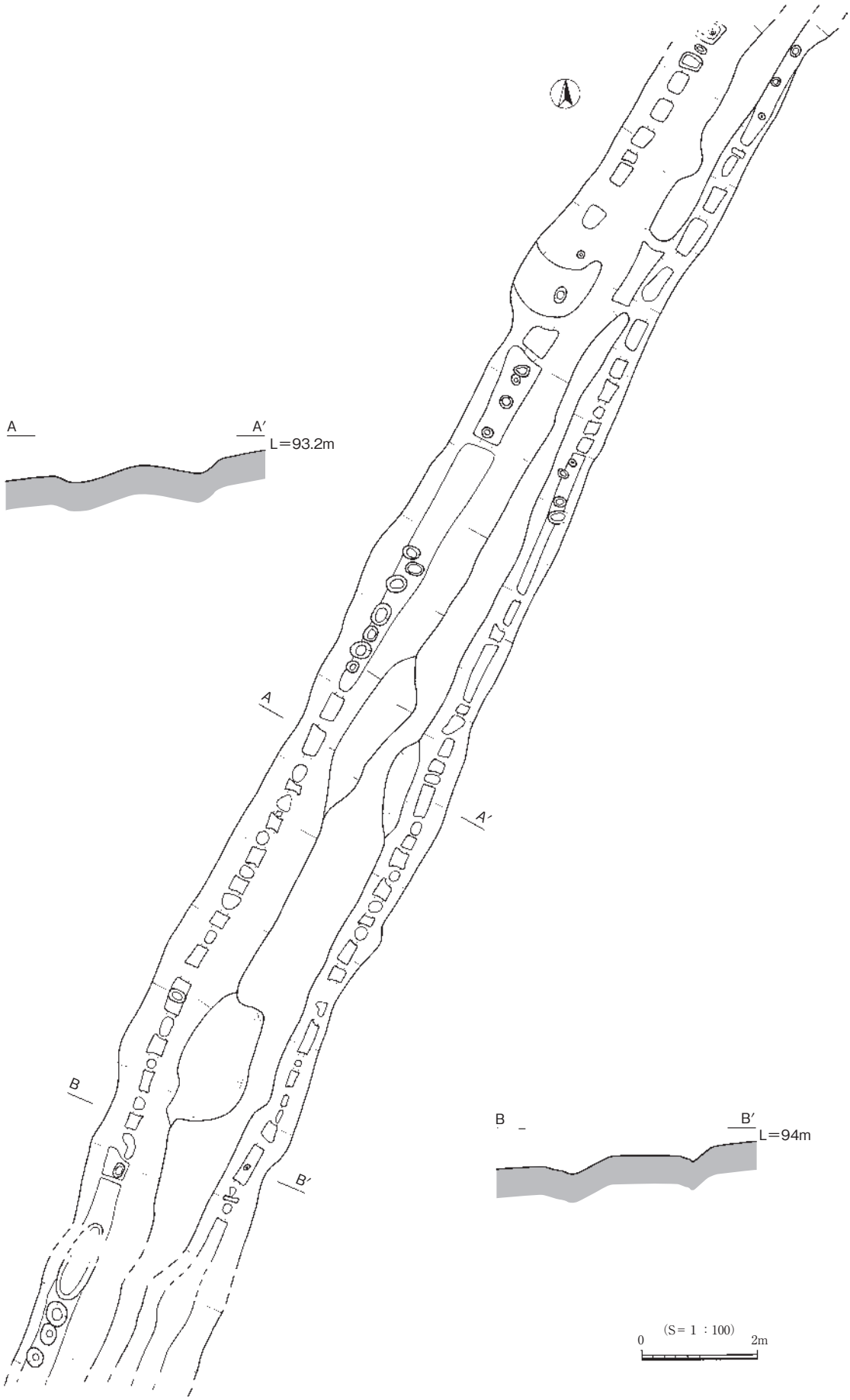
第59図　道路２　遺構図



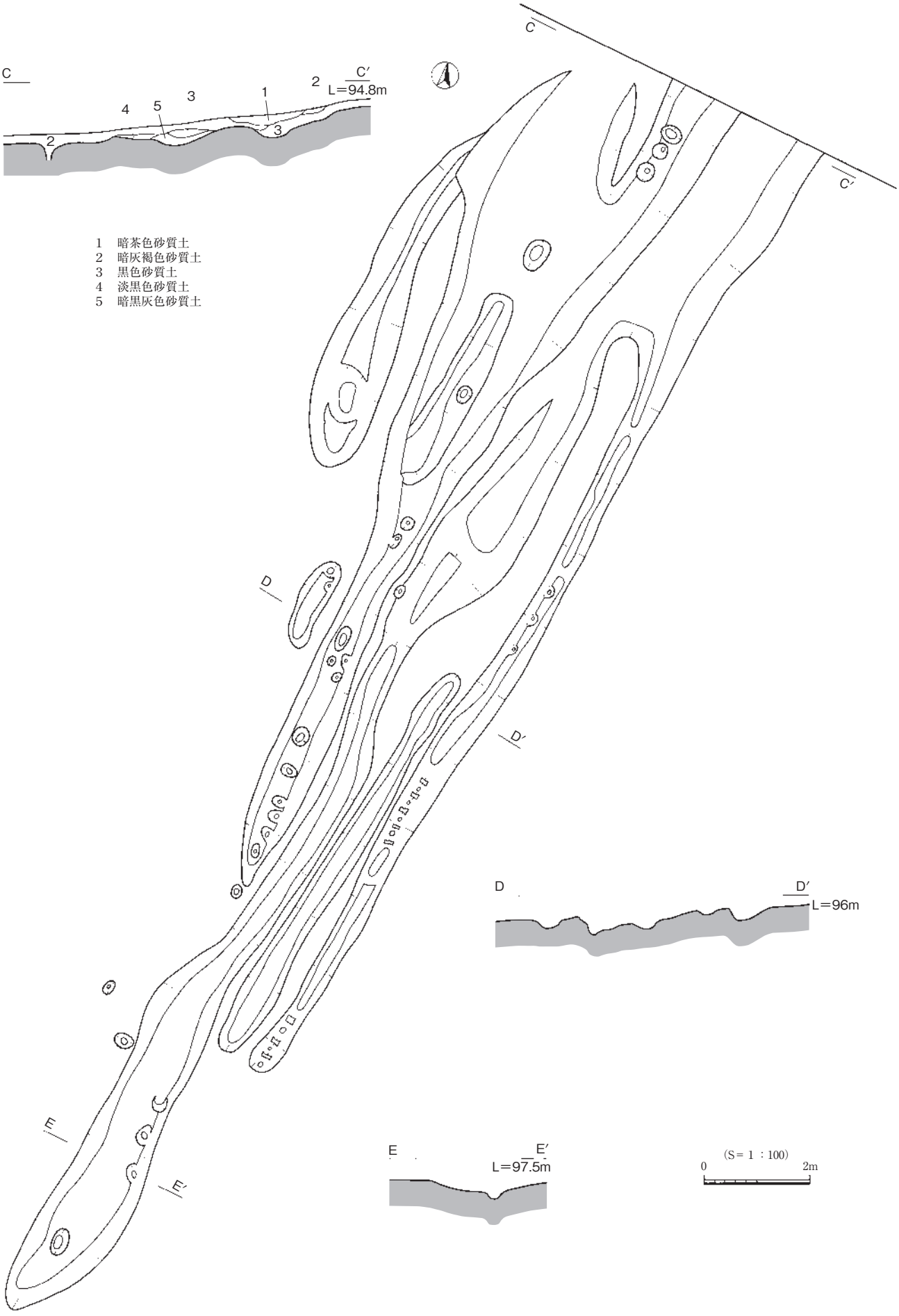
第60図　道路３（北側）　遺構・遺物図



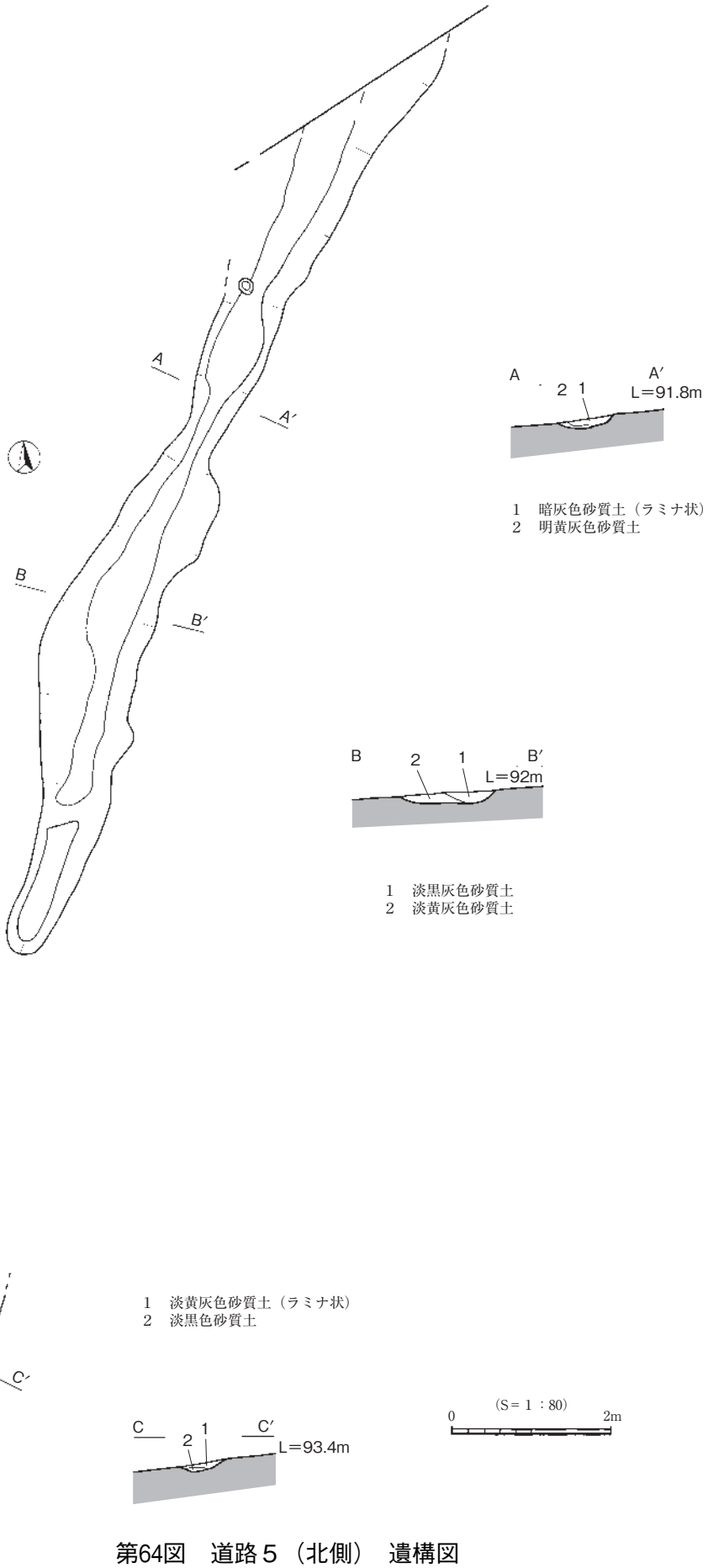
第61図　道路３（南側）　遺構図



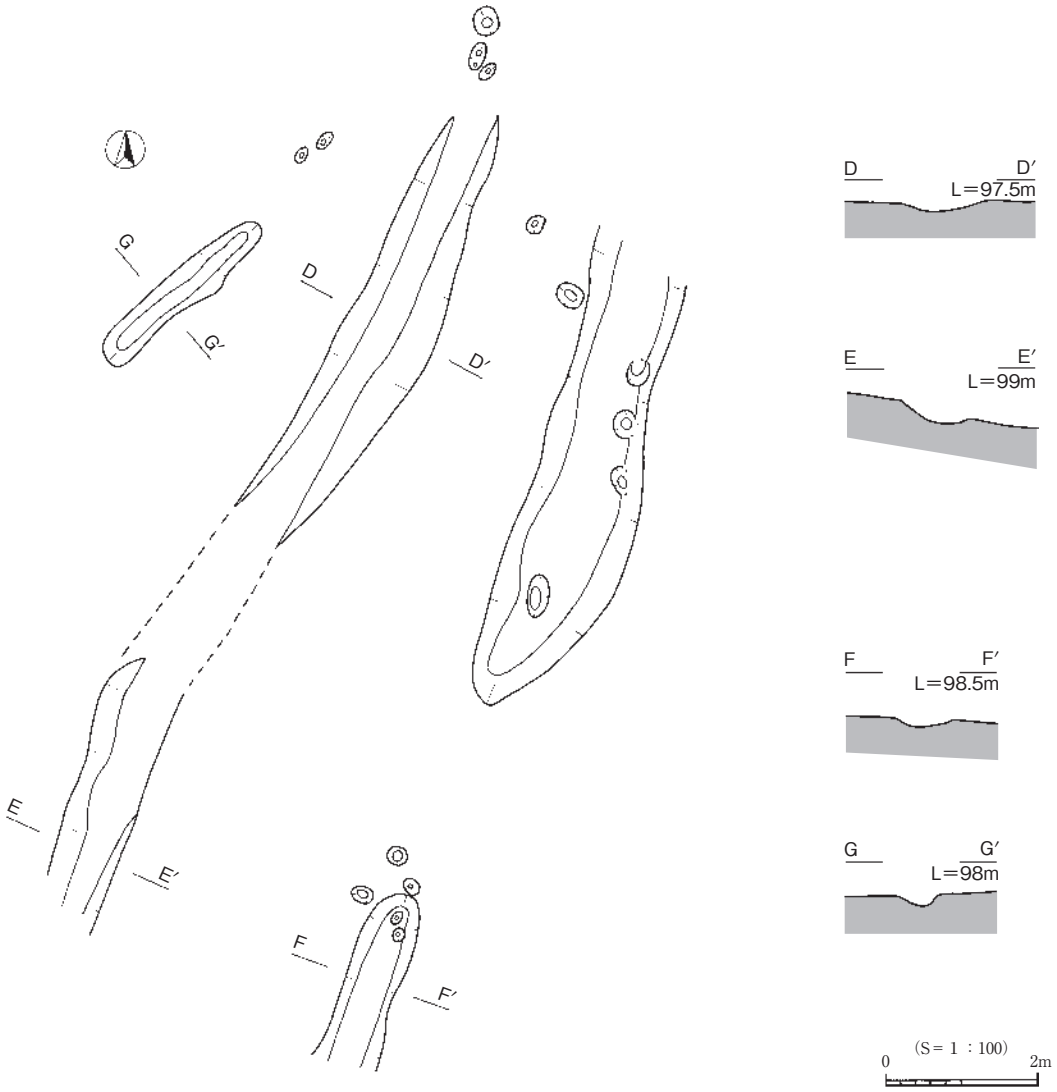
第62図　道路４（北側）　遺構図



第63図　道路４（南側）　遺構図



第64図　道路５（北側）　遺構図

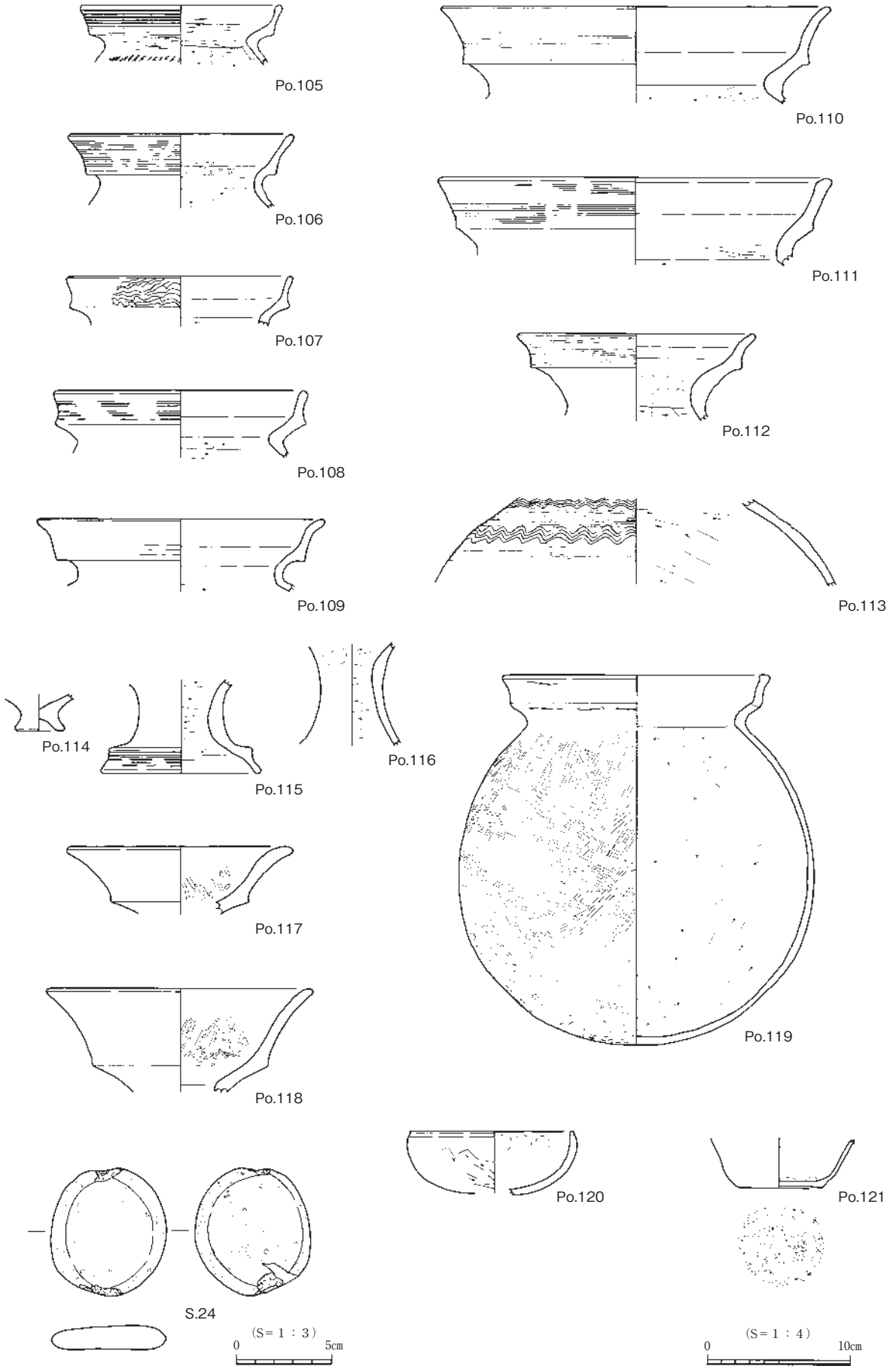


第65図　道路５（南側）　遺構図

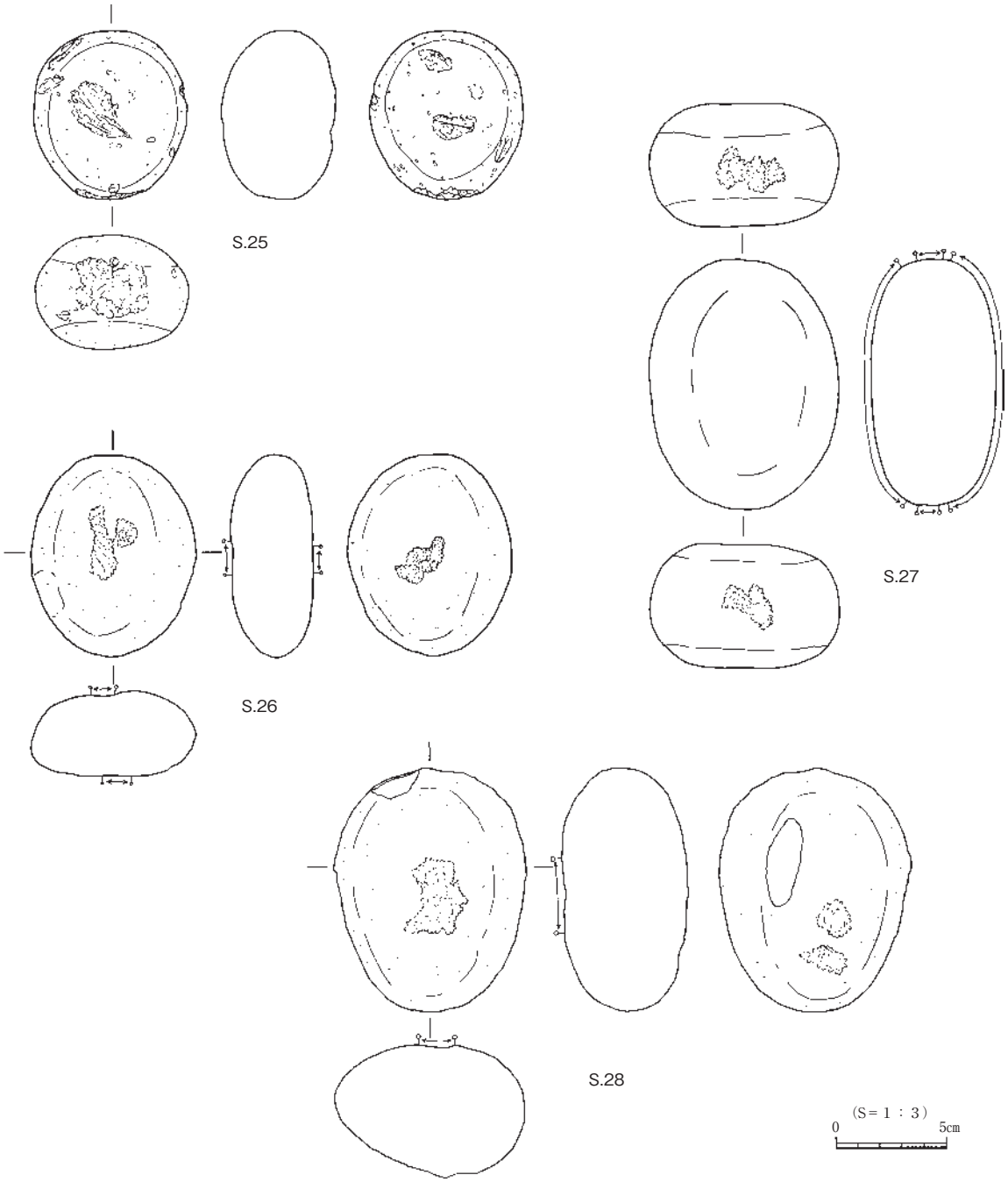
第４節　遺構に伴わない遺物（第66・67図）

遺構に伴わない遺物は、大半が遺物包含層の掘削作業中に表土層から出土した土器や石器類である。年代的には、縄紋時代から平安時代前期にかけてのものが見られるが、特に出土量が多いのは、集落として利用されていた弥生時代後期後半のものと、古墳群が築造されていた古墳時代中期のものである。

Po. 105は、口縁部に凹線紋が廻り、肩部に右上がりの刺突紋が施される甕である。Po. 106は、口縁部が外反する甕。Po. 107は、口縁部に波状紋を施す甕である。Po. 108も、Po. 107と同様の資料だが、口縁にはうっすらと凹線紋が廻る。Po. 109は、口縁部が大きく外反する甕で、やはり凹線紋の痕跡が残っている。Po. 110とPo. 111は、口径が26cmを超える大型の甕である。Po. 112は、口縁部が外反する壺の破片で、頸部内面はヘラケズリされている。Po. 113は、体部外面に凹線紋と波状紋を施す、胴部が球形を呈する壺である。内面がヘラケズリ調整されていることから、弥生時代後期のものと考えられる。Po. 112と、同一個体であろう。Po. 114は、低脚坏の底部か蓋の摘部と推測される。Po. 115は、脚端部に凹線を施す台付壺か。Po. 116は、内面をケズリ調整する高坏の脚柱部である。Po. 117、118は、内面をヘラミガキする器台の受部と推測される。Po. 119は、越敷山110号墳西側の



第66図　遺構外出土遺物図①



第67図　遺構外出土遺物図②

表土掘削中に出土した土師器の甕である。口縁は退化した複合口縁となり、底部は完全な丸底になっている。Po. 120は、越敷山127号墳周辺の表土掘削中に出土した土師器の坏身である。Po. 121は、平安時代頃のものと見られる、底部外面に糸切痕を持つ土師器の坏である。S. 24は、重さ78. 4gのデイサイト製の打欠石錘。S. 25～28は、全てデイサイト製の磨石である。

第４章　坂長越城ノ原遺跡２区の調査

第１節　調査区の概要と層位

坂長越城ノ原遺跡２区は、坂長越城ノ原遺跡１区と３区の間に挟まれた谷部に位置している。現地は標高74～77mの山林であり、調査に着手する以前には、樹木の伐開作業用重機の搬入路が調査区の南側に造られていた。

この調査区は、平成24年度に伯耆町教育委員会によって行われた試掘調査で、縄紋土器や弥生土器、土師器が多数出土したほか、小規模なピットが密集する状況が確認されていたことから、何らかの遺構が存在するものと考えられていた。

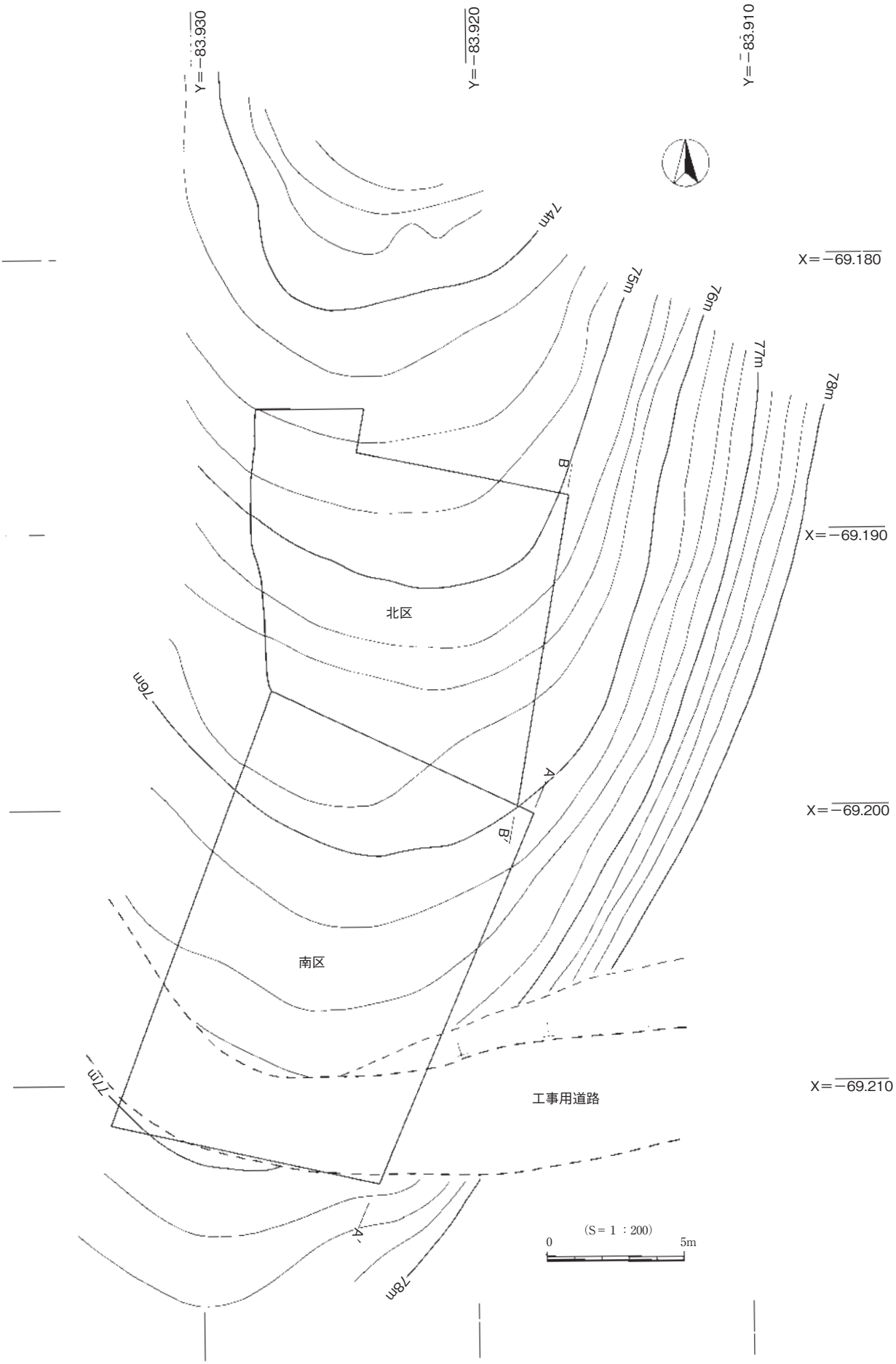
現地は、谷底に位置しているために平坦地が少なく、隣接地で排土置場を確保することが困難であったため、調査区を南北二つに分けて発掘調査を実施した。発掘調査は、表土掘削と排土の移動に重機を使用し、それ以外の包含層掘削、遺構面の検出などはすべて人力で行った。

調査区の層位は、谷部の傾斜に沿って７層ほどが堆積しており、表土である第１層から第２層の淡黒褐色砂質土、第３層の暗茶褐色土へと変化しているが、第４層以下は水分の含有量が高く、粘性の高い土となっている。

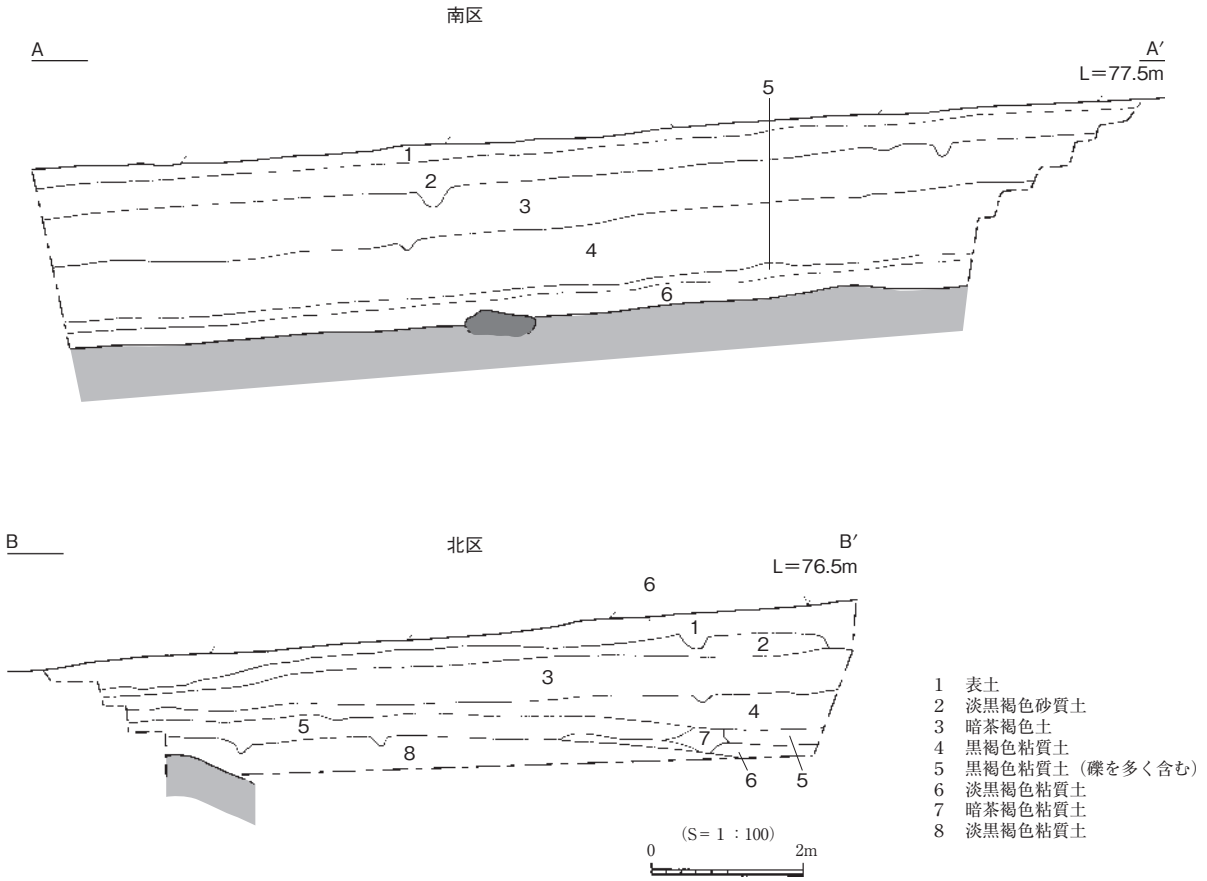
表土直下の第２層から縄紋時代後晩期の遺物が数多く出土している。そして、第３層の上面で多数のピットを検出したことから、これを第１遺構面として調査した。ピットの数は総数80基にも上ったが、いずれも直径20～30㎝、深さ10～40㎝前後と小型であり、谷底であるという立地条件から、建物を建てるための柱穴ではないと考えられる。あるいは、根菜類などを採取した痕跡かと考えたが、ピットの埋土は遺構面の土と異なる色調の土であることから、採取した穴を別の土で埋め戻すようなは作業は想定しにくい。

下層の調査については、南区では第１遺構面からさらに地山面まで掘り下げた結果、谷底に転落している大型の石を多数検出した。これらの石には人為的な加工痕が残されていないことから、越敷山一帯の丘陵形成期に、丘陵部にあった石が露出して転落し再堆積したものと考えられる。

出土した遺物は、縄紋時代後期から平安時代までの土器や石器類であるが、主体となるのは第２層から出土した縄紋時代後晩期の土器である。これらの遺物は、第２層から出土した縄紋土器などには完形品のものも見られたが、第１層から出土している遺物にはローリングを受けているものがあることから、大半は丘陵部から転落してきたものと考えられる。



第68図　越城ノ原遺跡２区　調査前地形図



第69図　越城ノ原遺跡２区　調査区断面図

第２節　検出遺構

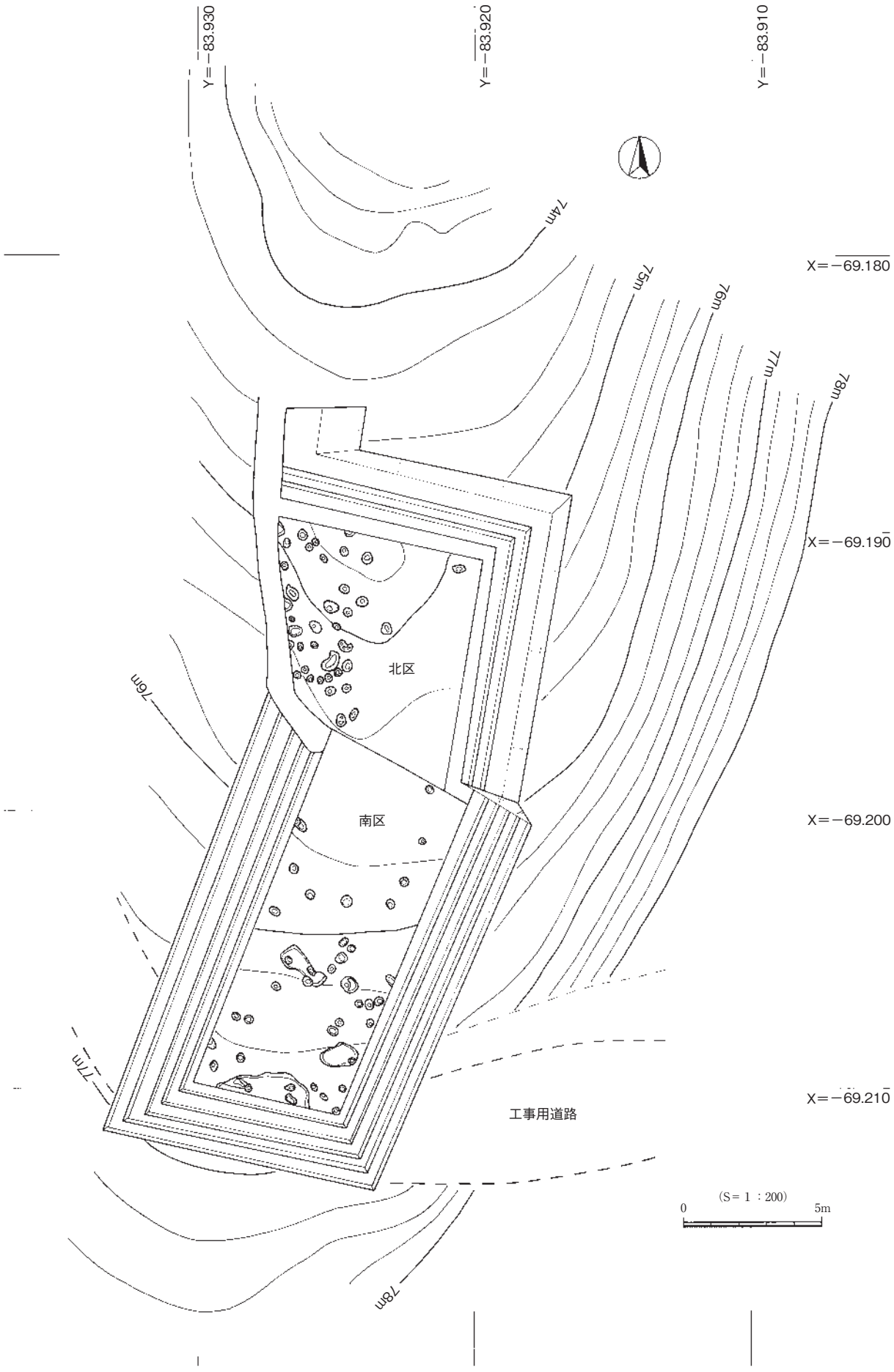
坂長越城ノ原遺跡２区において検出した遺構は、第１遺構面で水溜り状の土坑３基と無数のピットが分布している状況を確認した。さらに下層の第２遺構面では、巨大な岩が散乱している状況を確認している。

この二つの遺構面の時期に関しては、第１遺構面ではピット内から縄紋土器が出土していることから、縄紋時代後晩期に形成されたものと考えられる。また、第２遺構面に関しては、遺物の出土が無いため決め難いが、地形の形成時期にまで遡る可能性があることから、縄紋時代以前に堆積したものと推測される。

ピット群（第70～72図）

ピット群は、北区のやや西寄りの地点と南区に、まばらに80基ほどが分布している。ピットの配列には、やや規則性がありそうだが、ピットの直径は20～30cmで、深さは10～40cm程度のものが混在しているため、建物の柱穴とするには難しい。ピット内には暗茶褐色土が堆積しており、中には縄紋土器片や石鏃が出土するものもあった。

これらのピット群は、調査範囲が限られているため建物の配置を復元できなかったが、谷底に形成されていることから、住居に伴う柱穴の可能性は低いと考えられる。



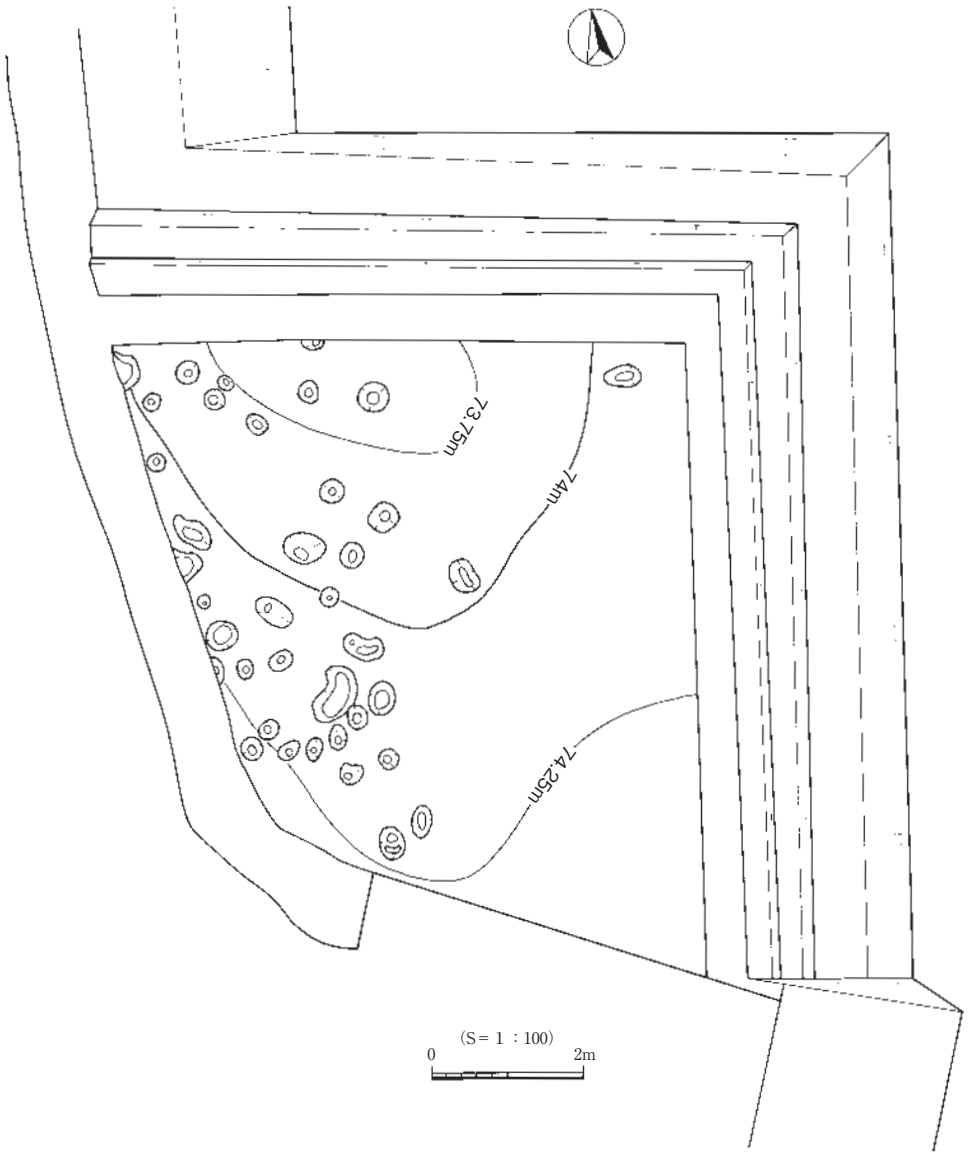
第70図　越城ノ原遺跡２区　第１遺構面全体図

土坑１（第73図）

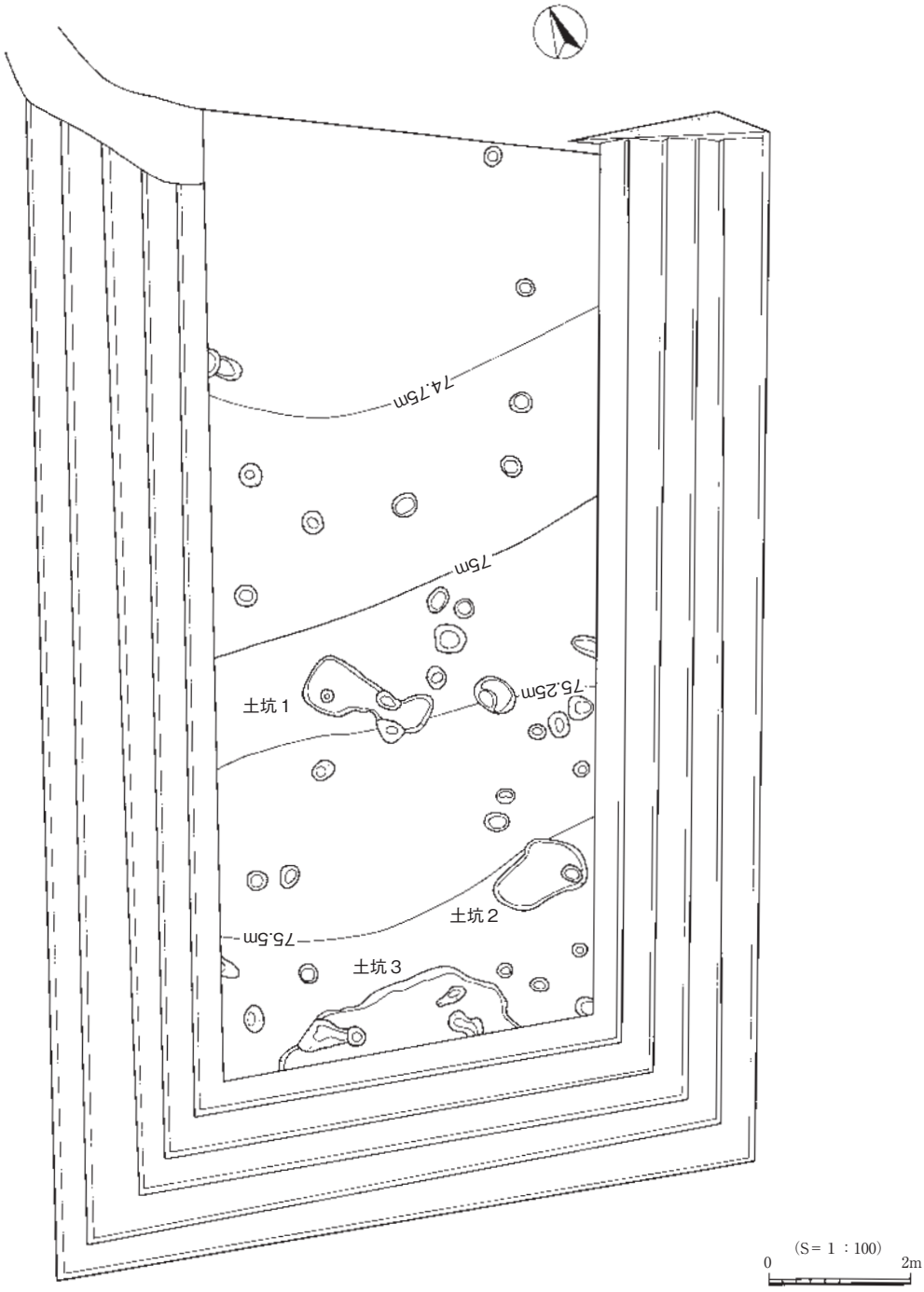
南区の中央付近で検出した、長さ1.8m、幅30～80cm、深さ10cmの不整形の水溜状土坑である。土坑内には直径20～30cm、深さ20～40cmのピットが３基切り合っているが、埋土に明瞭な違いが認められないことから、同時期に埋没したものと考えられる。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

土坑２（第73図）

南区の南端付近で検出した、長径1.3m、短径80cm、深さ10cmの、ややいびつな楕円形土坑である。土坑の南東部にある直径30cm、深さ40cmの小ピットを切っている。この遺構からは、遺物は出土しなかった。



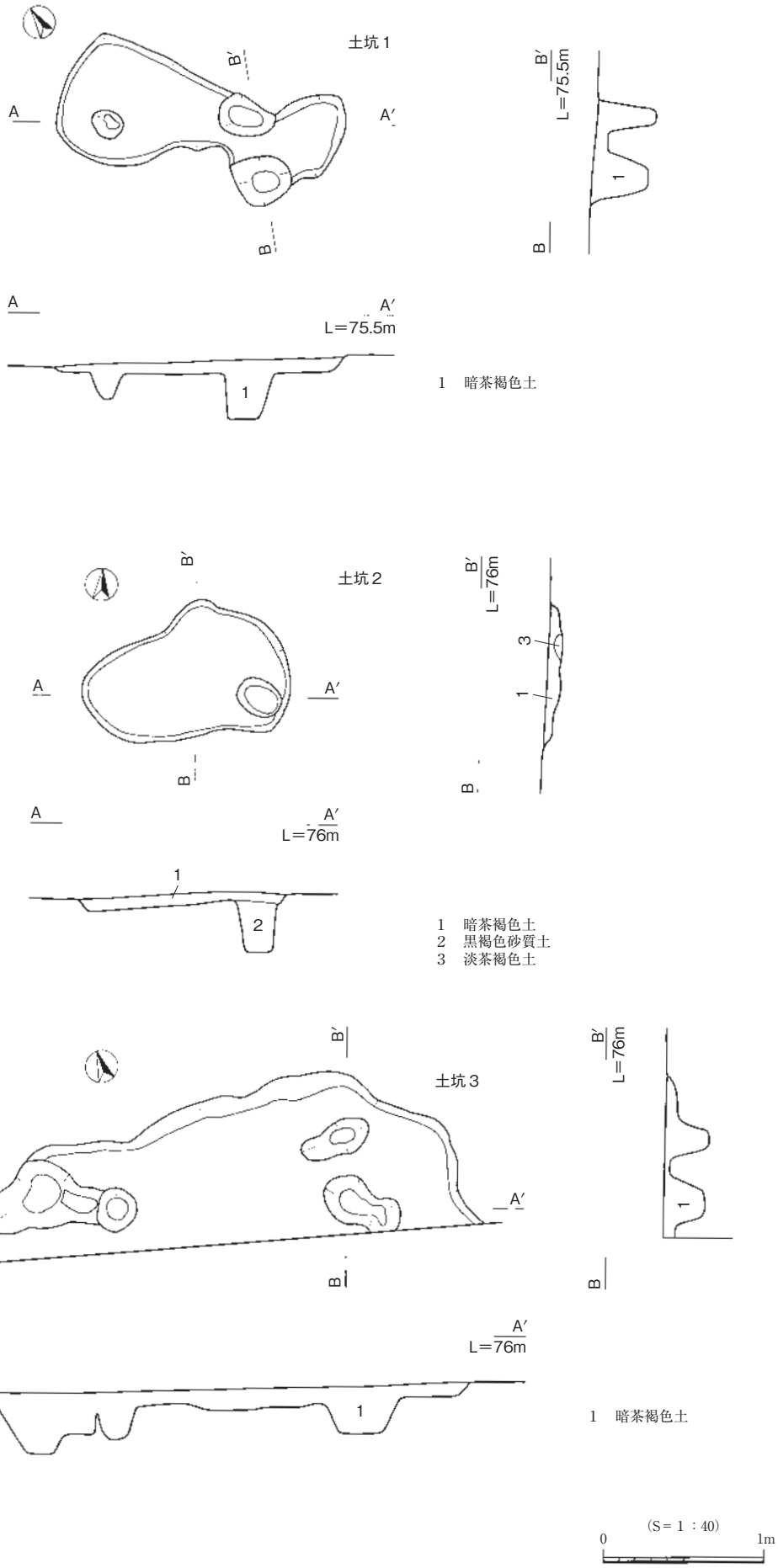
第71図　越城ノ原遺跡２区　第１遺構面（北区）



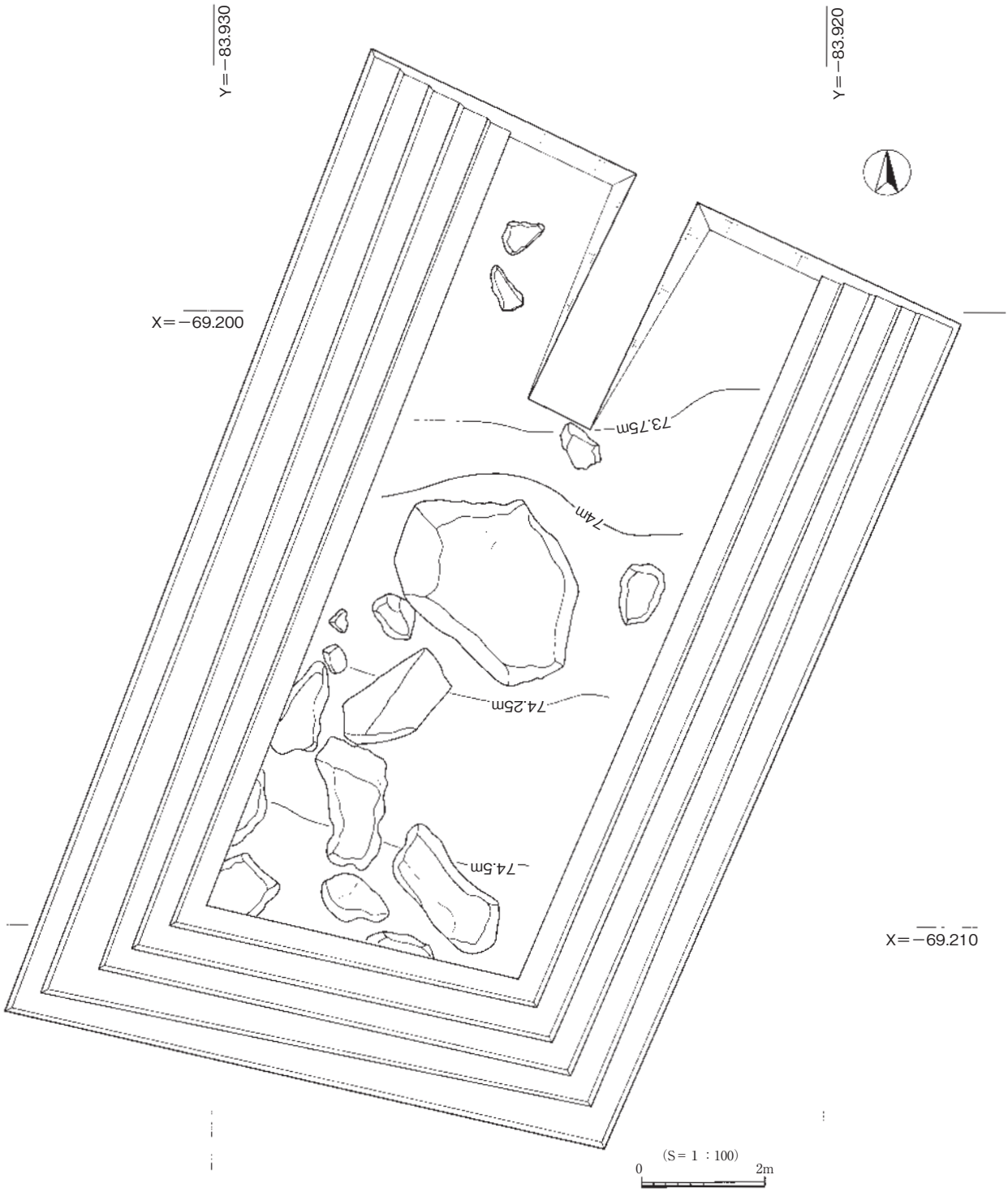
第72図　越城ノ原遺跡２区　第１遺構面（南区）

土坑３（第73図）

調査区の南端にあるため遺構の北側しか検出できなかったが、やや大型の落ち込みと見られる。ピットが何基か切り合っているが、それらの時期差を突き止めるとはできなかった。検出した土坑の規模は、長さ3.4m、幅１m以上、深さ10cmを測る。土坑の埋土は、暗茶褐色土である。土坑内のピットも同様の埋土であることから、土坑と同時期に埋没したものと考えられる。この遺構からは、遺物は出土しなかった。



第73図　越城ノ原遺跡２区　土坑１～３遺構図

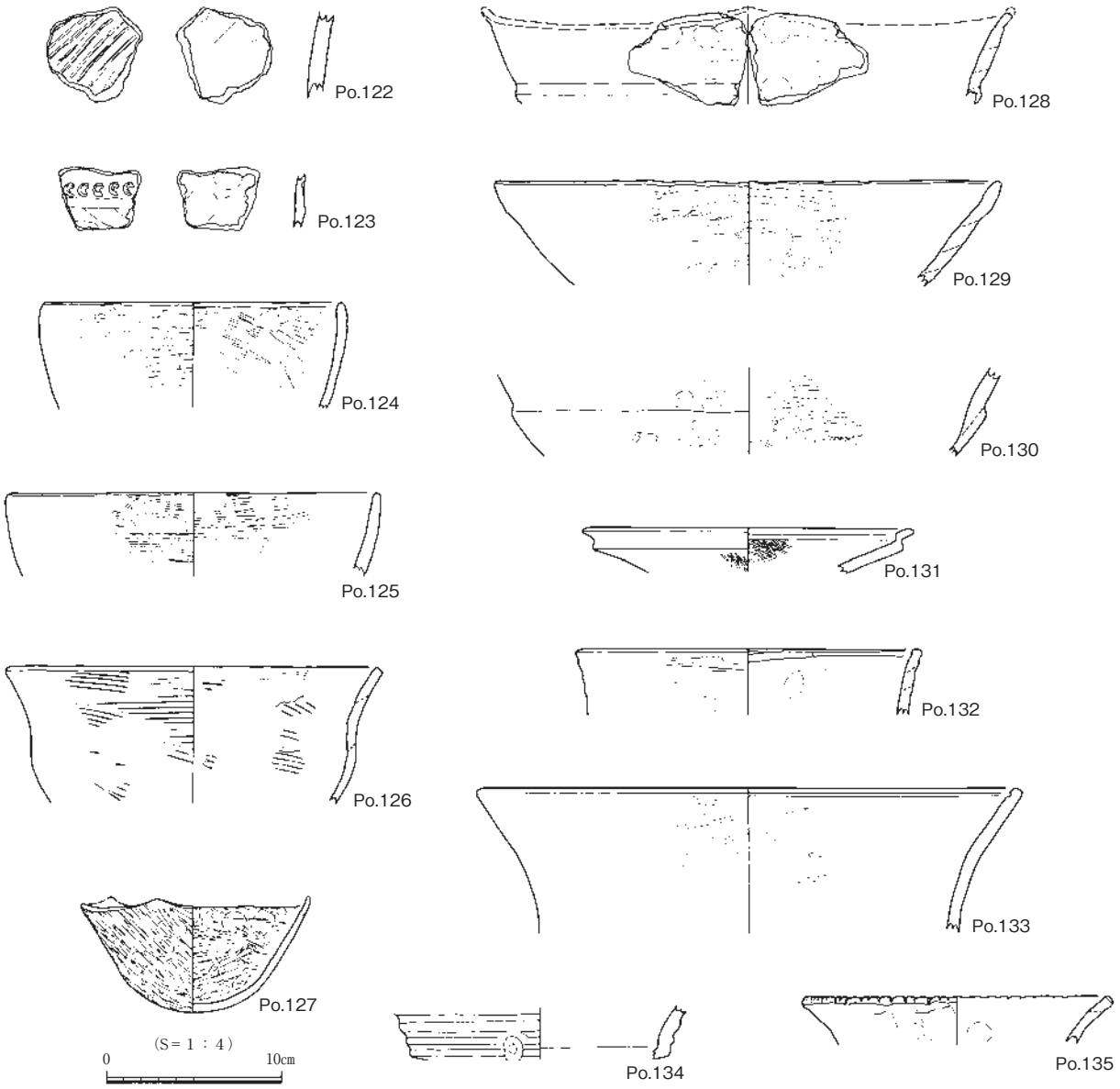


第74図　越城ノ原遺跡２区　第２遺構面

第３節　出土遺物

坂長越城ノ原遺跡２区から出土した遺物は、縄文時代後期から晩期にかけてのものが最も多く、それ以外では弥生時代中期後葉、弥生時代後期後葉から古墳時代前期、奈良時代から平安時代前期のものが見られた。

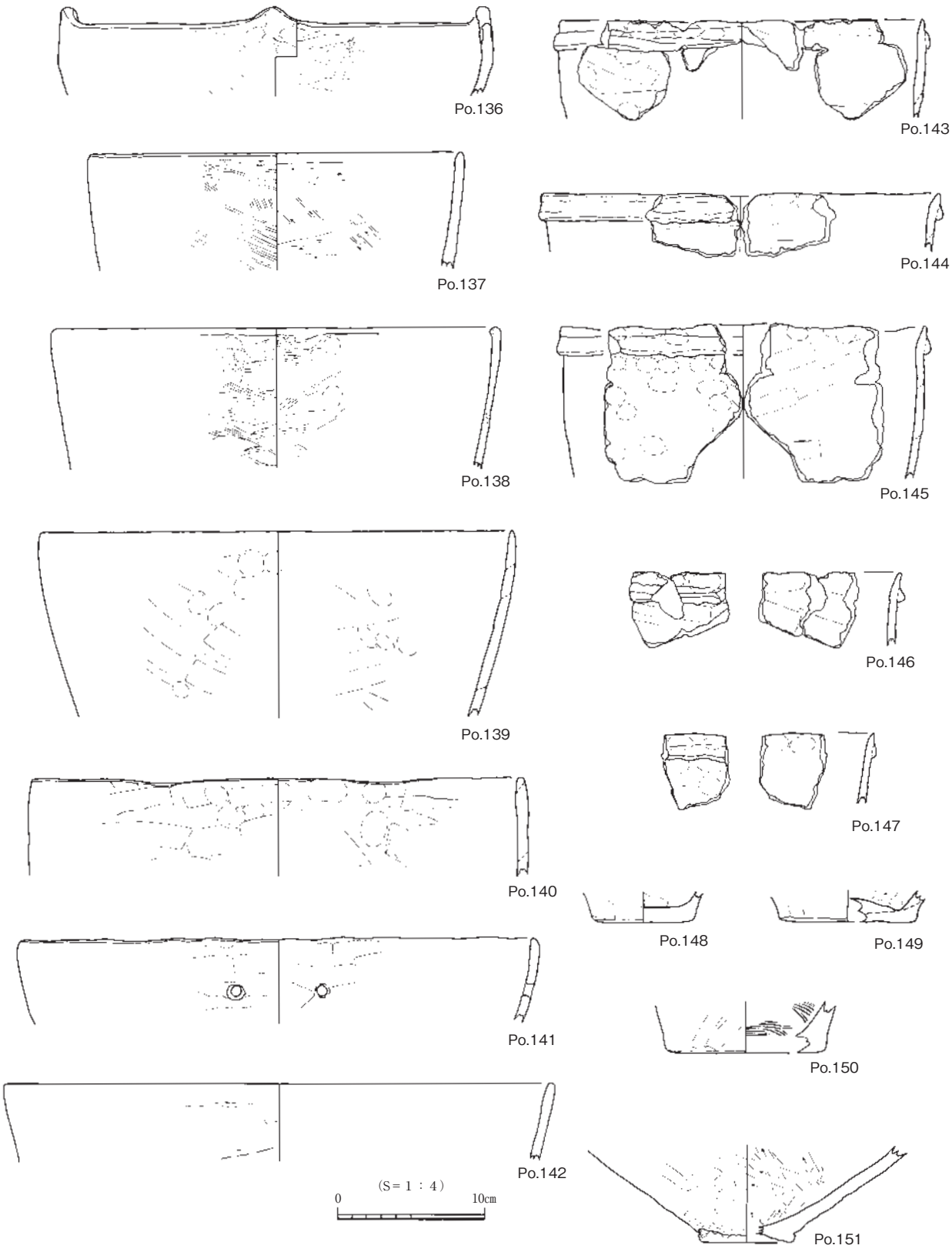
これらの遺物の出土層位は、表土である第１層と第２層からのものが多く、第３層以下からの遺物



第75図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図①

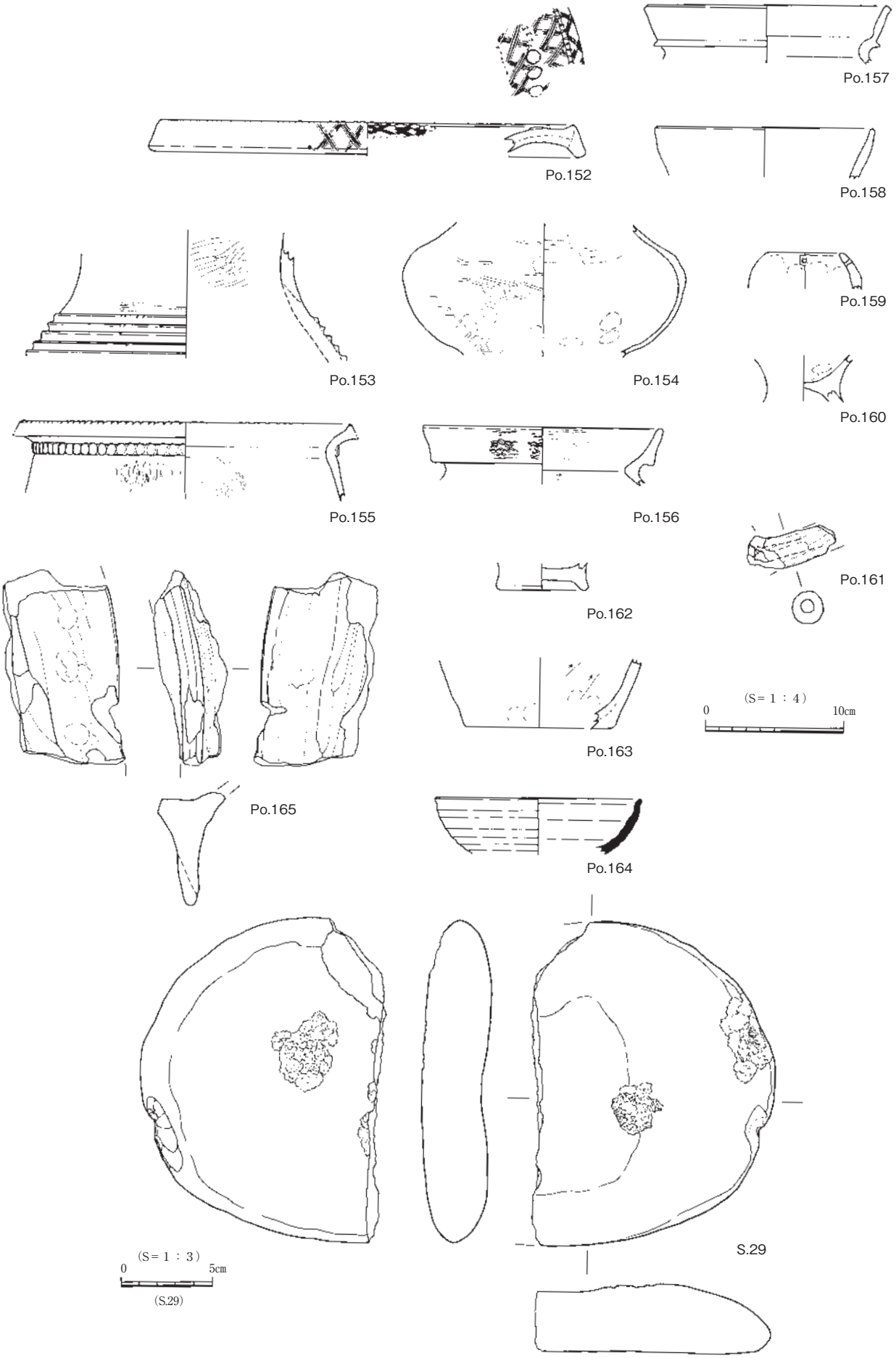
の出土は見られなかった。また、調査区の周囲に廻らせた排水溝の掘削途中に出土した遺物の中で、層位の明らかでないものは排水溝出土と表記した。

Po. 122は、右上がりの斜線紋を施す縄紋土器である。縄紋時代早期の穂谷式土器か。Po. 123は「C」字状の竹管紋を刺突する深鉢の破片。Po. 124・125は、椀形を呈する小型の浅鉢。Po. 126は、口縁が外方に屈曲する浅鉢である。Po. 127は、口径13㎝、高さ6. 7㎝の完形品の浅鉢である。内外面とも粗くハケ調整され、口縁部は波状を呈する。Po. 128は、口縁が大きく外反する浅鉢。Po. 129は、口縁が大きく広がる粗製の浅鉢である。Po. 130は、内外面をミガキ調整した浅鉢。Po. 131は、口縁端部が屈曲する浅鉢。Po. 132・133は、口縁端部内面に１条の沈線が廻る。Po. 134は、３条の沈線に押圧痕が残る浅鉢である。Po. 135は、口縁端部に刺突を施す浅鉢。Po. 136は、口縁が波状を呈する深鉢である。Po. 137～142は、体部の内外面を粗くナデ調整する深鉢で、概ね砲弾型の器形を呈すると見られる。Po. 141は、補修孔が開けられている。Po. 143～147は突帯紋土器である。突帯の貼り付けは

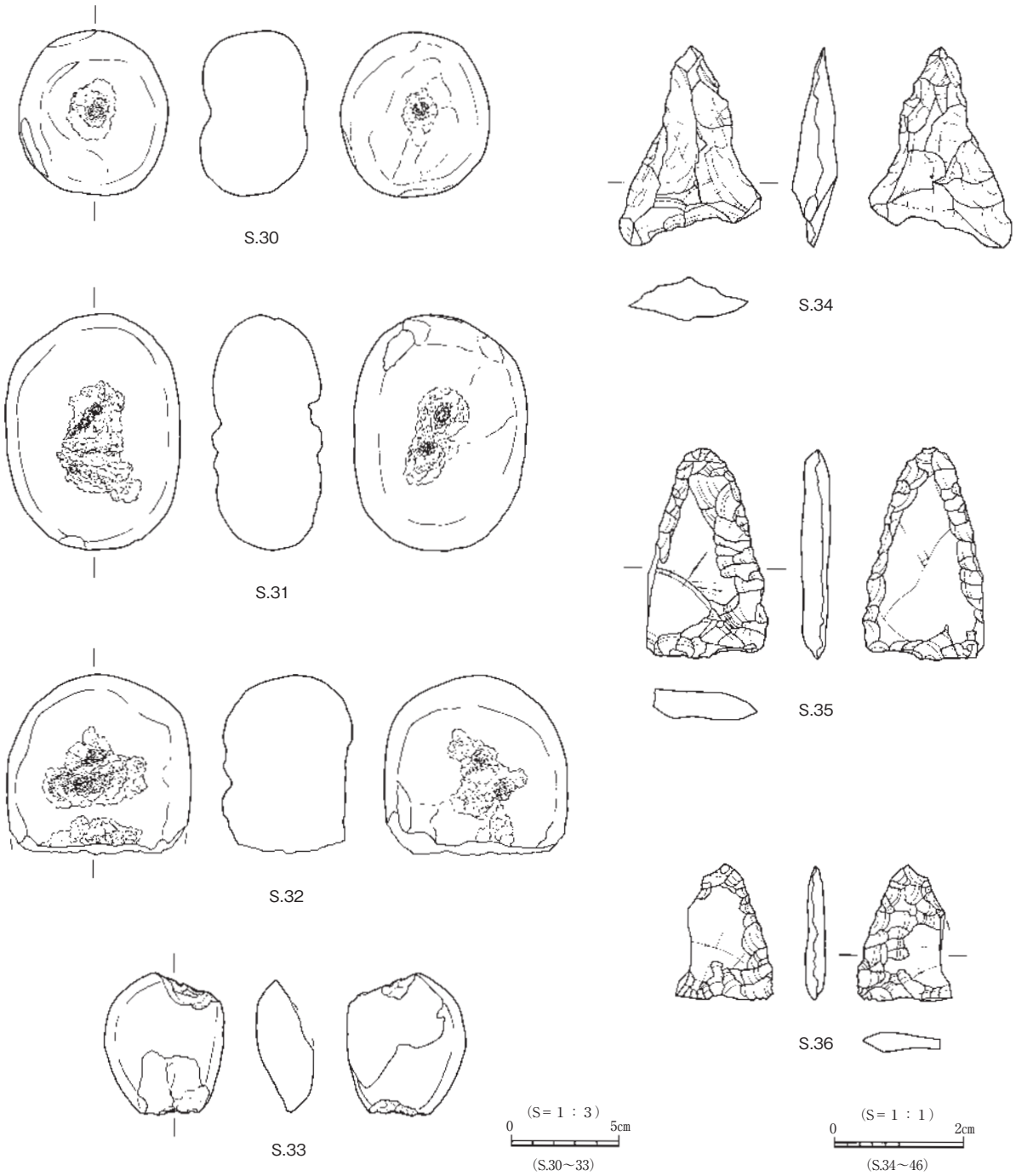


第76図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図②

簡略化しており、突帯に刺突が施されないことから、時期的に後出するものと考えられる。Po. 148～151は、縄紋土器の底部である。Po. 152は、口縁端部が下垂する弥生土器の壺である。表面に斜格子紋を施し、円形浮紋を貼り付けている。Po. 153は、肩部に５条の突帯を貼り付ける壺。Po. 154は、体部がタマネギ形を呈する壺である。Po. 155は、頸部に指頭圧痕貼付突帯を廻らす甕である。Po.



第77図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図③



第78図　越城ノ原遺跡２区　出土遺物図④

156は、口縁部に波状紋を施す弥生土器の甕である。Po. 157は、土師器の甕口縁部片である。Po. 158は、口縁部が緩やかに立ち上がる土師器の甕。Po. 159は小型の無頸壺で、一見すると土笛のようにも見えるが、細片のため断定できない。Po. 160は、内面を赤色塗彩する弥生土器の高坏である。Po. 161は、注口土器の破片と推測される。Po. 162は、高台を持つ土師器坏の底部である。Po. 163は、弥生土器の底部。Po. 164は、須恵器の坏身である。Po. 165は、移動式カマドの焚口部の破片である。

S. 29は、長さ17. 7cm、幅13. 4cm、厚さ3. 7cmの砂岩製の台石である。S. 30～32は、両面を使用する凹石。S. 33は、両端部を加工したデイサイト製の打欠石錘である。S. 34は、サヌカイト製の石鏃、S. 35・36は玉髄製の石鏃である。

第５章　坂長越城ノ原遺跡３区・越敷山70号墳の調査

第１節　調査区の概要と層位（第79・80図）

坂長越城ノ原遺跡３区は、越敷山の山頂から北東へ１㎞の地点に位置している。現地は、タコ足状に細長く伸びる丘陵の先端部にあり、標高96mから107mにかけて遺跡は分布している。平成24年度に伯耆町教育委員会によって実施された試掘調査では、越敷山70号墳の周溝と、さらに古墳の周囲を区画する溝が検出されている。

３区の地形は、標高106m付近に越敷山70号墳が所在しており、そこから北へ向かって丘陵が下っており、更に工事予定地の北側には、なだらかな斜面が広がっていることから、事前に実施した地形測量の際にも、何らかの遺構が存在するものと考えられた。

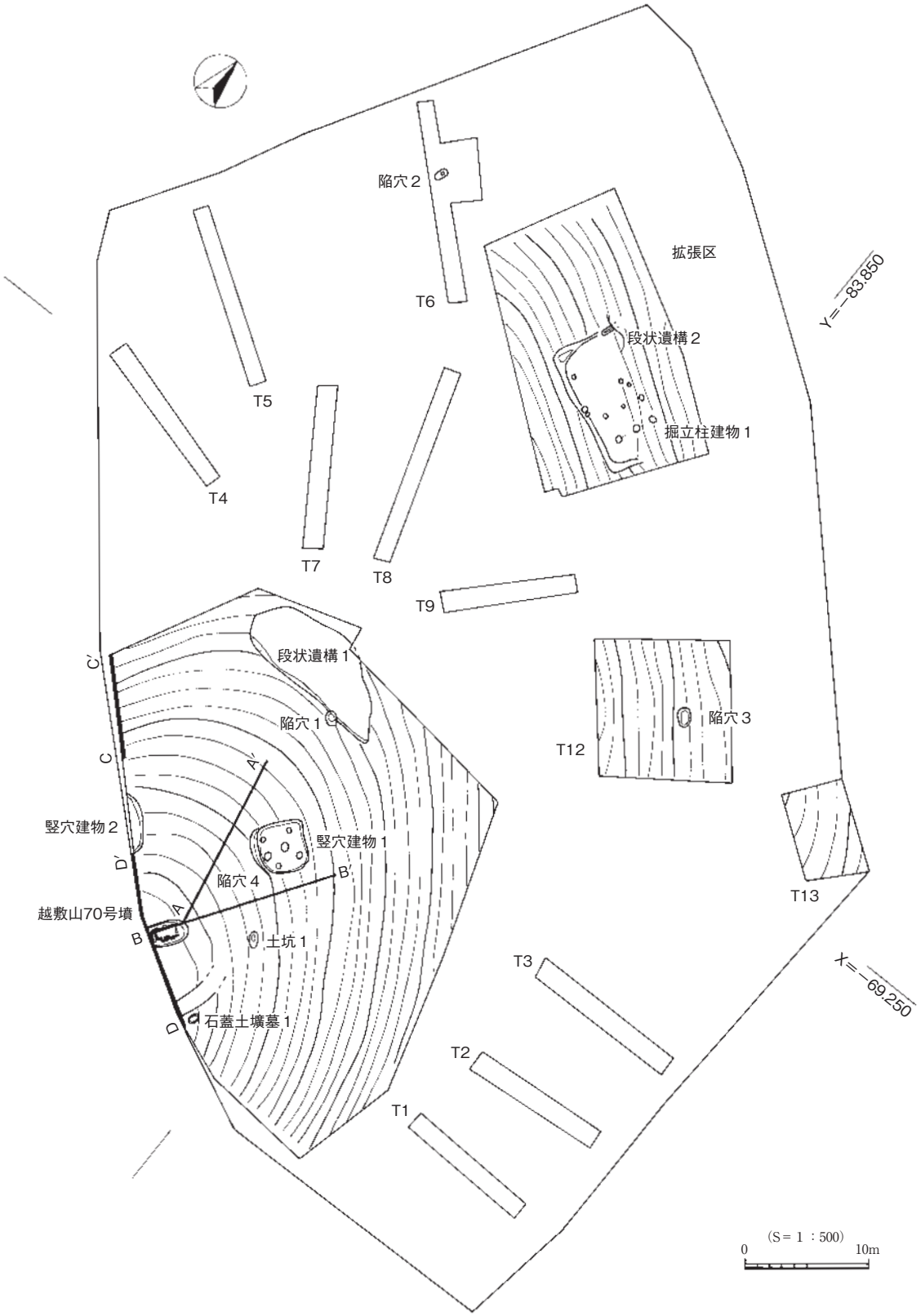
このため、調査地点の周囲に排土置場を設置する予定であったが、調査地以外にも遺構が存在する可能性があることから、工事予定地内に13本の試掘トレンチを設定して、事前に遺構の有無を確認してから排土置場を定めて調査を開始することにした。

現地調査については、表土掘削から遺構検出、排土搬出まですべて人力により行い、排土の移動や運搬には重機を使用した。

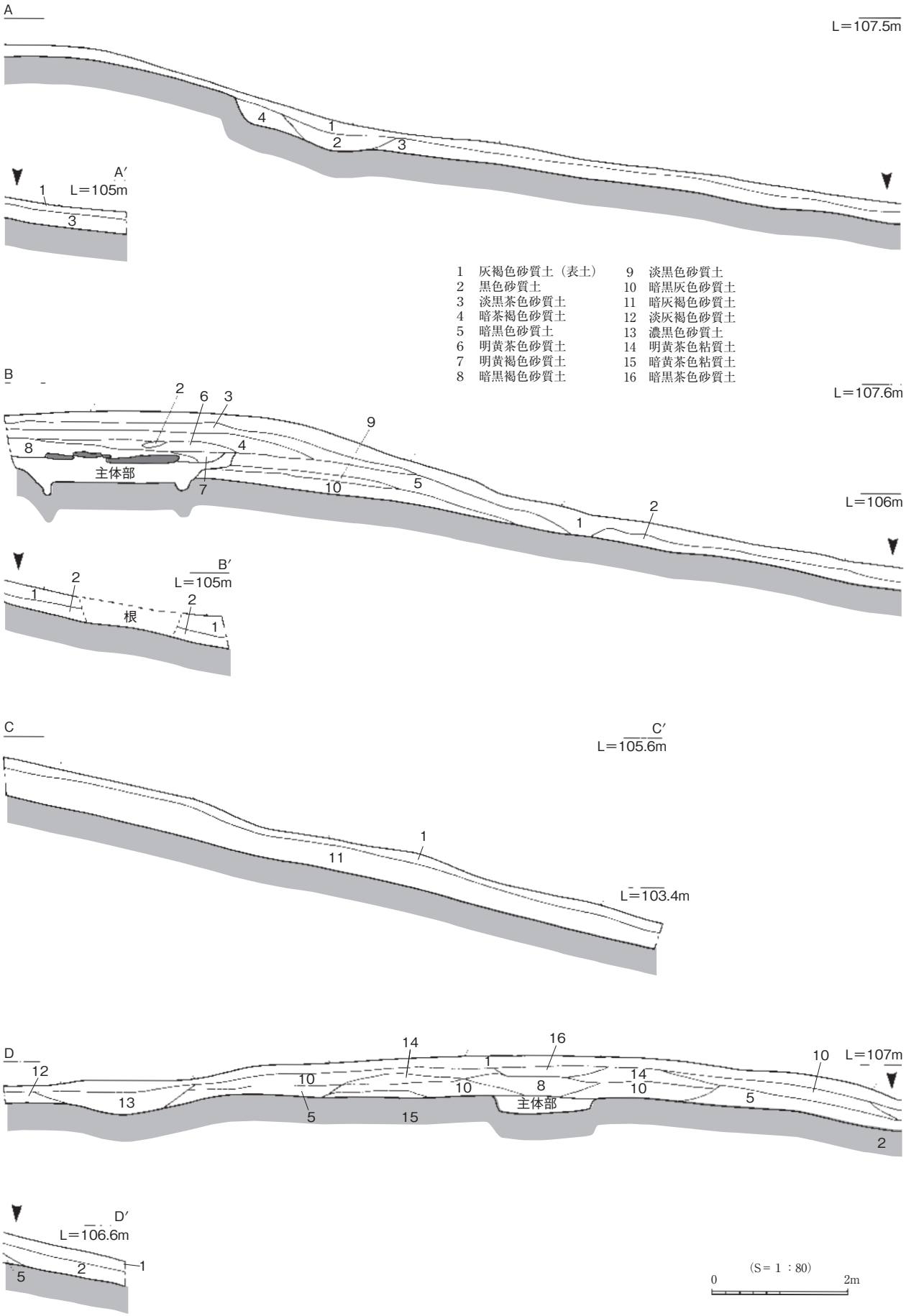
調査区内の堆積は、ほぼ全域にわたって表土の灰褐色砂質土があり、この層の下には黒灰色砂質土が堆積しており、その下は地山のローム層となる。盛土によって構築されている古墳以外の遺構は、このローム層の上面で検出している。

検出した遺構は、古墳１基、石蓋土壙墓１基、竪穴建物２棟、段状遺構２基、掘立柱建物１棟、陥穴４基、性格不明の土坑１基である。出土した遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてのものがほとんどであることから、集落としての存続期間は短かったと推測される。

調査指導については、人骨の調査指導に鳥取大学医学部の井上貴央名誉教授に、竪穴建物から出土した炭化材の樹種同定には、鳥取大学地域学部の中原計准教授にお願いした。



第79図　越城ノ原遺跡３区　全体図



第80図　越城ノ原遺跡３区　断面図

第２節　試掘トレンチの調査（第81～84図）

試掘トレンチは、合計13本設定した。このうち、トレンチ10、11では段状遺構を確認したことから、この範囲を拡張して遺構の全面検出を行った。また、トレンチ６、12において陥穴を確認した。

各トレンチの堆積状況はどれも類似しており、表土の灰褐色砂質土の下に黒灰色砂質土が広がっている。陥穴などの遺構は、この黒灰色砂質土を除去した地山面で検出している。

１トレンチ

越敷山70号墳の東、標高97～101mの地点に設定した、11m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

２トレンチ

越敷山70号墳の東、標高97～100mの地点に設定した、12m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

３トレンチ

越敷山70号墳の東、標高96～99mの地点に設定した、13m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

４トレンチ

越敷山70号墳の北西、標高97～100mの地点に設定した、13m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

５トレンチ

越敷山70号墳の北西、標高95～99mの地点に設定した、15m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

６トレンチ

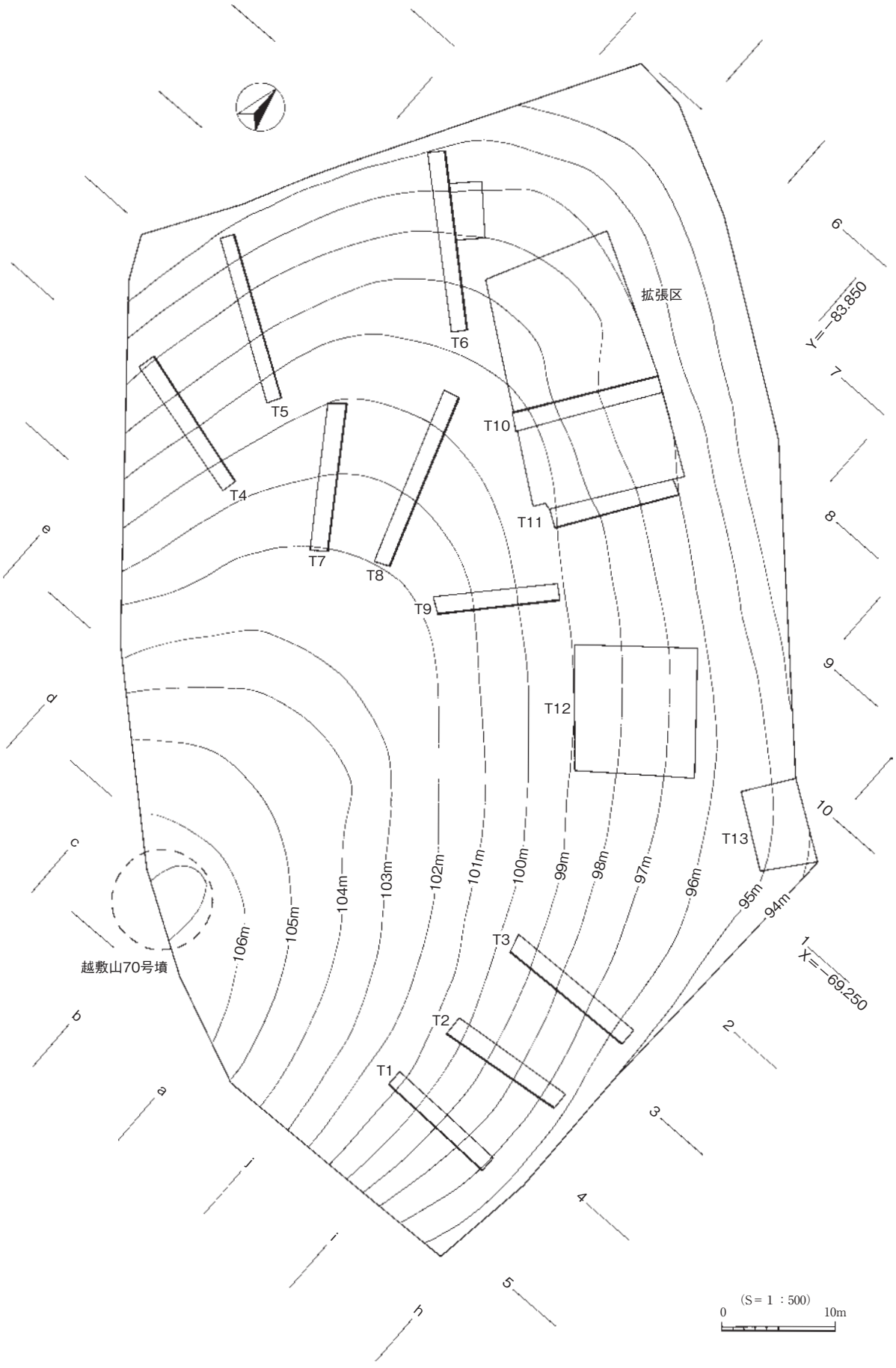
越敷山70号墳の北西、標高95～98mの地点に設定した、16m×1.5mのトレンチである。調査の結果、標高96m地点で陥穴を１基確認した。

７トレンチ

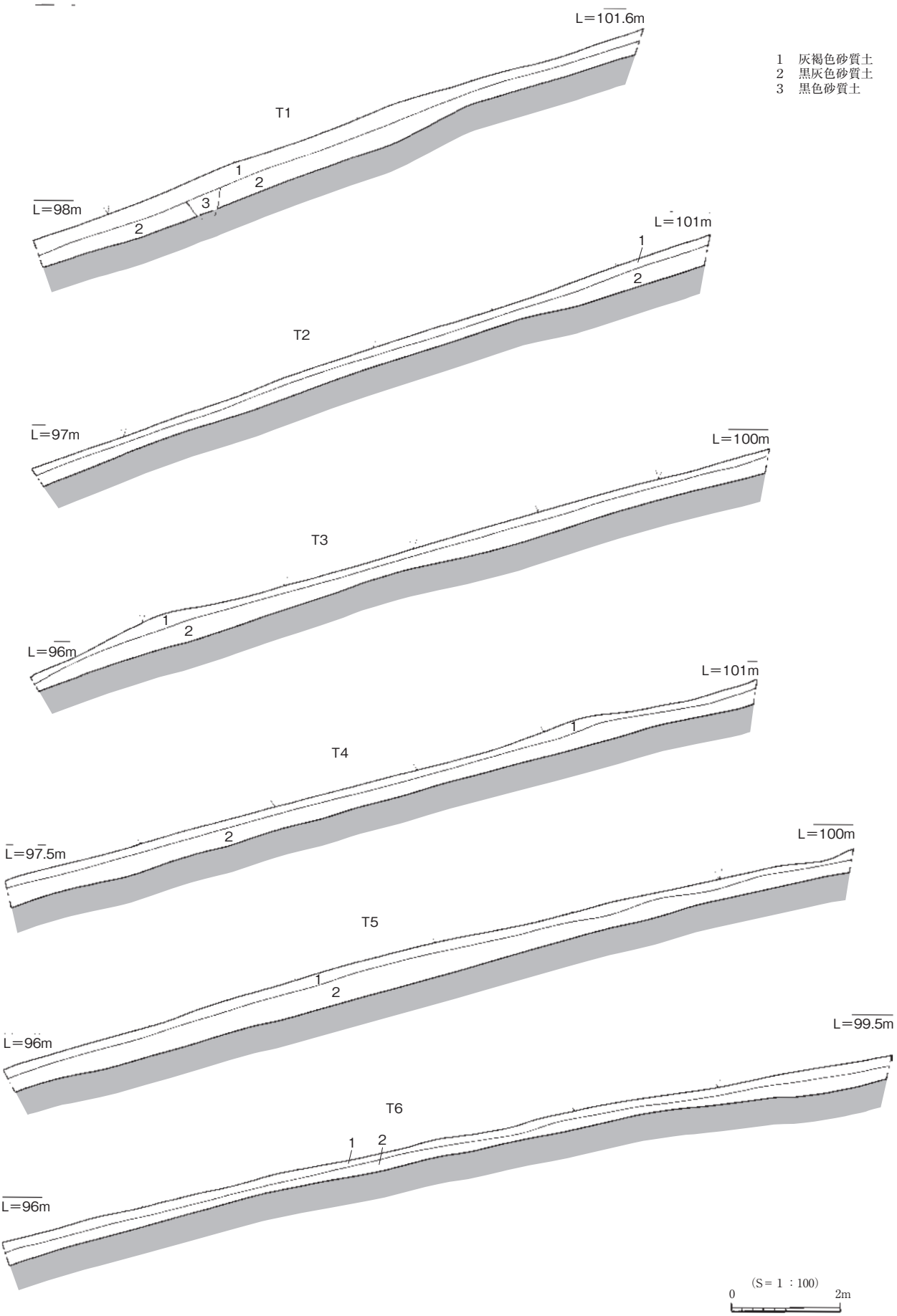
越敷山70号墳の北西、標高100～102mの地点に設定した、13m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

８トレンチ

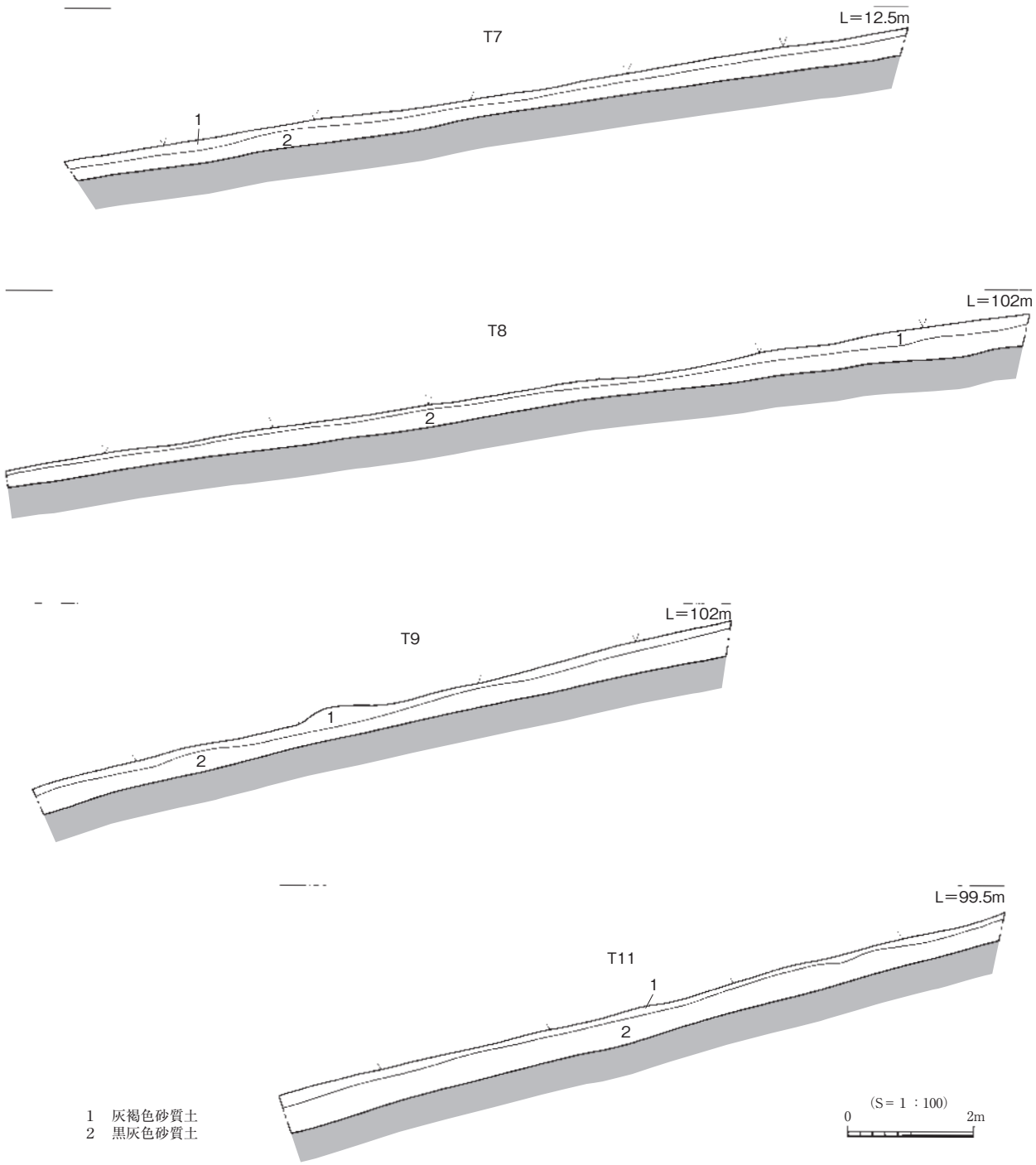
越敷山70号墳の北西、標高100～102mの地点に設定した、16m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。



第81図　越城ノ原遺跡３区　調査前地形図



第82図　越城ノ原遺跡３区　トレンチ断面図①



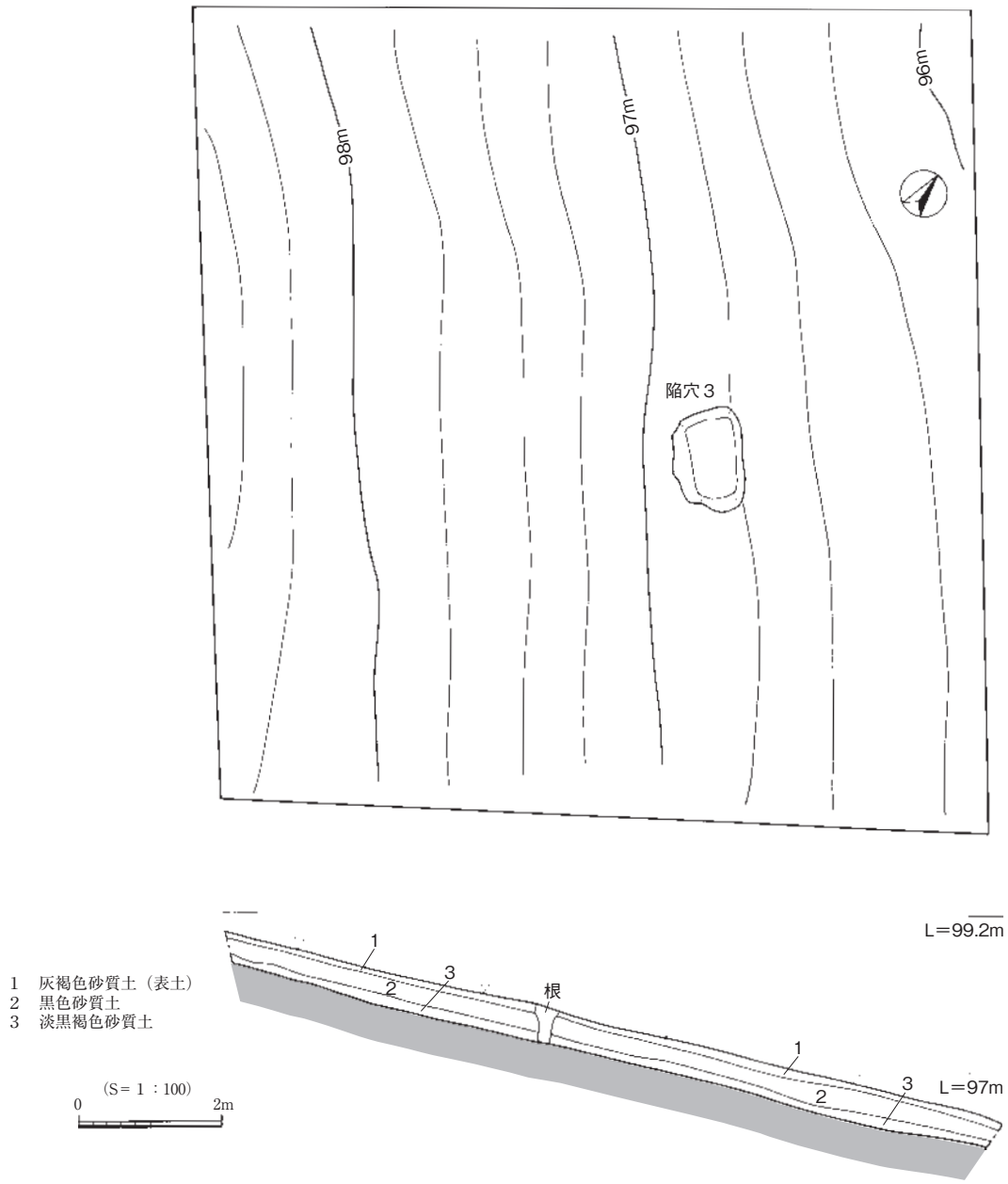
第83図　越城ノ原遺跡３区　トレンチ断面図②

９トレンチ

越敷山70号墳の北、標高99～102mの地点に設定した、11m×1.5mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。

10トレンチ

越敷山70号墳の北、標高96～99mの地点に設定した、13m×1.5mのトレンチである。調査前から、明瞭な平坦地形が観察された地点である。調査の結果、段状遺構と掘立柱建物の存在を確認した。



第84図　越城ノ原遺跡３区　トレンチ12　遺構図

11トレンチ

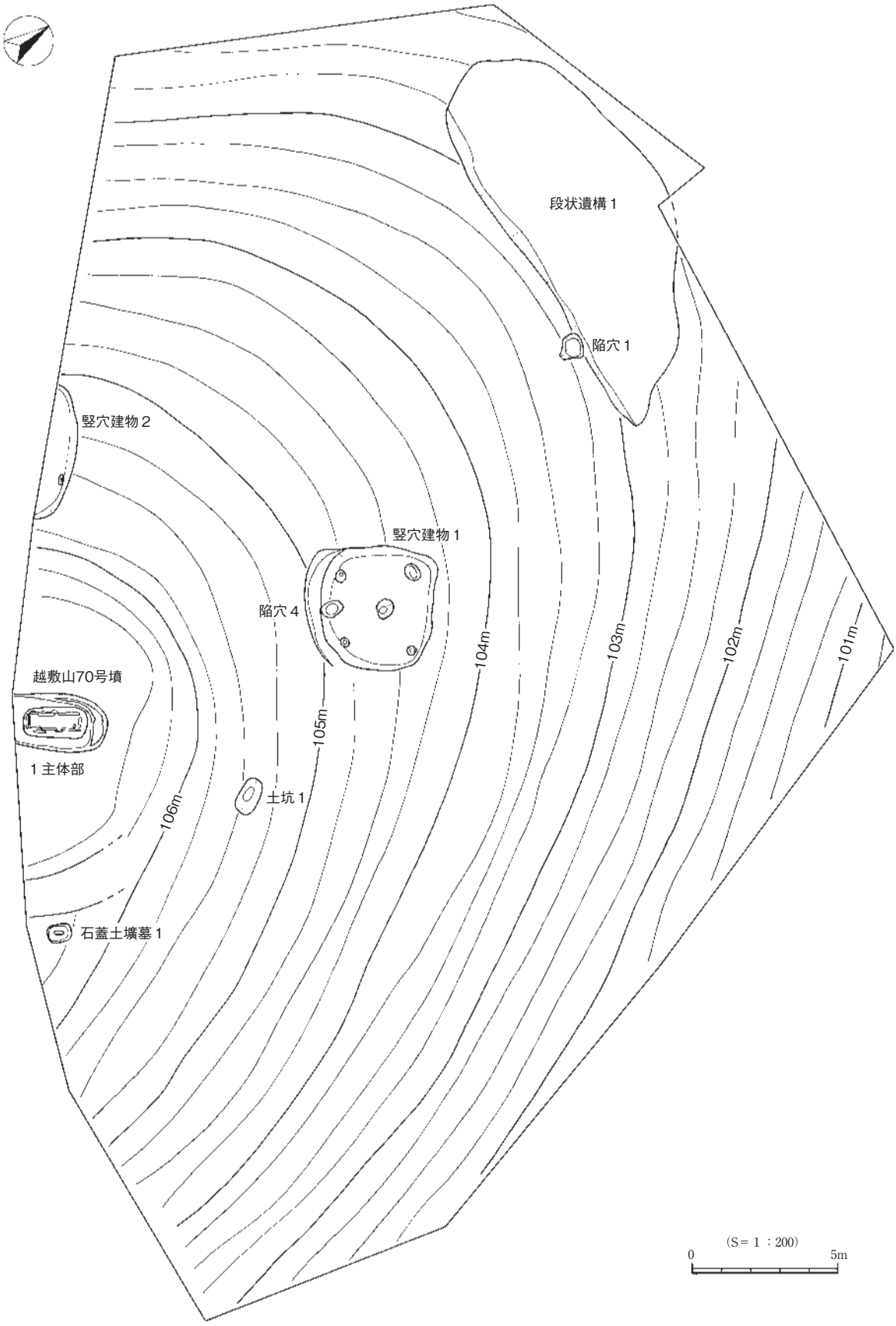
越敷山70号墳の北、標高96～99mの地点に設定した、11m×1.5mのトレンチである。調査の結果、段状遺構を確認した。

12トレンチ

越敷山70号墳の北東、標高96～99mの地点に設定した、11m×11mのトレンチである。調査の結果、トレンチの中央部、標高97m地点から陥穴を１基確認した。

13トレンチ

越敷山70号墳の北東、標高95mの地点に設定した、７m×５mのトレンチである。調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。



第85図　越城ノ原遺跡３区　遺構平面図

第３節　古墳の調査

越敷山70号墳（第85～88図）

越敷山70号墳は、調査区の南端、標高106m付近に位置している。この古墳は、調査前からマウンドが明瞭に残っており、この尾根上に造られた古墳としては最も北側に位置している。工事予定地にかかる範囲は、墳丘の北側半分程度と見られ、残りの墳丘は調査区外に伸びているため、墳丘の全面を調査することはできなかった。

墳丘・周溝　この古墳の墳丘は、地山のローム層の上に黒色系の砂質土を盛り上げて構築されており、東側には周溝が掘削されていた。古墳の形は円墳であり、直径は10mと推測される。墳丘の高さは、１m程度が残存している。周溝は東側にのみ明瞭に残っており、北側と西側では不明瞭となっている。周溝の規模は、幅2.3m、深さ30cmあり、断面は「U」字形を呈する。墳丘の表土や盛土中からは、弥生土器の破片が出土した。

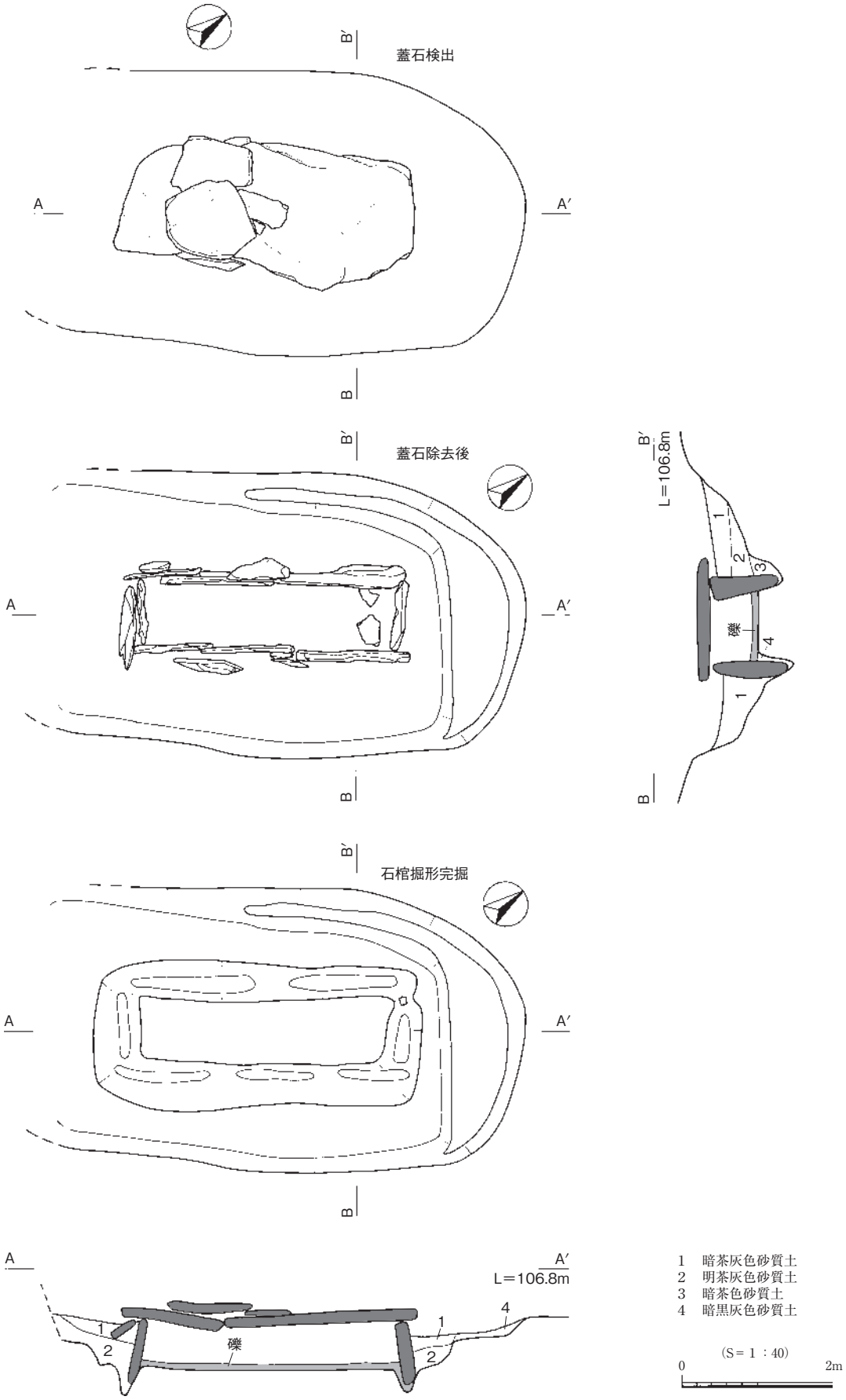
埋葬施設　越敷山70号墳の埋葬施設は、組み合わせ式の石棺が墳丘の中央に位置している。墓壙の規模は、南側が調査区外に伸びるため不明だが、検出した長さ３m、幅は1.9mあり、墓壙の検出面から深さ10cmほど掘り下げた所で石棺の蓋石を検出した。石棺の蓋石は、長さ1.3m、幅90cm、厚さ10cmのものと、長さ70cm、幅80cm、厚さ10cmの二枚の板石を合わせて閉塞しており、合わせ目の上には更に三枚の板石を被せて土砂の侵入を防いでいる。石棺の頭位方向は北東方向を向いており、出土した人骨との関係から、北東枕で埋葬されていることが判明した。

石棺は、六枚の板石を組み合わせて造られており、小口部は「H」字形となっている。石棺の規模は、内法で長さ1.7m、幅40cm、高さ30cmあり、床面には１～５cm程度の円礫が棺内の全面に敷き詰められている。石棺の掘形については、墓壙の底面に石棺を固定するための溝が「ロ」字形に掘られている。

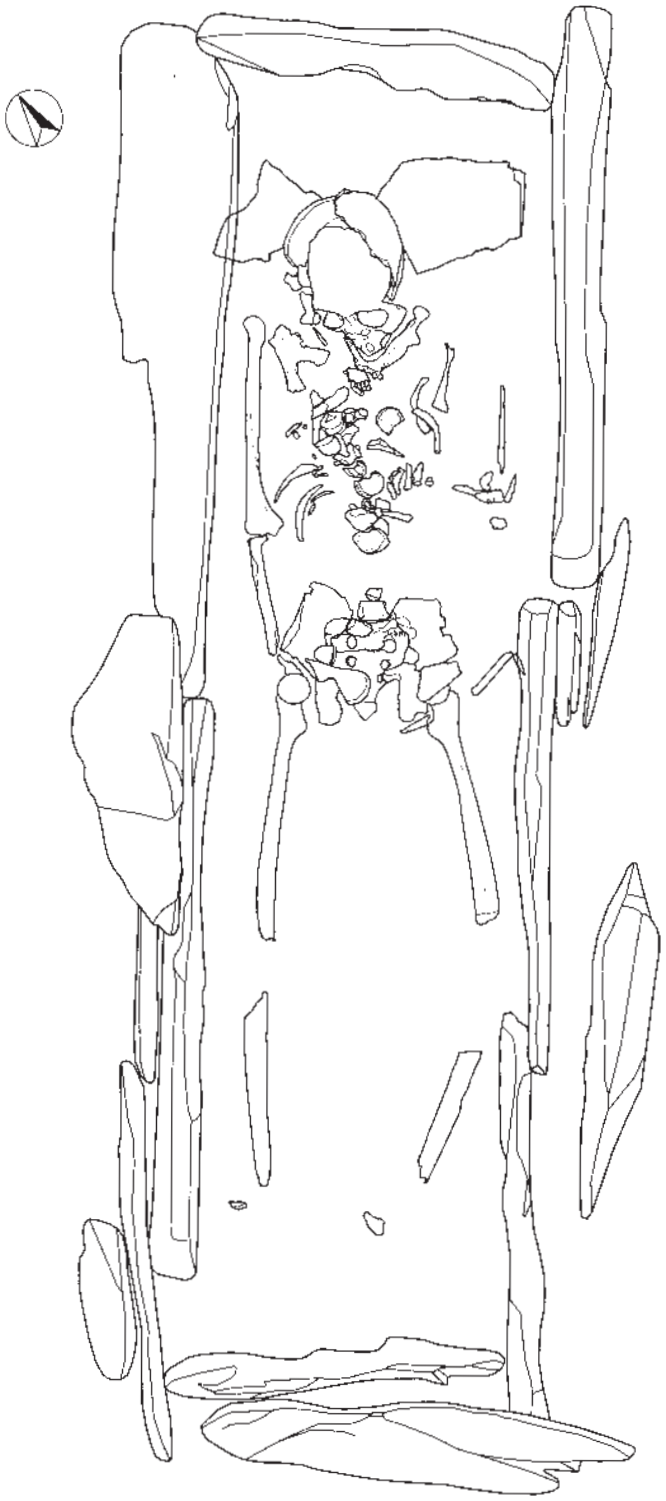
石棺床面の礫上には、蓋石の隙間から侵入した土砂がうっすらと堆積していた。石棺内には、人骨が１体分遺存しており、前頭部には水銀朱が厚く塗布されていた。人骨の頭部の下には、枕石として使われている二枚の板石が置かれているが、石棺内には副葬品は全く見られなかった。

人骨の取り上げについては、石棺の蓋を開ける前に、蓋石の隙間から小型のデジタルカメラで内部を撮影したところ、人骨の一部が写っていたために、石棺の開棺作業時から鳥取大学医学部の井上貴央名誉教授に立ち会って頂き、人骨の取り上げ作業を行った。出土した人骨と石棺については、専門業者に依頼して、レーザー測量を実施した。出土した人骨の詳細や水銀朱についての分析結果は、次年度に刊行する報告書に掲載する予定である。

出土遺物　出土遺物については、古墳の表土や墳丘の盛土中から弥生時代の土器が数点出土したが、この古墳が築造された時期を示すような遺物は出土しなかった。このため、古墳の築造された時期を明瞭にすることはできないが、見つかった石棺は、これまでの越敷山古墳群の発掘調査で出土している石棺と同様の資料であることから古墳時代中期のものと推測する。

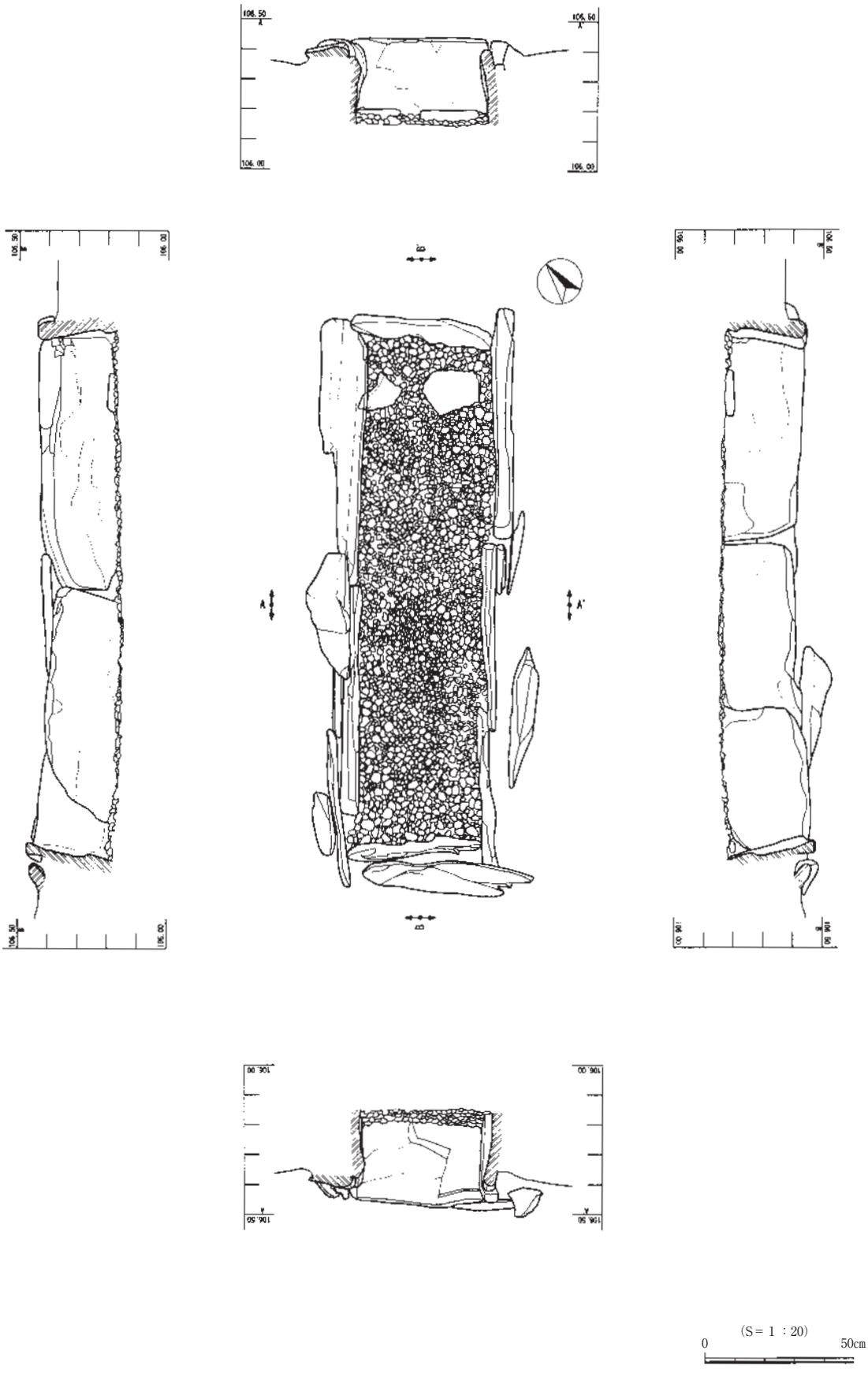


第86図　越敷山70号墳１主体部　遺構図

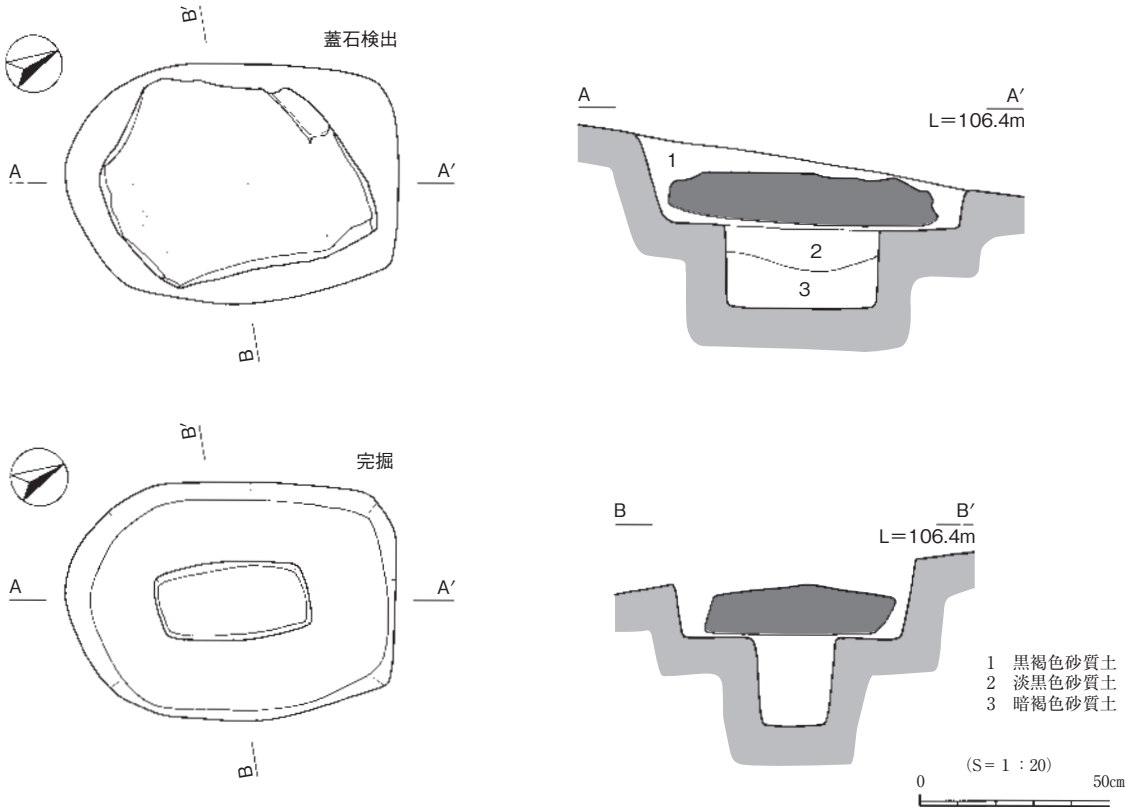


(S＝1：10)
0　20cm

第87図　越敷山70号墳１主体部　人骨図



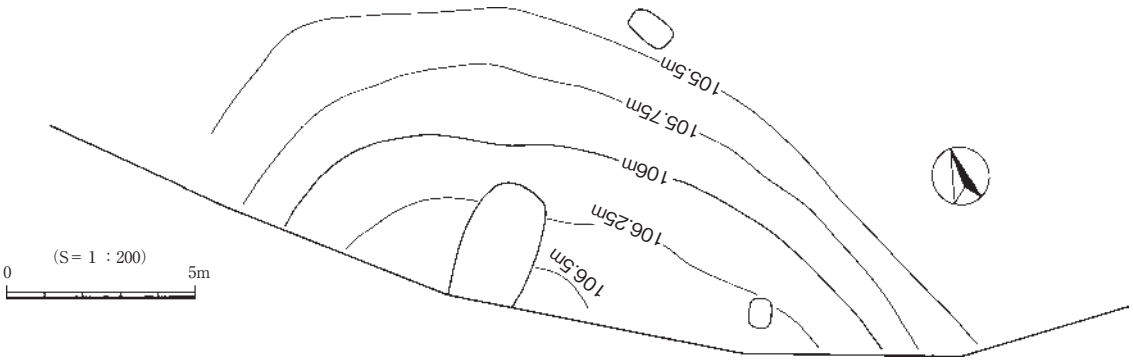
第88図　越敷山70号墳１主体部　石棺図



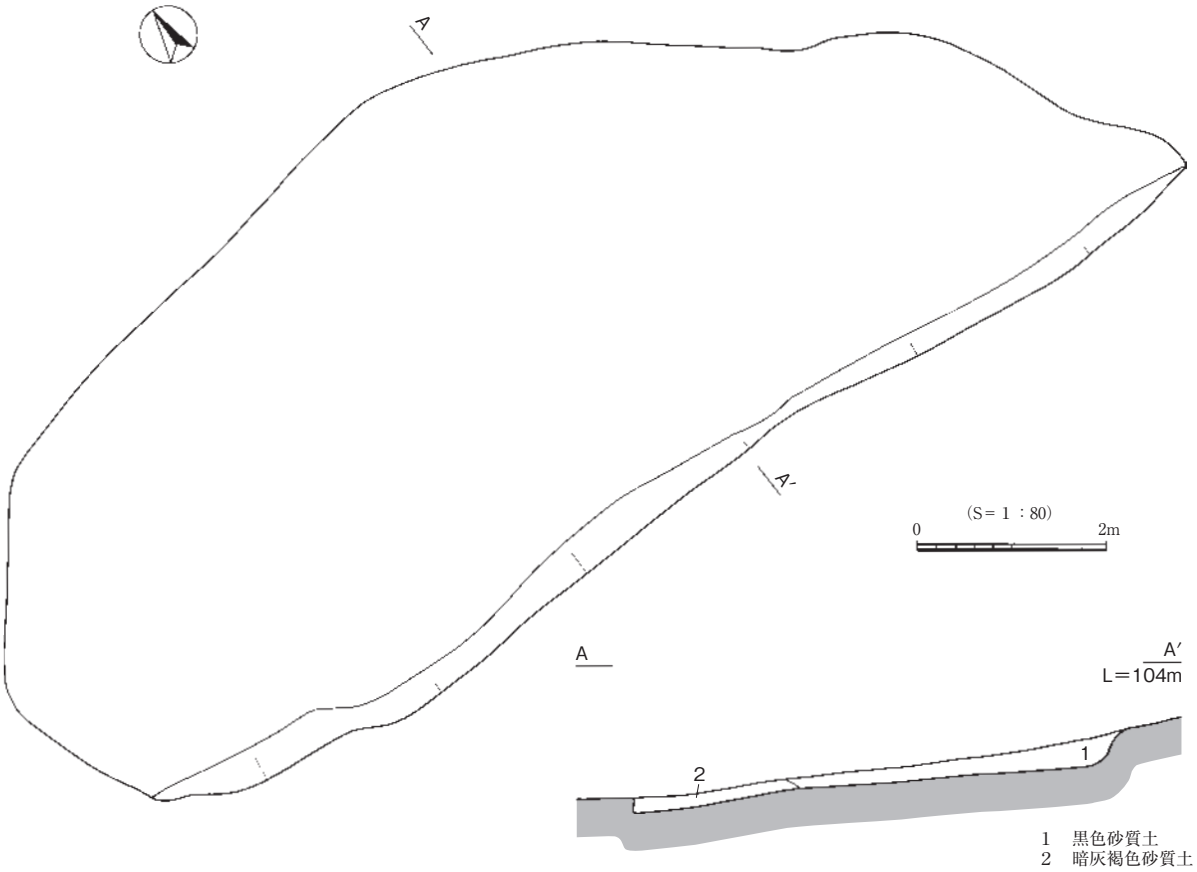
第89図　石蓋土壙墓１　遺構図

石蓋土壙墓１（第89図）

越敷山70号墳の西、周溝部分の外側で検出した埋葬施設である。検出面はややいびつな楕円形を呈しており、長さ88cm、幅60cmを測る。墓壙内には、長さ75cm、幅55cm、厚さ13cmの平石が置かれており、この下に、長さ40cm、幅20cm、深さ25cmの墓壙が掘られている。墓壙内には、締まりのない褐色砂質土が堆積していたが、枕石や副葬品は見られなかった。



第90図　越敷山70号墳　墳丘除去後平面図



第91図　段状遺構１　遺構図

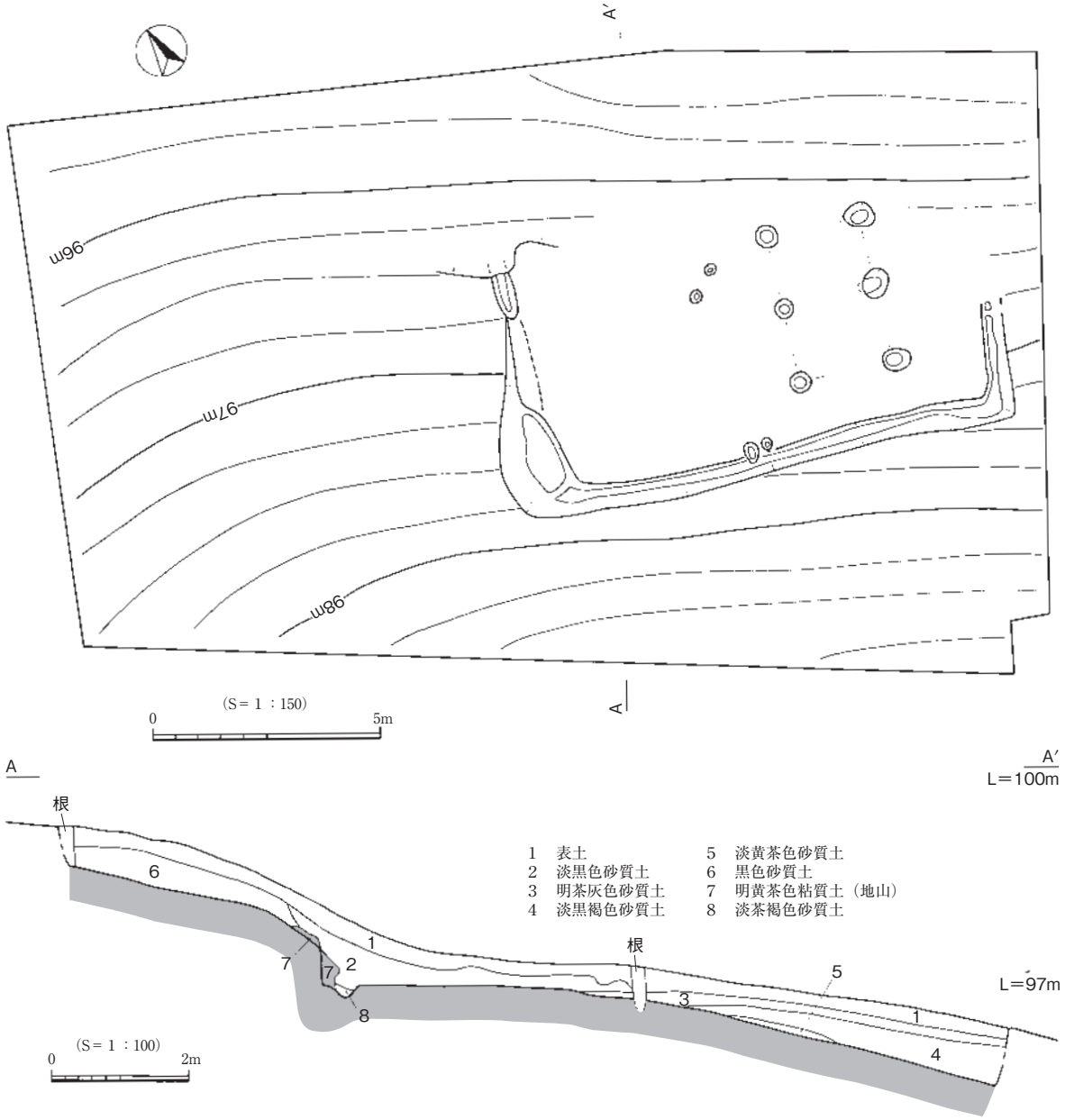
第４節　古墳以外の調査

段状遺構１（第91図）

段状遺構１は、調査区の北側、標高103m付近で検出した平坦地形である。遺構の範囲は、東西方向に12m、南北方向に５mあり、南側は斜面を「L」字形にカットして整形している。また、遺構の南東部では、陥穴１を切っている。

平坦地形の中にはピットなどの遺構は見られなかったが、付近には弥生時代の竪穴建物や越敷山70号墳が存在することから、何らかの作業・儀礼空間として整地されたものと考えられる。

この遺構の埋土からは、遺物が出土しなかったため、時期を特定できないが、周辺の遺構は弥生時代後期後半から古墳時代中期のものに限定されていることから、これらの時期と同様の時期の遺構と考えられる。

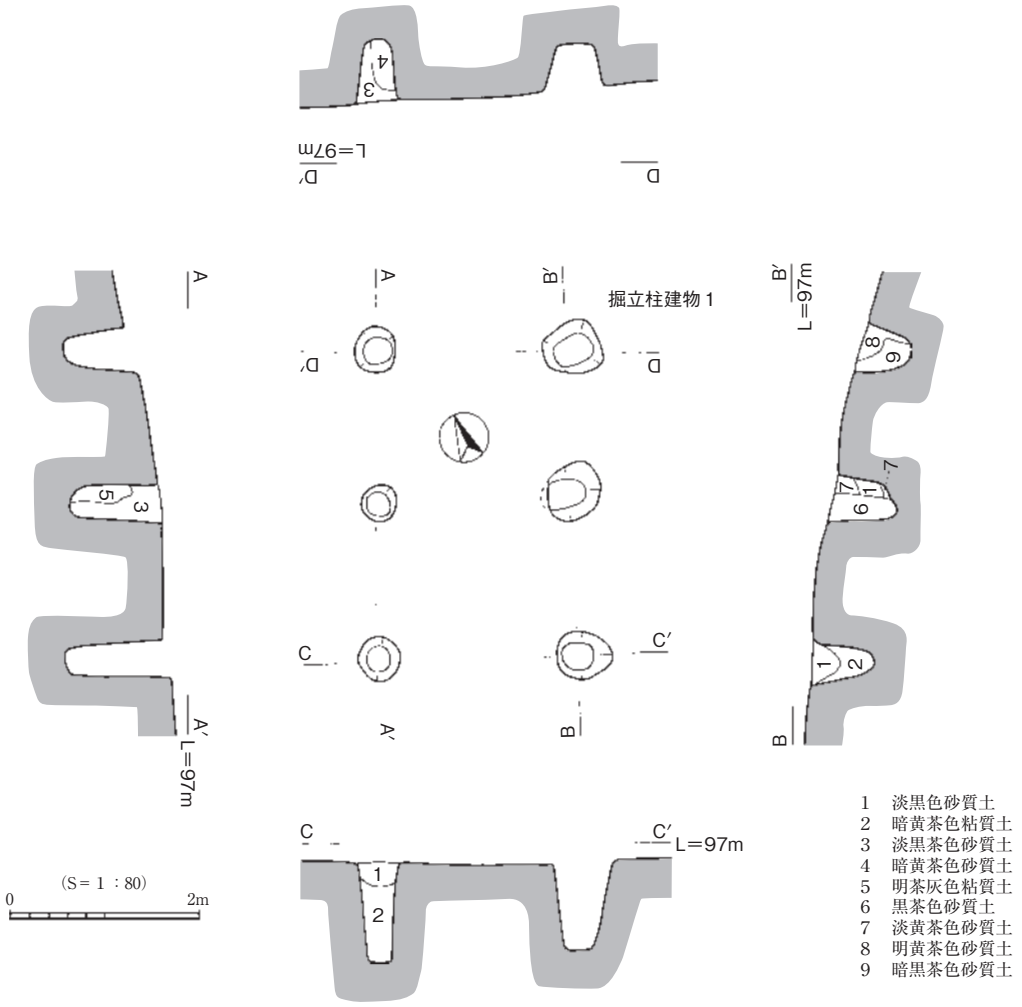


第92図　段状遺構２・掘立柱建物１　遺構図

段状遺構２（第92図）

段状遺構２は、試掘トレンチで検出した平坦地形である。長さ11.5m、幅６mの範囲を「L」字形にカットして形成されている。遺構内には、東側に掘立柱建物１が建てられており、西側は空閑地となっている。遺構の周囲には、幅30cm、深さ20cmの周溝が「コ」字形に廻っているが、西側の一部は、周溝の上に地山と同じロームが堆積していたことから、この部分の壁溝は暗渠状になっていたと推測される。こうした状況から、この場所が段状遺構の出入口であった可能性がある。

この遺構に伴う遺物は、図化できなかったが須恵器の小片が出土していることから、古墳時代中期以降に造られたものと考えられる。



第93図　掘立柱建物１　遺構図

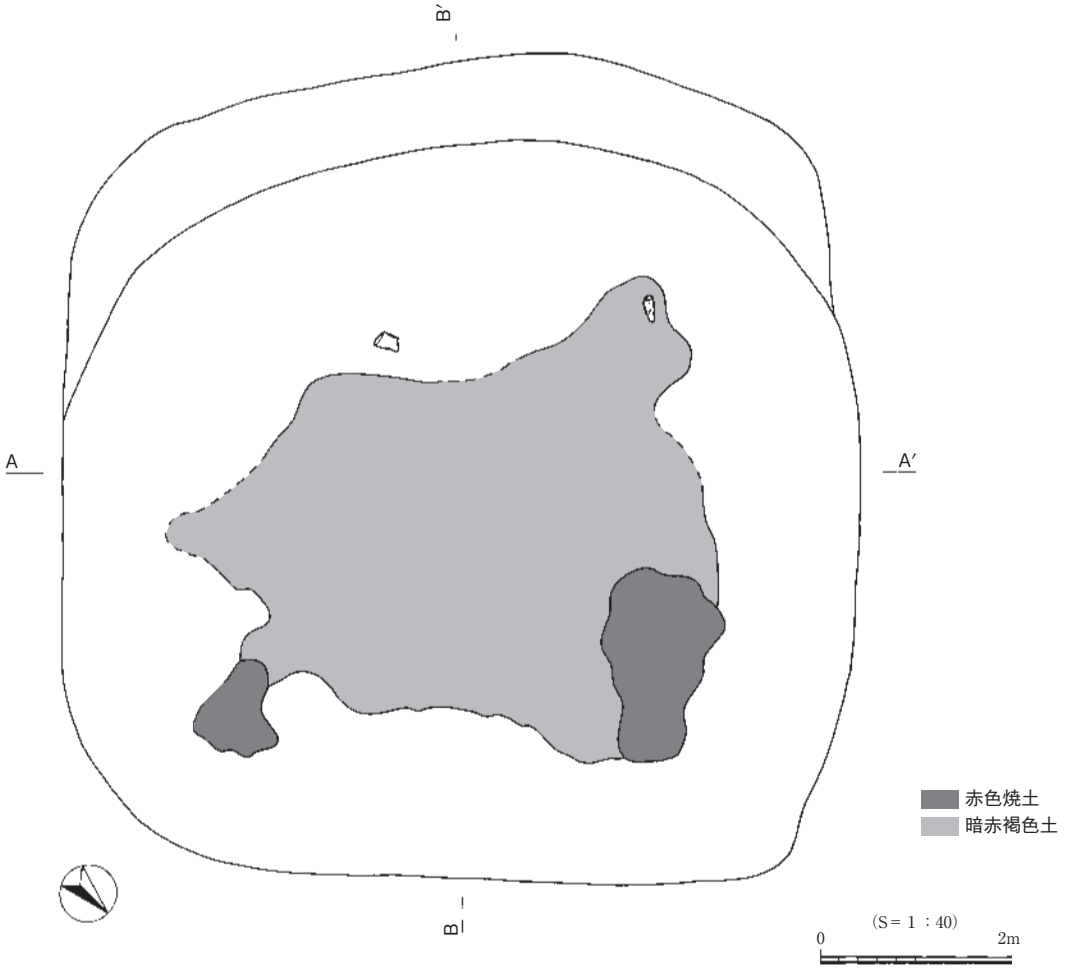
掘立柱建物１（第92・93図）

段状遺構２の内部に建てられた、１間×２間の掘立柱建物である。建てられた場所が段状遺構２の東側に偏っていることから、空閑地を確保するために建物が寄っていると考えられる。

検出した柱穴は、直径40～60㎝、深さ1.1mあり、柱間は桁行が1.2m、梁行が２mある。

この掘立柱建物は、この種の段状遺構に建てられる建物と比較すると、妻側が斜面に向かって建てられていることから、やや異質な印象を受ける。段状遺構の入口が西側に設けられていたことから、平入りの建物であったと考えられる。

この遺構に伴う遺物は、出土しなかったが、段状遺構２の年代から古墳時代中期のものと考えられる。この建物の性格については、出土遺物がほとんど無かったことから、居住用に建てられた建物ではない可能性が指摘される。



第94図　竪穴建物１　焼土分布図

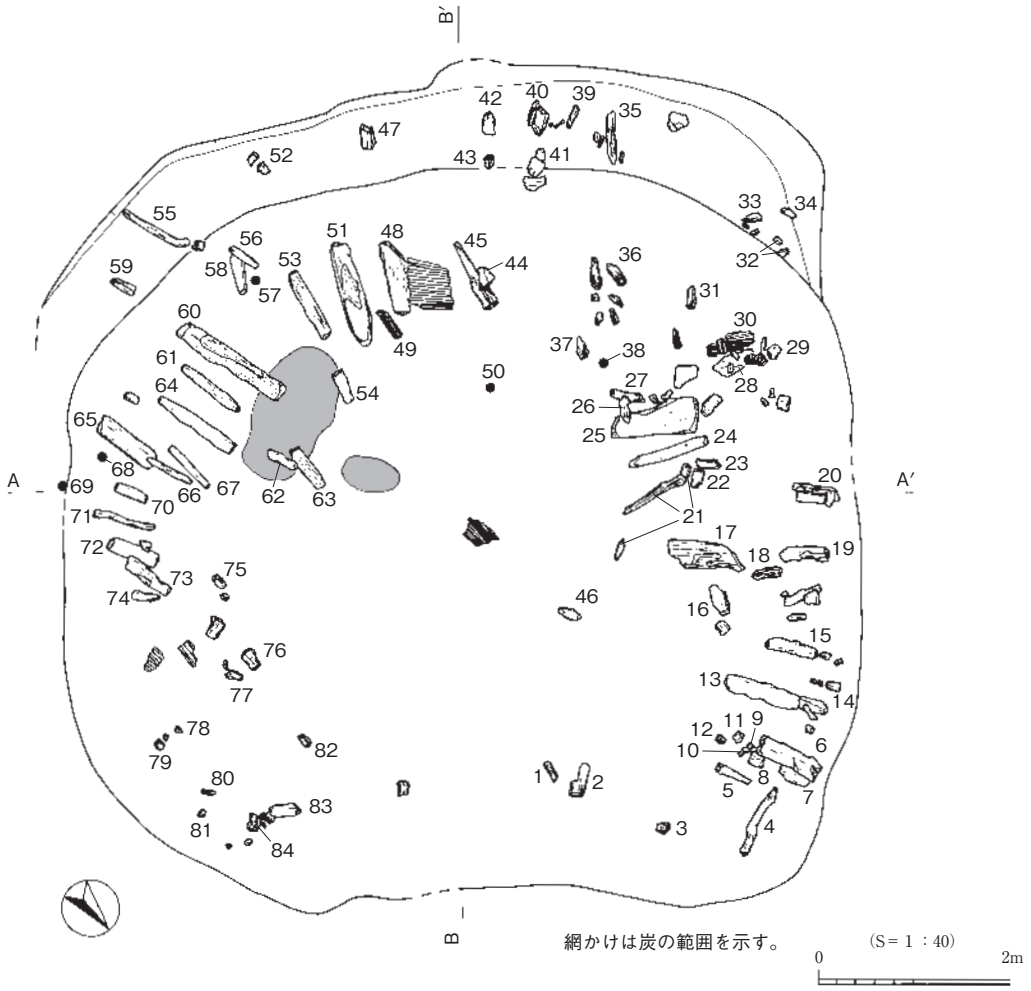
竪穴建物１（第94～96図）

越敷山70号墳の北、５mの地点で検出した竪穴建物である。竪穴の掘形は隅丸方形を呈し、南西部には段を持つ。この遺構は、検出した当初から炭化材や焼土が露出していたため、焼失住居と考えられた。

遺構内の埋土は、上層に黒色の砂質土があり、この層を除去すると、中央部に.2.5m×1.8mの範囲にかけて赤く焼けた焼土が床面から10～20cm浮いた所に広がっている。炭化材については、床面に接したところで放射状に広がった状態で分布している。また、南西部の段にもいくつか分布していることから、この部分も建物の内部に含まれていたと考えられる。炭化した木材については、鳥取大学地域学部の中原計准教授と、学生の栗田結衣氏に樹種同定を実施して頂いた。その結果を見ると、広葉樹のクリ類の出現率が高いことが判明している。今回の調査では花粉分析を実施していないためはっきりしないが、使用された木材の樹種は、周辺の植生環境をある程度反映していると考えられる。

建物の構造については、四本の柱で建物が支えられており、中央には大型の土坑が掘られている。そして、建物の周囲には幅10cm、深さ５cmの壁溝が廻っている。遺構の寸法については、柱穴が最大で長径60cm、短径30cm程度で、深さは30～60cmとやや幅がある。中央ピットは長径70cm、短径50cm程度の楕円形で、深さは30cmである。建物の南西部では、陥穴４が切り合っている。

出土遺物については、埋土中から土師器の甕口縁部（Po. 166）が出土している。

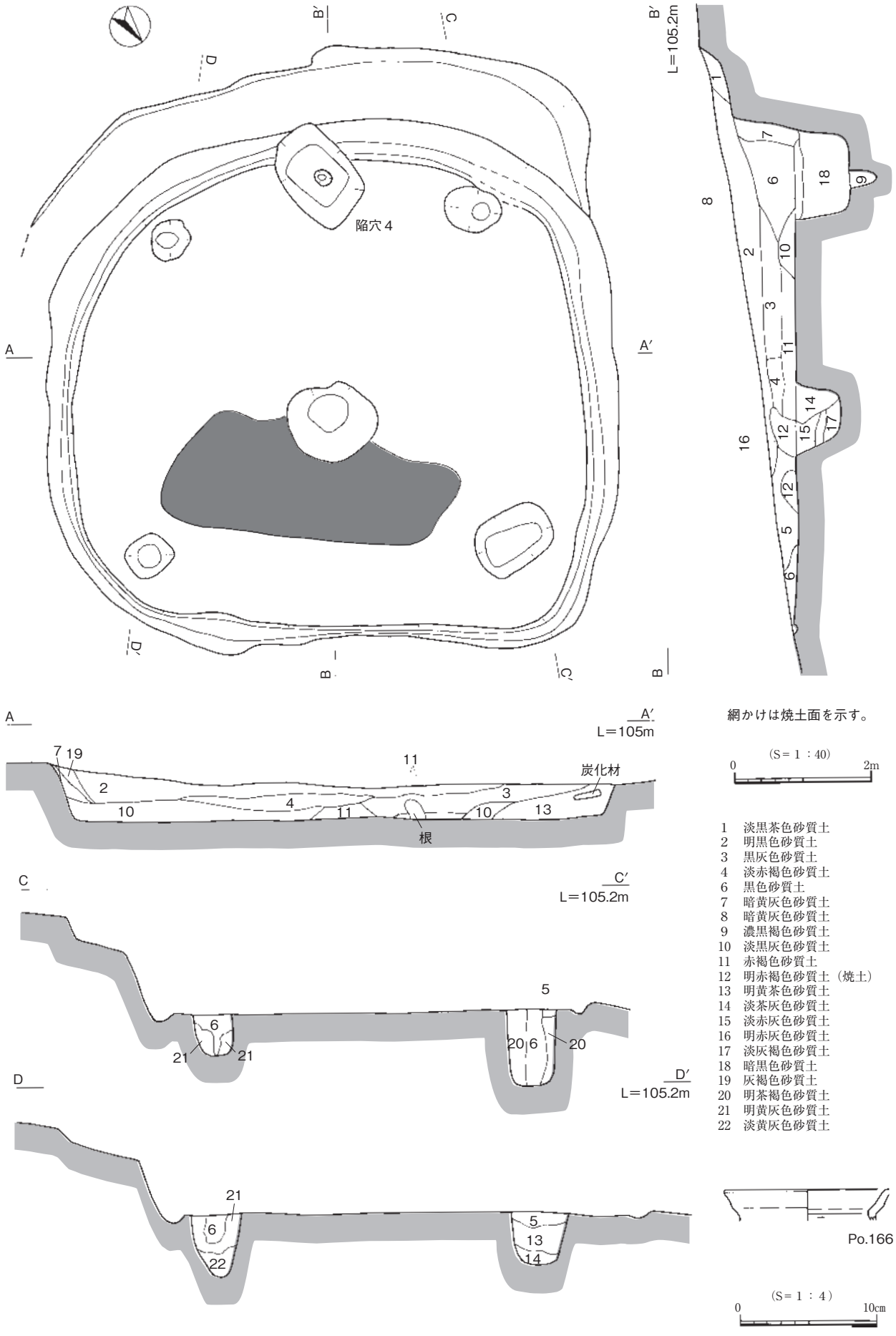


第95図　竪穴建物１　炭化材分布図

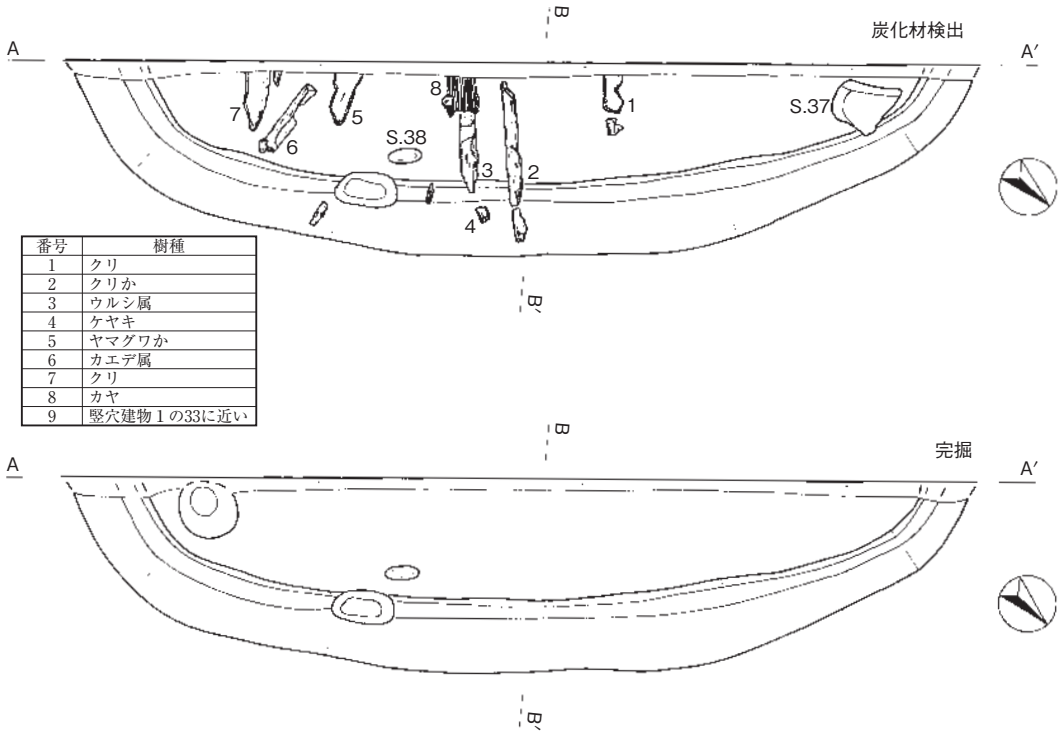
番号	樹　　種
1	カヤ
2	クリ
3	シイノキ属
4	ヤナギ属か
5	シイノキ属
6	クリ
7	シイノキ属
8	クリ
9	クリ
10	シイノキ属
11	シイノキ属
12	クリ
13	シイノキ属か
14	散孔材 a
15	散孔材 a に類似
16	散孔材 a に類似
17	クリ
18	クリ
19	シイノキ属（13に類似）
20	散孔材 a 、ヤマグワ
21	散孔材 a 、ウルシ属
22	コナラ亜属
23	カエデか（散孔材 c ）
24	散孔材 a
25	クリ
26	散孔材 a
27	クリ
28	クリ

番号	樹　　種
29	クリ
30	散孔材 c
31	ムクノキか
32	クリか
33	クリ
34	不明
35	クリ
36	クリ
37	クリ
38	散孔材 c 、散孔材 a 、クリ
39	クリ
40	クリ
41	クリ
42	カヤ
43	クリ
44	クリ
45	散孔材 d
46	エゴノキ属
47	クリか
48	クリ
49	マツ属
50	散孔材 a
51	散孔材 b
52	散孔材 b
53	散孔材 c
54	ブナ
55	クリ
56	クリ

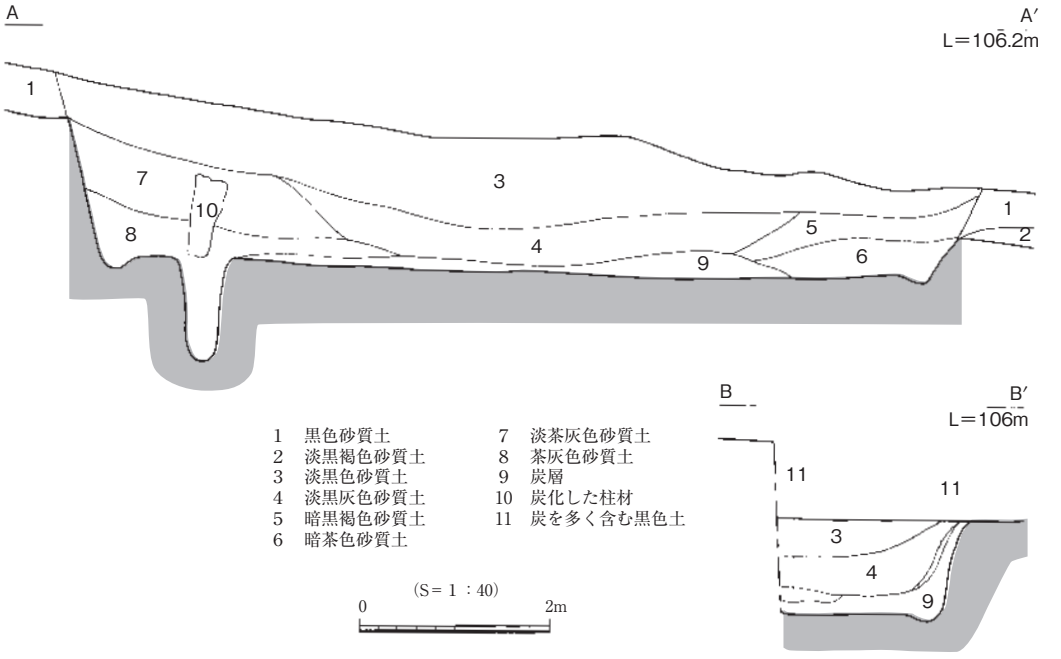
番号	樹　　種
57	散孔材 a
58	クリか
59	散孔材 d 、サクラ属
60	ウルシ属
61	クリと散孔材 a
62	クリ
63	ケヤキ
64	シイノキ属
65	クリ
66	クリ
67	シイノキ属
68	クリ
69	クリ
70	クリ
71	マツ属
72	クリ
73	アカガシ
74	シイノキ属
75	クリ
76	シイノキ属か
77	散孔材 f
78	散孔材 a
79	クリ
80	クリ
81	散孔材 a 、クリ
82	クリ
83	クリか
84	クリ



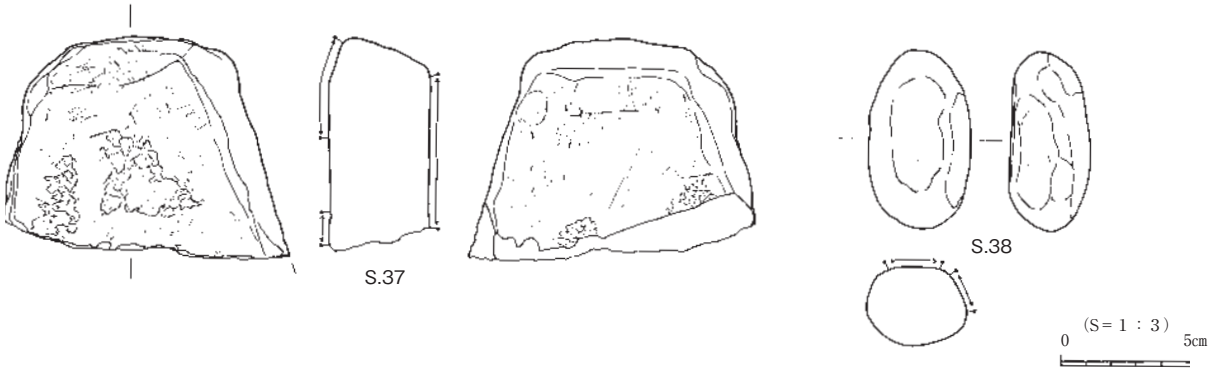
第96図　竪穴建物１・陥穴４　遺構・遺物図



番号	樹種
1	クリ
2	クリか
3	ウルシ属
4	ケヤキ
5	ヤマグワか
6	カエデ属
7	クリ
8	カヤ
9	竪穴建物１の33に近い



1　黒色砂質土
2　淡黒褐色砂質土
3　淡黒色砂質土
4　淡黒灰色砂質土
5　暗黒褐色砂質土
6　暗茶色砂質土
7　淡茶灰色砂質土
8　茶灰色砂質土
9　炭層
10　炭化した柱材
11　炭を多く含む黒色土

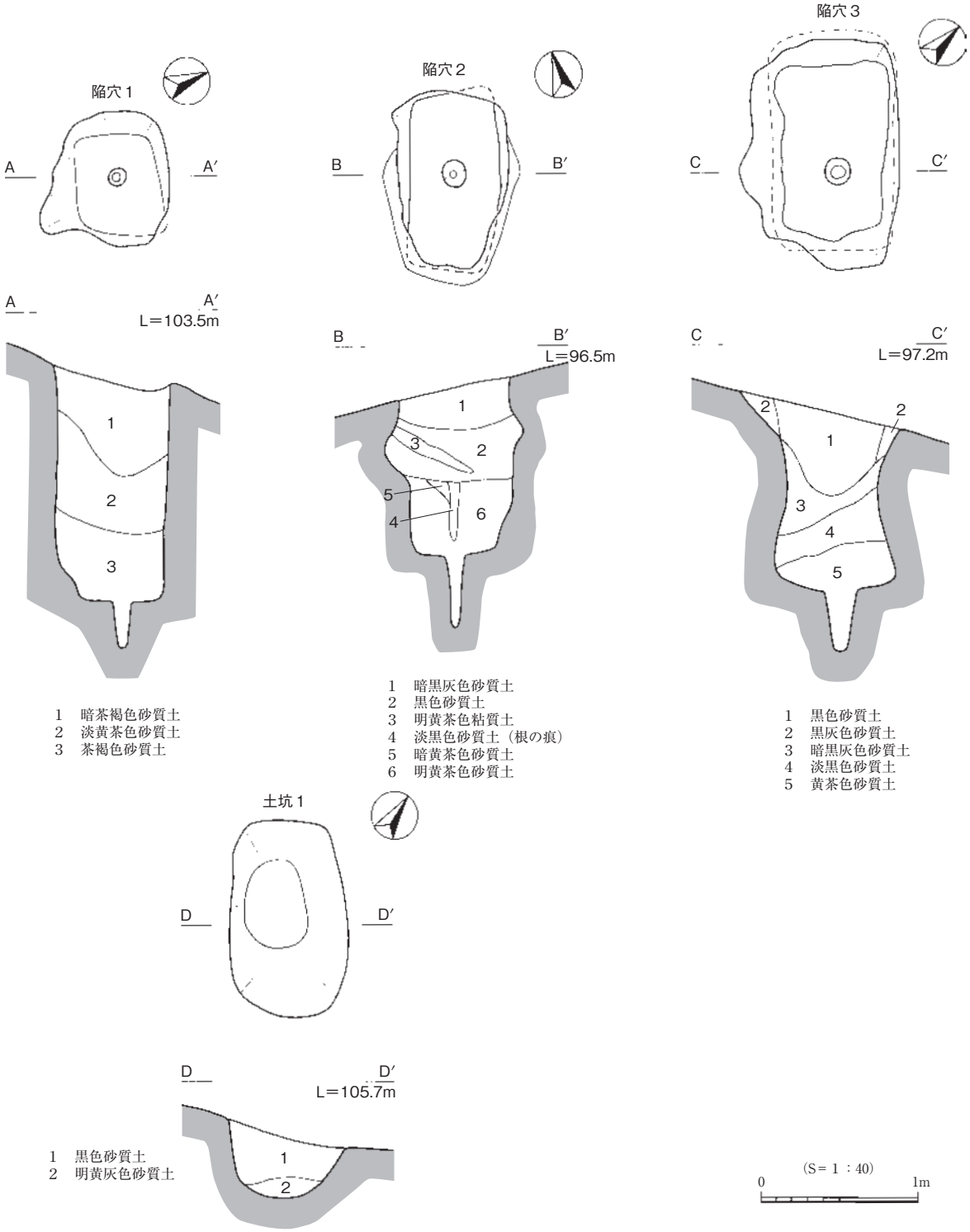


第97図　竪穴建物２　遺構・遺物図

竪穴建物２（第97図）

調査区の南端で検出した、隅丸方形の竪穴建物と見られる遺構である。遺構の床面と断面には炭化材が分布しており、焼失住居と見られる。検出した長さは4.7m、幅１m、深さ80cmを測り、遺構底面の周囲には、幅10cm、深さ10cmの壁溝が廻っている。

遺構内の埋土は、黒色の砂質土が堆積しており、床面に接して炭化材が分布している。また、断面の南端には炭化材の痕跡が残っており、柱穴の位置関係から、柱材が立ったままの状態で炭化したものと推測された。炭化材の同定結果を見ると、竪穴建物１と同様にクリが多い傾向にある。



第98図　陷穴１～３・土坑１　遺構図

出土した遺物については、床面から２点の自然石が出土しており、何らかの作業に用いられたものと考えられる。それ以外には、土器類は出土しなかった。この遺構の時期については、掘形が隅丸方形を呈することと、周辺から出土した遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけてのものと考えられる。

陥穴１（第98図）

段状遺構１の南東部で検出した、方形の土坑である。土坑の規模は、長さ90㎝、幅70㎝、深さ1.5ｍを測り、土坑の底面には直径10㎝、深さ30㎝の小穴が掘られている。形態的な特徴から、陥穴として掘削されたものと考えられる。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

陥穴２（第98図）

トレンチ６の標高96.5m付近で検出した、長方形の土坑である。長さ1.1m、幅70㎝、深さ1.1mで、土坑の断面は胴張状に膨らみ、底面の中央には直径15㎝、深さ45㎝の小穴が掘られている。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

陥穴３（第98図）

トレンチ12で検出した、長方形の土坑である。検出面の長さ1.5m、幅１m、深さ1.3mで、土坑の断面は、中ほどが狭くなっている。底面の規模は長1.4m、幅80㎝で、底面の中央には直径20㎝、深さ40㎝の小穴が掘られている。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

陥穴４（第96図）

竪穴建物１の南側で検出した長方形の土坑である。長辺70㎝、短辺50㎝を測り、竪穴建物１の床面から40㎝程度が残存している。土坑の底面は隅丸方形で、中央に直径10㎝、深さ20㎝の小穴を掘っている。この遺構からは、遺物は出土しなかった。

土坑１（第98図）

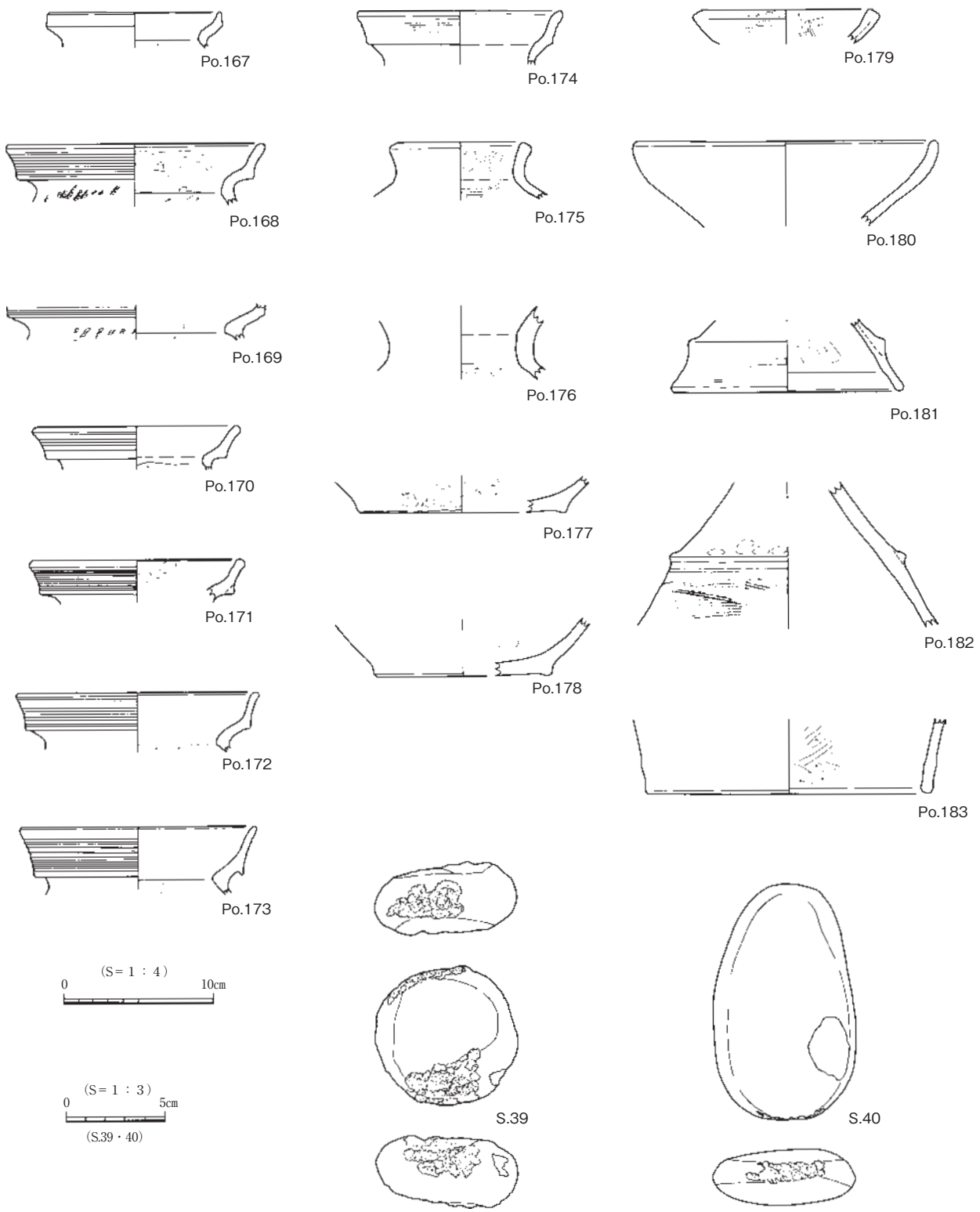
越敷山70号墳の北東部、標高105.5m付近に位置する楕円形の土坑である。土坑の規模は、長径1.3ｍ、短径70㎝、深さ50㎝で、断面は「U」字形を呈する。

70号墳に近接していることから土壙墓の可能性も考えられるが、石枕が置かれていないなど、決め手に欠けることから性格不明の土坑とした。

第５節　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、弥生土器や土師器、石器類が表土掘削中に出土している。発掘した面積の割に出土した遺物が少ないことから、この地点では、あまり積極的な土地利用が行われてこなかったものと考えられる。

Po.167は、口縁端部が短く上方に伸びる弥生土器の甕である。Po.168～173は、口縁部に凹線紋を廻らせる弥生土器の甕である。概ね弥生時代後期中葉から後葉にかけてのものと見られる。Po.174



第99図　越城ノ原遺跡３区　出土遺物図

は、口縁部が外方に広がる壺である。Po. 175は、短頸壺である。Po. 176は壺の頸部と見られる。Po. 177は、越敷山70号墳の墳丘から出土した弥生土器の底部で、Po. 178と同一個体か。Po. 179は、小型の鉢の口縁部片か、もしくは高坏の脚部か。Po. 180は、口径20cm程度の高坏。Po. 181とPo. 182は、器台の脚部である。Po. 183は、甑形土器の口縁部か。

S. 39は、円礫の両面を使用する砂岩製の叩石である。S. 40は、長さ12cmのデイサイト製の円礫で、使用痕はあまり見られないが叩石か。

第６章　総括

第１節　越敷山古墳群（坂長地区）の調査成果

１．はじめに

今回実施した越敷山古墳群(坂長地区)の調査では、越敷山70号墳、越敷山107～110号墳、125～128号墳までの８基の古墳を調査し、古墳の周辺から複数の埋葬施設を確認した。ここでは、今回の調査成果を項目別にまとめて総括としたい。

２．古墳群の築造順

越敷山古墳群における古墳築造の順は、金廻地区での調査により、標高の高い南から標高の低い北へ向かって造られたことが判明している。今回調査した坂長越城ノ原遺跡１区の古墳築造の順番は、隣り合う古墳同士の標高差が大きい上に、切り合い関係が無いため明確にはし難いが、周溝内から出土した遺物により、越敷山109号墳から127号墳へと順に造られた可能性がある。更に、周溝の形が一部歪んでいる越敷山110号墳では、古墳の南に位置する128号墳を避けた結果、周溝が不自然に歪んだ可能性があることから、本調査区内でも金廻地区と同様に、南から北へと順次造られていったと考えられる。

３．墳丘と周溝

古墳の墳丘については、周溝が消滅している事例が多いことから、外形を明らかにすることは難しい。坂長越城ノ原遺跡で検出した古墳は、いずれも円墳を指向しており、直径は４～10m程度、高さは、盛土が残っているものでも１m程度と低いことから、全体的に小型墳が主体となっている。このうち、越敷山127号墳では周溝の南西部の角が隅丸方形状を呈しているが、墳丘側では丸くカーブしていることから円墳であると考えられる。また、越敷山110号墳では南東部の周溝が角状に突出しているが、これも南側に位置する128号墳の影響と見られる。

周溝については、標高の高い山側を深く掘削するものがあるが、斜面下側の周溝が流出して輪郭がはっきりしないものも多かった。周溝内埋葬については検出することが出来なかったが、109号墳では、周溝の底に掘った小穴内に須恵器の壺を置き、更に石で蓋をした性格不明の遺構を検出した。

４．埋葬施設

古墳の中心埋葬施設は石棺が主体だが、越敷山109号墳では組み合わせ式の木棺を確認した。また、越敷山126号墳では土壙墓を確認した。周辺に単独で分布する埋葬施設では、石棺墓のほかに石蓋を持つ土壙墓などが用いられている。

石棺の構造は、全て複数の板石を用いる組み合わせ式で、小口板を長側板で挟み込む構造のものが主体である。石棺の固定方法は、墓壙の底面に溝を廻らせて、その中に固定するものが多い。木棺については、越敷山109号墳で検出した１主体部があり、これは石棺と同様に墓壙を掘り込んだ後、裏込めに粘質土を用いていたため、容易に検出することができた。また、越敷山110号墳の下層から見

つかった３主体部では木棺の痕跡を見つけることが出来なかったが、長さ３m以上の規模を持つ箱式木棺と推測される。越敷山古墳群では、平成26年度に調査を行った71号墳から、全長５mの木棺を検出しており、こうした構造の木棺墓も使用されていたと考えられる。

埋葬状況については、ほとんどの主体部が盗掘を受けているため、埋葬された当初の状況が保存されている事例が少ないが、越敷山70号墳では石棺内から頭部に水銀朱を塗った人骨が出土している。それを見ると、伸展葬で棺内に安置され、頭の下には二個の平石を用いた石枕が置かれていた。人骨の出土状況を見る限りでは、洗骨などが行われた形跡は見られなかった。

５．副葬品

副葬品については、越敷山107号墳と109号墳の棺内から玉類を、越敷山126号墳の主体部から刀を、越敷山110号墳の小型石棺から刀子が出土している。盗掘等の要因を考えても、本調査区において棺内に納められた副葬品は、やや貧弱な内容であったという印象を受ける。その中でも、越敷山126号墳から出土した長さ89.5cmの刀は特筆に値する。周辺の事例では、三尺クラスの刀が副葬される中期古墳はまれで、越敷山51号墳（85.1cm）、上ノ山古墳（90.5cm）、晩田山３号墳（87.4cm）、晩田山17号墳（92.4cm）など、いずれも盟主墳的な位置にある、直径25～40mクラスの円墳や前方後円墳であり、本古墳の規模とは明らかに隔絶している。こうした小規模古墳において長刀の副葬が見られたことは、武人的な要素を持った人物が身近に存在したことを示すものと考えられる。

６．供献土器

今回の調査では、古墳の周溝内から祭祀に用いられたと見られる多数の土器が出土した。土器の器種も、土師器の坏、高坏、甕、長頸壺、須恵器の坏蓋、瑞、直口壺、長頸壺などが出土した。これらの供献土器は、周溝の南東側に置かれたものが多いが、周溝の北側や南西部から単独で出土したものもあることから、これらの供献土器が置かれた場所の傾向は窺えるが、その位置が絶対的なものでもないことが分かる。また、一つの墳丘に複数の主体部が構築される場合、どのタイミングで土器供献が行われたのかも問題となる。今回の事例では、周溝の底面からやや遊離した状態のものが多かったことから、周溝が掘削されてから少し時間が経ってから供献されるものが多かったと推測される。

出土した土師器の特徴は、赤褐色を呈し、表面に細かい貫入が入るものと、橙褐色を呈して水樋されたような緻密な胎土を用いるグループに分かれている。前者の場合、高坏では明瞭な段を持ち、坏もやや口縁の立ち上がりが深いが、後者では高坏の段が緩くなり、小型化の傾向がある。坏は、器高が低くなり、底部外面には手持ちヘラケズリの痕跡が明瞭に残るが、新しくなるとナデ消しが徹底されるようである。須恵器は、TK208からTK23の時期におさまるものが主体と考えられる。産地については、概ね陶邑産のものと考えているが、小型の瑞（Po.29）は扁平で胎土もやや粗いことから、他の須恵器と比較して違和感がある。

今回出土した土師器の年代観については、共伴した須恵器から、５世紀中頃から５世紀後半に相当するものと考えられる。周辺の類例では、古墳時代中期の須恵器を副葬する古墳の事例が少なく、空白期的な時期であったが、ようやく良好な資料を得ることが出来た。

７．その他の遺構

３区で検出した二つの段状遺構と掘立柱建物は、墓域に近い位置に建てられた遺構として重要である。段状遺構１は、越敷山70号墳から北へ15mほど下がった位置にあり、平坦面の大きさは東西13m×南北５mほどの規模で、平坦面以外には明確な遺構を検出することは出来なかったが、古墳に近い場所にあることから古墳に関する何らかの作業か祭祀を行うための空間であったと推察される。出土遺物が全くないという事象を、どう解釈したらいいのか判断に悩むケースではあるが、生活遺物が出土しないということは一般的な居住空間ではないことの証左になりうる事例であろう。

また、段状遺構２に建てられた掘立柱建物は２間×１間の規模で、この建物に関してはいくつかのポイントがあると思われる。特に、このケースでは段状遺構への出入り口が推測できることと、建物が平入の掘立柱建物であったことである。通常、こうした段状遺構に建てられた長棟の建物は斜面に沿って建てられるため、斜面に平行する妻入の建物が多いと考えられる。また、出土遺物がほとんど見られないことと、段状遺構の入口と建物の正面との間に広い空間を持つことは、通常の住居跡では見られない特徴である。

発掘調査で知りえた断片的な情報から建物の性格まで判断することはできないが、古墳群に近接した位置に建てられた建物であることから、古墳とのかかわりのある遺構であることは容易に想像がつく。推測される用途としては、古墳造営に関わるキャンプ地や、殯屋などの儀礼に関わる遺構である。このうち前者の説については出土遺物がほとんどないことから、生活空間であったとは考えにくい。そのため、古墳造営キャンプ説も成立しがたい。こうして考えると、殯屋など儀礼的施設であった可能性が高くなる。実際にこうした殯屋が検出された事例は数が少ないため、何をもって殯屋とするのか等、前提条件を提示できる状況には無いが、古墳に近接して造られた施設については、祭祀的な用途で建てられた可能性を排除すべきではないと考える。

第２節　坂長越城ノ原遺跡の調査成果

坂長越城ノ原遺跡は、越敷山から伸びる丘陵部と谷部に位置している。今回実施した発掘調査の結果、縄紋時代から古代に至る遺跡の変遷が明らかとなった。ここでは各時代の様相をまとめて総括とする。

縄紋時代

縄紋時代の遺構は、１区と３区の丘陵上で検出した陥穴と、２区で検出したピット群がある。陥穴については、１区では７基、３区では３基を確認した。これらの陥穴は、平面が円形のものや楕円形、長方形のものなどバリエーションがあり、同一丘陵上でも異なる事例が多い。また、底面に小穴を持つ陥穴については、３区では３基の陥穴すべてで確認されたが、１区では７基のうち２基しか持っておらず、地区による違いも見えてきた。

２区で検出したピット群については、分布状況にある程度のまとまりがあることから、建物を支える柱穴の可能性もあるが、規模が小さいことと谷底に位置していることから、建物に関わるものではないと考えられる。

周辺の遺跡で同様の類例は、時期や性格が不明ながら、越敷山第２遺跡で谷部にピットが密集して

いる状況が確認されており、類似する事例と考えられる。問題の所在は、こうした谷部に密集する小穴がどのような目的を持って掘削されたのか、その形成理由が判然としない点にある。今回の事例は、小規模なピットながら明確に掘形を認識出来たことから、掘った土をそのまま埋めるのではなく、一度掘った穴に別の土を入れている可能性がある。自然の営み、例えば樹木の根痕などでは、これほど明瞭な穴としては残らないと考えられ、自然力以外の別の原因を探る必要がある。また、仮に人間が根菜類等を収穫した跡だとすると、小穴の中に別の土が入っている理由が説明できない。やはり、こうした小穴の群集が人為によるものか、自然的な要因によるものかは自然科学からのアプローチのほかにも、民俗例などを参考にする必要があると考える。

弥生時代後期後半～古墳時代前期

縄紋時代には狩猟の場として利用されていた坂長越城ノ原遺跡も、弥生時代後期後半から古墳時代前期には集落が形成されている。越敷山の周辺では、越敷山遺跡群をはじめとして、当該期の集落が数多く見つかっており、大規模な集落群となっていた。今回の調査は、細長く伸びる丘陵尾根のごく一部を調査したに過ぎず、全容を把握できる状況ではないが、標高100m近い丘陵上に集落が広がるという現象は、越敷山麓に分布する集落遺跡の特徴と言える。

検出した主な遺構は、１区では竪穴建物６棟、掘立柱建物６棟、段状遺構１基、貯蔵穴１基、３区では竪穴建物２棟である。これらの遺構の年代観については、１区では、竪穴建物１と３と４の３棟から弥生時代後期後半期の土器が出土しており、この頃に集落が形成されたと考えられる。また、竪穴建物３と４では、建て替えの痕跡があることから、後に続く古墳時代前期初頭まで存続したものと考えられる。３区では、竪穴建物内からの土器の出土がほとんど無かったため時期を決め難いが、周辺から出土した土器から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭のものと考えられる。なお、鳥取県教育文化財団が調査した金廻家ノ上ノ内遺跡でも弥生時代後期の竪穴建物が見つかっていることから、越敷山の北に広がる丘陵地では、弥生時代後期から古墳時代前期の集落が濃密に分布していると考えられる。周辺の事例では、妻木晩田遺跡において標高100mを超える丘陵上に複数の集落や墳墓が分散している状況が確認されており、こうした集落のあり方と類似している。

また、検出した遺構の中で特筆すべきは、１区で検出した竪穴建物３である。この遺構は、直径10mの大型竪穴建物であり、最終段階では柱穴に礎板石を用いていた。こうした大型の竪穴建物の類例は、越敷が丘遺跡の39号住居（直径８m）や越敷野原遺跡のSI-2（直径8.5m）、越敷山遺跡群第19a区から検出された竪穴建物SI-01（直径10.5m）など、越敷山周辺の集落遺跡で散見される。今回の事例では、建物の範囲を拡張しながら、少なくとも３時期の建て替えがあり、時期が新しくなるにつれて柱穴数が増加することが判明した。また、建物の最終段階では、柱を建てた後に貼床が行われている。このような事例は、諏訪西山ノ後遺跡の竪穴住居４でも確認されているが、貼床に用いられた土が地山の土と同様の場合は、柱穴の掘形を検出できないことも考えられる。不自然に細い柱穴の場合は、柱穴の断ち割りを行って貼床の有無を調べる必要があろう。

柱穴の底に置かれていた礎板石については、一部の柱穴にのみ採用されていることから、建物の沈下を防ぐ目的ではなく、柱材の転用などで寸の足らなくなった柱の高さを合わせるような目的で使用されたのではないかと考えられる。また、同様の類例は、越敷山遺跡群の19a・SI-01でも確認されており、越敷山麓において、古墳時代前期初頭頃に建てられた大型の竪穴建物に見られる工法と推測さ

れる。

古代以降

古代以降のものと見られる遺構は、１区で検出した道路である。これらの道路については、直接的な年代を示す遺物が出土しなかったため時期を特定することは出来ないが、古墳群を壊して道路を構築している状況から、古墳時代以降に造られたものと考えられる。

道路の構造については、丘陵の東側で見つかった道路１では、断面が「Ｕ」字形をしており、砂質土が互層状に堆積している。こうした土層の堆積は、人為的に整地された基礎地業の跡を示すものと推測され、少なくとも三回以上の造り替えが行われていることが判明した。これら地業の目的は、路面の硬化を促すためのものと、雨水を地下に浸透させる暗渠としての役割があったものと考えられる。しかし、こうした道路遺構が狭い山の尾根上に複数回に亘って重複しながら造り替えられている状況は理解しがたい。西側で検出した道路２～５も、複雑に切り合う状況から、道路１と同様に複数回に亘って補修や造り替えが行われていると推測される。平成24年度に調査を実施した坂長伯楽塚遺跡で見つかった道路も、短期的な使用で廃絶されていたことから、理由は不明ながら、越敷山の丘陵上に道路が頻繁に造り替えられていった状況が窺える。

参考文献

佐々木謙　1971年『越敷が丘』岸本町教育委員会

中原斉編　1992年『越敷山遺跡群』会見町・岸本町教育委員会

赤見高好　1999年『越敷山第２遺跡発掘調査報告書Ⅱ』岸本町教育委員会

米子市史編さん協議会　1999年『新修米子市史第７巻』米子市

家塚英詞　2000年『越敷山遺跡群―荻名第３遺跡―』鳥取県教育文化財団

角田寛幸　2004年『越敷野原遺跡発掘調査報告書』岸本町教育委員会

玉木秀幸　2013年『金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）』鳥取県教育文化財団

佐伯純也　2016年『坂長伯楽塚遺跡・伯楽塚古墳群17～21号墳』米子市文化財団

表１　坂長越城ノ原遺跡１区　出土土器・土製品観察表　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
Po. 1	107号墳	表土	土師器・壺	(11.8)		(4.1)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 2	107号墳	表土	弥生土器・甕	(13.7)		(2.6)	褐色	ナデ	凹線紋、ナデ	
Po. 3	107号墳	表土	弥生土器・甕	(18.1)		(3.4)	灰褐色	ナデ	凹線紋、風化	
Po. 4	107号墳	墳丘	弥生土器・甕	(11.9)		(2.8)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 5	107号墳	表土	弥生土器・底部		(7.1)	(1.8)	灰褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 6	108号墳	表土	弥生土器・甕	(13.8)		(5.7)	赤褐色	風化、ケズリ	凹線紋、連続刺突紋	
Po. 7	108号墳	周溝東	弥生土器・甕	(16.0)		(3.4)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 8	108号墳	表土	弥生土器・高坏			(2.7)	赤褐色	ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 9	108号墳	表土	弥生土器・器台			(5.3)	灰褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 10	108号墳・集中１	周溝内	土師器・壺	(12.7)		(9.5)	灰茶色	ナデ、ケズリ	ハケ、ナデ	
Po. 11	108号墳・集中２	周溝内	須恵器・坏蓋	(11.6)		4.1	青灰色	ナデ	ナデ、回転ヘラケズリ	
Po. 12	108号墳・集中２	周溝内	土師器・坏	(13.9)		5.4	淡橙褐色	風化	風化	
Po. 13	108号墳・集中２	周溝内	土師器・長頸壺			(11.2)	淡黄灰色	ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 14	108号墳・集中２	周溝内	土師器・壺	10.5		11.8	黒茶色	ケズリ、ナデ	ハケ、風化	
Po. 15	108号墳・集中２	周溝内	土師器・壺	17.7		24.4	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	黒斑、底部外面ス ス付着
Po. 16	108号墳・集中３	周溝内	土師器・高坏	16.3		(8.9)	橙褐色	ナデ	風化	
Po. 17	108号墳・集中３	周溝内	土師器・高坏	16.3	9.4	12.2	橙褐色	ナデ	ハケ、風化	
Po. 18	108号墳・集中３	周溝内	土師器・高坏	(16.1)		(5.3)	橙褐色	ナデ	風化	
Po. 19	108号墳・集中３	周溝内	土師器・高坏			(5.9)	橙褐色	風化	風化	
Po. 20	108号墳・集中３	周溝内	土師器・高坏			(3.2)	橙褐色	風化	風化	
Po. 21	108号墳・集中３	周溝内	土師器・壺			(14.3)	橙褐色	ナデ	ハケ、ナデ	
Po. 22	126号墳	周溝内	須恵器・壺	(23.1)		46.2	灰色	ナデ、当て具	波状紋、タタキ	
Po. 23	109号墳・集中４	周溝内	土師器・坏	11.9		4.8	橙褐色	ナデ	ナデ、ハケ	
Po. 24	109号墳・集中４	周溝内	土師器・坏	120		4.7	橙褐色	ナデ	ナデ、ハケ	
Po. 25	109号墳・集中４	周溝内	土師器・高坏	17.0	8.9	11.0	橙褐色	ナデ	ナデ、ハケ	
Po. 26	109号墳・集中４	周溝内	土師器・高坏		9.3	(11.5)	褐色	ナデ	ナデ、ハケ	
Po. 27	109号墳・集中５	周溝内	土師器・壺	(17.6)		30.3	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	黒斑、外面ス ス付着
Po. 28	109号墳・集中６	周溝内	土師器・坏	10.3		5.8	赤褐色	ナデ	ナデ	黒斑
Po. 29	109号墳・集中７	周溝内	須恵器・甕	8.9		10.6	灰色	ナデ	ナデ	
Po. 30	109号墳・集中７	周溝内	須恵器・壺	10.7		16.9	灰色	ナデ	波状紋、タタキ、ナデ	
Po. 31	109号墳	周溝内	弥生土器・甕	(25.3)		(5.8)	灰褐色	ミガキ、ケズリ	凹線紋	
Po. 32	127号墳	周溝内	須恵器・直口壺	(8.2)		9.5	緑灰色	ナデ	ナデ、底部ケズリ後ナデ	
Po. 33	127号墳・２主体部	埋土中	土師器・坏	(12.9)		(4.1)	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 34	127号墳・集中８	周溝内	土師器・甕	(17.2)		26.8	褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	黒斑、外面底部ス ス付着
Po. 35	127号墳・集中９	周溝内	土師器・坏	11.9		4.5	橙褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 36	127号墳・集中９	周溝内	土師器・坏	11.5		4.6	橙褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 37	127号墳・集中９	周溝内	土師器・坏	(12.0)		4.4	赤褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 38	127号墳・集中９	周溝内	土師器・甕	13.8		17.6	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	黒斑
Po. 39	127号墳・集中９	周溝内	須恵器・甕			(15.2)	灰色	ナデ	波状紋、刺突紋、タタキ、ナデ	
Po. 40	127号墳・集中10	周溝内	土師器・坏	11.4		4.7	橙褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 41	127号墳・集中10	周溝内	土師器・坏	12.2		4.6	橙褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	黒斑

表２　坂長越城ノ原遺跡１区　出土土器・土製品観察表　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
Po. 42	127号墳・集中10	周溝内	土師器・高坏	23.3	13.4	15.9	橙褐色	ミガキ、ケズリ	ミガキ	黒斑
Po. 43	127号墳・集中11	周溝内	土師器・長頸壺	(9.8)		(18.5)	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 44	110号墳・３主体部	埋土中	弥生土器・甕	(18.3)		(4.9)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 45	110号墳・３主体部	埋土中	弥生土器・甕			(4.3)	褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 46	110号墳・３主体部	埋土中	弥生土器・底部		(6.6)	(5.2)	灰茶色	ケズリ	ナデ	
Po. 47	110号墳・３主体部	埋土中	土師器・甕	(18.0)		(3.7)	灰褐色	ナデ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 48	110号墳・集中12	周溝内	土師器・甕	14.9		34.7	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	穿孔有、底部外面ス ス付着
Po. 49	110号墳	周溝内	土師器・甕	(14.8)		(9.0)	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	
Po. 50	110号墳	表土	土師器・高坏		(10.7)	(2.8)	橙褐色	ナデ	ミガキ	
Po. 51	110号墳	下層	弥生土器・甕	(14.4)		(3.5)	灰褐色	風化	凹線紋	
Po. 52	110号墳	下層	弥生土器・甕	(13.4)		(4.2)	赤褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 53	110号墳	下層	弥生土器・甕	(17.8)		(3.1)	灰茶色	ナデ	凹線紋	
Po. 54	110号墳	下層	弥生土器・甕	(16.4)		(4.6)	灰褐色	ナデ、ケズリ	波状紋	口縁ス ス付着
Po. 55	110号墳	下層	弥生土器・甕	(14.6)		(3.3)	橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 56	110号墳	下層	弥生土器・甕	(16.3)		(2.9)	灰茶色	ナデ	ナデ	
Po. 57	110号墳	下層	土師器・甕	(15.6)		(3.8)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 58	陥穴５	埋土中	縄紋土器・深鉢			(6.3)	灰茶色	ナデ	山形紋	
Po. 59	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・甕	(10.6)		(2.9)	灰褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 60	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・甕	(15.5)		(4.0)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	外面ス ス付着
Po. 61	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・甕	(21.4)		(4.0)	灰茶色	ナデ	凹線紋	黒斑
Po. 62	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・甕	(26.5)		(4.6)	灰褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 63	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・器台	(22.0)		(6.0)	灰褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 64	竪穴建物１	埋土中	弥生土器・器台		(15.8)	(6.6)	灰褐色	ケズリ	凹線紋	
Po. 65	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(11.5)		(11.4)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、風化	外面にス ス付着
Po. 66	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(13.4)		(2.9)	橙褐色	ミガキ、ケズリ	凹線紋	外面にス ス付着
Po. 67	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(12.3)		(4.1)	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 68	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(13.6)		(7.9)	淡赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 69	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(15.5)		(5.8)	淡橙褐色	ミガキ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 70	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕	(15.7)		(2.5)	灰褐色	風化	風化	
Po. 71	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・甕			(22.6)	橙褐色	ケズリ、ナデ	ハケ、波状紋	
Po. 72	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・高坏	(22.1)		(5.0)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 73	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・底部		(4.8)	(4.1)	灰茶色	ケズリ	ナデ	黒斑
Po. 74	竪穴建物２	埋土中	弥生土器・底部		3.4	(2.1)	淡赤灰色	ナデ	ナデ	
Po. 75	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・甕	(14.4)		(3.8)	灰褐色	ナデ	凹線紋	赤色塗彩
Po. 76	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・甕	(14.6)		(4.3)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 77	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・甕	(20.6)		(5.7)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 78	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・甕	(19.8)		(4.6)	褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 79	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・甕	(12.6)		(3.8)	灰茶色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 80	竪穴建物３	埋土中	土師器・甕	(14.3)		(4.1)	灰茶色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 81	竪穴建物３	埋土中	土師器・甕	(15.2)		(4.3)	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 82	竪穴建物３	埋土中	土師器・甕	(16.6)		(4.2)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 83	竪穴建物３	埋土中	土師器・器台	(20.0)		(6.8)	褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩

表３　坂長越城ノ原遺跡１区　出土土器・土製品観察表　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別・器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
Po. 84	竪穴建物３	埋土中	土師器・器台		(18.5)	(7.3)	褐色	ケズリ	ナデ	脚端部ス ス付着
Po. 85	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・高坏			(4.2)	明灰褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
Po. 86	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・高坏			(2.2)	赤橙褐色	ハケ	ナデ	
Po. 87	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・低脚坏		6.2	(3.7)	灰褐色	ナデ	ナデ	蓋か
Po. 88	竪穴建物３	埋土中	弥生土器・低脚坏		4.4	(2.5)	灰褐色	ナデ	ナデ	蓋か
Po. 89	竪穴建物３	埋土中	土器・取手			(3.3)	黒茶色		ナデ	
Po. 90	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(11.5)		(3.2)	灰褐色	ミガキ	波状紋	
Po. 91	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(11.8)		(2.9)	淡褐色	ミガキ	波状紋	
Po. 92	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(15.3)		(4.2)	褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 93	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(18.8)		(7.0)	褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、波状紋	外面ス ス付着
Po. 94	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(16.8)		(4.6)	灰褐色	ミガキ、ケズリ	凹線紋	
Po. 95	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(17.8)		(3.2)	灰褐色	ミガキ	凹線紋	
Po. 96	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(10.0)		(5.8)	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 97	竪穴建物４	埋土中	弥生土器・甕	(14.3)		(3.8)	灰褐色	ミガキ、ケズリ	ナデ	
Po. 98	竪穴建物４	埋土中	土師器・甕	(14.2)		(4.9)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 99	竪穴建物４	埋土中	土師器・甕	(15.4)		(4.3)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	外面ス ス付着
Po. 100	竪穴建物４	埋土中	土師器・甕	(16.8)		(3.5)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 101	竪穴建物４	埋土中	土師器・甕	(25.8)		(5.2)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 102	竪穴建物４	埋土中	土器・底部		6.6	(5.8)	灰褐色	風化	ナデ	黒斑
Po. 103	竪穴建物４	埋土中	土器・底部		(4.0)	(2.6)	褐色	ナデ	ナデ	
Po. 104	段状遺構１	埋土中	弥生土器・甕	(14.8)		(6.0)	灰茶色	ナデ、ケズリ	波状紋	
Po. 105	表採	表土	弥生土器・甕	(13.9)		(4.2)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	赤色塗彩
Po. 106	D-6	黒色土	弥生土器・甕	(15.5)		(5.3)	灰茶色	ミガキ	凹線紋	赤色塗彩
Po. 107	F・G-7	表土	弥生土器・甕	(15.6)		(3.5)	灰茶色	ナデ	波状紋	
Po. 108	D-6	黒色土	弥生土器・甕	(17.2)		(4.7)	淡橙褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 109	E-2	表土	弥生土器・甕	(20.0)		(5.1)	灰茶色	風化	風化	
Po. 110	G-5	表土	弥生土器・甕	(27.0)		(6.8)	灰茶色	風化	凹線紋	
Po. 111	C・D-6	表土	弥生土器・甕	(26.8)		(6.1)	褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 112	F・G-5	黒色土	弥生土器・壺	(16.3)		(6.2)	褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 113	C-6	黒色土	弥生土器・壺			(6.0)	灰褐色	ケズリ	凹線紋	
Po. 114	E-6	表土	土師器・低脚坏		(3.1)	(2.6)	灰褐色	風化	ナデ	蓋か
Po. 115	F・G-7	表土	弥生土器・高坏		(10.9)	(6.5)	灰茶色	ケズリ	凹線紋、ナデ	
Po. 116	C-6	黒色土	弥生土器・高坏			(7.0)	淡橙褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 117	F・G-7	表土	弥生土器・高坏	(15.5)		(4.8)	淡褐色	ミガキ	ナデ	赤色塗彩
Po. 118	E-6	表土	弥生土器・高坏	(18.2)		(7.3)	淡橙褐色	ケズリ、ミガキ	風化	
Po. 119	C-4	表土	土師器・甕	(18.6)		26.0	灰褐色	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	
Po. 120	E-4・5	表土	土師器・坏	(11.3)		(4.5)	赤褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 121	G-7・8	表土	土師器・坏		(5.9)	(3.4)	灰褐色	ナデ	底部糸切、ナデ	

表４　坂長越城ノ原遺跡１区　出土石製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量（cm）			重量（g）	石材
				最大長	最大幅	最大厚		
S.1	107号墳	表土	凹石	10.4	7.9	4.9	507.5	デイサイト
S.2	107号墳・１主体部	棺底	勾玉	2.5	1.5	0.8	3.0	メノウ
S.3	107号墳・１主体部	棺底	勾玉	2.8	1.8	0.8	5.0	メノウ
S.4	107号墳・１主体部	棺底	勾玉	2.5	1.7	0.8	3.9	メノウ
S.5	109号墳	墳丘北西部下層	折片	7.7	8.7	3.8	249.4	玄武岩
S.6	109号墳	墳丘	磨石	(10.1)	7.3	3.7	437.0	デイサイト
S.7	109号墳	墳丘南西部下層	石鏃未成品	3.1	2.5	0/9	5.8	黒曜石
S.8	110号墳	墳丘	石鏃	1.6	(1.6)	0.4	0.8	黒曜石
S.9	陥穴３	埋土中	石鏃	(1.5)	1.9	0.4	0.8	黒曜石
S.10	竪穴建物１	埋土中	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.5	黒曜石
S.11	竪穴建物３	埋土中	石包丁	(5.3)	3.5	0.8	27.4	結晶片岩
S.12	竪穴建物３	埋土中	砥石	(9.0)	3.0	1.9	86.7	凝灰岩
S.13	竪穴建物３	埋土中	台石	(22.6)	(18.3)	7.2	4,900.0	デイサイト
S.14	竪穴建物４	埋土中	石鏃	2.0	1.8	0.4	0.8	黒曜石
S.15	竪穴建物４	埋土中	石鏃	(1.4)	1.5	0.3	0.4	黒曜石
S.16	竪穴建物４	埋土中	石鏃	(2.2)	1.4	0.6	0.8	黒曜石
S.17	竪穴建物４	埋土中	凹石、叩石	10.4	5.2	3.4	290.5	デイサイト
S.18	竪穴建物５・６	埋土中	スクレイパー	6.6	3.5	0.9	19.8	サヌカイト
S.19	竪穴建物５・６	埋土中	石鏃	13	1.4	0.3	0.3	サヌカイト
S.20	段状遺構１	埋土中	砥石	(13.3)	5.3	2.4	234.0	花崗岩
S.21	道路１	埋土中	石鏃	2.1	1.6	0.4	0.8	黒曜石
S.22	道路１	埋土中	石鏃	(1.9)	(1.5)	0.4	0.6	黒曜石
S.23	道路３	埋土中	砥石	(19.7)	6.7	5.1	635.6	閃緑岩
S.24	G-7・8	表土	石錘	6.7	6.0	1.3	78.4	デイサイト
S.25	D-3	表土	磨石	7.6	6.9	5.1	372.3	デイサイト
S.26	C-6	黒色土	磨石	9.1	7.4	3.8	284.1	デイサイト
S.27	D-6	黒色土	磨石	11.3	8.4	5.6	807.5	デイサイト
S.28	C-6	黒色土	凹石、磨石	11.0	8.7	6.0	607.3	デイサイト

表５　坂長越城ノ原遺跡１区　出土鉄製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量（cm）			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
F.1	126号墳・主体部	棺底	鉄刀	89.5	2.8	0.7	目釘あり
F.2	127号墳・周溝内	下層	刀子	(4.8)	(1.2)	0.3	半分欠損
F.3	110号墳・２主体部	棺底	刀子	11.3	1.8	0.3	
F.4	竪穴建物３	床面	槍鉋	10.5	3.0	0.2	

表６　坂長越城ノ原遺跡１区　出土ガラス製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）・（重量の※は、0.1g以下のため計測不能）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量（㎜）			重量（g）	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
G.1	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G.2	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.5	2.5	2.5	※	
G.3	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.5	※	
G.4	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.5	※	
G.5	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.5	3.0	2.0	※	
G.6	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.3	※	
G.7	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.3	※	
G.8	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.2	2.0	※	
G.9	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.5	※	
G.10	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.5	※	
G.11	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	2.8	2.0	※	
G.12	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G.13	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.5	※	
G.14	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.5	※	
G.15	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	(3.0)	(3.0)	1.5	※	半分欠損
G.16	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.5	※	
G.17	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.7	2.9	2.0	※	
G.18	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.6	2.5	1.5	※	
G.19	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.5	※	
G.20	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.5	※	
G.21	107号墳・１主体部	棺底	ガラス・小玉	2.8	3.0	2.0	※	
G.22	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	6.0	5.5	5.5	0.2	
G.23	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	5.0	5.7	3.5	0.1	
G.24	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.5	3.3	2.1	※	
G.25	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G.26	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.8	※	
G.27	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G.28	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.3	3.3	2.0	※	
G.29	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	3.0	2.0	※	
G.30	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.6	2.0	※	
G.31	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.6	※	
G.32	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.6	2.7	1.5	※	
G.33	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.7	1.5	※	
G.34	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.7	2.0	※	
G.35	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.7	※	
G.36	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G.37	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	2.8	1.7	※	
G.38	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.3	※	
G.39	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.2	※	
G.40	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.2	1.7	※	
G.41	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	2.0	※	
G.42	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.5	※	
G.43	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	1.5	※	
G.44	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.4	※	
G.45	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.7	※	
G.46	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.6	2.6	※	
G.47	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	2.3	※	
G.48	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.0	2.5	2.6	※	
G.49	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.5	1.5	※	
G.50	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.0	※	
G.51	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.4	※	

表７　坂長越城ノ原遺跡１区　出土ガラス製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）・（重量の※は、0.1g以下のため計測不能）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法量（㎜）			重量（g）	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
G. 52	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.1	2.0	※	
G. 53	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 54	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 55	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.0	※	
G. 56	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 57	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 58	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 59	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.7	※	
G. 60	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.6	2.6	1.8	※	
G. 61	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.5	※	
G. 62	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.5	※	
G. 63	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.7	1.7	※	
G. 64	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	2.2	※	
G. 65	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.7	1.7	※	
G. 66	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.7	※	
G. 67	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.3	※	
G. 68	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.8	※	
G. 69	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.5	※	
G. 70	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.7	※	
G. 71	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.5	※	
G. 72	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.7	※	
G. 73	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.8	※	
G. 74	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 75	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.6	※	
G. 76	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.7	1.7	※	
G. 77	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.6	※	
G. 78	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.8	※	
G. 79	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.6	2.6	2.0	※	
G. 80	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	2.8	1.8	※	
G. 81	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	2.0	※	
G. 82	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.7	1.7	※	
G. 83	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.2	1.7	※	
G. 84	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.5	1.7	※	
G. 85	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	2.2	※	
G. 86	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.0	※	
G. 87	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.3	※	
G. 88	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	1.7	※	
G. 89	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	3.0	1.8	※	
G. 90	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.7	2.5	1.5	※	
G. 91	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.0	※	
G. 92	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	2.0	※	
G. 93	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.5	2.5	2.0	※	
G. 94	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	2.5	2.2	※	
G. 95	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	(3.0)	(3.0)	1.5	※	半分欠損
G. 96	107号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	(2.5)	(2.5)	2.0	※	半分欠損
G. 97	109号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	5.0	5.5	3.2	0.1	
G. 98	109号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	3.0	3.0	1.8	※	
G. 99	109号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	2.0	※	
G. 100	109号墳・１主体部	埋土中	ガラス・小玉	2.8	2.8	1.5	※	
G. 101	竪穴建物３	ピット内	ガラス・管玉	5.0	5.0	5.0	0.3	

表８　坂長越城ノ原遺跡２区　出土土器・土製品観察表　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層位	種別器種	法量（cm）			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
Po. 122	北区	２層	縄紋土器・深鉢			（ 5.5）	淡褐色	風化	沈線紋	
Po. 123	南区	２層	縄紋土器・深鉢			（ 3.1）	明灰色	ナデ	ナデ、刺突紋	
Po. 124	南区	２層	縄紋土器・浅鉢	（17.0）		（ 6.1）	灰褐色	ナデ	条痕紋	
Po. 125	北区	２層	縄紋土器・浅鉢	（21.0）		（ 4.8）	黒茶色	条痕紋	条痕紋	
Po. 126	南区	２層	縄紋土器・浅鉢	（21.2）		（ 7.9）	灰褐色	条痕紋	条痕紋	
Po. 127	南区	３層	縄紋土器・浅鉢	13.1		6.7	灰褐色	ハケ、ナデ	ハケ	
Po. 128	南区	２層	縄紋土器・浅鉢	（29.7）		（ 5.2）	灰茶色	ナデ	ナデ	
Po. 129	北区	２層	縄紋土器・浅鉢	（28.8）		（ 6.0）	灰茶色	ナデ	条痕紋、ミガキ	
Po. 130	北区	排水溝	縄紋土器・浅鉢			（ 5.1）	灰褐色	ミガキ	ミガキ	
Po. 131	北区	２層	縄紋土器・浅鉢	（18.4）		（ 2.5）	黒茶色	ミガキ	ミガキ	
Po. 132	北区	２層	縄紋土器・深鉢	（19.2）		（ 3.8）	灰茶色	ミガキ	ナデ	
Po. 133	北区	２層	縄紋土器・浅鉢	（39.0）		（ 8.4）	灰茶色	ミガキ	ナデ	
Po. 134	北区	２層	縄紋土器・浅鉢			（ 3.0）	灰褐色	ナデ	沈線紋	
Po. 135	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（17.4）		（ 2.8）	灰褐色	ナデ	風化	
Po. 136	北区	２層	縄紋土器・浅鉢	（28.6）		（ 6.1）	灰褐色	ナデ	条痕紋	
Po. 137	北区	２層	縄紋土器・深鉢	（25.3）		（ 8.0）	灰褐色	ケズリ	条痕紋	
Po. 138	北区	２層	縄紋土器・深鉢	（30.0）		（ 9.7）	灰褐色	ナデ	条痕紋	
Po. 139	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（32.4）		（12.8）	灰褐色	ナデ	条痕紋、ナデ	
Po. 140	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（33.3）		（ 6.8）	黒茶色	ナデ	ケズリ、ナデ	
Po. 141	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（35.2）		（ 5.8）	灰褐色	風化	条痕紋	
Po. 142	北区	２層	縄紋土器・深鉢	（38.0）		（ 5.3）	黒茶色	ナデ	条痕紋、ナデ	
Po. 143	南区	３層	縄紋土器・深鉢	（24.9）		（ 6.8）	灰褐色	ナデ	条痕紋、ナデ	
Po. 144	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（27.2）		（ 4.0）	褐色	ナデ	条痕紋、ナデ	
Po. 145	南区	２層	縄紋土器・深鉢	（24.8）		（10.5）	褐色	ナデ	条痕紋	
Po. 146	南区	２層	縄紋土器・深鉢			（ 5.1）	褐色	ナデ	ナデ	
Po. 147	南区	２層	縄紋土器・深鉢			（ 4.9）	淡褐色	ナデ	ナデ	
Po. 148	南区	排水溝	縄紋土器・底部		（ 7.0）	（ 2.2）	淡褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 149	北区	２層	縄紋土器・底部		（ 9.2）	（ 2.2）	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 150	南区	２層	縄紋土器・底部		（10.8）	（ 3.5）	灰褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 151	南区	２層	縄紋土器・深鉢			（ 3.2）	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 152	北区	排水溝	弥生土器・壺	（30.1）		（ 2.1）	橙褐色		斜格子紋、円形浮紋	
Po. 153	北区	２層	弥生土器・壺			（ 9.2）	淡橙褐色	ミガキ	風化、突帯	
Po. 154	南区	１層	弥生土器・壺			（ 9.7）	暗褐色	ナデ	ナデ	
Po. 155	北区	排水溝	弥生土器・甕	（23.9）		（ 5.7）	橙褐色	ハケ	ハケ、ナデ、突帯	
Po. 156	南区	２層	弥生土器・甕	（17.3）		（ 4.2）	淡褐色	ナデ	波状紋	
Po. 157	北区	１層	土師器・甕	（17.2）		（ 4.3）	橙褐色	ナデ	ナデ	
Po. 158	北区	２層	土師器・甕	（15.5）		（ 3.7）	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 159	北区	２層	縄紋土器・小型品	（ 5.5）		（ 2.7）	灰色	ナデ	風化	穿孔
Po. 160	南区	１層	弥生土器・高坏			（ 3.4）	灰褐色	ナデ、ミガキ	ナデ	赤色塗彩
Po. 161	南区	１層	土師器・注口土器				淡褐色	ナデ	ナデ	
Po. 162	南区	排水溝	土師器・坏底部		（ 6.2）	（ 2.0）	橙褐色	風化	風化	
Po. 163	北区	１層	弥生土器・底部		（10.8）	（ 5.1）	褐色	ケズリ	ナデ	
Po. 164	南区	１層	須恵器・坏身	（15.0）		（ 4.1）	淡灰色	ナデ	ナデ	
Po. 165	南区	２層	移動式カマド			（14.1）	褐色	ナデ	ナデ	

表９　坂長越城ノ原遺跡２区　出土石製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層　位	種別	法　量（cm）			重　量（g）	石　材
				最大長	最大幅	最大厚		
S. 29	南区	１層	台石	(13. 4)	17. 7	3. 7	1, 477. 5	砂岩
S. 30	南区	２層	凹石	7. 7	6. 9	5. 0	295. 6	凝灰岩
S. 31	北区	２層	凹石	11. 0	8. 1	5. 1	602. 3	デイサイト
S. 32	北区	２層	凹石	(8. 3)	8. 5	6. 0	749. 7	斑れい岩
S. 33	北区・ピット	埋土中	石錘	6. 6	5. 6	2. 7	99. 5	デイサイト
S. 34	南区・ピット	埋土中	石鏃	3. 2	(2. 2)	0. 7	2. 4	サヌカイト
S. 35	南区	２層	石鏃	3. 3	(1. 9)	0. 5	3. 4	玉髄
S. 36	南区	２層	石鏃	2. 1	(1. 5)	0. 3	0. 9	玉髄

表10　坂長越城ノ原遺跡３区　出土土器・土製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）

遺物番号	地区遺構	層　位	種別器種	法　量（cm）			色　調	調　整		備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面	
Po. 166	竪穴建物１	埋土中	土師器・甕	(12. 2)		(2. 3)	灰褐色	ナデ	ナデ	
Po. 167	3-J	黒色土	弥生土器・甕	(11. 5)		(2. 5)	灰茶色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
Po. 168	70号墳	表土	弥生土器・甕	(17. 2)		(4. 2)	灰褐色	ミガキ、ケズリ	凹線紋	
Po. 169	70号墳	表土	弥生土器・甕			(2. 4)	淡橙褐色	ナデ	凹線紋	
Po. 170	70号墳	墳丘下層	弥生土器・甕	(13. 2)		(3. 0)	灰茶色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 171	4-A	表土	弥生土器・甕	(14. 0)		(2. 9)	灰茶色	ナデ、	凹線紋	
Po. 172	3-B	表土	弥生土器・甕	(16. 0)		(4. 0)	灰褐色	ナデ、ケズリ	凹線紋	
Po. 173	4-A	表土	弥生土器・甕	(15. 7)		(4. 6)	灰茶色	風化	凹線紋	
Po. 174	4-B	表土	弥生土器・甕	(13. 6)		(3. 8)	灰褐色	風化	凹線紋	外面スス付着
Po. 175	4-B	表土	弥生土器・壺	(8. 4)		(3. 8)	灰茶色	ナデ	ナデ、ハケか	黒斑
Po. 176	3-J	黒色土	弥生土器・壺			(4. 9)	淡赤褐色	ナデ、ケズリ	ナデ	
Po. 177	70号墳	墳丘	弥生土器・甕		(14. 0)	(2. 4)	灰褐色	ナデ	ハケ、ナデ	底部黒斑
Po. 178	2-B	表土	弥生土器・底部		(11. 7)	(3. 8)	灰褐色	風化	風化	Po. 177と同一個体
Po. 179	4-A	表土	弥生土器・鉢	(11. 2)		(2. 3)	淡黒灰色	ケズリ、ナデ	ミガキ	脚か
Po. 180	3-B	表土	弥生土器・高坏	(20. 0)		(5. 7)	灰褐色	風化	ナデ	
Po. 181	4-A	表土	弥生土器・器台		(15. 4)	(4. 9)	灰褐色	風化	風化	
Po. 182	T-13	黒色土	土師器・器台			(9. 9)	淡赤褐色	風化	凹線紋、風化	
Po. 183	4-A	表土	土師器・甑形土器		(19. 0)	(5. 0)	灰褐色	ケズリ	ナデ	

表11　坂長越城ノ原遺跡３区　出土石製品観察表　　（残存・復元値は（　）で表示）・（※100g以下は四捨五入）

遺物番号	地区遺構	層位	種別	法　量（cm）			重　量（g）	石　材
				最大長	最大幅	最大厚		
S. 37	竪穴建物２	床面	自然石	30. 4	(23. 5)	10. 9	12, 200※	デイサイト
S. 38	竪穴建物２	床面	自然石	19. 0	10. 9	8. 3	2, 301. 3	デイサイト
S. 39	4-B	表土	叩石	7. 0	7. 2	3. 7	189. 0	砂岩
S. 40	2-B	表土	叩石か	11. 9	7. 2	2. 8	324. 6	デイサイト

写 真 図 版

１．１区遠景（北より）

２．１区遠景（西より）

写真図版２

１．１区調査前（北より）

２．１区調査前（南より）

３．１区調査前（南西より）

１．越敷山107号墳調査前
（北東より）

２．越敷山107号墳墳丘
（東より）

３．越敷山107号墳
石棺蓋石検出（南東より）

写真図版４

１．越敷山107号墳石棺完掘
（北東より）

２．越敷山107号墳
玉類出土状況（北東より）

３．越敷山107号墳枕石
（北より）

１．越敷山107号墳
　　石棺掘形断面（南より）

２．越敷山107号墳
　　石棺掘形完掘（西より）

３．越敷山107号墳
　　墳丘盛土除去（北東より）

写真図版６

１．越敷山108号墳調査前
（東より）

２．越敷山108号墳墳丘
（南より）

３．越敷山108号墳墳丘
（南より）

１．越敷山108号墳
南周溝内遺物出土状況
（南より）

２．越敷山108号墳
南周溝内遺物出土状況
（東より）

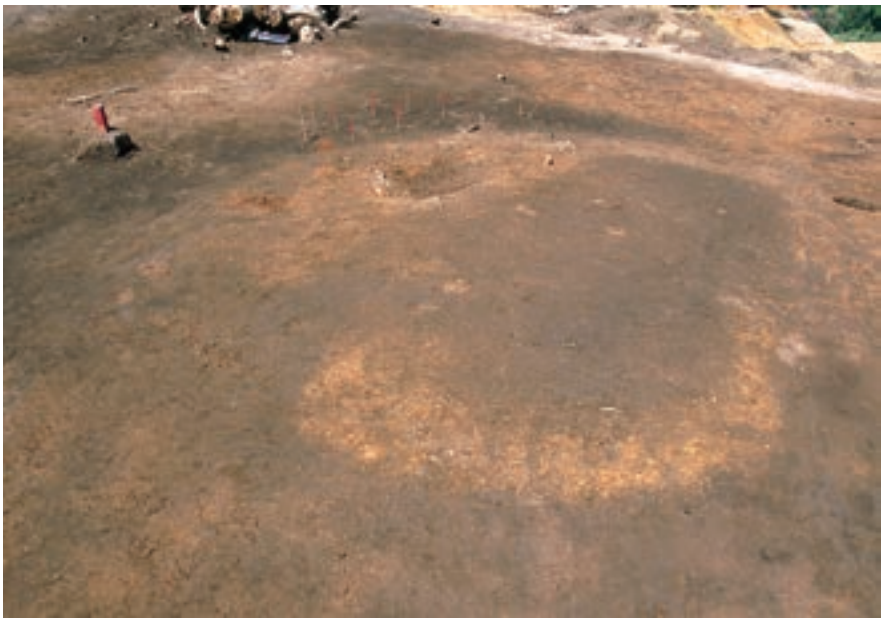
３．越敷山108号墳
土器集中３（南東より）

写真図版８

１．越敷山108号墳
土器集中２（南東より）

２．越敷山108号墳
北周溝内遺物出土状況
（北より）

３．越敷山108号墳
墳丘盛土除去（南より）



１．越敷山126号墳
周溝・墓壙検出（東より）

２．越敷山126号墳
周溝内遺物出土状況
（北東より）

３．越敷山126号墳
周溝・墓壙完掘（西より）

写真図版10

1．越敷山126号墳
　1主体部完掘（北西より）

2．越敷山126号墳
　1主体部完掘（南西より）

3．越敷山126号墳
　鉄刀（F. 1）出土状況
　（南西より）

1．越敷山109号墳調査前
（西より）

2．越敷山109号墳周溝検出
（北東より）

3．越敷山109号墳墓壙検出
（南より）

写真図版12

1．越敷山109号墳墳丘
（南西より）

2．越敷山109号墳墳丘
（南東より）

3．越敷山109号墳
１主体部完掘（北より）

1．越敷山109号墳
２主体部完掘（南より）

2．越敷山109号墳
周溝内遺物出土状況
（東より）

3．越敷山109号墳
土器集中４（東より）

写真図版14

1．越敷山109号墳
土器集中５（北東より）

2．越敷山109号墳
土器集中６（東より）

3．越敷山109号墳
土器集中７・石蓋検出
（北より）

1．越敷山109号墳
土器集中７・石蓋除去
（南東より）

2．越敷山109号墳
墳丘盛土断面（南西より）

3．越敷山109号墳
墳丘盛土除去（東より）

写真図版16

1．越敷山127号墳
周溝・主体部検出
（東より）

2．越敷山127号墳
１主体部盗掘状況
（北西より）

3．越敷山127号墳
２主体部検出（東より）

１．越敷山127号墳
　　２主体部断面（東より）

２．越敷山127号墳
　　２主体部完掘（北より）

３．越敷山127号墳
　　１・２主体部完掘
　　（北西より）

写真図版18

1．越敷山127号墳
周溝内遺物出土状況
（北より）

2．越敷山127号墳
周溝内遺物出土状況
（南より）

3．越敷山127号墳
土器集中10（北より）

1．越敷山127号墳墳丘
（西より）

2．越敷山127号墳墳丘
（南西より）

3．越敷山128号墳
主体部検出（北より）

写真図版20

1．越敷山128号墳
主体部完掘（西より）

2．越敷山128号墳
主体部完掘（南より）

3．越敷山128号墳
周溝・主体部完掘
（南西より）

1．越敷山110号墳調査前
（西より）

2．越敷山110号墳墳丘
（南より）

3．越敷山110号墳
１・２主体部検出
（北東より）

写真図版22

1．越敷山110号墳
　１主体部検出（北より）

2．越敷山110号墳
　１主体部完掘（西より）

3．越敷山110号墳
　２主体部蓋石検出
　（南東より）

1．越敷山110号墳
２主体部完掘（北西より）

2．越敷山110号墳
２主体部掘形断面
（南西より）

3．越敷山110号墳
２主体部掘形完掘
（北西より）

写真図版24

1．越敷山110号墳
３主体部検出（南より）

2．越敷山110号墳
３主体部完掘（南より）

3．越敷山110号墳
３主体部完掘（東より）

1．越敷山110号墳
土器集中12（南東より）

2．越敷山110号墳
北側周溝完掘（北より）

3．越敷山110号墳
墳丘盛土除去（西より）

写真図版26

1．石棺１盗掘状況（北より）

2．石棺１掘形完掘（東より）

3．石棺２・道路１断面
（南より）

1．石棺２完掘（西より）

2．石棺２枕石（北西より）

3．陥穴１完掘（北東より）

写真図版28

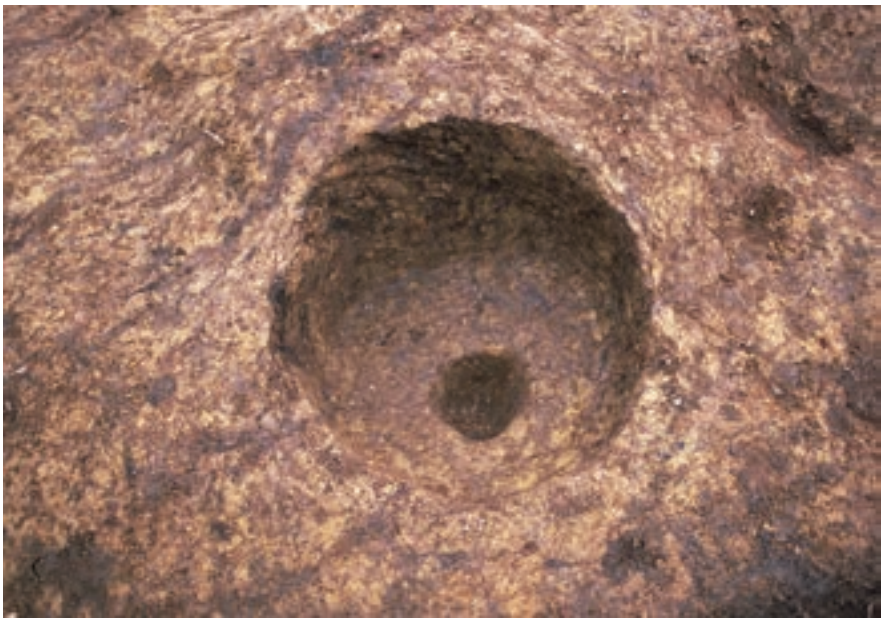
1．陥穴２断面（南より）

2．陥穴３完掘（北東より）

3．陥穴４完掘（南より）

1．陥穴５完掘（北西より）

2．陥穴６完掘（東より）



3．陥穴７完掘（北より）

写真図版30

1．竪穴建物１遺物出土状況
（東より）

2．竪穴建物１ピット検出
（北西より）

3．竪穴建物１完掘（西より）

1．竪穴建物２検出
（北西より）

2．竪穴建物２ピット検出
（東より）

3．竪穴建物２完掘（南より）

写真図版32

1．竪穴建物３
Bライン北断面 （北より）

2．竪穴建物３
Aライン西断面 （北より）

3．竪穴建物３ピット検出
（南より）

1．竪穴建物３調査状況
（南より）

2．竪穴建物３ピット完掘
（西より）

3．竪穴建物３新段階の
Ｂピット　柱痕・掘形
断面（南より）

写真図版34

1．竪穴建物３新段階の
Ｂピット・柱痕完掘
（南より）

2．竪穴建物３新段階の
Ｂピット・掘形完掘
（南より）

3．竪穴建物３新段階の
Ｃピット　完掘
（北西より）

1．竪穴建物３新段階のＥピット　完掘（東より）

2．竪穴建物４
検出（西より）

3．竪穴建物４
検出（南東より）

写真図版36

1．竪穴建物４
断面（北より）

2．竪穴建物４
第１面完掘（東より）

3．竪穴建物４
第２面完掘（北東より）

1．竪穴建物５・６検出
（北西より）

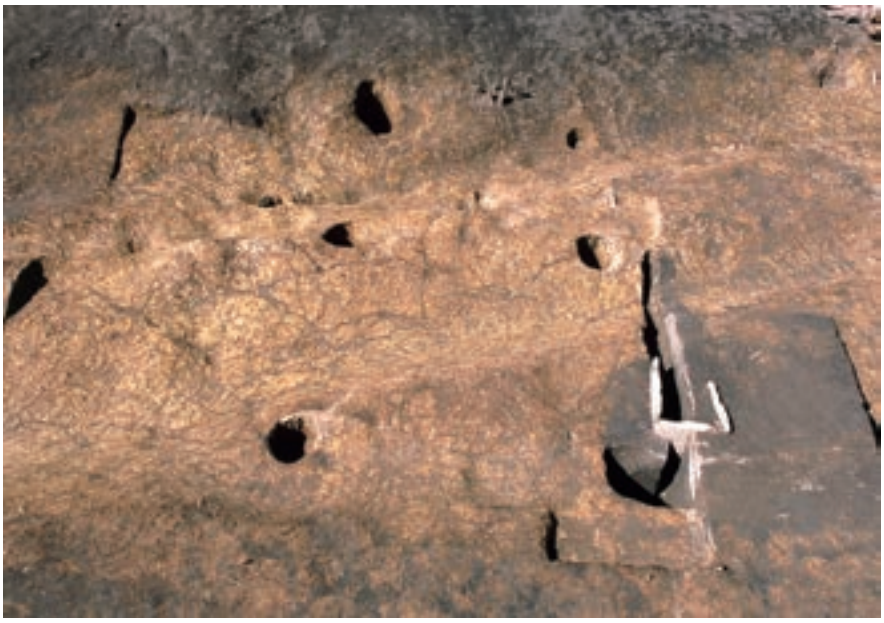
2．竪穴建物５・６完掘
（北より）

3．掘立柱建物１完掘
（南より）

写真図版38

1．掘立柱建物２完掘
（西より）

2．掘立柱建物３検出
（南西より）



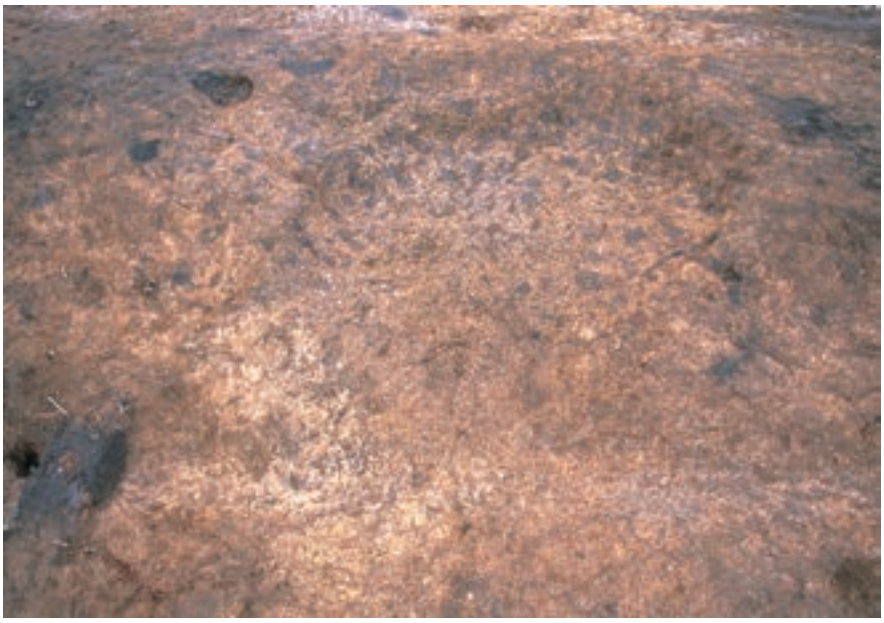
3．掘立柱建物４完掘
（東より）

1．掘立柱建物６完掘
（東より）

2．段状遺構１検出
（北東より）

3．段状遺構１完掘
（北東より）

写真図版40



1．竪穴遺構１完掘（東より）

2．貯蔵穴１断面（東より）

3．貯蔵穴１完掘（北より）

１．道路１北側検出
（南西より）

２．道路１北側完掘（南より）

３．道路１断面（南より）

写真図版42

1．道路１南側完掘
（北東より）

2．道路３北側検出
（北東より）

3．道路３北側完掘
（北東より）

1．道路３
E4区凹凸穴検出
（北東より）

2．道路３
E4区凹凸穴完掘
（北東より）

3．道路３
南側凹凸穴検出
（北東より）

写真図版44

1．道路３
南側凹凸穴完掘
（北東より）

2．道路４・５
北側検出（北東より）

3．道路４・５
北側完掘（北東より）

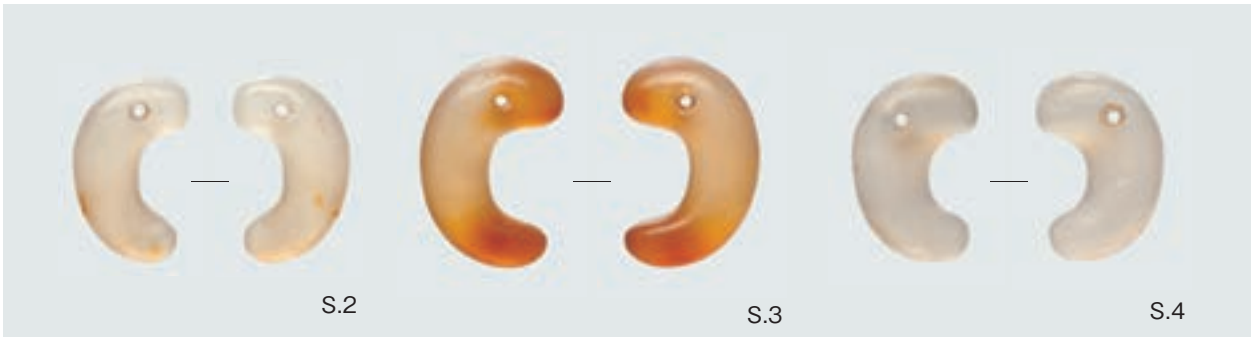
1．道路４・５
E3区凹凸穴検出
（北東より）

2．道路４・５
南側検出（北東より）

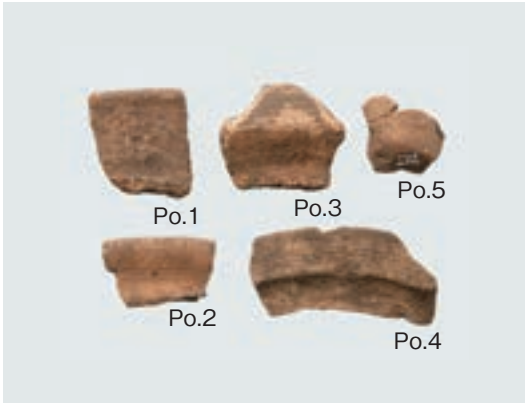
3．道路４・５
南側完掘（北東より）

写真図版46

1．越敷山107号墳出土玉類（左の勾玉の長さ2.5㎝）



2．越敷山107号墳出土勾玉　（1：1）



3．越敷山107号墳出土土器　（1：3）

4．越敷山108号墳出土土器　（1：3）

1．越敷山108号墳　Po. 10　（1：3）

2．越敷山108号墳　Po. 11　（1：3）

5．越敷山108号墳　Po. 15　（1：3）

3．越敷山108号墳　Po. 13　（1：3）

6．越敷山108号墳　Po. 17　（1：3）

4．越敷山108号墳　Po. 14　（1：3）

7．越敷山108号墳　Po. 21　（1：3）

写真図版48

1．越敷山126号墳　F. 1　（1：8）

2．越敷山126号墳　Po. 22　（1：3）

1．越敷山109号墳 Po. 23（1：3）

2．越敷山109号墳 Po. 24（1：3）

3．越敷山109号墳 Po. 28（1：3）

6．越敷山109号墳　Po. 27　（1：3）

4．越敷山109号墳　Po. 25　（1：3）

5．越敷山109号墳　Po. 26　（1：3）

7．越敷山109号墳　Po. 29　（1：3）

8．越敷山109号墳　Po. 30　（1：3）

写真図版50

1．越敷山127号墳 Po. 32（1：3）

2．越敷山127号墳 Po. 33（1：3）

4．越敷山127号墳 Po. 35（1：3）

5．越敷山127号墳 Po. 36（1：3）

7．越敷山127号墳　Po. 38　（1：3）

3．越敷山127号墳　Po. 34　（1：3）

6．越敷山127号墳 Po. 37（1：3）

8．越敷山127号墳 F. 2
（1：2）

9．越敷山127号墳　Po. 39　（1：3）

1．越敷山127号墳　Po. 40　（1：3）

2．越敷山127号墳　Po. 41　（1：3）

3．越敷山127号墳　Po. 42　（1：3）

4．越敷山127号墳　Po. 43　（1：3）

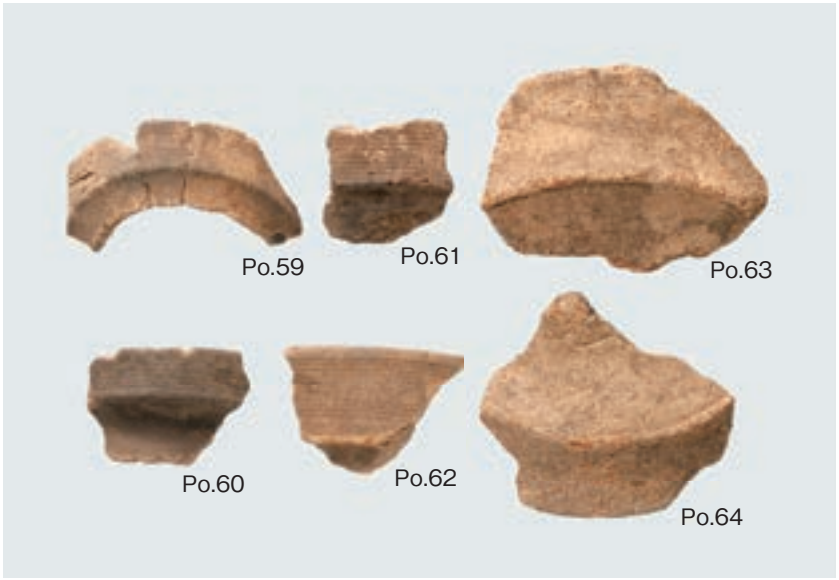
5．越敷山110号墳　Po. 48　（1：3）

6．越敷山110号墳　F. 3　（1：2）

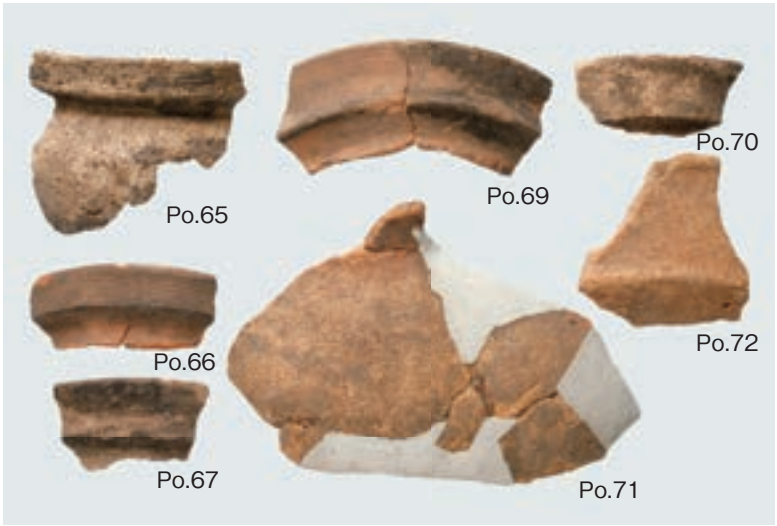
7．越敷山110号墳　Po. 49　（1：3）

写真図版52

1．陥穴５　Po. 58（1：3）



2．竪穴建物１出土遺物　（1：3）



3．竪穴建物２出土遺物１　（1：3）

4．竪穴建物２出土遺物２（1：3）

5．竪穴建物３出土遺物１　（1：3）

6．竪穴建物３出土遺物２（1：3）

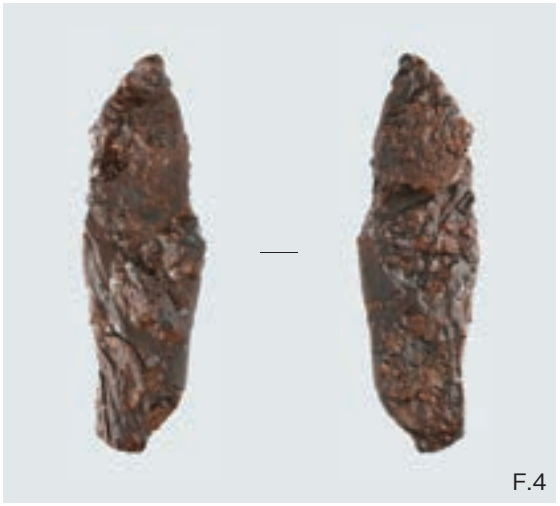
1．竪穴建物３出土遺物３　（１：３）

2．竪穴建物３出土遺物４（１：３）

3．竪穴建物３出土遺物５　（１：３）

4．竪穴建物３
出土遺物６（１：２）

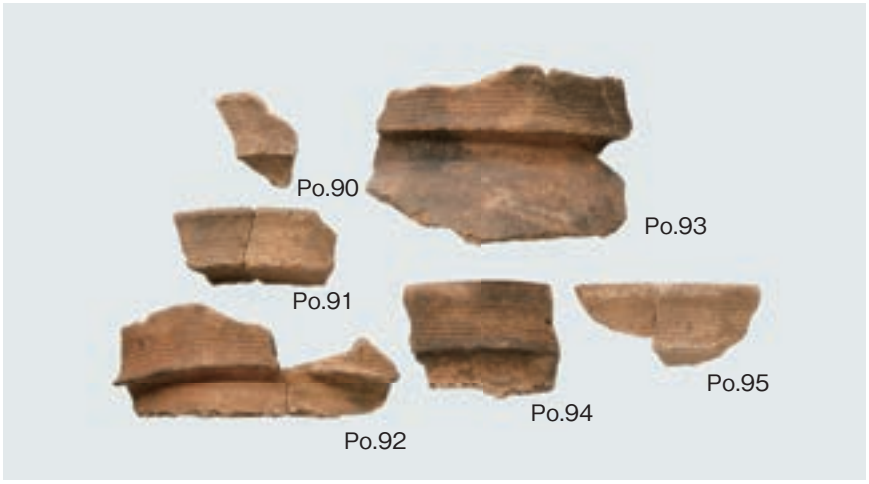
5．竪穴建物３
出土遺物７（２：１）



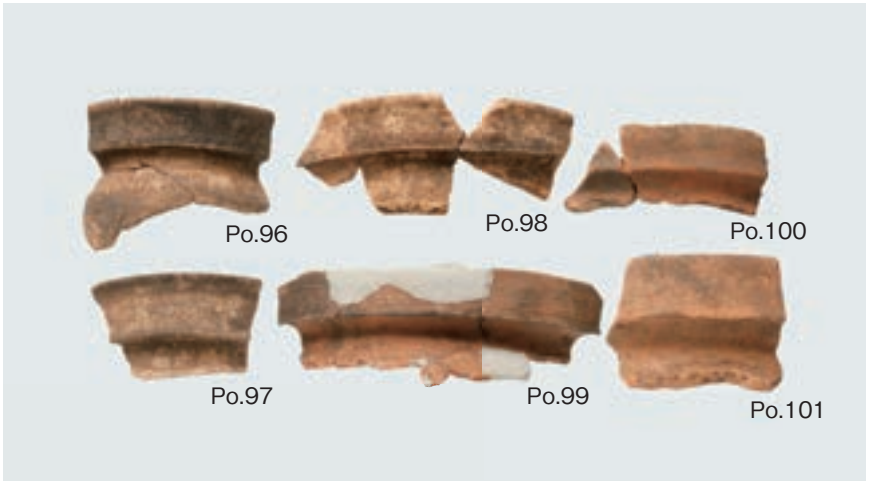
6．竪穴建物３出土遺物８　（１：２）

7．竪穴建物３出土遺物９　（１：２）

写真図版54



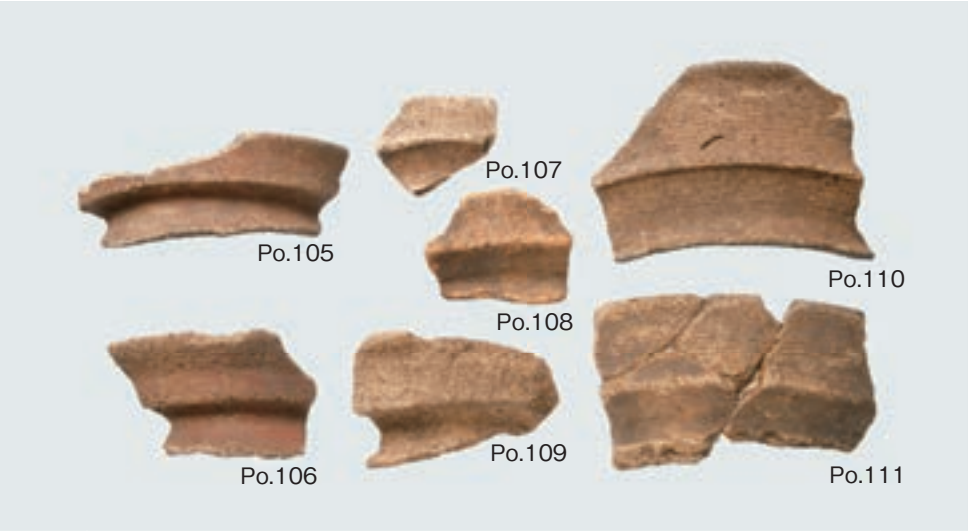
1．竪穴建物４出土遺物１　（１：３）



2．竪穴建物４出土遺物２　（１：３）

3．竪穴建物５・６出土遺物　（１：２）

4．段状遺構１出土遺物　（１：３）



1．遺構外出土遺物１（１：３）

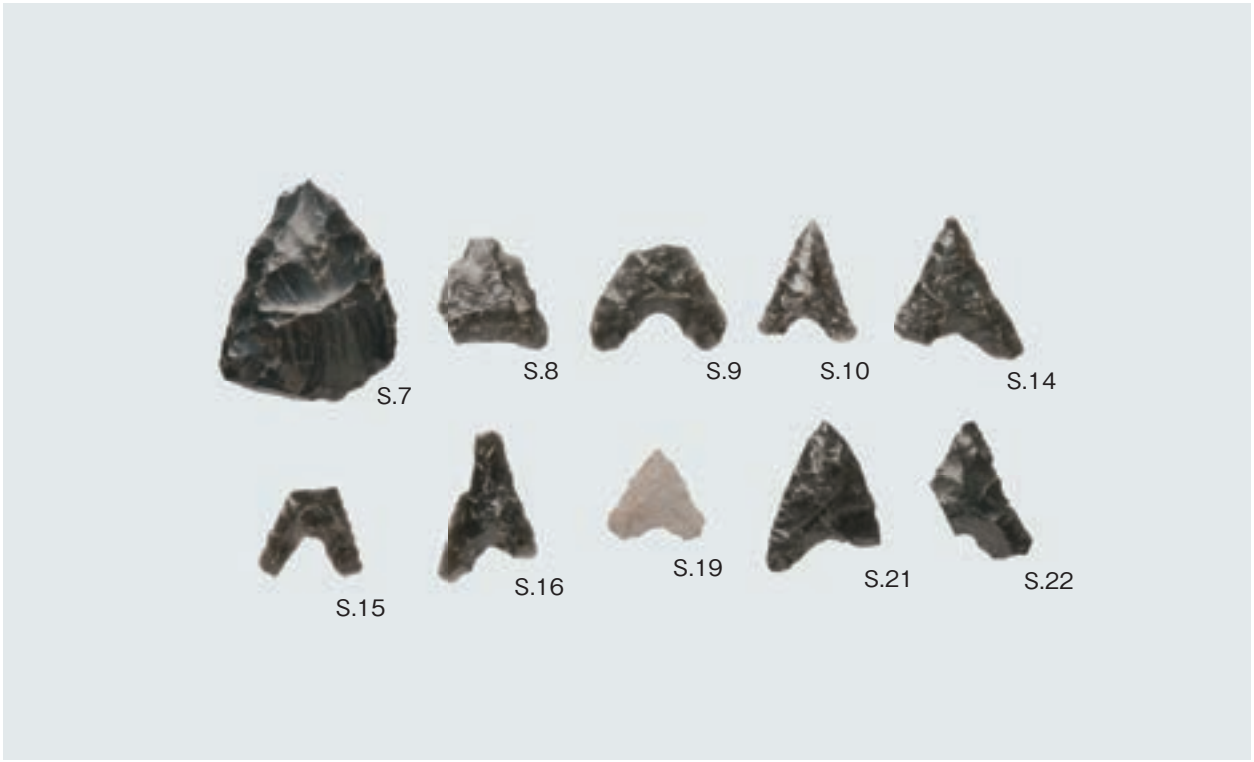
2．遺構外出土遺物２（１：３）

3．遺構外出土遺物３（１：３）

4．遺構外出土遺物４（１：３）

5．遺構外出土遺物５　（１：３）

写真図版56



１．１区出土石鏃　　（１：１）

２．１区出土礫石器（S.1の長さ10.4㎝）

1．２区調査前（北より）

2．北区遺物出土状況
（南より）

3．南区遺物出土状況
（南より）

写真図版58

1．Po.127出土状況（南より）

2．北区第１遺構面完掘
（北より）

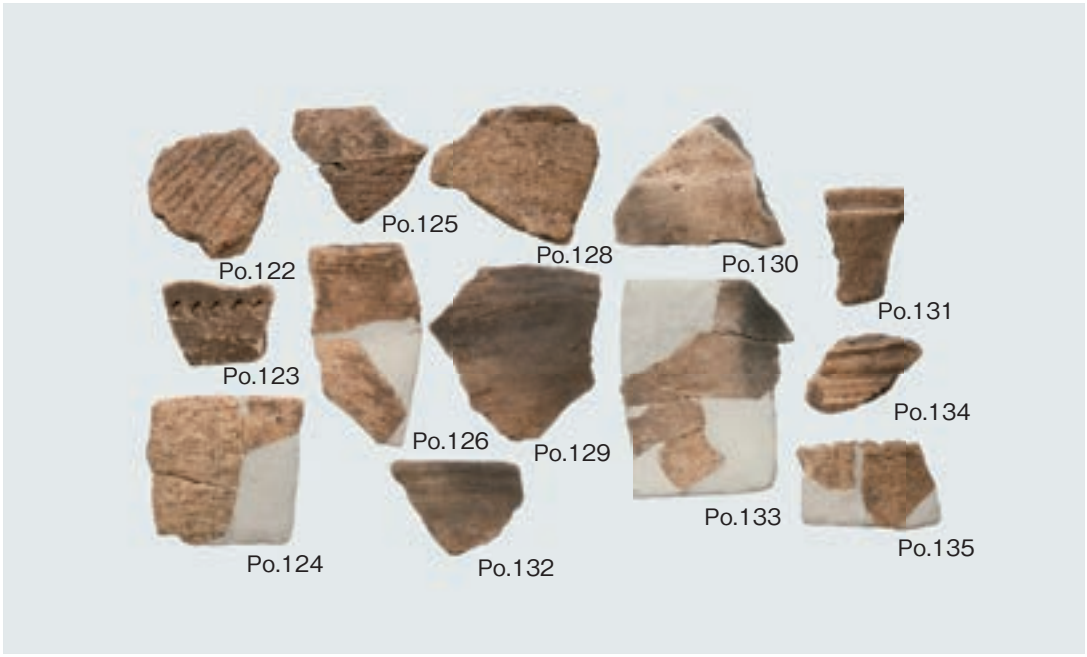
3．南区第１遺構面完掘
（南より）

1．土坑２断面・ピット完掘
（東より）

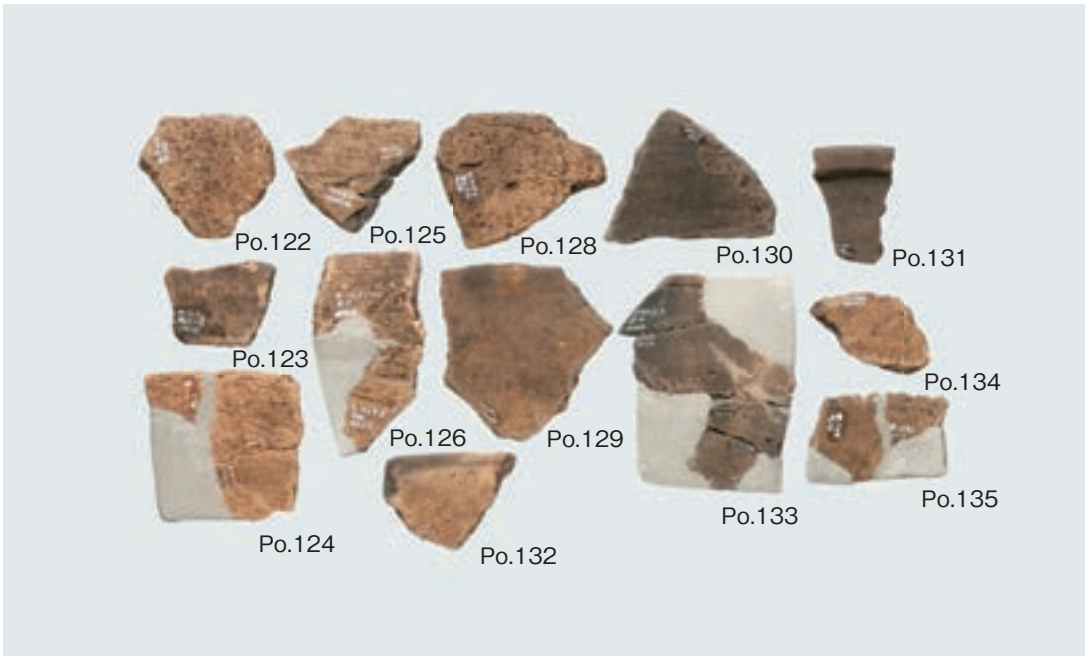
2．南区第２遺構面完掘
（南より）

3．南区第２遺構面完掘
（西より）

写真図版60



1．２区出土土器１　（１：３）



２．２区出土土器２・同裏面　（１：３）

３．２区出土土器３　（１：３）

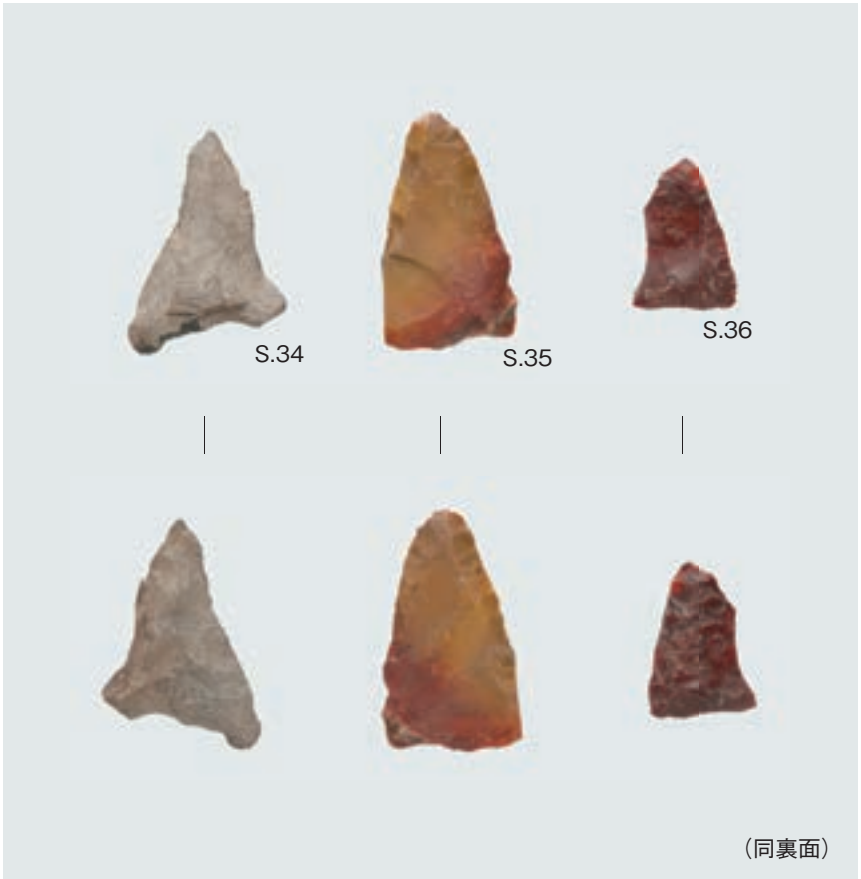
1．２区出土土器４　（１：３）

2．２区出土土器５　（１：３）

3．２区出土土器６　（１：３）

写真図版62

１．２区出土石器１（S.33の長さ6.6㎝）



２．２区出土石器２　　（１：１）

1．３区調査前（北西より）

2．越敷山70号墳調査前
（北より）

3．越敷山70号墳墳丘検出
（北より）

写真図版64

1．越敷山70号墳墳丘検出
（北東より）

2．越敷山70号墳周溝
（北東より）

3．越敷山70号墳石棺検出
（北東より）

1．１主体部蓋石検出（東より）

2．蓋石除去（東より）

3．開棺直後（南西より）

写真図版66

1．人骨検出（南西より）

1．人骨上半身（北西より）

2．人骨下半身（北西より）

写真図版68

1．石棺礫床検出（南西より）

2．枕石検出（南西より）

3．石棺掘形断面（北東より）

1．石棺掘形（東より）

2．墳丘除去後（北より）

3．石蓋土壙墓１検出
（東より）

写真図版70

1．石蓋土壙墓１断面
（東より）

2．石蓋土壙墓１完掘
（北東より）

3．段状遺構１検出
（北東より）

1．段状遺構１完掘（東より）

2．段状遺構２調査中
（南東より）

3．段状遺構２完掘
（北東より）

写真図版72

1．段状遺構２完掘（西より）

2．掘立柱建物１完掘
（北より）

3．掘立柱建物１完掘
（西より）

1．竪穴建物１検出（北より）

2．竪穴建物１焼土検出
（北東より）

3．竪穴建物１焼土検出
（北西より）

写真図版74

1．竪穴建物１炭化材検出
（北東より）

2．竪穴建物１炭化材検出
（南より）

3．竪穴建物１完掘
（北東より）

1．竪穴建物２炭化材検出
（北東より）

2．竪穴建物２炭化材検出
（北より）

3．炭化した柱材の痕跡
（北東より）

写真図版76

1．竪穴建物２完掘（東より）

2．陥穴１完掘（東より）

3．陥穴２完掘（西より）

1．陥穴３完掘（北西より）

2．陥穴４完掘（西より）

3．土坑１完掘（北東より）

写真図版78

1．３区出土土器　（1：3）

2．３区出土石器（S.40の長さ11.9㎝）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さかちょうこしきのはらいせき・こしきさんこふんぐん（さかちょうちく）
書　　名	坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群（坂長地区）
副 書 名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	12
編 著 者 名	佐伯純也
編 集 機 関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所 在 地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　　TEL・FAX　0859-26-0455 eメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦2017年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
坂長越城ノ原遺跡１区・越敷山古墳群（坂長地区）	西伯郡伯耆町坂長字越城ノ原	31390	1-172 1-173 1-174 1-175 1-389 1-390 1-391	35°22′34″	133°24′23″	平成24年12月１日～平成25年７月15日	2,670㎡	道路建設工事
坂長越城ノ原遺跡２区	西伯郡伯耆町坂長字越城ノ原	31390		35°22′33″	133°24′25″	平成25年７月１日～平成26年３月31日	830㎡	道路建設工事
坂長越城ノ原遺跡３区・越敷山古墳群（坂長地区）	西伯郡伯耆町坂長字越城ノ原	31390	1-135	35°22′31″	133°24′28″	平成25年７月１日～平成26年３月31日	940㎡	道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂長越城ノ原遺跡１区・越敷山古墳群（坂長地区）	集落 古墳	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 古代	陥穴、竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴、段状遺構、竪穴遺構、越敷山107号墳～110号墳、126号墳～128号墳、石棺墓、石蓋土壙墓、道路	縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄製品、ガラス玉	大型の竪穴建物を検出。
坂長越城ノ原遺跡２区	集落	縄紋時代 弥生時代 古墳時代 古代	土坑、ピット	縄紋土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器	
坂長越城ノ原遺跡３区・越敷山古墳群（坂長地区）	集落 古墳	縄紋時代 弥生時代 古墳時代	陥穴、竪穴建物、掘立柱建物、段状遺構、越敷山70号墳、石棺墓、石蓋土壙墓	弥生土器、土師器、須恵器、石器、人骨	焼失住居と朱塗の人骨が出土。

要　約

坂長越城ノ原遺跡１区では、陥穴から押型紋土器が出土した。集落遺跡では、弥生時代の竪穴建物６棟を検出し、そのうちの１棟は、直径10m近い大型建物であった。その他の遺構では、掘立柱建物６棟、貯蔵穴１基、段状遺構１基、道路を検出した。古墳では、越敷山107～110号墳、126～128号墳を調査し、石棺内からメノウ製の勾玉やガラス製の小玉、刀などが出土した。谷部に位置する坂長越城ノ原遺跡２区では、縄紋時代後～晩期の土器のほか、性格不明の小ピットを多数検出した。坂長越城ノ原遺跡３区では、焼失した弥生時代後期後葉から古墳時代前期前半の竪穴建物２棟と段状遺構２基、掘立柱建物１棟を検出した。越敷山70号墳の調査では、石棺内から頭部顔面を赤彩した人骨が出土したほか、小児を埋葬したと考えられる小型の石蓋土壙墓を１基検出した。以上の成果から、この周辺では縄紋時代から狩猟の場として活用され、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半頃にかけて集落が形成されたのち、古墳時代中期には墓域として利用されていることが判明した。また、時期は不明ながら、坂長越城ノ原遺跡１区では道路が複数検出されていることから、古墳群としての役割を終えた後は、交通路として丘陵地が活用されている実態が判明した。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書12

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長越城ノ原遺跡・越敷山古墳群
(坂長地区)

２０１７年3月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９―２６―０４５５

印　　刷　　勝美印刷株式会社